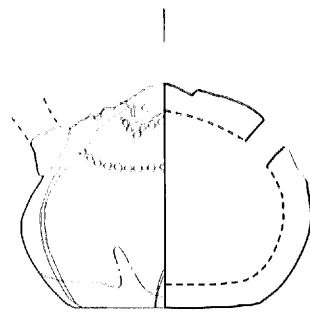
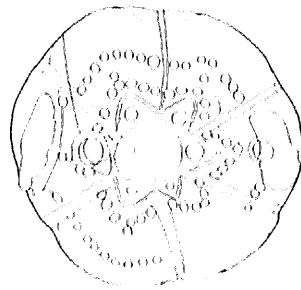


大宰府条坊跡 27

—第 222・222-2 次調査—



平成 17 年
太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡 27

—第 222・222-2 次調査—

平成 17 年
太宰府市教育委員会

『大宰府条坊跡27』正誤表 1

頁・行	誤(下線部)	正
4・5頁 平成16年度組織	(平成16/2004年度) 庶務 教育部長 白石純一 事務主査 藤井泰人	(平成16/2004年度) 庶務 教育部長 松永栄人(4月1日～) 事務主査 藤井泰人(~6月30日) 齋藤実貴男(7月1日)
51頁の図版タイトル	Fig32 SF1000関連土層図	Fig32 SF1100関連土層図
55頁10行目	黒褐土ブロック	黒褐土(黄色粘b)
55頁11行目	黒褐土ブロック	黒褐土(黄色粘b)
63頁SB2802 S-2802H黒褐土の3		
93頁9行目	東播系。	トル
105頁3行目	東播系。	トル
108頁の図版タイトル	表1 SE415井戸枠計測表	表1 SE150井戸枠計測表
125頁15行目	回転ナデ	手持ちナデ
126頁2行目	回転ナデ	手持ちナデ
155頁30行目	東播系。	トル
157頁SE610の10		
158頁SE615暗褐土の4		
175頁16行目	東播系。	トル
182頁5行目	黒褐土ブロック	黒褐土(黄色粘b)
185頁1行目	黒褐土ブロック	黒褐土(黄色粘b)
添付CD 遺構番号台帳 S-10 埋土状況	黒褐土ブロック	黒褐土(黄色粘b)
添付CD 25頁 S-0150暗褐土 須恵質土	捏鉢(東播系)	捏鉢
添付CD 46頁 S-0265黒灰土 須恵質土	鉢(東播系)	鉢
添付CD 76頁 S-0500暗灰土 須恵質土	捏鉢(東播系)	捏鉢
添付CD 81頁 S-0520灰褐粘 須恵質土	捏鉢(東播系)	捏鉢
添付CD 94頁 S-0610黒灰土 須恵質土	捏鉢(東播系)	捏鉢
付図No.6 左下S0545の土説	②黄灰土(貼り床) 遺物なし	②黄灰土(貼り床)

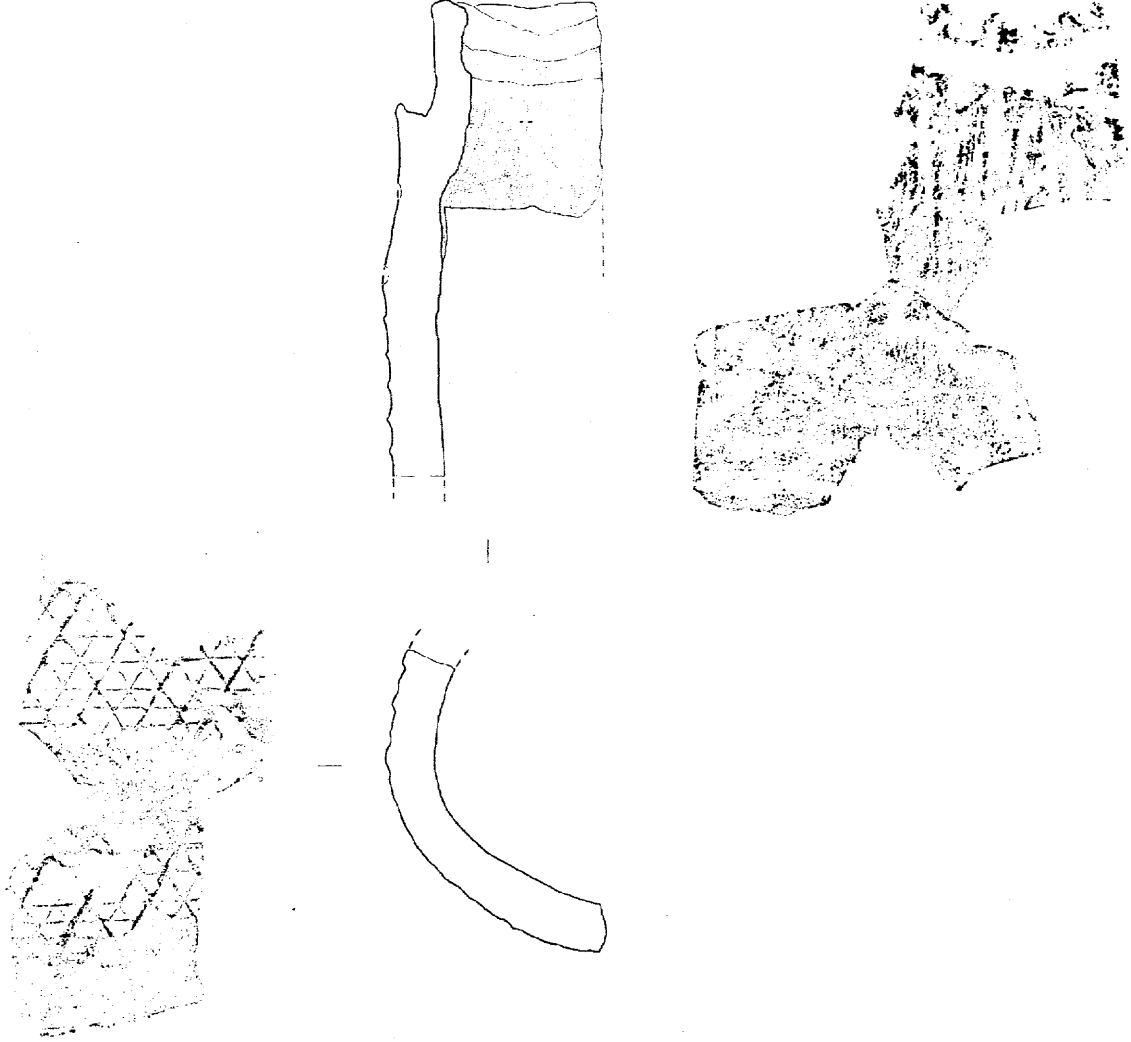
* bは「ブロック」を意味しています

太宰府市教育委員会

202頁SX2328暗灰土の1(誤)



202頁SX2328暗灰土の1(正)



序

本書は、共同住宅建築に先立ち、平成14・15年度に発掘調査を行いました大宰府条坊跡第222次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁跡の南側に広がる広大な都市遺跡です。今回の調査はその西側、鷲田川西岸において、7,650 m²という、これまでの大宰府条坊の調査では前例の無い広大な調査区が設けられました。ここでは平安時代後期を中心とした遺跡がみつき、調査区の周囲三方を当時の道路で区画していることが判明しました。この中には建物が立ち並んでおり、多量の生活関連遺物が見つかりました。遺跡が失われることは大変残念なことです。ここで得られた成果は、大宰府条坊および平安時代後期の状況分析に大きく寄与するものと期待されます。

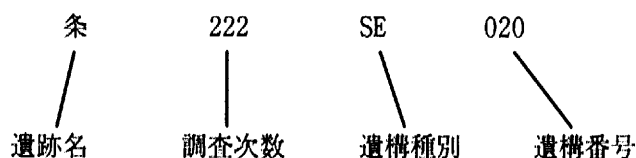
本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成17年3月
大宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は、太宰府市都府楼南2丁目497、500-1、500-4、500-8、500-13、および筑紫野市大字杉塚393-21にて行った大宰府条坊跡第222・222-2次調査の埋蔵文化財発掘報告書である。
2. 第222次調査は共同住宅建築に先立ち実施したもので、第222-2次調査は対象地西側を通る道路のセットバック部分について実施したものである。いずれも同時期に調査したため、調査および整理報告は一括して作業を行った。調査対象面積は9,944.52 m²、発掘調査面積は7,650 m²である。
3. 調査整理報告は、太宰府市教育委員会が(株)パスコに委託した。監理・指導は井上信正が行った。
4. 調査期間は平成14年9月3日～平成15年10月20日である。整理作業は、平成15～16年度にかけて実施し、遠竹陽一郎・柳田信が担当した。
5. 遺構実測の基準点は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。したがって、遺構実測図および遺構配置図中に記載される方位は特に注記のないかぎり、座標北(G.N.)を指している。なお基準点測量は、(株)パスコが実施した。
6. 遺構の実測は、遠竹・柳田・米田信仁が中心となって作業を行った。
7. 遺構図の整理浄書は、遠竹・柳田を中心に作業を進めた。
8. 遺構写真撮影は、遠竹・柳田・米田が行った。また全体写真については、ふじた航空写真(代表 藤田勝一)が行った。
9. 遺物の実測、土器計測は、遠竹を中心として作業を進めた。
10. 遺物の写真撮影は、遠竹が行った。
11. 遺物のデジタルトレースは、(株)パスコが行った。
12. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、基本的に本書中では遺跡名・調査次数を省略している。



13. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。また遺物の分類は遠竹が行い、井上信正・森田レイ子に助言を得た。
須恵器 【宮ノ本遺跡Ⅱ-窯跡編-】太宰府市教育委員会 1992
土器 【大宰府条坊跡Ⅱ】太宰府市教育委員会 1983
陶磁器 【大宰府条坊跡ⅩⅤ】太宰府市教育委員会 2000
14. 調査時には、小田富士雄(福岡大学教授)、坂上康俊(九州大学教授)、佐藤信(東京大学教授)、山中章(三重大学教授)、木本雅康(長崎外国語大学)、横田賢次郎(九州歴史資料館)、長家伸(福岡市教育委員会)、小鹿野亮(筑紫野市教育委員会)の各氏にご来場いただき、ご教示いただいた。
15. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
16. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録は、太宰府市教育委員会が保管している。
17. 本書の執筆は、自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社が、その他の執筆・編集は、遠竹・柳田が行った。

目次

I. 調査地の位置と歴史	1
II. 調査組織	4
III. 調査に至る経緯	5
IV. 調査・整理・報告方法について	6
V. 調査の概要	8
1. 層位	8
2. 遺構	9
3. 遺物	61
VI. 自然科学分析	207
VII. まとめ	210

写真図版

付図

遺構配置図 (1/100、8面)

遺構全体図 (1/200)

CD-ROM

柵列・掘立柱建物・溝・道路の座標・方位一覧

遺構番号台帳

土器計測表

出土遺物一覧表

SF700・1000道路関連図

遺構写真1 (北調査区北側近景～SE685完掘状況)

遺構写真2 (SF700路面状況1～SX2914遺物出土状況)

遺物写真

I. 調査地の位置と歴史

太宰府市は福岡市の南東約17kmに位置し、北から東にかけ三郡山系、西から背振山系に囲まれた狭い平野部に展開している。宝満山に源を発する御笠川は、市内を縦貫し、途中で鷺田川、大佐野川と合流し、博多湾に流れている。また交通の面では南北にJR鹿児島本線、西鉄天神大牟田線、九州自動車道、国道3号が走り、福岡空港に近接するなど恵まれている。昭和30年に太宰府町と水城村が合併して太宰府町となり、昭和40年代になると福岡都市圏の膨張、大規模開発による住宅化の進行、大学の立地、交通網の整備などによって人口は急増し、昭和57年に現在の太宰府市になった。

ところで、太宰府市域の歴史は古くは旧石器時代にまで遡ることができるが、古墳時代が終わるまで目立った活動跡はみられない。目立つようになったのは7世紀になってからである。

663(天智二)年、唐・新羅連合軍と戦った朝廷軍は白村江の戦いで大敗を喫した。朝鮮半島からの撤退を余儀なくされた日本軍は唐・新羅連合軍の来攻に備えて、早急に防御体制を強化する必要があった。なかでも北部九州は、古くから大陸に対する玄関口となってきたほど朝鮮半島の近くに位置し、この地域の整備は最優先事項であった。それは敗戦から数年の間に対馬、壱岐、筑紫国に防人と烽とを配置し、さらに大野城、基肆城、水城を築いたことから窺える。大宰府はこのような緊張感が高まった7世紀～8世紀に設置されたと考えられる。大宰府の主な機能としては、西海道(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向・大隅・薩摩の9カ国と対馬・壱岐の2島)の統括、帰化人の措置や外国使節および渡来者の接待、海辺の防衛などがあった。この役割は律令体制が崩壊するまで、およそ500年間もの長期間続いていくことになる。

さて、その大宰府の条坊制について最初に言及したのは鏡山猛氏である。氏は「観世音寺文書」などの文献資料と現存している道路や田畑の畦道、水路などの地割りを検討した。その結果、大宰府に条坊があったと結論づけ、その規模は東西各12坊、南北22条であったと推測している。

本調査区の場所は鷺田川の西岸約150mに位置し、調査区の北側は、西から流れて鷺田川に注ぐ小河川に接する。鏡山条坊推定案による右郭10・11条9坊に位置し、条坊跡の西のはずれにあたる。周辺では大宰府条坊跡第122・164・176次調査等が行われており、平安後期の遺構が広く展開している状況が指摘されている。特に南東隣接地で行われた大宰府条坊跡第122次調査では、土地を区画するとみられる道路や溝などの遺構が検出されており、その延長が本調査対象地に伸びていることは十分予想された。このため、本調査区でも道路・溝の続きを確認すること、および区画設計の解明、区画内部の状況把握を目的として調査をすすめることになった。

<参考文献>

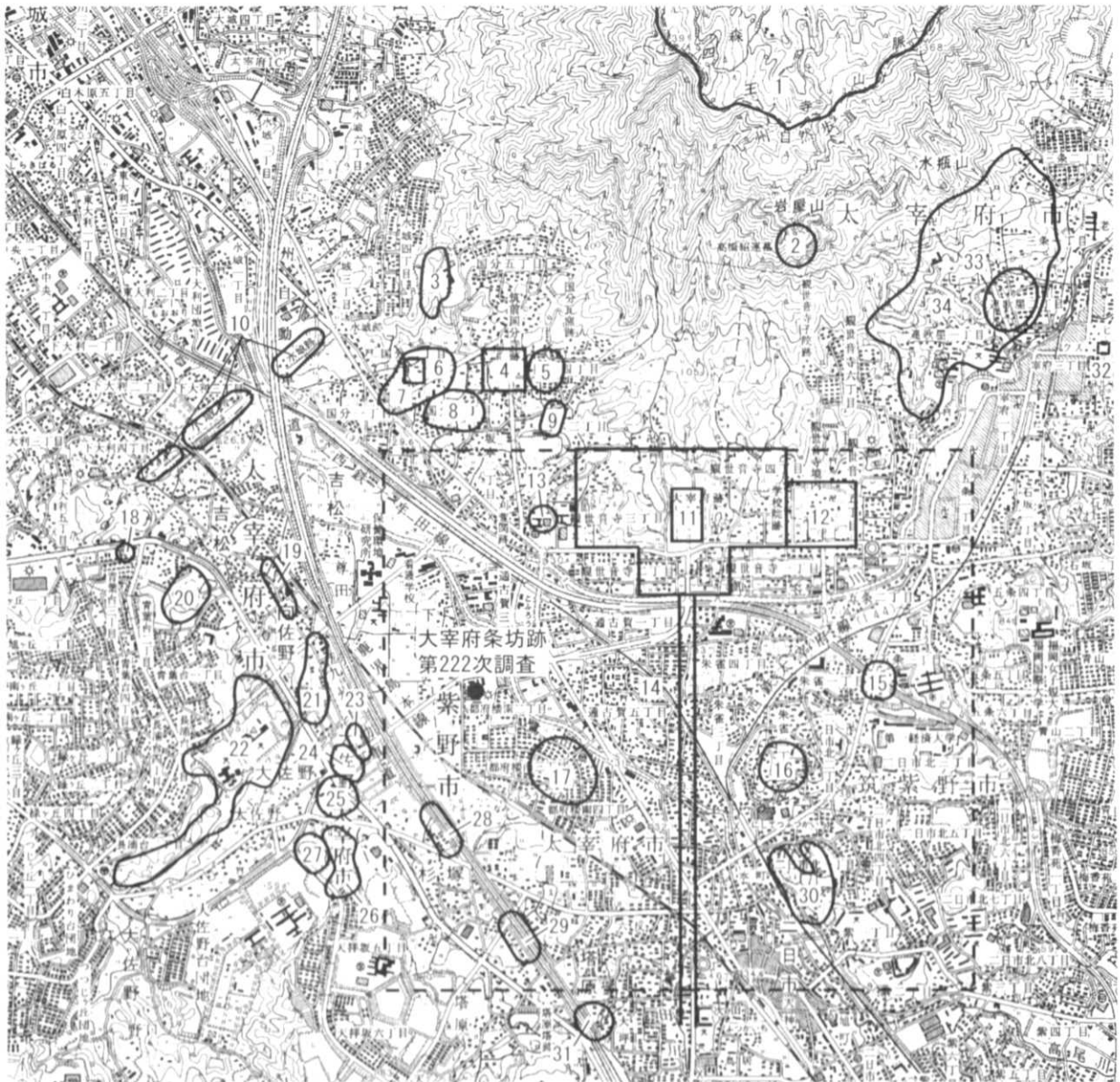
- 【太宰府市史考古資料編】太宰府市 1992
鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968



条 + 「3桁数字」・・・大宰府条坊跡第「3桁数字」次調査

なお、条127は福岡県教育委員会の調査、
 条166・186は筑紫野市教育委員会の調査で、
 その他は大宰府市教育委員会の調査である。

図1 報告調査地と周辺調査 (1/5,000)



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯遺跡 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 桶田山遺跡 |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(破線内) | 23. 雑川遺跡 | 32. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 浦城跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 原遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前竈跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

図2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

Ⅱ. 調査組織

調査を実施した平成14・15年度、および整理報告を行った平成15・16年度の調査組織は、以下のとおりである。

(平成14 / 2002年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正 (調査・整理担当)
		高橋 学
		宮崎亮一 (事前審査・試掘担当)
	技師 (囑託)	下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁

(平成15 / 2003年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信 (~6月30日)
		久保山元信 (7月1日~)
	保護活用係長	久保山元信 (10月1日~)
	文化財調査係長	神原 稔 (~9月30日)
	調査係長	永尾彰朗 (10月1日~)
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正 (調査・整理担当)
		高橋 学
		宮崎亮一
	技師 (囑託)	下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁

(平成16 / 2004年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美

調査	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正 (調査・整理担当)
		高橋 学
		宮崎亮一
技師 (嘱託)	下川可容子	
	森田レイ子	
	柳 智子	
	渡邊 仁	
	長 直信	
	松浦 智 (7月1日～)	

(株)パスコ東日本事業部技術部文化財技術課調査組織

課長	植田 真
プロジェクトマネージャー	岡本範之
調査員	遠竹陽一郎 (調査・整理担当)
調査員	柳田 信 (調査・整理担当)
調査員	米田信仁 (調査担当)

Ⅲ. 調査に至る経緯

調査対象地は、太宰府市都府楼南2丁目497、500-1、500-4、500-8、500-13、および筑紫野市大字杉塚393-21に所在する。

ここは、大和味噌醸造株式会社が昭和40年より味噌工場を建設していたところである。ここに共同住宅を建設するため事前に遺跡の有無についての問い合わせが以前より文化財課にあったが、平成12(2000)年10月13日に地権者(株)大和からの問い合わせがあり、現地建物解体後、確認調査を実施することになった。対象地は大宰府条坊跡の範囲に含まれている上、この周辺で実施した大宰府条坊跡第122・164・176次調査で平安時代後期を中心とした時期の遺構が展開していることが判明しており、平成13(2001)年7月2日に確認調査を実施した結果、地下約0.4～1m付近に、周辺同様遺構が展開していることを確認した。

その後、平成14(2002)年1月21日に(株)理研ハウスより共同住宅建設の内容で文化財課に問い合わせがあった。試掘結果を説明し協議した結果、対象地全体を発掘調査し記録保存することになり、原因者負担で行うこととなった。なお対象地の北西隅の一部が筑紫野市であるため、筑紫野市教育委員会と協議を行ったが、筑紫野市の範囲が極めて狭小であるため、今回の調査に含むことになった(実際調査できたのは調査区西端の約4㎡)。

この発掘調査整理報告事業を行うにあたっては、当初これを文化財課直営で実施することを予定していたが、当時の緊急発掘調査計画・実施状況を鑑み、関係各部署と協議した結果、最終的に民間の調査組織に委託することになり、指名入札の結果、(株)パスコ福岡支店(支店長保坂智明)と調査整理報告委託契約を行った。

調査に際しては、現場運営および開発者の工事計画から、対象地を北と南に分け、北側から調査を実施し、北側調査終了後、南側を発掘調査し、同時に北側は工事に着手することになった。調査は平成14年9月3日より開始し、2ヵ年度を予定した。なお調査途中の平成15年7月、調査対象地の西側を通る現在の南北道路をセットバックして拡張するため、調査区西～南西部分が道路となる話が太宰府市建設課都市開発係と(株)理

研ハウスとの間に上がったため、これに伴う発掘調査の追加契約を(株)パスコ福岡支店と行い、引き続き第222-2次調査として実施した。調査は平成15(2003)年10月20日に全て終了した。開発対象面積は9,944.52㎡で、発掘調査面積は7,650㎡である。

なお調査成果を公表するため、平成15年9月11日に現地で記者発表を行った。その翌々日には一般向けに現地説明会を予定していたが、台風14号接近のため中止した。

調査地は、その後工事が進められ、現在RC構造7階建のマンションが2棟建築されている。

IV. 調査・整理・報告方法について

調査・整理・報告は、『太宰府市埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2000年4月)、『佐野地区遺跡群Ⅰ』(太宰府市の文化財第14集 1989)の内容を参考に進めた。

調査では、遺構確認面まで重機により掘り下げた。(株)パスコにより、調査区の周囲に基準点を設定した後、調査区内に国土座標第Ⅱ座標系に沿うように3mグリッドを設けた。グリッド毎に遺構検出を行い、検出した遺構をデジタルカメラで撮影した。撮影した写真から、デジタル処理により、正射投影画像を作成し、CAD上でトレースし、遺構配置図を作成した。遺構配置図には埋土の堆積状況、遺構間の切合関係などを記入した。原則として、遺物の出土した遺構に「S-番号」を付し台帳を作成した(添付CD収録「遺構番号台帳」)。掘立柱建物や柵列を構成する可能性のある小穴には枝番を付した。枝番をつける関係上、遺物が出土していないものにも、「S-番号」を付している。同一遺構内で似かよった土色の土層を混入物により分けている場合がある。その場合、土色+“(混入物)”という表記を行っている。例：暗褐土(黄褐粘ブロック)。遺構の実測は基本的にトータルステーションを用い行い、場合によっては手実測で補完している。トータルステーションで観測したデータを、パソコンに取り込み、CADを用いて編集した。遺構配置図は1/100、遺構全体図は1/50、個別遺構図・土層図は原則1/20、範囲が広い場合は1/30または1/40の縮尺で、プロッターで印刷した。

出土遺物の整理作業は、洗浄後、分類を行い、台帳を作成した(添付CD収録「出土遺物一覧表」)。貿易陶磁器については『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』により分類し、破片単位で点数を数えた。在地産とみられる土師器、黒色土器、瓦器の供膳具については、口縁部が1/3以上残存する資料を対象(場合によっては1/3未満の資料も対象とした)に、口径、器高、底径(高台径)を計測した。計測した資料には「M-番号」を付し、台帳を作成した(添付CD収録「土器計測表」)。煮炊具、外来系遺物、石製品、金属製品、木製品などは、極力実測を行い資料化に努めた。貿易陶磁器については、『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』で分類されていないものは実測を行った。『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』で分類されているものでも、分類毎に状況の好いものを選別し、実測を行っている。実測した遺物は、デジタルトレースを行い、本書に掲載している。小片で図化には至らないが、特殊な遺物(穿孔を有する滑石製品片や付着物のある土器片など)はデジタルカメラで写真撮影を行った。写真は添付CDに収録している。実測、写真撮影を行った資料には「R-番号」を付した。

本報告書では例言でも述べたように大宰府条坊跡第222・222-2次調査を一括して報告している。便宜上、本書では第222次調査の調査区反転前を北調査区、反転後を南調査区、第222-2次調査を南西調査区と表現している。また今回は遺構写真の一部を除き、表類、SF700・1000道路関連図、遺構・遺物写真を添付CD内に収録している。これはデジタルデータの活用により写真、図面について、カラーで掲載することができるため採用している。

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上限)		標識磁器	準標識磁器				
				灰釉	緑釉						
⑤	700	I A B		猿投0-10 井ヶ谷1G-78	長門?・畿内	白磁I類 越州窯系青磁I, II類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎				
	725	II									
	750	III									
	800	IV									
	825	VI A B						黒笹K-14 藤岡S-4 黒笹K-90	長門・洛北・(洛西)・(黒笹K-14) 洛西 黒笹K-90	青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器	
	850	VII									
	900	VIII									
	925	IX						虎渡山1 (折戸0-53)	近江		
	950							X	新戸0-53		
	1000	XI						丸石2 百代寺 東山H-105 藤岡S-1	龍泉窯系青磁III類 白磁XI類		越州窯系青磁III類 白磁XI類
	1050							XII A B	丸石2 百代寺 東山H-105 藤岡S-1		
1100	XIII										
1150	XIV	龍泉窯系青磁碗I-1~4, 6 血I類 同安窯系青磁碗I~IV, 皿I類	龍泉窯系青磁碗I-1~4, 6 血I類 同安窯系青磁碗I~IV, 皿I類	白磁碗VII, V 4, 皿III類増加 白磁碗VII, 皿VIII I類							
1200	XV	龍泉窯系青磁碗II a, b類	龍泉窯系青磁碗II a, b類		白磁皿VIII 2類						
1230	XVI	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類							
1250	XVII	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類		龍泉窯系青磁III類 白磁IX類						
1300	XVIII	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類							
1330	XIX	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類		龍泉窯系青磁III類 白磁IX類						
1350	XX	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類							
1450		龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類		龍泉窯系青磁III類 白磁IX類						
1500		龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	龍泉窯系青磁III類 白磁IX類							

紀年銘資料

- ①A. D. 927 延長5年, 大宰府74次SD205A溝
- ②A. D. 1091 寛治5年, 平安京左京4条1坊SE8井戸
- ③A. D. 1224 貞応3年, 大宰府33次SD605溝
- ④A. D. 1304 嘉元2年, 大宰府109 III次SD3200溝
- ⑤A. D. 1330 元徳2年, 大宰府45次SX1200池
- ⑥A. D. 784 延暦3年, 長岡京102次SD10201溝
- ⑦A. D. 1459・1465 長祿3・寛正5年, 福岡市井相田C11・SG16池
- ⑧A. D. 1501 文龜元年, 大宰府70次SD1805溝
- ⑨A. D. 1265 文永2年, 博多62次713土庫

文献

- ①九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
- ②田辺昭三・吉川義彦 「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
- ③九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
- ④九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
- ⑤九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
- ⑥長岡京市埋蔵文化財センター 「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
- ⑦福岡市教育委員会 「井相田C遺跡II」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
- ⑧九州歴史資料館 「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
- ⑨福岡市教育委員会 「博多48」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

図3 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

V. 調査の概要

1. 層位 (Fig. 1 ~ 3)

現地表面からおよそ0.4~0.6mの厚さで真砂が堆積し、表土を形成している。この層は味噌工場設置時の盛土層である。その下は0.2~0.3mの厚さにわたり旧水田耕作土及び床土が堆積している。床土は場所により、土色から2層に分層できる。さらにその下が遺物包含層になっており、出土した遺物は暗灰砂として取り上げている。遺物包含層には、削平されて確認できない地点がある。またSF1000路面部の上で検出した茶褐土については、広く浅い堆積であったため、個別の遺構に帰属させず包含層として扱っている。遺構確認面は1面である。また調査区を南北に横断する旧河川を確認している。旧河川は切り合い関係上最も古いものとわかるが、埋土中から遺物の出土はない。また、AUライン以北では工場そして主に耕作により広範囲に削平されている。

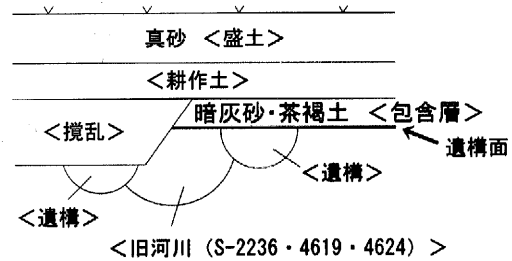


Fig.1 調査区土層模式図

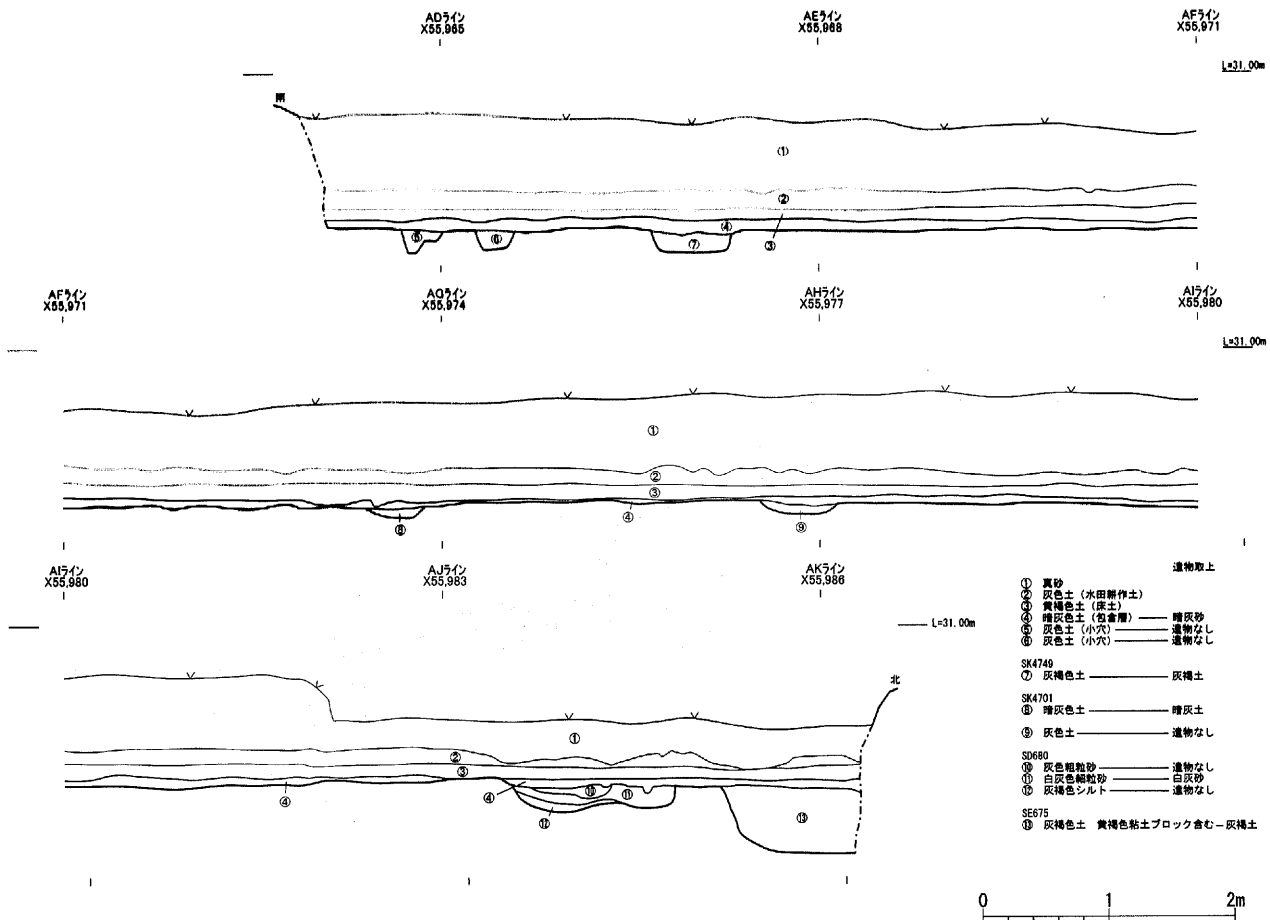


Fig. 2 AC41 ~ AK42 地区調査区西壁土層図 (1/60)

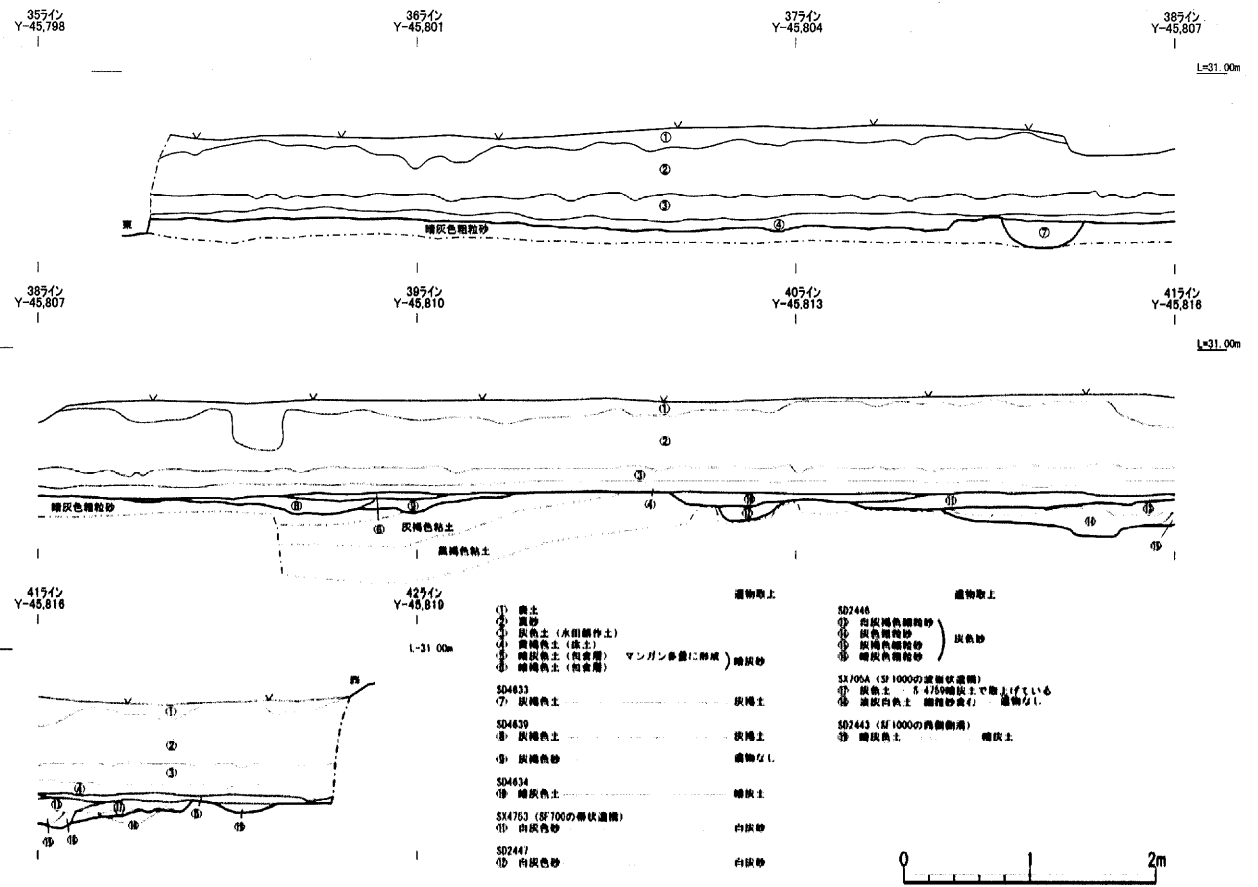


Fig. 3 AC35 ~ AC41 地区調査区南壁土層図 (1/60)

2. 遺構

遺構編の本文に共通することとして、遺構名の横に括弧がついていない場合は、報告書・添付CDのどちらにも、図版または写真が掲載されていないことを意味している。その場合は遺構全体図(付図)を参照していただきたい。また埋土堆積状況の上層は、遺物取上時の層名で記載している。

柵列

以下に紹介する以外にも多くの柵列あったと考えられるが、ここでは調査担当者が確実性の高いと判断した柵列を挙げる。

SA1398

調査区中央のAQ37・38 地区で検出した。検出長約 5.10m を測り、ほぼ東西に走行している。

SA1399

調査区中央のAP34 ~ AP38 で検出した。検出長約 10.00m を測り、ほぼ東西に走行している。

SA1638

調査区中央のAP34 ~ AP36 で検出した。検出長約 8.00m を測り、ほぼ東西に走行している。

なお、出土遺物から平安後期に埋没したと推測される。

SA2707

調査区南東のAE19 ~ AF23 で検出した。検出長約 13.00m を測り、ほぼ東西に走行している。SB2802 の近くに位置し、目隠し堀だった可能性がある。

掘立柱建物

建物は 20 棟報告しているが、その中でも確実性の高い建物について実測図を掲載している。

SB001 (Fig. 4, Pl. 3)

調査区北のBF22～BH24地区で検出した。3×3間側柱の身舎と、東西両面に庇または縁が付く東西棟である。西側は、柱穴が5つになっており、後から付け足した可能性がある。付け足しが可能な点からも、庇または縁のような簡単なものと推定している。身舎は東西4.75m、南北4.80m、庇まで含めると、東西7.45m、南北4.80mを測る。ただし、庇または縁と考えている柱穴の深さが、身舎と推定している柱穴よりも総じて深いことから、3×5間の側柱東西棟であったと考えることもできる。

SB095

調査区東のAQ11～AR13地区で検出した。2×3間の側柱東西棟である。東西5.75m、南北3.75mを測る。

SB210 (Fig. 5, Pl. 3)

調査区中央のAR17～AT20地区で検出した。柱間が不均等ながら、4×4間総柱の身舎と、西側に庇または縁が付く南北棟である。西側K列が他の柱穴に比べ、若干小規模で、J列-K列間も狭く、庇または縁と推定している。身舎は南北7.65m、東西6.07～6.18m、庇または縁まで含めると、南北7.62～7.73m、東西7.01～7.15mを測る。また、柱穴L、R、Iの掘り方は下方が狭く、柱痕とほとんど変わらなくなる。上部には裏込があり、杭のように打ち込んだのではなく掘り込んだ穴に柱を埋めたものと考えている。裏込は存在していたと考えられるが、僅少なため調査時には識別できなかった。

SB215 (Fig. 6, Pl. 3)

調査区中央のAQ17～AT20地区で検出した。柱間が不均等ながら、4×4間総柱の身舎と、西側に庇または縁が付く南北棟である。本遺構と同じ位置に、同じ柱配置(柱間は異なる)でSB210があり、同じ規模の建物の立替があったと考えている。時間的な前後関係については不明である。身舎は南北7.67m、東西6.13～6.17m、庇または縁まで含めると、南北7.67～7.72m、東西7.20～7.24mを測る。

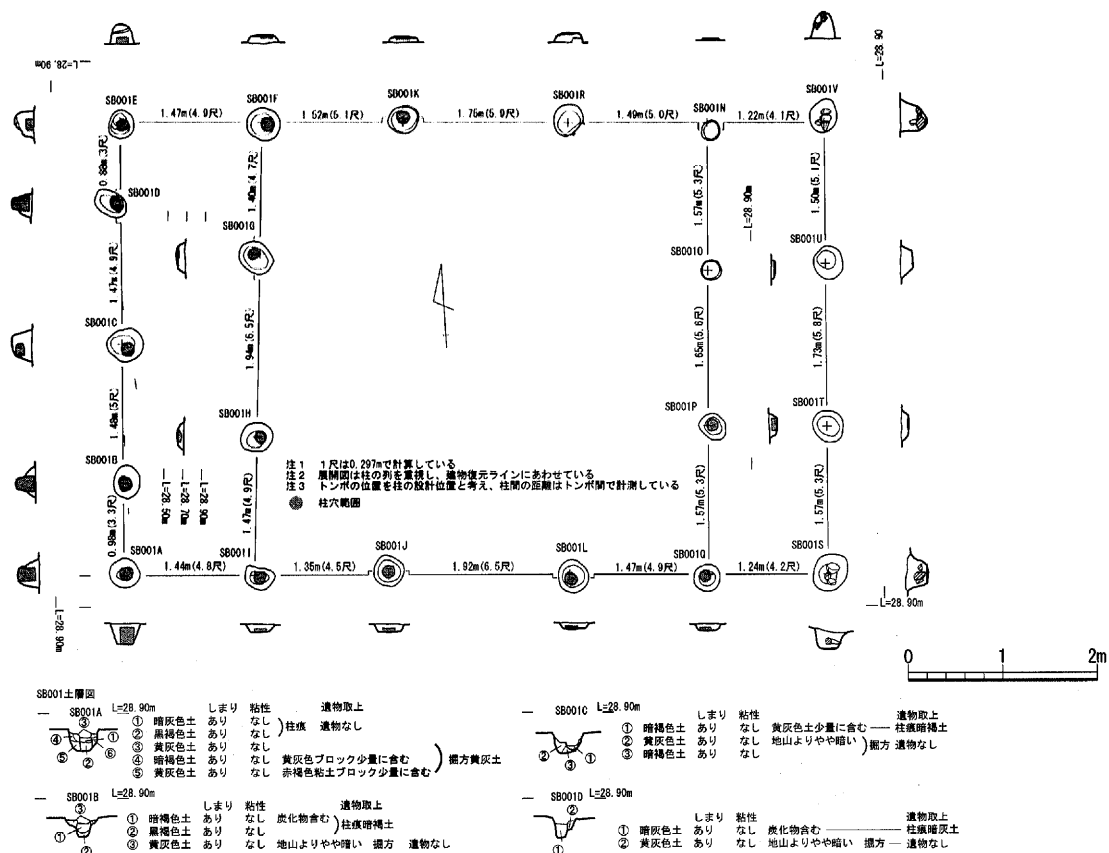
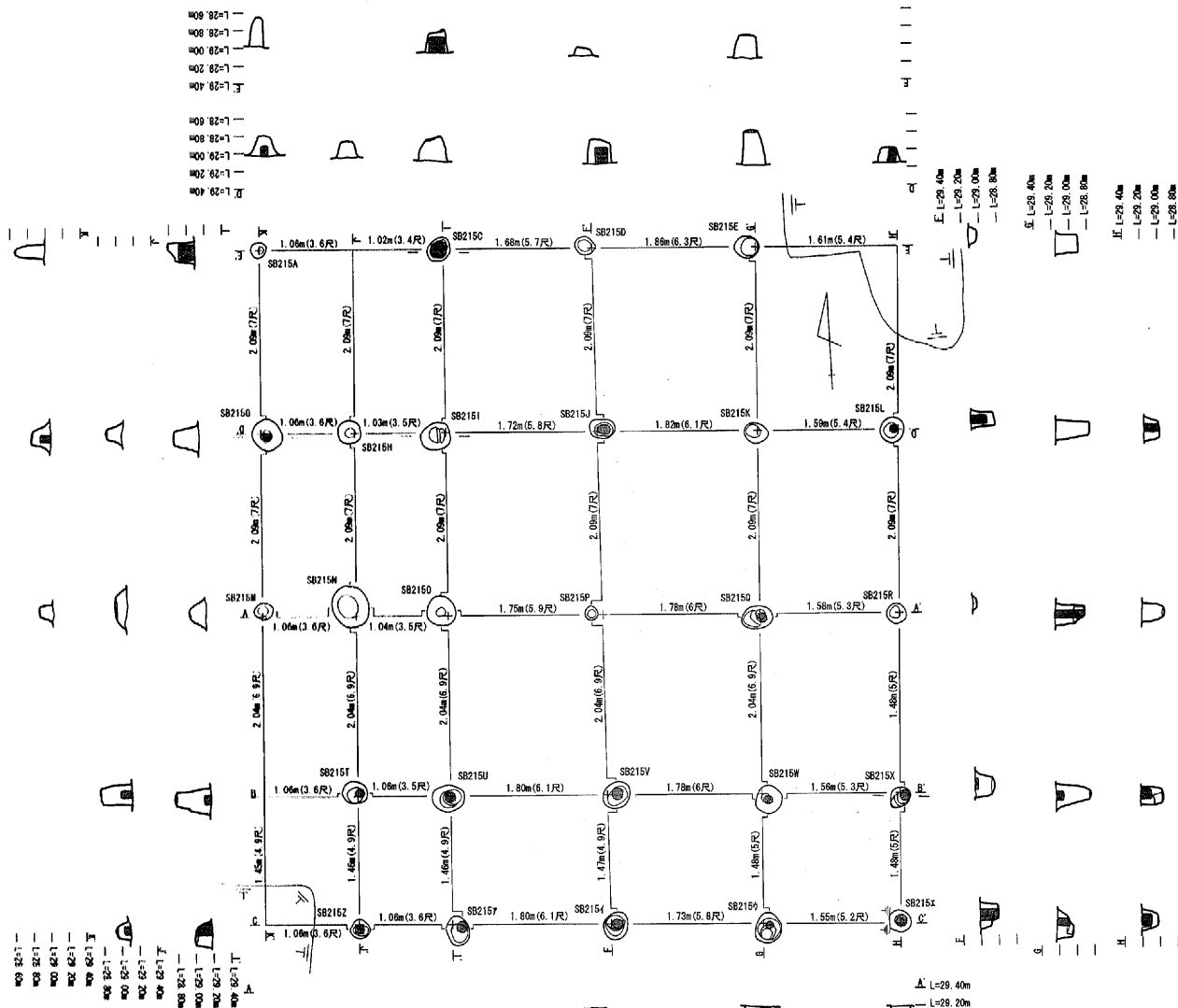
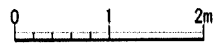


Fig. 4 SB001 実測図 (1/80)



注1 1尺は0.297mで計算している
 注2 展開図は柱の列を省略し、建物等ラインにのみ対応している
 注3 トンボの位置を柱の設計位置と考へ、柱間の距離はトンボ間で計算している
 ● 柱穴範囲



SB215土間図

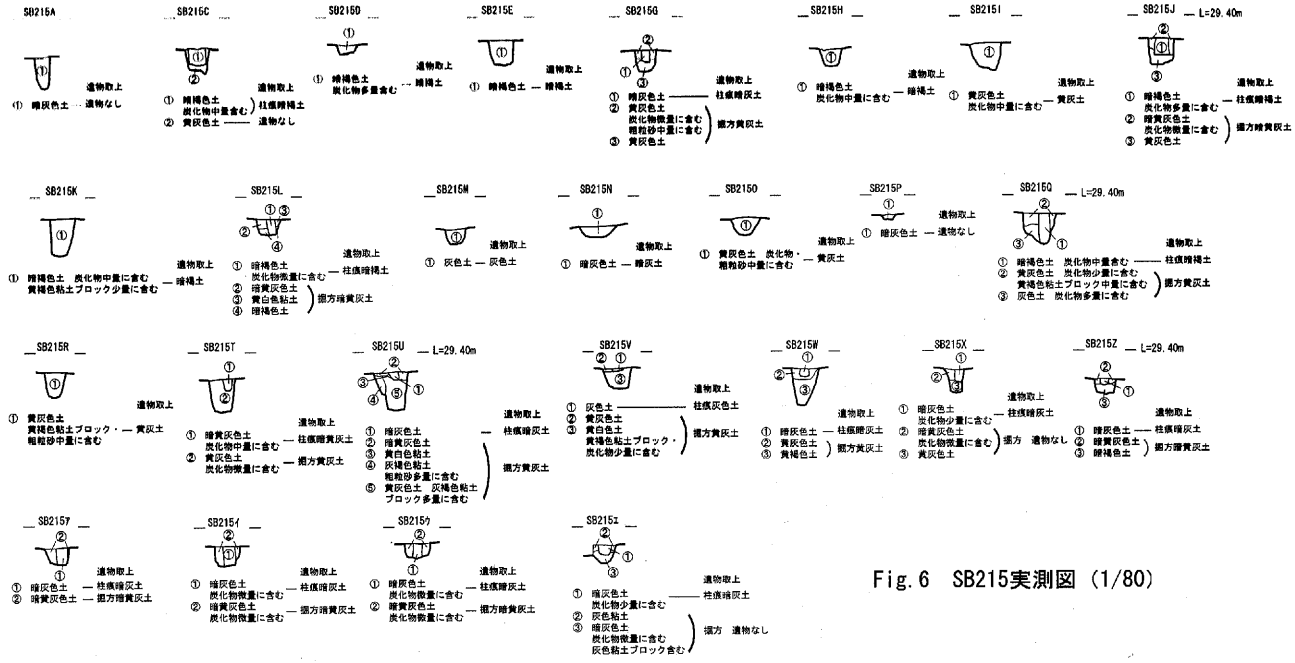


Fig. 6 SB215実測図 (1/80)

SB220

調査区北東のAW9～AY12地区で検出した。北半部を攪乱により消失してしまっているが、2×3間程の側柱の身舎と、身舎の廻り3面に庇または縁が付く南北棟であったと想定している。柱間距離は身舎で、南北2.26～2.82m、東西2.17～2.24m、庇または縁だと南北1.14～2.67m、東西1.29～2.31mを測る。残存長で身舎は南北7.58m、東西4.46m、庇または縁まで含めると、南北8.35m、東西6.94mを測る。

SB225

調査区北東のAW8～AY10地区で検出した。2×4間総柱の身舎と、西側に庇または縁が付く南北棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では直径(以下、径とする)0.20～0.43m、楕円形では長径0.41～0.53m、短径0.25～0.30mを測る。柱間距離は身舎で、南北1.30～2.61m、東西1.31～1.75m、庇または縁だと南北1.21～2.61m、東西0.78～0.83mを測る。身舎は南北8.12m、東西3.32m、庇または縁まで含めると、東西4.12mを測る。

SB315 (Fig. 7, Pl. 3)

調査区西のAU36～AV37地区で検出した。2×2間の総柱である。掘り方は深く、今回の調査区では他の掘立柱建物と異なっている。掘り方に対して柱間が狭いことから、倉庫であったと考えている。東西3.09m、南北2.91mを測る。

SB653

調査区中央のAP23～AQ26地区で検出した。2×5間の総柱東西棟である。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.22～0.46m、深さ0.30m程を測る。東西7.90m、南北3.14mを測る。

SB897

調査区西のAU32～AX35地区で検出した。3×4間総柱の身舎と、東西両面に庇または縁が付く南北棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.20～0.30m、楕円形では長径0.43m、短径0.28mを測る。身舎は南北6.79m、東西6.43～6.56m、庇または縁まで含めると、南北6.79m、東西8.80mを測る。

SB934

調査区西のAW29～AY31地区で検出した。2×4間の総柱南北棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.20～0.30m、楕円形では長径0.32～0.39m、短径0.23～0.25mを測る。南北7.18m、東西3.58mを測る。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SB1252

調査区西のAR36～AT38地区で検出した。2×3間総柱の身舎と、北側に庇または縁が付く東西棟である。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.24～0.35mを測る。身舎は東西6.48m、南北3.71m、庇または縁まで含めると、東西6.48m、南北4.53mを測る。

SB1264

調査区西のAR37～AS38地区で検出した。2×3間の側柱南北棟である。南北4.80m、東西3.60mを測る。

SB1662

調査区中央のAR28～AT29地区で検出した。2×3間の側柱東西棟である。東西4.92m、南北3.48mを測る。

SB2536

調査区南のAI19～AK21地区で検出した。2×3間総柱の身舎と、南北両面に庇または縁が付く東西棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.24～0.45m、楕円形では長径0.51～0.56m、短径0.38～0.44mを測る。身舎の小穴は庇または縁の小穴に比べて平面プランが大きい、掘り方の深さは0.30m程で差がない。身舎は東西6.54m、南北3.76～3.84m、庇または縁まで含めると、南北5.98mを測る。

SB2662

調査区南のAG21～AI22地区で検出した。2×2間側柱の身舎と、東側に庇または縁が付く東西棟である。身舎は東西4.29m、南北4.00m、庇または縁まで含めると、東西5.28mを測る。

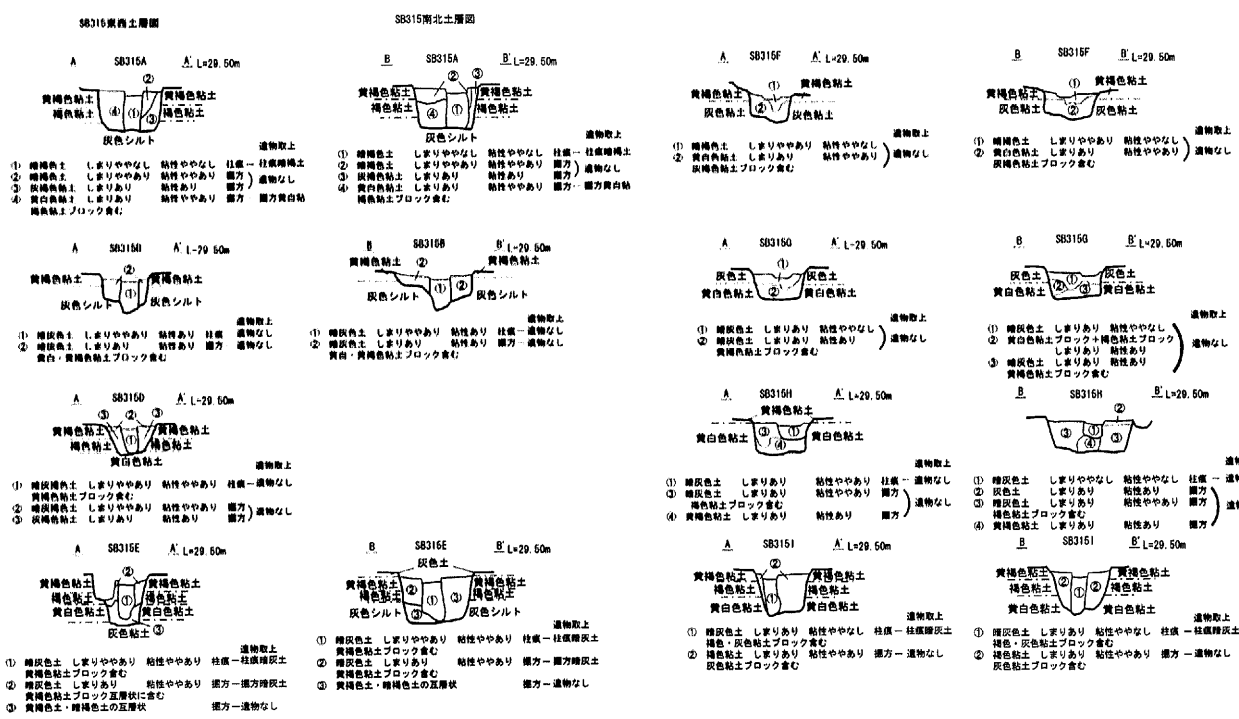
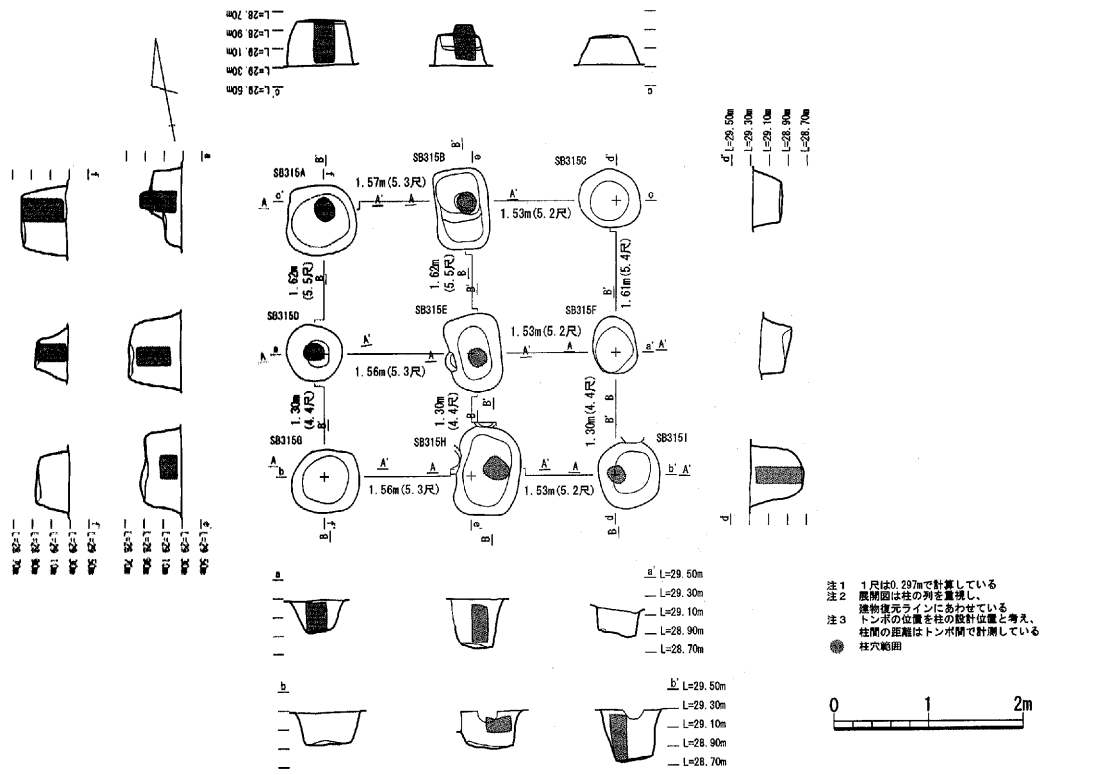


Fig.7 SB315実測図 (1/80)

なお、出土遺物はX II期の様相を示している。

SB2802 (Fig.8)

調査区南のAF22～AJ24地区で検出した。柱の配置がSB210、SB215に類似していることから、4×4間総柱の身舎と、西側に庇または縁が付く南北棟と考えている。身舎は東西7.40～7.48m、南北7.45～7.60m、庇または縁まで含めると、東西8.48～8.61mを測る。

SB3061

調査区西のAM36～A038地区で検出した。2×3間の総柱東西棟である。掘り方の平面プランは円形

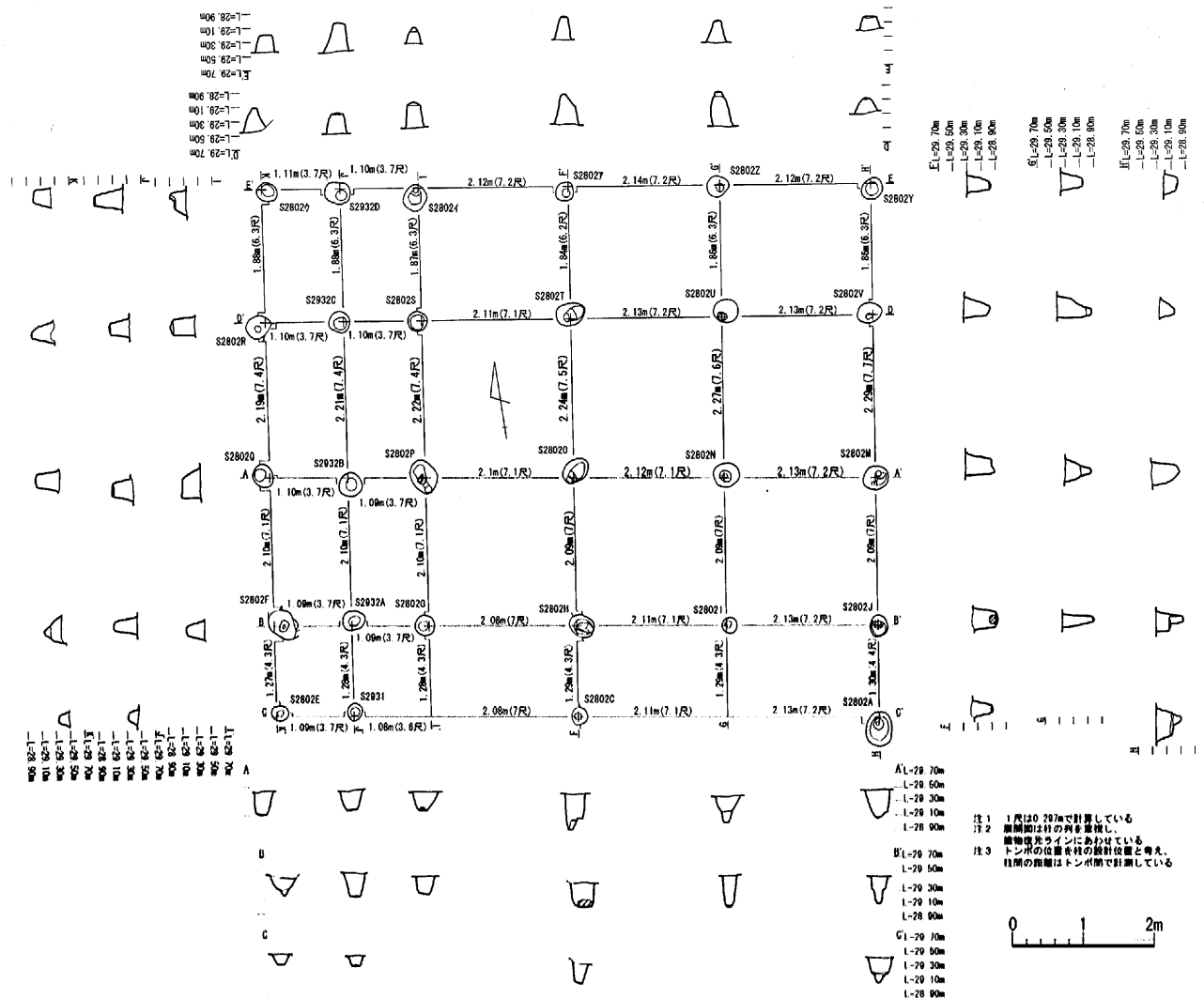


Fig.8 SB2802 実測図 (1/100)

を呈し、径0.20～0.46m、深さ0.06～0.50mを測る。東西4.92m、南北3.48mを測る。

SB3267

調査区南のAF29～AH30地区で検出した。2×3間の総柱の身舎と、北西両面に庇または縁が付く東西棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.22～0.46m、楕円形では長径0.70m、短径0.28mを測る。掘方の深さは0.16～0.45mを測る。身舎は南北5.48m、東西3.44m、庇または縁まで含めると、南北6.60m、東西4.61mを測る。

SB3512

調査区西のAI34～AK37地区で検出した。3×3間の総柱の身舎と、東南両面に庇または縁が付く東西棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.22～0.40m、楕円形では長径0.74m、短径0.31mを測る。掘方の深さは0.23～0.36mを測る。身舎は東西6.64m、南北5.22m、庇または縁まで含めると、庇または縁まで含めると、東西7.80m、南北6.02～6.28mを測る。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SB3537

調査区南のAG33～AH35地区で検出した。2×3間の総柱東西棟である。掘り方の平面プランは円形または楕円形を呈し、円形では径0.22～0.40m、楕円形では長径0.77m、短径0.33mを測る。掘方の深さは0.11～0.34mを測り、東西5.90m、南北4.18mを測る。

溝

SD002

調査区北のBC26～BG26地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約8.13m、幅0.30～0.97m、深さ0.06～0.09mを測る。調査時はS-2・6・15・24と分けて考えていたが、南北方向に並ぶため一連の溝として捉えている。流水していた痕跡はない。埋土は、S-2が黒褐土、S-6・15・24は暗褐土と異なっているが、S-2の土色が暗褐土よりやや黒味が強く見えたため、SD002は暗褐土の単層であったと考えている。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD003 (添付CD PI.013・014)

調査区北のBC25～BE17地区で検出した。ほぼ東西方向に走行し、21ライン以東で北に曲がっていく。検出長約25.20m、幅0.76～3.84m、深さ0.10～0.53m(平均0.30m程度)を測る。溝壁にえぐれている箇所があり、流水作用によるものと考えられる。溝底のレベルから西から東に流水していたと推定している。埋土は、上から暗褐土・ねずみ色土ブロック・黄褐シルト・ねずみ色土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD055 (PI.4)

調査区東のA05～BB7地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約35m、幅3.20～8.50m、深さ0.58～0.78mを測る。両端とも調査区内では完結せず、調査区外に延びている。南については大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながり、途中で西に曲がり、本遺跡のSD505に続いていく。溝底に白灰砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたことがわかる。溝底のレベルから南から北へ流水していたことがわかる。また径0.14～0.80mの礫が多数出土している。礫は散乱し、若干浮いている。護岸等の施設に用いられていた可能性はあるが、性格は不明である。埋土は、上から黒灰土・灰褐土・白灰砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅣ期を下限とする。

SD060 (PI.4)

調査区東のA04～AU5地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約17.40m、幅1.94～2.56m、深さ0.43～0.48mを測る。両端とも調査区内では完結せず、調査区外に延びている。南については大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながり、その調査所見ではさらに南に続いていくとしている。本遺構はSF1100の東側溝である。溝底のレベルは南から北へ緩やかに傾斜している。流水していた痕跡はなく、単に道路と宅地部分を区切るための溝であったようである。埋土は、上から暗褐土・褐色土・灰色砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD070 (PI.4)

調査区東のA07～BA8地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約34m、幅1.25～1.69m、深さ0.10～0.43mを測る。両端とも調査区内では完結せず、調査区外に延びている。南については大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながり、途中で西に曲がり、本遺跡のSD520に続いていく。本遺構はSF1100の西側溝である。溝底のレベルは南から北へ傾斜している。流水していた痕跡はなく、単に道路と宅地部分を区切るための溝であったようである。埋土は、上から黒灰土・暗褐土・灰褐土・灰色砂・暗灰シルト(AQ8地区より北)に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD075 (PI.4)

調査区東のA06～BA7地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約34m、幅0.50～1.87m、深さ0.13～0.72m(平均0.21m程度)を測る。両端とも調査区内では完結せず、調査区外に延びている。南については大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながる。溝底に白灰砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたと考えられる。溝底のレベルから南から北へ流水していたと想定している。埋土は、上から黒灰土・黒色土・白灰砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅣ期を下限とする。

SD100

調査区北壁際で検出した。現在も調査区の北に鷺田川に向かって流れている水路がある。検出された溝は、

旧水路跡と考えられる。埋土は、上から真砂・暗灰土に分かれる。

SD115 (添付CD PI.023)

調査区東のAP20～AS9地区で検出した。大きく蛇行しながら東西方向に走行している。検出長約35.30m、幅0.31～0.91m、深さ0.04～0.18mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは西から東へ緩やかに傾斜している。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD120 (Fig.9、PI.4)

調査区中央よりやや東のAD14～AS14地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約45m、幅0.70～1.36m、深さ0.04～0.23mを測る。北端は調査区内で完結しているが、さらに北に延びていた可能性もある。南端についてはSD520によって切られており、さらに南には続いていない。調査区東壁土層観察 (Fig.28) でも、この南の続きは確認できなかった。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ傾斜している。埋土は、暗灰土の単層である。

SD125 (Fig.9、PI.4)

調査区東のAH16～AT17地区で検出した。途中途切れつつもほぼ南北方向に走行している。検出長約28.75m、幅0.50～1.10m、深さ0.01～0.26mを測る。北端は攪乱で切られているが、南端については調査区内で完結している。北から南までつながっていたと推定している。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ傾斜している。埋土は、暗灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD160 (添付CD PI.026)

調査区東のAR5～AS2地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約8.24m、幅0.56～1.46m (平均1.35m程度)、深さ0.03～0.17mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは西から東へ緩やかに傾斜している。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅣ期の様相を示している。

SD185 (添付CD PI.027)

調査区東のA08～AQ19地区で検出した。緩やかな円弧を東西方向に描くように走行している。検出長約31.30m、幅0.33～0.82m (平均0.55m程度)、深さ0.11～0.27mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは西から東へ緩やかに傾斜している。埋土は、灰色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD245 (添付CD PI.028)

調査区中央のAQ20～AT21地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約8.70m、幅0.49～1.12m、深さ0.02～0.14mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ緩やかに傾斜している。SB210・215の近くに位置し、宅地部分を区切るための溝だったと考えられる。埋土は、褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD250 (添付CD PI.029)

調査区中央のAS・AT20地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約5.10m、幅0.59～0.87m、深さ0.01～0.09mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルはおおよそ水平である。SB210・215の

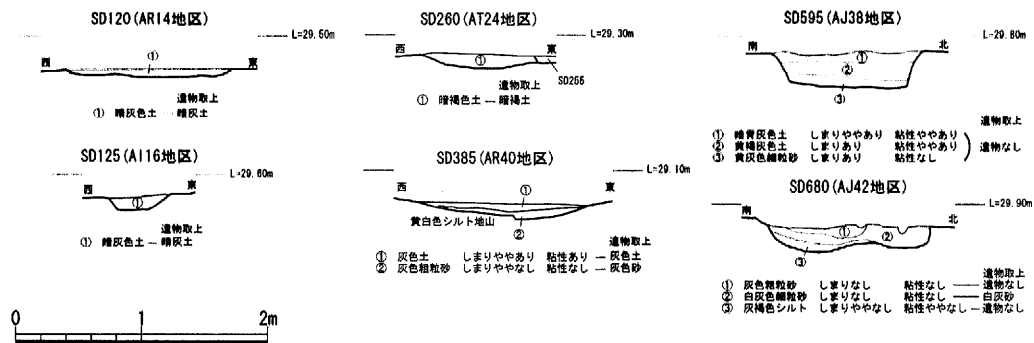


Fig.9 溝土層図 (1/60)

近くに位置し、この宅地部分を区切るための溝だったと考えられる。埋土は、暗褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD255 (添付CD PI.030)

調査区中央のAO24～AT24地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約11.60m、幅0.71～0.99m、深さ0.01～0.08mを測る。削平などにより溝底しか残らなかったとみられ、途中が切れているが、北から南までつながっていたと推定している。南端については、調査区を反転させたときに削平してしまい続きを確認することができなかった。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ緩やかに傾斜している。埋土は、暗灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD260 (Fig.9)

調査区中央のAO24～BB23地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約22.81m、幅0.84～1.80m、深さ0.02～0.08mを測る。削平などにより溝底しか残らなかったとみられ、途中が切れているが、北から南までつながっていたと推定している。南端については、調査区を反転させたときに削平してしまい続きを確認することができなかった。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ緩やかに傾斜している。埋土は、暗褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD343

調査区東のAS・AT3地区で検出した。北北東・南南西方向に走行している。検出長約4.10m、幅0.38～0.45m、深さ0.01～0.05mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SD350

調査区西のAV35～BA31地区で検出した。ほぼ東西方向に走行し、AV31地区内で北に曲がっていく。検出長約18.50m、幅0.22～0.62m、深さ0.05～0.21mを測る。流水していた痕跡はない。溝底のレベルは東西方向はおおよそ水平で、南北方向では北へ向かって緩やかに傾斜している。宅地部分を区切るための溝だったと考えられる。埋土は、灰褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD380 (添付CD PI.031)

調査区西のAQ37・38地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約5.10m、幅0.29～0.58m、深さ0.21～0.31mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルはほぼ水平である。埋土は、黒色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD385 (Fig.9、PI.4)

調査区西のAQ40～AT40地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約10.6m、幅1.06～1.42m、深さ0.11～0.24mを測る。両端とも調査区内では完結せず、調査区外に延びている。南についてはSD2446につながるとみられる。溝底に灰色砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたと考えられる。南から北に流水していたと想定している。埋土は、上から灰色土・灰色砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅣ期の遺物をわずかに含むが、大半はXⅡ期の様相を示している。

SD450 (添付CD PI.033)

調査区西のAR27～AR30地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約9.20m、幅0.72～1.16m、深さ0.05～0.09mを測る。溝が途中分岐しているが、土層観察から同一遺構と考えている。埋土は、暗褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SD505 (Fig.26～28、添付CD PI.034)

調査区南のAC14～AC26地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約35.5m、幅0.54～2.63m、深さ0.04～0.66m(平均0.27m程度)を測る。西端についてはAC26地区で完結する。調査区南壁の土層観察(Fig.26)から、もともとAC27地区まで続いていたことがわかる。東は調査区外に延びており、大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながり、途中で北に曲がり、本調査区のSD055に続いていく。溝底に灰色砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたことがわかる。溝底

のレベルから西から東へ流水していたことがわかる。埋土は、上から黒褐土・灰褐粘・暗灰土・灰色砂に分かれる。

なお、出土遺物はXIV期の様相を示している。

SD520 (Fig. 28, Pl. 5)

調査区南のAD14～AE39地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約74m、幅1.21～1.90m(平均1.50m程度)、深さ0.17～0.49m(平均0.27m程度)を測る。東は調査区外に延びており、大宰府条坊跡第122次調査で検出された溝につながり、途中で北に曲がり、本調査区のSD070に続いていく。本遺構はSF700の北側溝である。西端はSX4631とSD2448によって切られているが、北に曲がっていた可能性がある。溝底の一部に白灰砂が堆積していることから、一時的な流水作用はあったと考えられるが、主に空間を区切るための溝であったと想定している。埋土は、上から黒褐土・黒色土・灰色砂(遺物出土なし)・灰褐粘・白灰砂に分かれる。

なお、出土遺物はXIV期の遺物をわずかに含むが、本遺構の切り合い関係を考慮するとXII期に埋没していた可能性が高い。

SD556

調査区北東のAW・AX10地区で検出した。南北方向に走行している。検出長約1.65m、幅0.36～0.42m、深さ0.01～0.07mを測る。埋土は、黒色土の単層である。

SD595 (Fig. 9, Pl. 5)

調査区南のAJ17～39地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。幅1.17～1.78m(平均1.40m程度)、深さ0.17～0.27mを測る。調査時はS-595・2581と分けて考えていたが、東西方向に並ぶため一連の溝として捉えている。流水していた痕跡はない。埋土は、S-595が上から、暗褐土・暗青灰土・黄褐土・黄灰細粒砂に分かれ、暗褐土のみ遺物が出土している。S-2581は暗灰土の単層である。埋土の違いは層序の違いによるものではなく、両遺構の位置が離れていることによると考えている。

なお、XIV期の遺物が埋土上位から出土しているが、これは流れ込みまたは沈み込みによるためと考えられる。本遺構の切り合い関係を考慮するとXII期に埋没していた可能性が高い。

SD680 (Fig. 9)

調査区南西のAJ41・42地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約3.00m、幅1.30m程度、深さ0.21～0.28mを測る。西端は調査区外に延びている。東端はSD2443手前で完結している。本遺構の東西ライン上にSD595も並ぶ。埋土は、上から、灰粗砂(遺物出土なし)・白灰砂・灰褐シルト(遺物出土なし)に分かれる。

なお、出土遺物から7世紀後半に埋没したと推測され、本調査区ではSI545とともに最も古い遺構である。

SD2134

調査区中央のAP31～AR31地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約6.00m、幅0.45～0.58m、深さ0.06～0.20mを測る。調査時はS-2134・4519と分けて考えていたが、攪乱を挟んで並ぶため一連の溝として捉えられる。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルはおよそ水平である。埋土は、暗灰土の単層である。

SD2443 (Fig. 31, Pl. 5)

調査区南西のAC41～AK40地区で検出した。ほぼ南北方向に走行し、AFライン以南でやや西に曲がっていく。検出長約22.70m、幅0.47～0.77m(平均0.50m程度)、深さ0.05～0.15m(平均0.27m程度)を測る。両端とも調査区外に延びている。本遺構はSF1000の西側溝である。溝底のレベルは南から北へ傾斜している。流水していた痕跡はなく、単に道路と宅地部分を区切るための溝であったようである。埋土は、暗灰土の単層である。

なお、出土遺物はXII期の様相を示している。

SD2446 (Fig. 31, Pl. 5)

調査区南西のAC40～AK40地区付近で検出した。ほぼ南北方向に走行し、AFライン以南でやや西に曲がっていく。検出長約23.00m、幅0.90～2.20m(平均1.80～2.00m)、深さ0.12～0.31m(平均0.25m程度)を測る。両端とも調査区外に延びている。北についてはSD385につながるとみられる。溝底に灰色砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたことがわかる。溝底のレベルから南から北へ流水していたことがわかる。埋土は、上から、茶褐土・灰色砂に分かれる。ただし茶褐土について

は調査区の「1. 層位」の項で述べたように、包含層の掘り残しである。

なお、出土遺物はXIV期の様相を示している。

SD2447 (Fig. 31、Pl. 5)

調査区南西のAC39～AK39地区で検出した。ほぼ南北方向に走行している。検出長約23.00m、幅0.34～1.29m(平均1.10～1.20m)、深さ0.13～0.23mを測る。調査区外に延びている。溝底に白灰砂が堆積していることと、溝肩・溝底が蛇行している状況から流水していたと考えられる。溝底のレベルから南から北へ流水していたと想定できる。埋土は、上から、茶褐色土・暗褐色土・白灰砂に分かれる。SD2446同様、茶褐色土については包含層の掘り残しである。

SD2448 (Fig. 31、Pl. 5)

調査区南西のAD33～AD39地区とAE39～AK39地区で検出した。AE39～AK39地区ではほぼ南北方向に、AD39地区内で東に曲がり、AD33地区までほぼ東西に走行している。検出長約34.50m、幅0.33～1.05m(南北平均0.50m、東西平均0.80m)、深さ0.05～0.30m(平均0.10m程度)を測る。調査時はS-2448・4294と分けていたが、一連の溝状遺構である。北端は調査区外に延びている。本遺構はSF1000の東側溝とSF700の北側溝の機能を兼ねている。溝底のレベルはAE39～AK39地区では南から北へ、AD33～AD39地区では西から東へ傾斜している。流水していた痕跡はない。遺物は、S-2448が暗灰土、S-4294が暗褐色土で取り上げている。

なお、白磁碗Ⅶ類が1点混入しているものの、本遺構の切り合い関係を考慮するとXII期に埋没していた可能性が高い。

SD2681

調査区南のAC16～AD34地区で検出した。途中途切れつつもほぼ東西方向に走行している。検出長約38.50m、幅0.26～0.97m、深さ0.03～0.13mを測る。西から東までつながっていたと推定している。西端については、南調査区・南西調査区の境界にあたり、南西調査区内で続きを確認することができなかった。溝底のレベルは西から東へ傾斜している。流水していた痕跡はない。SF700路面上に位置しているが、特に硬化しているわけでもなく、带状遺構などの道路関連遺構ではないと想定される。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXIII期の様相を示している。

SD2682

調査区南のAC17～AE34地区で検出した。途中途切れつつもほぼ東西方向に走行している。検出長約48.90m、幅0.32～0.84m(平均0.56m程度)、深さ0.03～0.18mを測る。本遺構はSD2681と並走している。西端については、南調査区・南西調査区の境界にあたり、南西調査区内で続きを確認することができなかった。溝底のレベルは西から東へ傾斜している。流水していた痕跡はない。SD2681同様SF700路面上に位置しているが、特に硬化しているわけでもなく、带状遺構などの道路関連遺構ではないと想定される。埋土は、暗褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXII期の様相を示している。

SD3129

調査区西のAL34～AM37地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約6.40m、幅0.70～1.07m、深さ0.09～0.21mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは西から東へ傾斜している。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXIII期の様相を示している。

SD3483

調査区南西のAH35～AH38地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約6.70m、幅0.34～0.43m、深さ0.03～0.12mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは東から西へ傾斜している。埋土は、暗灰土の単層である。

SD3998

調査区南西のAH31～AI35地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約6.20m、幅0.74～0.90m、深さ0.11～0.16mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルはおおよそ水平である。埋土は、黒灰土の単層である。

SD4012

調査区南のAG25～AH29地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約10.00m、幅0.58～0.77m、深さ0.08～0.19mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルはおおよそ水平である。埋土は、暗灰土の単層である。

SD4017

調査区南のAI27～AH28地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約2.48m、幅0.25～0.34m、深さ0.10～0.26mを測る。流水していた痕跡はなく、溝底のレベルは南から北へ緩やかに傾斜している。埋土は、暗灰土の単層である。

SD4394

調査区中央やや西寄りのAM・AN31地区で検出した。ほぼ北北東・南南西方向に走行している。検出長約3.10m、幅0.19～0.24m、深さ0.05～0.11mを測る。削平などにより溝底しか残らなかったとみられ、途中が切れているが、北から南までつながっていたと推定している。流水していた痕跡はない。埋土は、灰褐色土の単層である。

SD4629

調査区南西のAD34～38地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約10.50m、幅0.40～0.57m、深さ0.09～0.19mを測る。東端は溝の続きを確認することができなかった。流水していた痕跡はない。SF700路面上に位置しているが、特に硬化しているわけでもなく、带状遺構などの道路関連遺構ではないと想定される。埋土は、暗灰土の単層である。

SD4672 (Fig. 28)

調査区南西のAC34～AD36地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約5.50m、幅0.40～0.85m、深さ0.05～0.23mを測る。西端は調査区内で完結しているが、東端はAC33地区拡張区で検出された溝につながると推定している。流水していた痕跡はない。SF700路面上に位置しているが、特に硬化しているわけでもなく、带状遺構などの道路関連遺構ではないと想定される。埋土は、暗褐色土の単層である。

SD4714 (Fig. 28)

調査区南東のAB14・15地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約2.00m、幅0.31～0.52m、深さ0.08～0.11mを測る。両端とも調査区外に延びている。東の延長上は、大宰府条坊跡第122次調査で検出された東西道路の南側溝に続く可能性が高い。このことから本遺構はSF700の南側溝であると考えられる。埋土は、灰色土の単層である。遺物は土師器小片のみである。

SD4763 (Fig. 28)

調査区南西のAB34～AC35地区で検出した。ほぼ東西方向に走行している。検出長約1.40m、幅0.26～0.41m、深さ0.18mを測る。両端とも調査区外に延びている。上述のようにSD4714はSF700の南側溝と想定されるが、SD4714検出地点でのSF700路面幅はSD520・4714溝芯々間距離で6.87mを測り、本遺構もSD520との溝芯々間距離は6.57mを測る。調査区内で検出した道路側溝はいずれも直線的であることから、本遺構もSD4714とつながると推定され、SF700の南側溝であると考えられる。埋土は、灰褐色土の単層である。ここからは平安後期の遺物が出土している。

井戸

本調査区内で灰色粗粒砂と青灰色細粒砂（場所により色調の小異がある）の2つの湧水層を確認した。この2つの湧水層は現在における湧水層だが、井戸枠を伴う明らかな井戸がこれらの湧水層を掘り抜いている。浅い所では、遺構確認面から1m程度で灰色粗粒砂層に達し、曲物を設置している例もみられる。よって、これらの湧水層は、井戸構築当時も湧水層であった可能性が高いと考えられる。

井戸は地下水を汲み上げる施設であるので、湧水層まで掘り込まれていたことが必要条件と考える。以下に報告するなかで、井戸枠などを伴わないでも、上記の湧水層まで掘り込まれていることを条件に、規模や形態を考慮し、井戸と捉えたものである。また湧水が確認されなかったものでも、規模や形態から井戸として捉えているものもある。

SE020 (Fig. 10)

調査区北のBC26～BD27地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径2.12～2.20m、深さ2.95mを測る。埋土全体に地山に見られる土がブロック状の土塊になって多く含まれていることから、人為的に埋

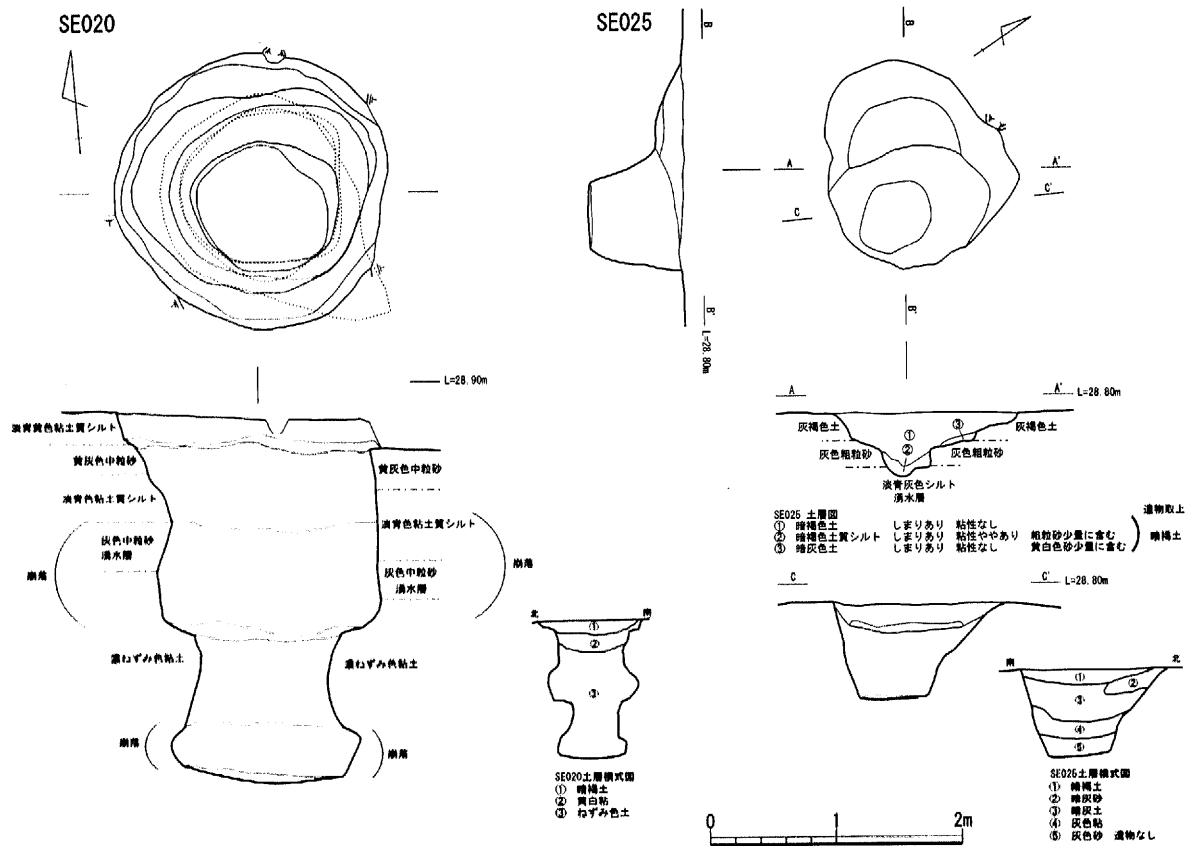


Fig.10 SE020・025実測図 (1/60)

め戻されたと考えられる。湧水により、遺構中位・下位部分で掘り方壁が崩落している。崩落が、掘削時、使用時、どの時点のものかは不明である。埋土は、上から暗褐色土・黄白粘・ねずみ色土に分かれる。最下位に埋め戻し以前の堆積があった可能性があるが、湧水により、確認することができていない。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE025 (Fig.10)

調査区北のBD20～BE21地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径1.65m、短径1.48m、深さ0.76mを測る。埋土は、上から暗褐色土・暗灰砂・暗灰土・灰色粘・灰色砂（遺物出土なし）に分かれる。暗褐色土については本遺構検出時に全面に見えたため一つの遺構として認識していたが、別遺構の浅い土坑だった可能性が高いと考えている。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE050 (Fig.11、PI.6)

調査区北のBB30・31地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径2.00～2.15m、深さ1.51mを測る。遺構検出面から約0.56m程掘り下げた後、平面プランが0.70～0.75mの方形の井戸枠を検出した。井戸枠は厚さ（1～2cm程度）や幅（10～30cm程度）の異なる縦板を重ねて用い、内側から隅柱に横棧木を差し込んで支持する。隅柱は北東のみ6cm角×高さ90cm程度の角材を使用し、他の隅柱は径10cm×高さ90cm程度の円柱形を呈する。横棧木は、腐朽し脱落していたが、両端から約7cmの範囲の2面を斜めに削ることによってホゾとして使用している。埋土は、井戸枠内（暗灰粘）、井戸枠裏込（黄白・青灰粘ブロック）に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE080 (添付CD PI.050)

調査区東のAP9地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.54m、短径1.21m、深さ1.12mを測る。埋土は、上から暗灰土・黄褐シルトブロックに分かれる。

SE150 (Fig.11、PI.6)

調査区東のAP9～AQ10地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径3.60m、短径3.20m、深さ2.80mを測る。遺構検出面から約0.80m程掘り下げた後、平面プランが0.82mの方形の井戸枠

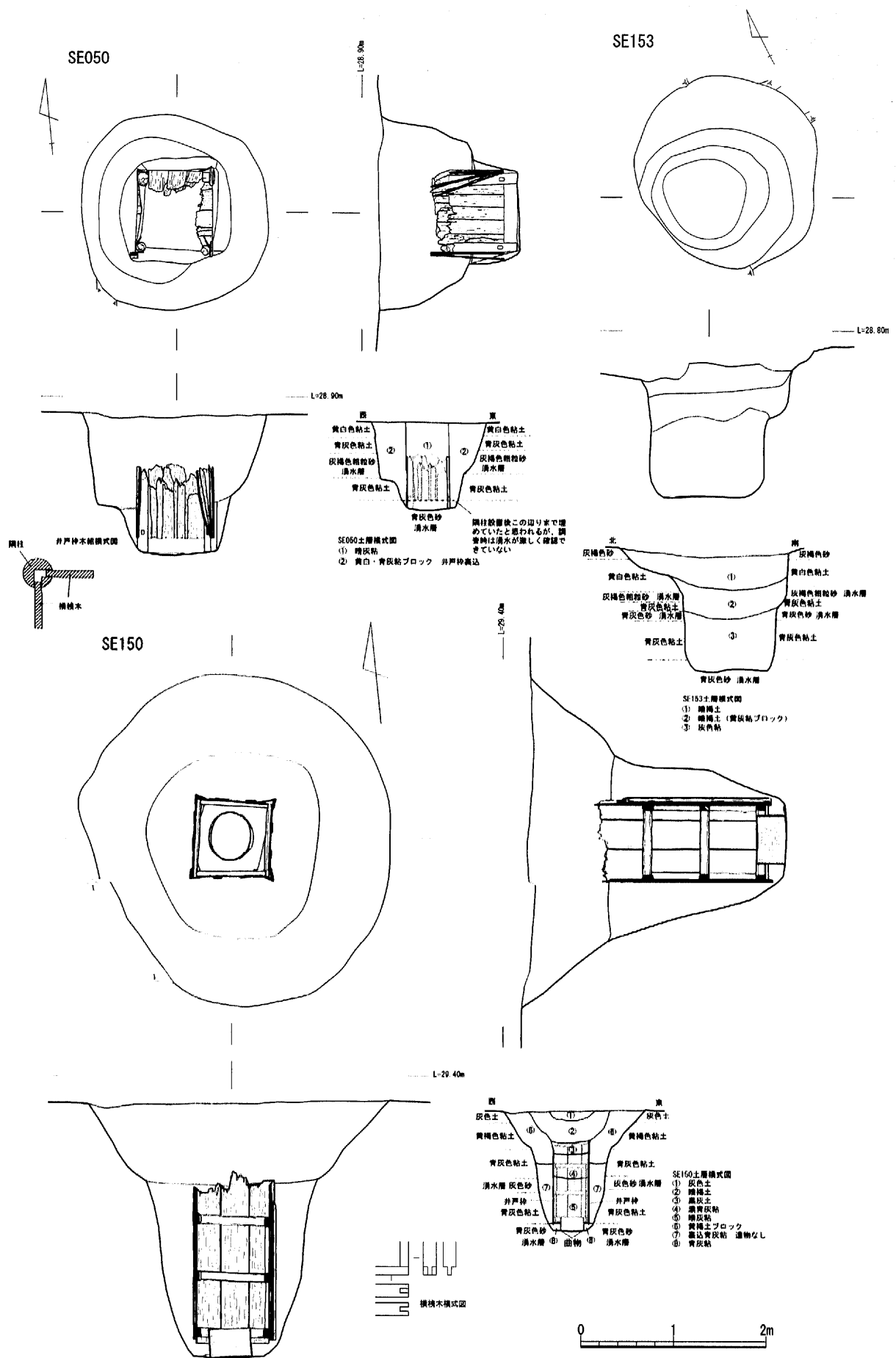


Fig.11 SE050・150・153 実測図 (1/60)

を検出した。井戸枠の下底には水溜めの曲物を伴う。縦板を内側から横棧木で支え、横棧木は支柱により支持される。縦板は残りが良く、残存長で180cm程度もあり、幅30cm、厚さ2cm程度の板材を用い、縦板の合せ目に外側から幅10cm、厚さ0.8cm程度の薄い板をあてている。外側の薄い板は2枚重ねて使用される箇所が多い。横棧木は3段分が原位置を保った状態で検出され、もう1段分が崩落して出土した。横棧木は本来4段で組まれていたと推測される。井戸枠部の中位に堆積した濃青灰粘から人頭大の石が出土しており、井戸上部あるいは地表面の施設に使われていた可能性もある。埋土は、遺構確認面から井戸枠プラン検出まで(上から、灰色土・暗褐土)、井戸枠内(上から、黒灰土・濃青灰粘・暗灰粘)、井戸枠裏込(上から、黄褐土ブロック・裏込青灰粘(遺物出土なし)・青灰粘(遺物出土なし))に分かれる。

出土遺物は、井戸枠裏込(黄褐土ブロック)はXⅢ期、遺構確認面から井戸枠プラン検出(暗褐土)と井戸枠内(黒灰土・暗灰粘)はXⅣ期の様相を示している。

SE153 (Fig.11)

調査区北のBB・BC25地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.09m、短径1.92m、深さ1.60mを測る。埋土に井戸枠の痕跡は認められない。埋土は、上から暗褐土・暗褐土(黄灰粘ブロック)・灰色粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE175 (Fig.12)

調査区東のAS8～AT9地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.20～1.40m、深さ0.88mを測る。埋土は、暗褐土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE190 (添付CD PI.055)

調査区東のAV・AW9地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.69m、短径1.59m、深さ0.90～0.96mを測る。埋土は、上から黒灰土・暗褐土・黄灰土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE195 (Fig.12)

調査区中央よりやや東のAR15・16地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.04m、短径1.75m、深さ1.00mを測る。埋土に井戸枠の痕跡は認められない。埋土は、上から暗褐土・褐色土・濃ねずみ色土・ねずみ色土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE205 (Fig.12)

調査区東のAP2・3地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.81m、短径2.47m、深さ1.30mを測る。地山土は、上から暗灰色粗粒砂・黄色粘土・茶色粘土・黄白色粘土となっており、湧水層は不明確である。しかし断面漏斗状を呈し、集水の意識がはたらいっていたと考えられる。埋土は、上から暗灰土・白色砂・暗褐土・灰色粘・暗灰粘(遺物出土なし)に分かれる。暗灰土については土層観察から別遺構の浅い土坑だった可能性が高いと考えている。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE235 (Fig.12、PI.7)

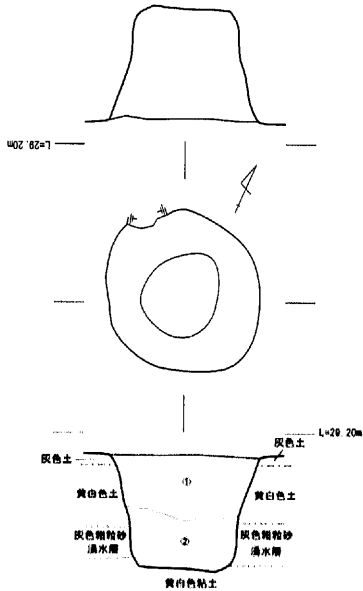
調査区北東のAX10～AY11地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.82m、短径1.66m、深さ1.57mを測る。遺構検出面から約0.60m程掘り下げた後、径0.38～0.43mの楕円形の結桶を使った井戸枠を検出した。竹で2巻き(編んでいない)して締めており、隙間に木切れ(長さ8cm×幅1cm×高さ1cm程度)を差し込んでいる。板は土圧により内側に張り出し、形が崩れていた。また、2箇所だけ2重に板が当てられている。これらの板は井戸底まで達しておらず、タガでとめられているわけでもなく、どういう意味を持つものなのか不明である。埋土の堆積状況から井戸枠は2段あったものと思われる。埋土は、推定井戸枠内(上から、黒灰土・黄色粘(遺物出土なし)・暗灰粘(粗粒砂)(遺物出土なし))、井戸枠内(暗灰粘)、井戸枠裏込(上から、暗褐土・青灰粘)に分かれる。

出土遺物は、推定井戸枠内(黒灰土)はXⅢ期、井戸枠内(暗灰粘)はXⅡ期、井戸枠裏込(暗褐土)はXⅡ期の様相を示している。

SE240 (Fig.13)

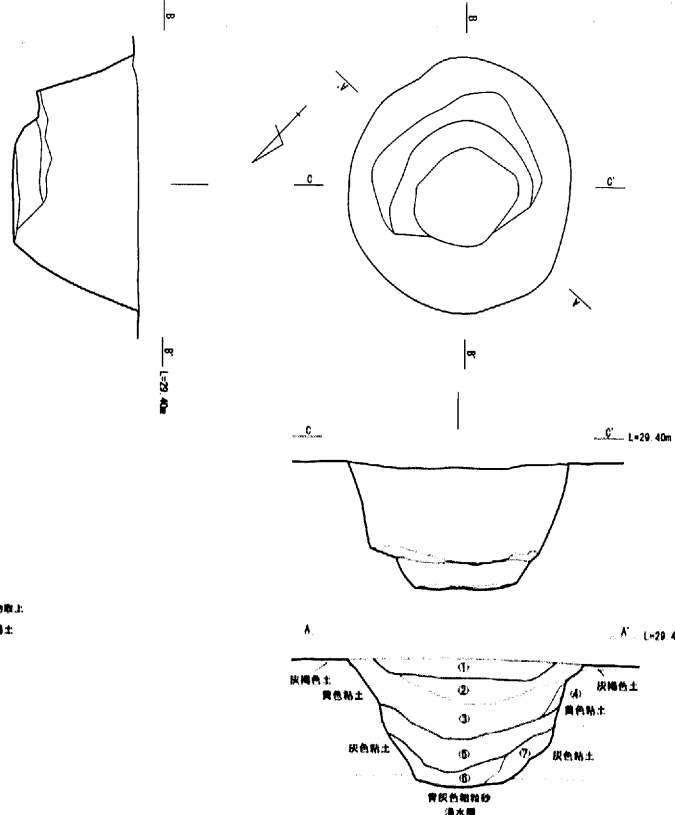
調査区中央よりやや東のAP・AQ17地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.40m、

SE175



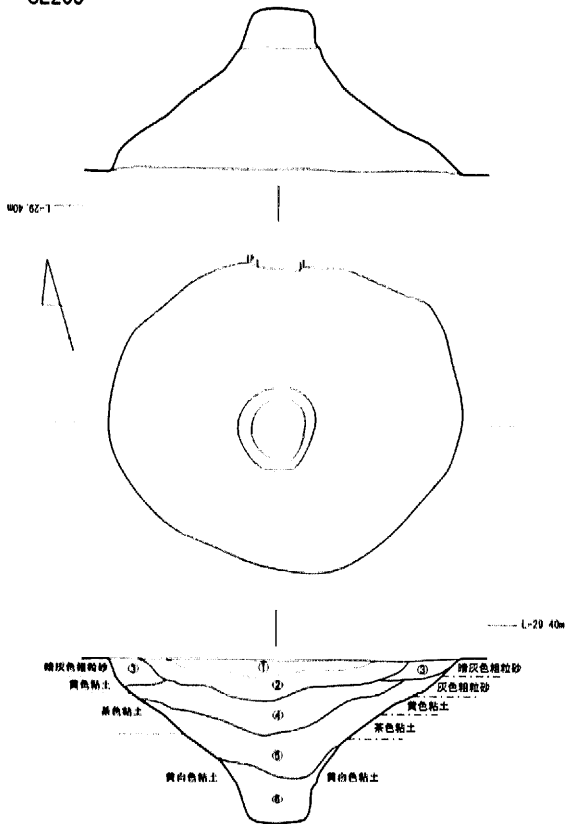
SE175 土層図
 ① 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ② 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 白色シルトブロック多量に含む
 ③ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ④ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑤ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ⑥ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑦ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む

SE195



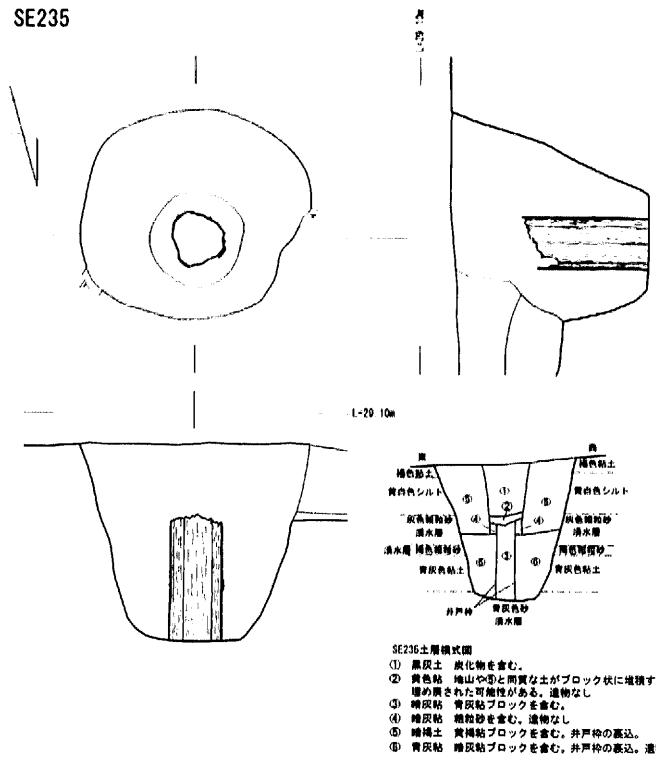
SE195 土層図
 ① 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ② 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ③ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ④ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑤ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ⑥ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑦ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む

SE205



SE205 土層図
 ① 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ② 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ③ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ④ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑤ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む
 ⑥ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 暗砂多量に含む
 ⑦ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 暗砂多量に含む

SE235



SE235土層図
 ① 暗褐色土 暗化物を含む
 ② 暗褐色土 暗山や①と同質な土がブロック状に堆積する。認められた可能性がある。遺物なし
 ③ 暗褐色土 暗砂多量に含む
 ④ 暗褐色土 暗砂多量に含む
 ⑤ 暗褐色土 暗砂多量に含む
 ⑥ 暗褐色土 暗砂多量に含む
 ⑦ 暗褐色土 暗砂多量に含む



Fig.12 SE175・195・205・235 実測図 (1/60)

短径1.25m、深さ0.95mを測る。埋土は、上から暗褐色土・暗灰粘・灰粗砂（遺物出土なし）に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE270 (Fig.13、Pl.7)

調査区中央のAQ21～AR22地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径2.87～2.97m、深さ1.08mを測る。遺構検出面から約0.30m程掘り下げた後、内外2つの井戸枠を検出した。内側の井戸枠は、径0.60m程度の結桶で長さ約80cmの板材を使用して円く組み、外側上下2ヶ所でタガを取り付けている。タガは幅1cm、厚さ0.3cm程度の竹をねじり編みにしたものを上1束、下2束を用いている。外側の井戸枠は、残存状況が悪くほとんど残っていない。2つの井戸枠の関係については同時期に存在していたかどうかは不明である。埋土は、井戸枠内（上から、黒褐色土・暗灰粘）、井戸枠裏込（上から、暗褐色土・暗青灰粘（遺物出土なし））に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE280 (Fig.13)

調査区北のBA24・25地区で検出した。掘り方の平面プランは円形～隅丸方形を呈し、径1.80～1.92m、深さ1.66m以上を測る。調査を進めていく中で地山壁崩落の危険があり、安全上掘削を途中で止めている。井戸枠を確認できなかった。埋土は、上から暗褐色土・暗褐色土（青灰粘質シルトブロック）に分かれる。埋土の堆積状況から埋め戻していると考えられる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE300 (Fig.13)

調査区北のAY28～BA29地区で検出した。攪乱により削平されているため正確な形状は不明であるが、掘り方の平面プランは不整楕円形を呈していたとみられ、残存長で長径2.85m、短径2.26m、深さ2.29mを測る。埋土は、上から黒灰土・灰色粘に分かれる。遺物は、黒灰土からの出土が多い。SE300の役割を終えた後、廃棄土坑として使われたものと推測される。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE320 (Fig.14、Pl.8)

調査区西のAV37～AW38地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径2.00～2.08m、深さ2.40mを測る。遺構検出面から約0.90m程掘り下げた後、井戸枠を検出した。井戸枠は平面プランが0.73～0.77mの方形木枠で、縦板を隅柱と横棧木により、内側から支えている。隅柱（径8cm）には枠穴を穿ち、直接横棧木を差し込んでおり、構造的に強い造りになっている。横棧木（長さ70cm×幅5.5cm×高さ4cm）は、両端の3面を斜めに削ることによってホゾとしている。1面だけをゆるく丸め、断面かまぼこ状を呈する。丸めた面を内側に向くように使用している。東側の横棧木だけは横長に使用されており、丸めた面が上にきている。曲物（径48cm、厚さ2cm前後、高さ20cm）を設置した後、裏込で固定し、曲物の裏込の上に井戸枠が作られている。曲物の脇から石が出土しており、曲物の固定に用いられた可能性があるが、1つだけなので確証はない。埋土は、遺構確認面から井戸枠プラン検出まで（上から、灰色土・黒褐色土・暗褐色土（褐色粘ブロック））、井戸枠内（暗灰粘）、井戸枠裏込（上から、裏込暗褐色土・青灰砂）に分かれる。灰色土は、井戸埋土が沈み込んだ部分に新たに堆積したもの、暗褐色土（褐色粘ブロック）は、裏込暗褐色土が崩落して堆積したものと考えられる。また、黒褐色土にもブロック状の土塊がみられ、堆積の過程で裏込暗褐色土の崩落土を含んだものと推測される。人為的に埋め戻されたかどうかの判断はつかない。

なお、出土遺物については、裏込暗褐色土はXⅡ期を示す。暗灰粘は出土遺物から時期を特定することができない。暗褐色土（褐色粘ブロック）はXⅡ期、黒褐色土はXⅢ期を示す。灰色土は、白磁皿Ⅸ-2類（磁器区分F期）の資料を1点含む。それを除けばXⅡ期の様相を示すが、出土量も少ないため、精度は低い。築造はXⅡ期、XⅡ期中に廃棄され、XⅢ期には完全に埋没したものと推測される。

SE362 (Fig.14)

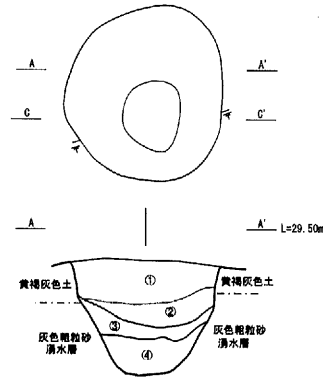
調査区東のAP13地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.20～1.24m、深さ1.00mを測る。埋土は、上から灰色土・黒灰土・暗褐色土・暗灰土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

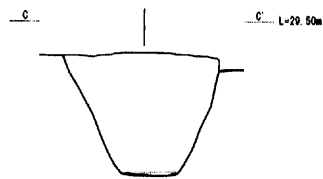
SE370 (添付CD Pl.069)

調査区西のAT・AU35地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径1.79m、短径1.39m、深さ0.63～0.85mを測る。埋土は、上から灰色土・黒灰土・暗褐色土・黄褐色土に分かれる。

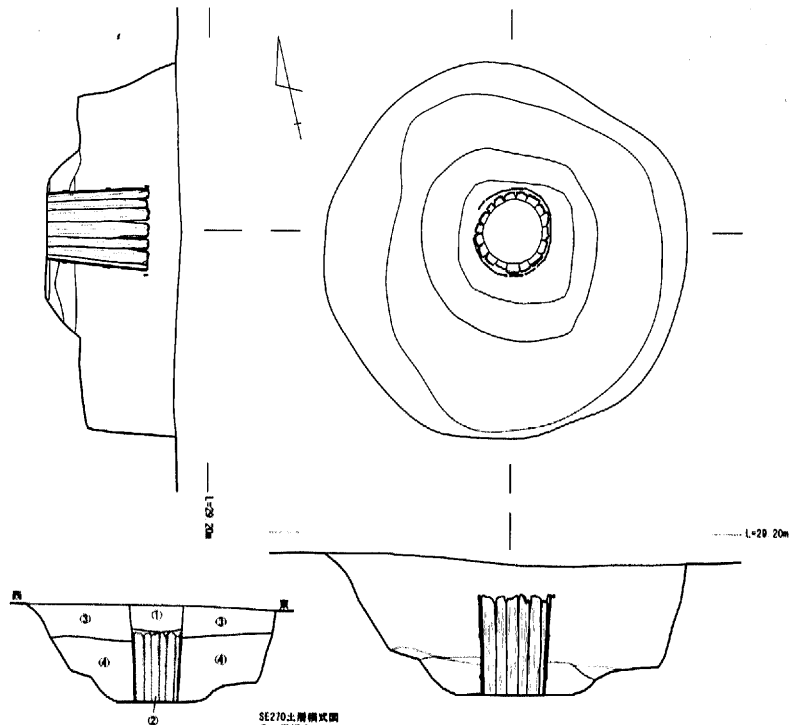
SE240



- SE240 土層図
- | | | | | |
|---------|-----------|--------|------------|--------|
| ① 暗褐色土 | しまりあり | 粘性ややなし | 炭化物少量に含む |) 暗褐色土 |
| ② 暗褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化物少量に含む | |
| ③ 黄白色粘土 | しまりやなし | 粘性あり | 炭化物少量に含む | 暗褐色土 |
| ④ 黄白シルト | ブロック少量に含む | 粘性なし | 地山よりしまりがない | 遺物なし |

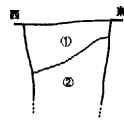
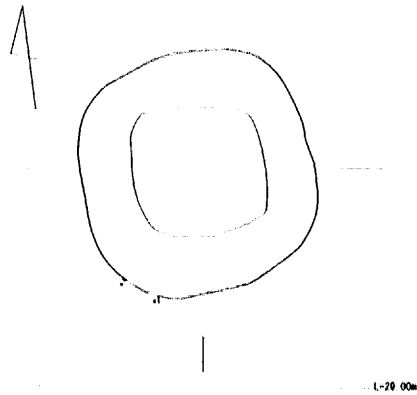


SE270

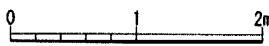


- SE270土層構造図
- ① 黒褐色土
 - ② 暗褐色土
 - ③ 暗褐色土、非円形の遺込
 - ④ 暗褐色土、非円形の遺込、遺物なし

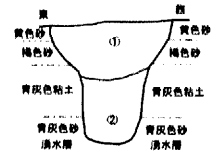
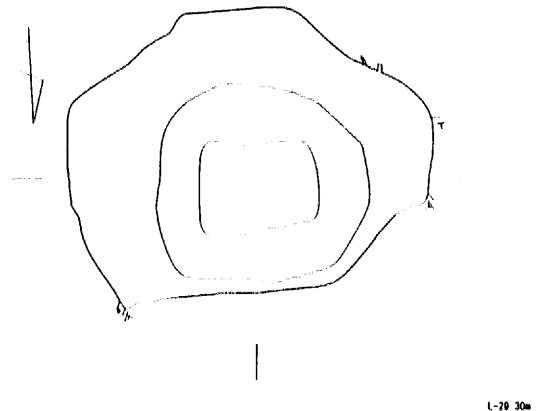
SE280



- SE280土層構造図
- ① 暗褐色土
 - ② 暗褐色土 (黄灰粘質シルトブロック)



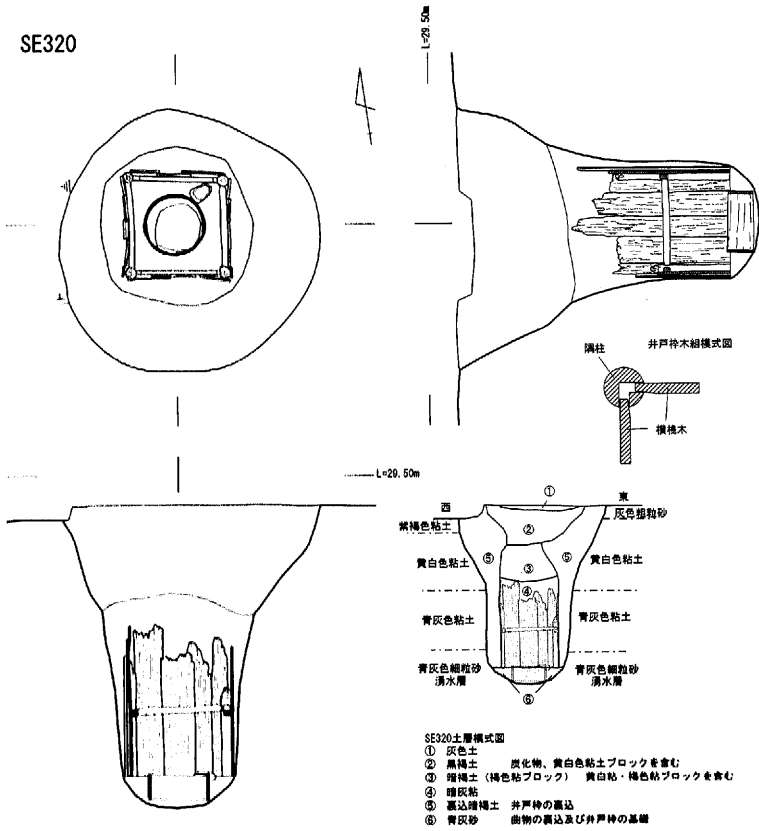
SE300



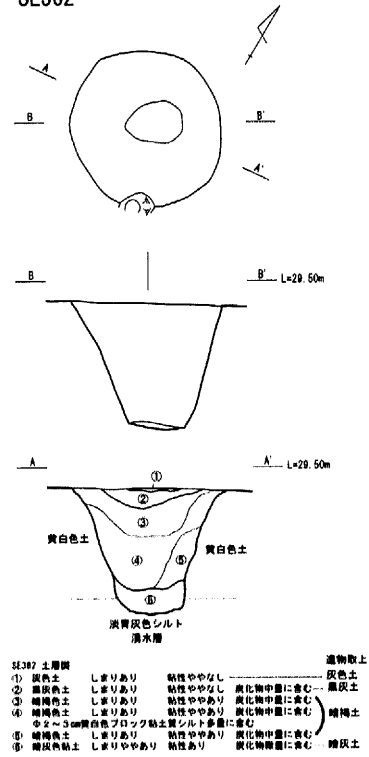
- SE300土層構造図
- ① 黒褐色土
 - ② 灰色粘

Fig. 13 SE240・270・280・300実測図 (1/60)

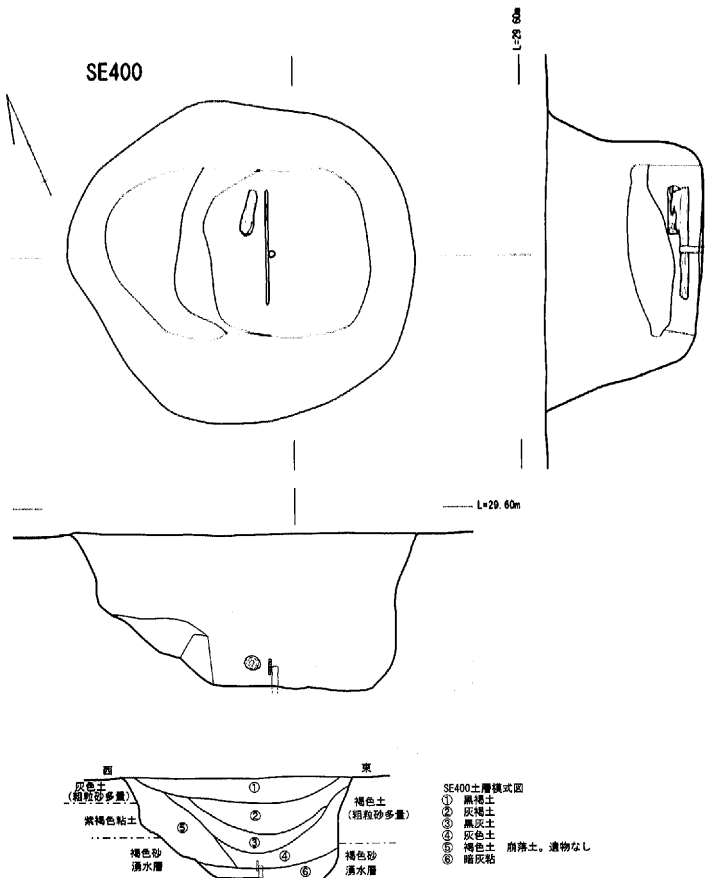
SE320



SE362



SE400



SE405

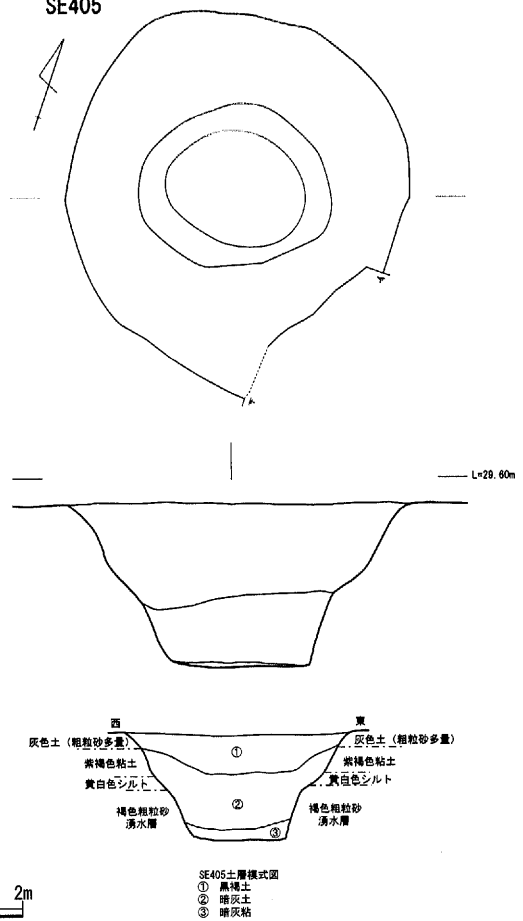


Fig.14 SE320・362・400・405 実測図 (1/60)

出土遺物は、暗褐色土から土師器a1(糸切り)と白磁椀V-4類(磁器区分D期)が出土しており、それ以外はXⅡ期の様相を示している。

SE400 (Fig.14)

調査区西のAR32～AS31・32地区で検出した。掘り方の平面プランは不整形円形を呈し、径2.41～2.76m、深さ1.25mを測る。井戸枠の痕跡は認められないが横板と杭が出土している。埋土は、上から黒褐色土・灰褐色土・黒灰土・灰色土・褐色土(遺物出土なし)・暗灰粘に分かれる。褐色土は西側の掘り方壁が崩落したものとみられ、横板と杭は、脆弱ではあるが、崩落土をせき止める意図で設置したのではないかと推測される。黒褐色土から灰色土まで非常に多くの遺物を含み、廃棄土坑としての利用が考えられる。埋土状況は、埋め戻しのような人為的なものではなく、自然堆積の様相を呈する。一括廃棄ではなく、比較的長期間の利用が想定される。

出土遺物は、黒褐色土に少量の糸切りを伴う土師器と白磁椀Ⅷ類(磁器区分D期)を含む以外は、XⅡ期の様相を示している。

SE405 (Fig.14)

調査区西のAQ・AR32地区で検出した。掘り方の平面プランは不整形円形を呈し、径2.72～3.03m(平均2.80m)、深さ1.29mを測る。井戸枠の痕跡は認められないが、付近のSE400・415と同じ湧水層まで掘り下げていることなどから井戸と考えられる。埋土は、上から黒褐色土・暗灰土・暗灰粘に分かれる。

出土遺物は、黒褐色土に龍泉窯系青磁椀Ⅰ類(磁器区分D期)を1点含む以外は、XⅡ期の様相を示している。

SE410 (Fig.15、Pl.8)

調査区西のAP33～AQ34地区で検出した。掘り方の平面プランは不定形を呈し、径1.99～2.40m、深さ1.26mを測る。遺構検出面から約1.14m程掘り下げた後、曲物、支柱、横板を検出した。井戸枠は確認できなかった。曲物(径50cm、厚さ0.5cm前後、高さ12cm)は、わずかに遺構底面にめり込み(底面は砂地)原位置を保っている。支柱(径5cm、高さ16cm)もわずかにめり込む程度で、打ち込まれてはいない。支柱は直立し、原位置を保つと考えられるのに対し、横板は移動しているようである。井戸枠の裏込は確認されず、井戸枠はもともと背の低いものか、あるいは、部材が抜かれている可能性が想定される。埋土は、上から黒灰土・灰褐色土・暗灰粘に分かれる。

出土遺物は、灰褐色土・暗灰粘はXⅡ期、黒灰土はXⅢ期の様相を示している。

SE415 (Fig.15、Pl.9)

調査区西のAR33地区で検出した。掘り方の平面プランは不整形円形を呈し、径2.14～2.27m、深さ1.31mを測る。遺構検出面から約0.95m程掘り下げた後、平面プランが0.83mの方形の井戸枠を検出した。横板は三枚ホゾ差で組まれ、支柱は横板の上に乗せられているだけである。板材は残っていない。井戸枠内には径60cmの結桶が据えられている。桶は幅8cm、厚さ0.6cm程度の板材20枚を使用して円く組み、外側下位でタガを取り付けている。板材の長さは腐食しており詳細は不明である。この桶には底板があり、4ヶ所V字形の切り込みがある。浄水の効果を狙ったものだろうか。埋土は、遺構確認面から井戸枠内まで(上から、黒灰土・灰色土・灰色土(黄褐色粘ブロック)・暗灰粘)、桶外(暗灰粘)、桶裏込(灰褐色粗砂(遺物出土なし))に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE440 (Fig.15)

調査区西のAP35地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.91～0.99m、深さ0.83mを測る。埋土は、上から黒灰土・暗褐色土に分かれる。

SE445 (Fig.15)

調査区中央よりやや西のAV28地区で検出した。掘り方の平面プランは不整形楕円形を呈し、長径2.23m(推定2.40m程度)、短径2.26m、深さ1.05mを測る。埋土は、上から暗灰粘・暗褐色土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE455 (Fig.16)

調査区西のAS31～AT32地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.36m、短径2.00m、深さ1.02mを測る。埋土は、上から黒褐色土・灰褐色土・黒灰土・暗灰粘に分かれる。

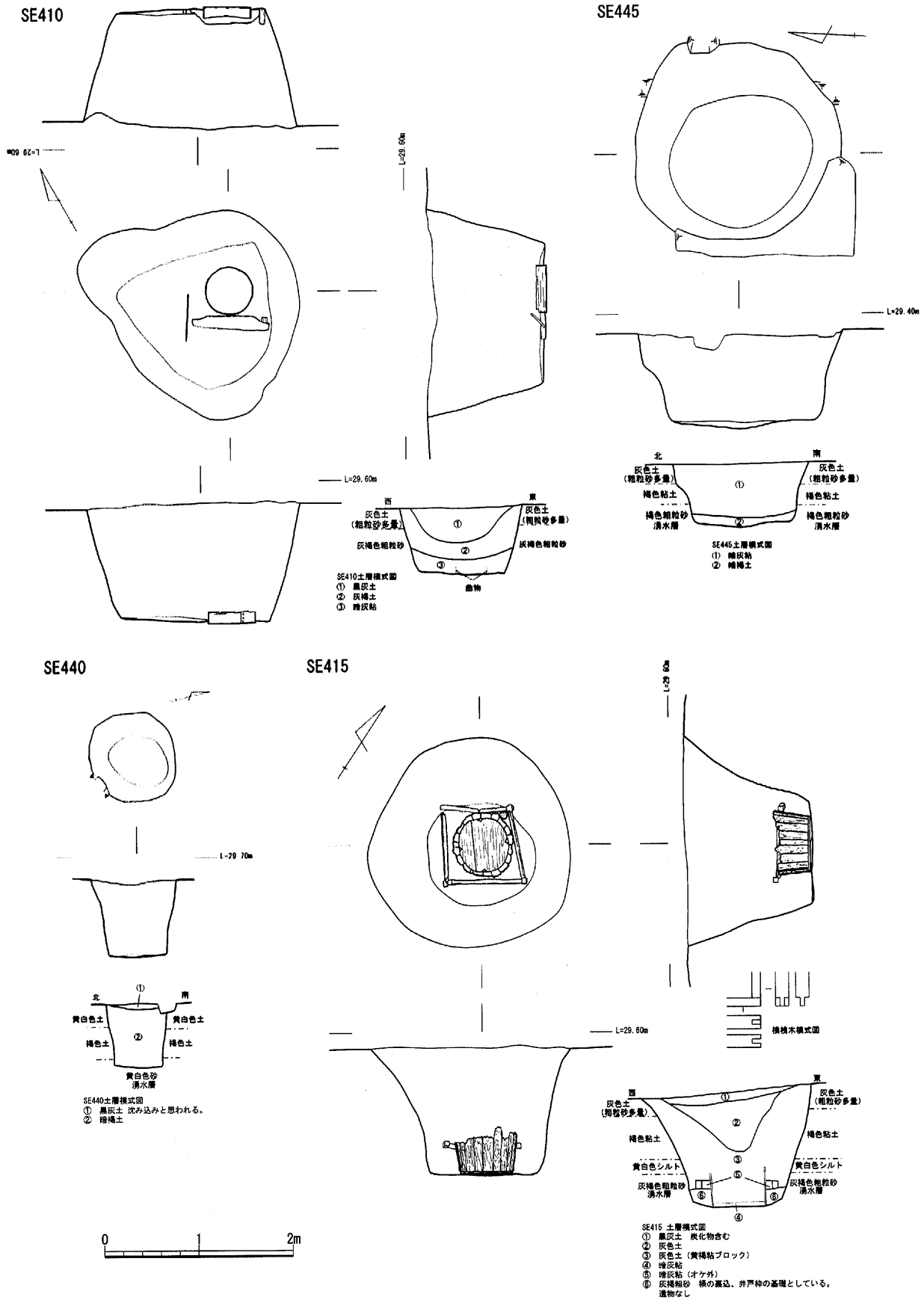


Fig.15 SE410・415・440・445 実測図 (1/60)

出土遺物は、黒褐土に土師器小皿a1(糸切り)と白磁椀V-4類(磁器区分D期)を含む以外は、XⅡ期の様相を示している。

SE465 (Fig.16)

調査区西のAP33～AQ34地区で検出した。SE410に切られているが、掘り方の平面プランは、径2.80～2.92m程度の不整円形を呈すとみられ、深さ0.94mを測る。埋土は、上から黄褐土・暗灰土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE480 (Fig.16)

調査区北東のBA15・16地区で検出した。SX619に切られているが形は残っており、掘り方の平面プランは不整円形を呈し、径1.79～1.93m程度、深さ1.52mを測る。埋土は、上から暗褐土・黒褐土・灰色粘・青灰砂(遺物出土なし)に分かれる。

出土遺物は、黒褐土・灰色粘は遺物出土量が少なく時期の特定ができない。暗褐土は土師器坏a(糸切り)、白磁椀Ⅷ類(磁器区分D期)を含むもののXⅡ期的様相を示している。

SE485 (Fig.16)

調査区南東のAH17～AI18地区で検出した。掘り方の平面プランは円形～隅丸方形を呈し、径2.02～2.22m、深さ1.36mを測る。埋土は、上から暗褐土・暗褐土(黄白粘ブロック)・暗灰粘(出土遺物なし)・灰褐粘に分かれる。暗褐土については土層観察から、別遺構の可能性が高い。

出土遺物は、暗褐土はXⅢ期、暗褐土(黄白粘ブロック)はXⅡ期の様相を示している。灰褐粘は出土量が少なく時期の特定はしにくいだが、糸切りを伴う土師器片を含むことから、総体としてXⅢ期と捉えられる。

SE490 (Fig.17)

調査区南東のAJ15～AK16地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.31m、短径2.11m、深さ2.70mを測る。遺構中位部分で壁が崩落しているのは湧水によるものであると考えられる。埋土は、上から黒色土・暗灰粘・黒灰粘に分かれる。

出土遺物は、黒色土に白磁椀V-4b類(磁器区分D期)1点を含む以外は、XⅢ期の様相を示している。

SE495 (Fig.17)

調査区南東のAL・AM17地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.20m、短径1.90m、深さ2.12mを測る。埋土状況に井戸枠の痕跡がないことと、地山土の上が湧水に耐えられるだけの土質であることから、素掘りの井戸と想定している。埋土は、上から暗褐土・黒褐土・暗灰粘(出土遺物なし)に分かれる。暗褐土・黒褐土については土層観察から別遺構だった可能性が高いと考えている。

遺物については暗褐土、黒褐土から遺物が多く出土し、井戸廃棄後の窪みに廃棄されたものと考えられる。あるいは、井戸埋没後、新たに掘削された廃棄土坑の可能性もある。暗灰粘からは遺物が出土していないが、暗褐土・黒褐土出土遺物はXⅡ期を示し、井戸自体もXⅡ期にはほぼ埋没していたと想定している。

SE500 (Fig.17)

調査区東のAN15・16～A016地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.87m、短径2.58m、深さ2.24mを測る。埋土は、上から暗褐土・暗灰土・黒褐土・灰色粘・白灰砂(出土遺物なし)に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE510 (Fig.17)

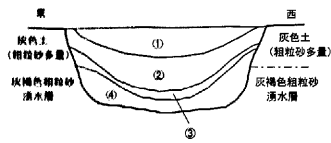
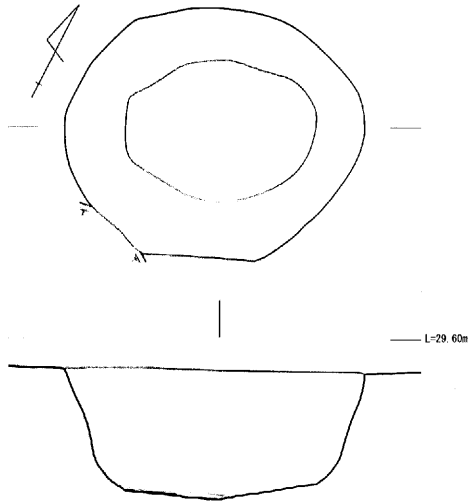
調査区南東のAF18～AG19地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径3.00m、短径2.64m、深さ1.80mを測る。埋土は、上から黒褐土・灰褐土・灰色粘・黄灰土・黒灰粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE515 (Fig.18)

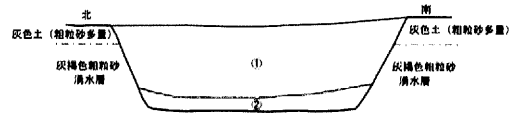
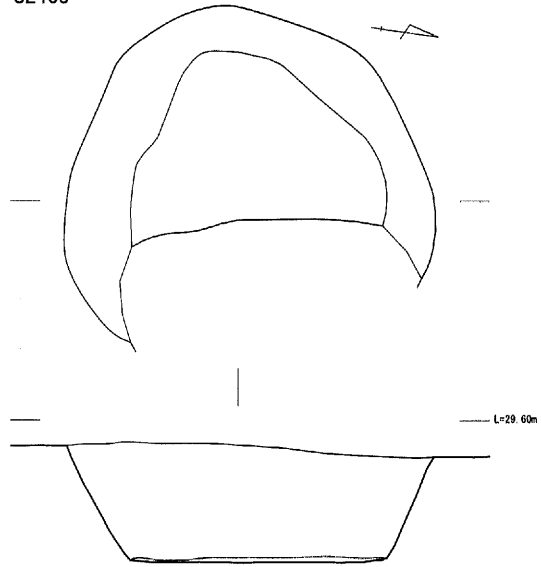
調査区南東のAK18～AL19地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.41m、短径1.88m、深さ2.20mを測る。残存状況は悪いが平面プランが0.65～0.69mに推定される方形の井戸枠を検出した。縦板(幅16cm×厚さ2cm×高さ148cm)は1枚のみ残存し、上半は土圧で内側に倒れ

SE455



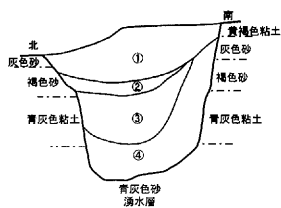
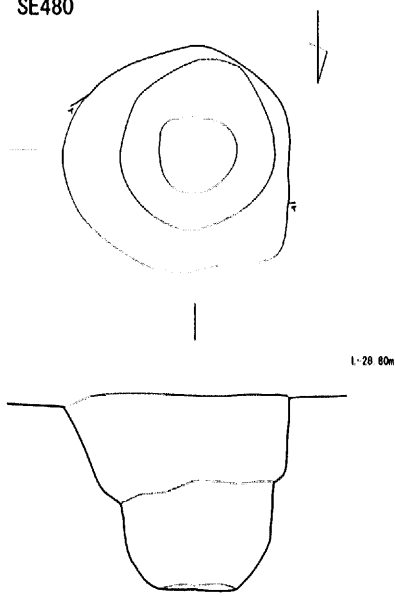
SE455土層模式図
 ① 暗褐色土
 ② 灰褐色土
 ③ 黒褐色土
 ④ 暗褐色粘

SE465



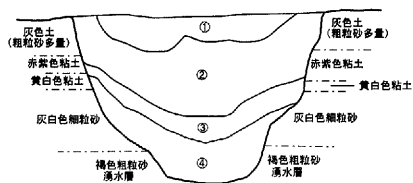
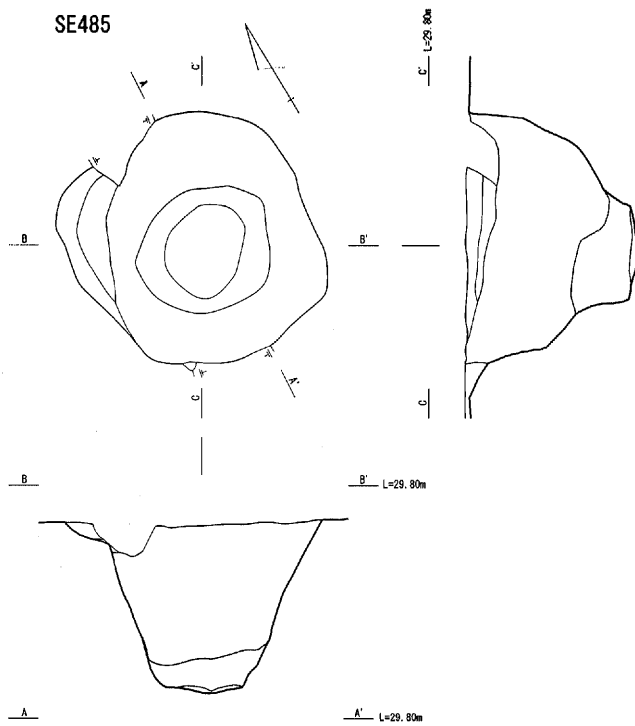
SE465土層模式図
 ① 黄褐色土
 ② 暗褐色土

SE480



SE480土層模式図
 ① 暗褐色土
 ② 黒褐色土
 ③ 灰褐色粘
 ④ 青灰色砂 遺物なし

SE485



SE485土層図
 ① 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物中量に含む 暗褐色土
 ② 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 黄白色粘土ブロック多量に含む 暗褐色土(黄白粘ブロック)
 ③ 暗褐色粘土 しまりややなし 粘性あり 遺物なし
 ④ 灰褐色粘土 しまりややなし 粘性あり 灰褐色粘

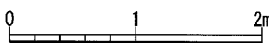


Fig.16 SE455・465・480・485実測図 (1/60)

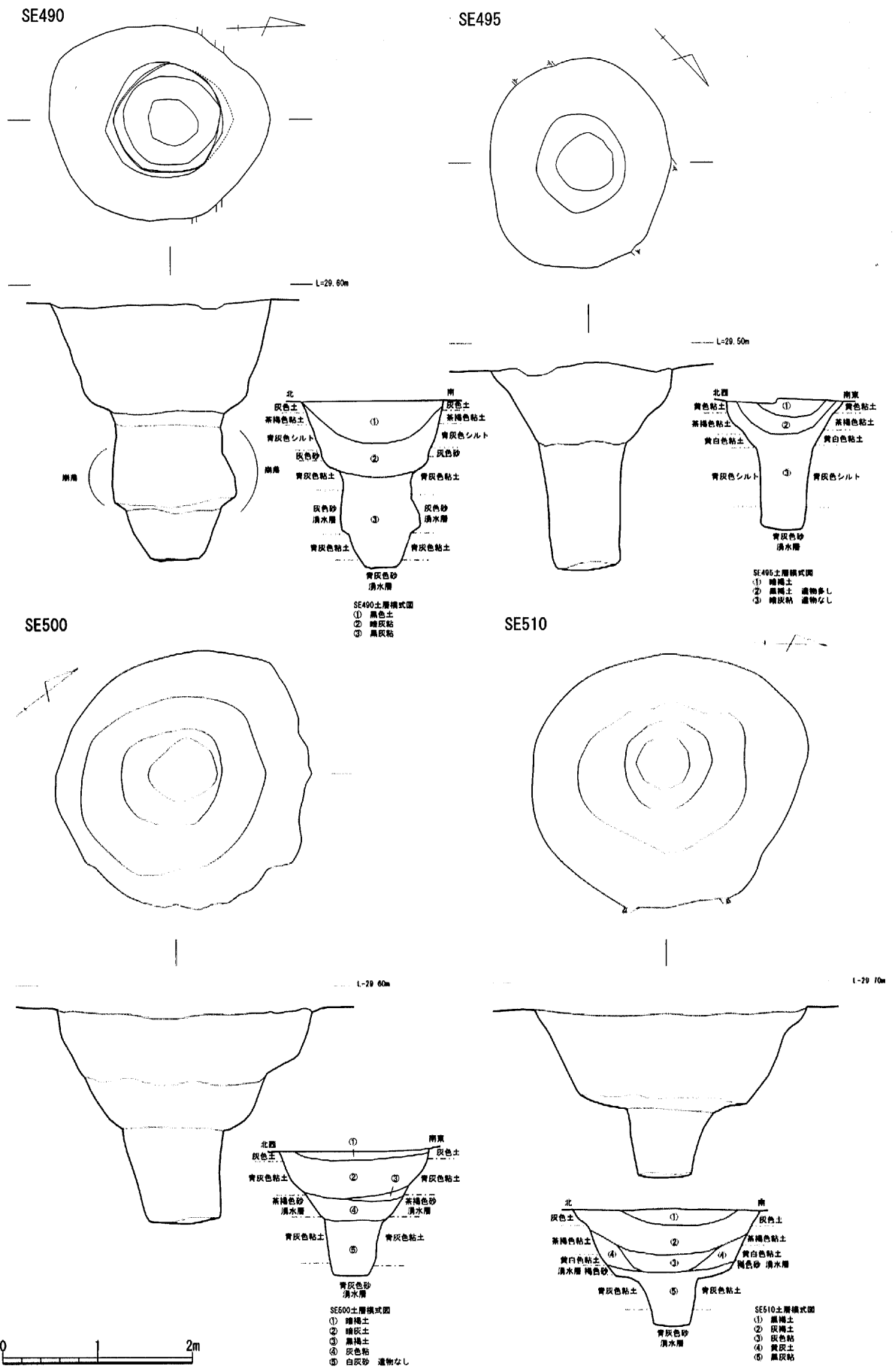
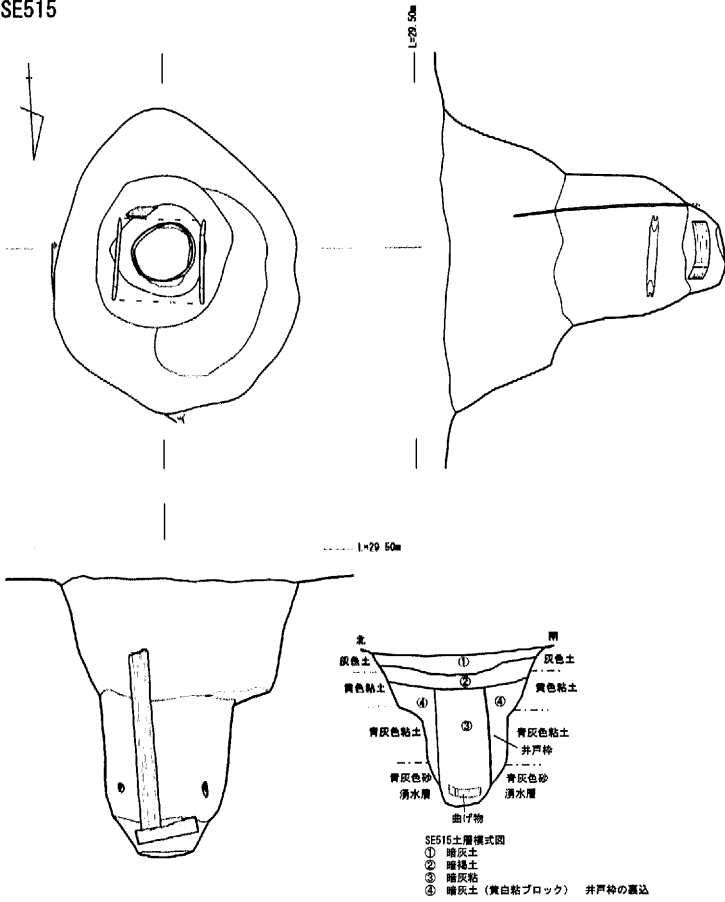
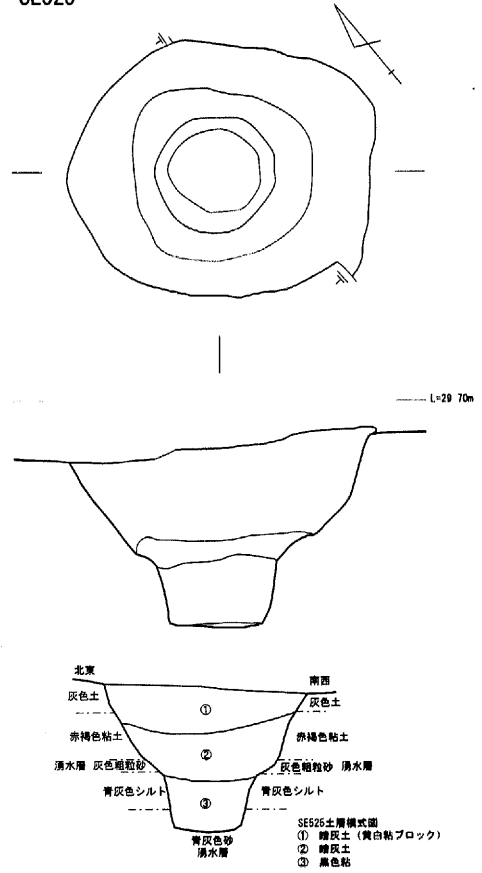


Fig.17 SE490・495・500・510 実測図 (1/60)

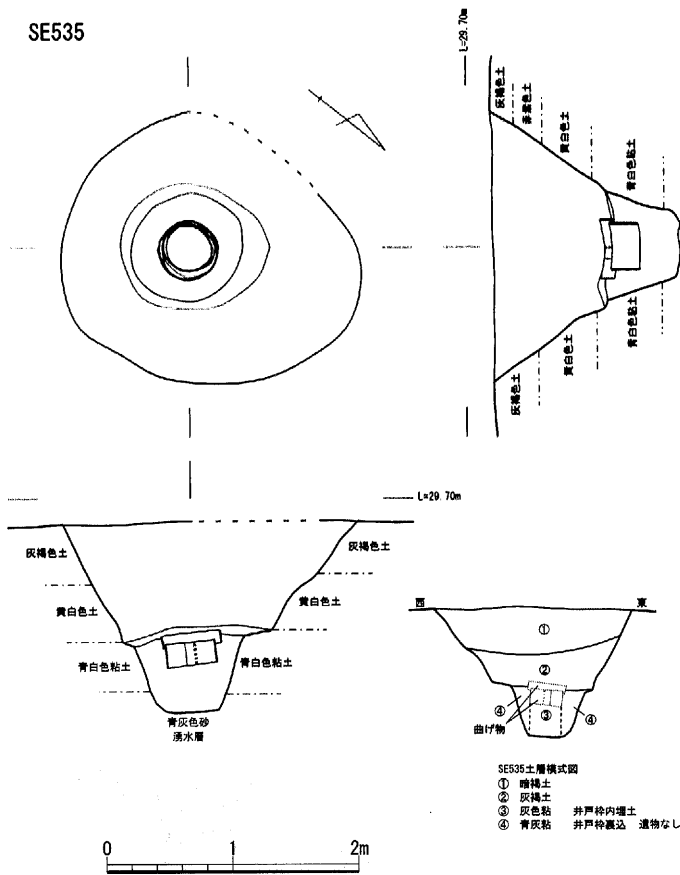
SE515



SE525



SE535



SE540

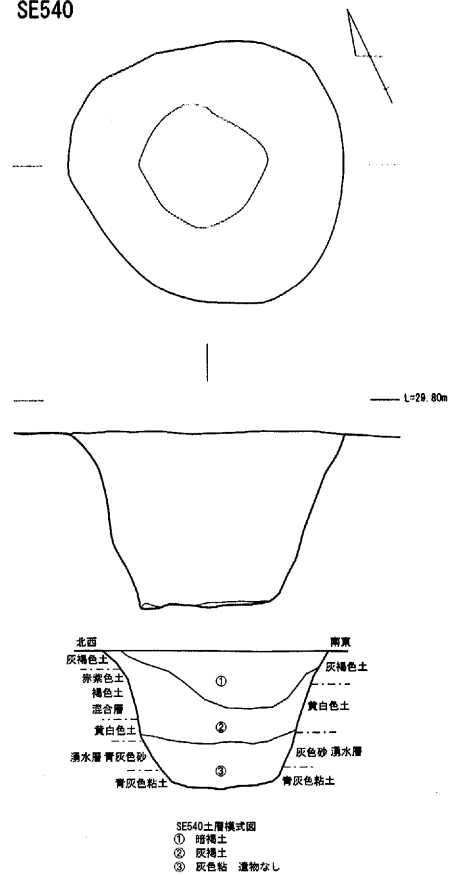


Fig. 18 SE515・525・535・540 実測図 (1/60)

込んでいるが、基部は原位置に近いと考えている。横棧木（長さ65cm×幅2～3cm×高さ5～7cm）も、原位置に近いと考えているが、縦板と若干隔たりがある。横棧木は径7cm程度の樹皮を残したままの丸太を半分に分けて、両端だけを凹字形に加工した簡素なもので、三枚ホゾ差で組まれていたと想定している。下底から曲物（径48cm、厚さ0.6cm前後、高さ11cm）が出土したが、井戸底から少し浮いている。井戸枠の部材自体の残りは良好なのに対し、残っている数が少ない。裏込も井戸枠がないと崩落しそうなぐらい緩い。部材を抜いて埋め戻したのか。埋土は、遺構確認面から井戸枠検出まで（上から、暗灰土・暗褐土）、井戸枠内（暗灰粘）、井戸枠裏込（暗灰土（黄白粘ブロック））に分かれる。

出土遺物は、暗灰土から糸切りの可能性のある資料が出土しているが、全体にXⅡ期の様相を示している。

SE525 (Fig. 18)

調査区南のAE24地区で検出した。掘り方の平面プランは隅丸方形を呈し、長軸2.40m、短軸2.00m、深さ1.43～1.56mを測る。埋土は、上から暗灰土（黄白粘ブロック）・暗灰土・黒色粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE535 (Fig. 18, Pl. 9・10)

調査区南のAF25・26～AG26地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.35m、短径1.98m、深さ1.52mを測る。遺構検出面から約0.85m程掘り下げた後、内外2つの曲物を検出した。外側の曲物は、径48cm、厚さ0.7cm前後、高さ11cmを測り、内側の曲物は径38cm、厚さ0.7cm前後、高さ20cmを測る。2つの曲物は径が異なるため、曲物の設置とともに裏込を順次行ったものと推測される。曲物は井戸底よりもだいぶ上方から出土したが、井戸内の埋土（灰色粘）及び裏込（青灰粘）は曲物より下位にも続いており、井戸枠を設置していた可能性が高い。曲物より上層には井戸枠の痕跡がみられず、大きく開口していたものと考えられる。埋土は、遺構確認面から井戸枠検出まで（上から、暗褐土・灰褐土）、井戸枠内（灰色粘）、井戸枠裏込（青灰粘（出土遺物なし））に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE540 (Fig. 18)

調査区南のAF26～AG27地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径2.05～2.23m、深さ1.39mを測る。埋土は、上から暗褐土・灰褐土・灰色粘（遺物出土なし）に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE550 (Fig. 19)

調査区中央やや東のAO18地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.37～1.52m、深さ2.19mを測る。遺構の径に対して掘り方がかなり深い。埋土は、上から灰色粘・褐色粘に分かれる。

SE555 (Fig. 19)

調査区中央よりやや南のAK24～AL25地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.85～2.05m、深さ0.87mを測る。埋土は、上から暗褐土・暗灰粘・灰色粘（遺物出土なし）に分かれる。暗褐土・暗灰粘からは遺物が多く出土し、井戸廃棄後、廃棄土坑として利用されたものと考えられる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE570 (Fig. 19)

調査区南西のAH33・34地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.32～1.38m、深さ1.36mを測る。埋土は、上から暗褐土・黄褐土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE575 (Fig. 19, Pl. 10)

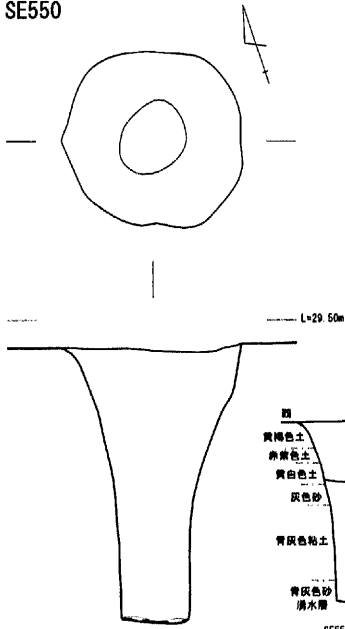
調査区南西のAI33・34地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.05m、短径1.79m、深さ2.04mを測る。遺構検出面から約1.70m程掘り下げた後、径55cm、厚さ0.8cm前後、高さ34cmの曲物を検出した。曲物設置方法については裏込土を使うのではなく、曲物の大きさの分だけ掘り込んで設置したと考えている。埋土は、上から暗褐土・暗灰粘・青灰砂・赤褐粘・灰色粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

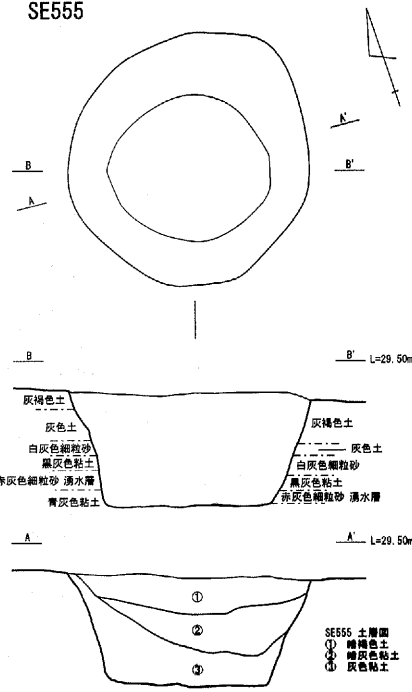
SE580 (Fig. 20, Pl. 10)

調査区西のAM34・35地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.40m、短径1.25m、深さ1.40mを測る。遺構検出面から約1.15m程掘り下げた後、径40cm、厚さ0.8cm程度、高さ24cmの曲物を

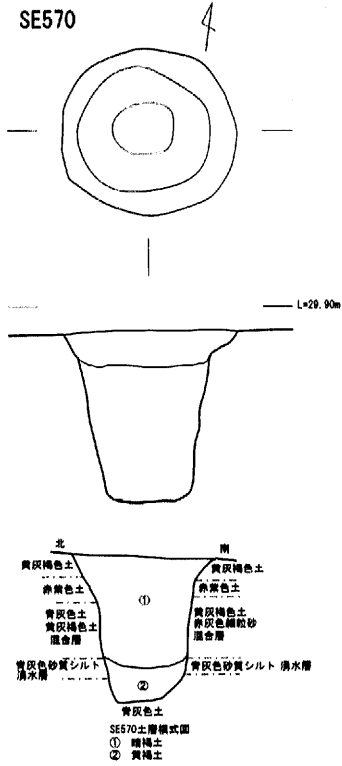
SE550



SE555



SE570



SE575

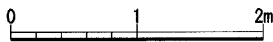
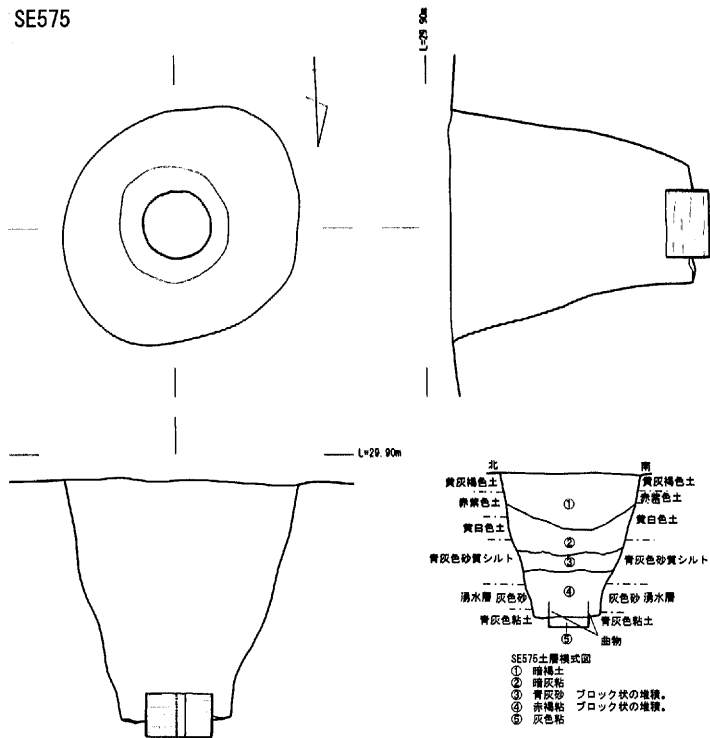


Fig.19 SE550・555・570・575 実測図 (1/60)

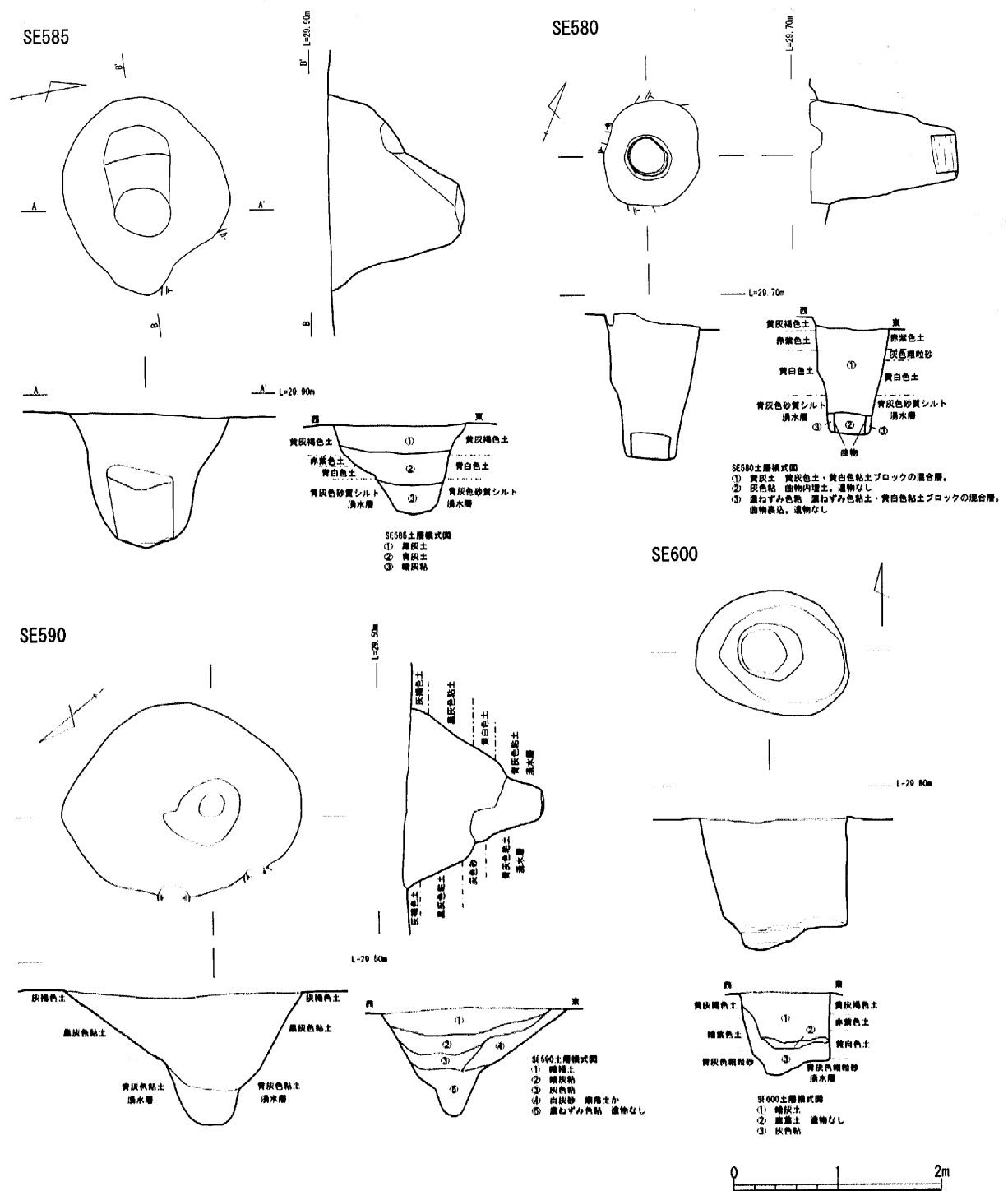


Fig.20 SE580・585・590・600実測図 (1/60)

検出した。井戸枠の痕跡は認められず、集水施設としての曲物のみを伴う。人為的に埋め戻された印象を受ける。埋土は、遺構確認面から曲物検出まで（黄灰粘）、曲物内（灰色粘（遺物出土なし））、曲物裏込（濃ねずみ色粘（遺物出土なし））に分かれる。

SE585 (Fig.20)

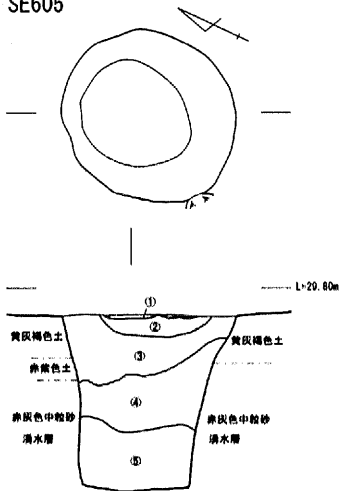
調査区南西のAI34地区で検出した。SE575に切られているが、掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.90m、短径1.57m、深さ1.28mを測る。埋土は、上から黒灰土・青灰土・暗灰粘に分かれる。

出土遺物は、黒灰土に白磁碗V-4類（磁器区分D期）1点を含む以外は、XⅢ期の様相を示している。

SE590 (Fig.20)

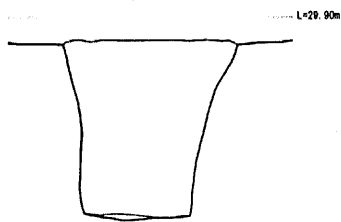
調査区中央よりやや南のAK・AL22地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.31m、

SE605

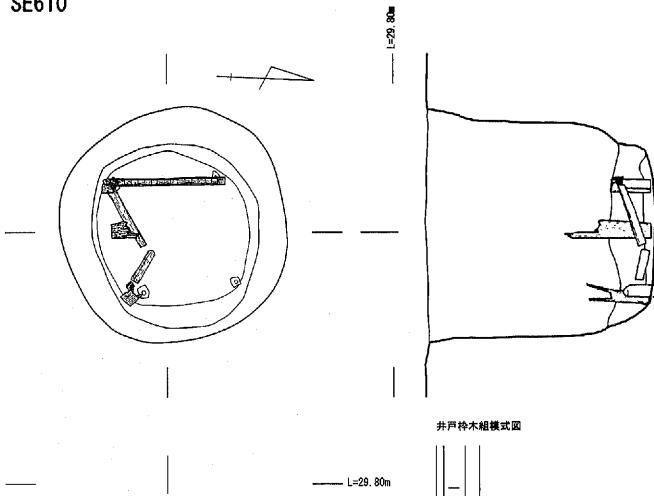


SE605 土層図
 ① 黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり
 ② 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり
 ③ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり
 ④ 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり
 ⑤ 暗褐色粘土 しまり普通 粘性あり

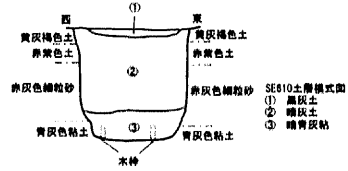
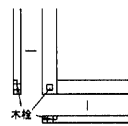
遺物取上
 黄褐色土
 暗褐色土
 黄白色粘土ブロック状
 暗褐色土
 暗褐色粘土



SE610

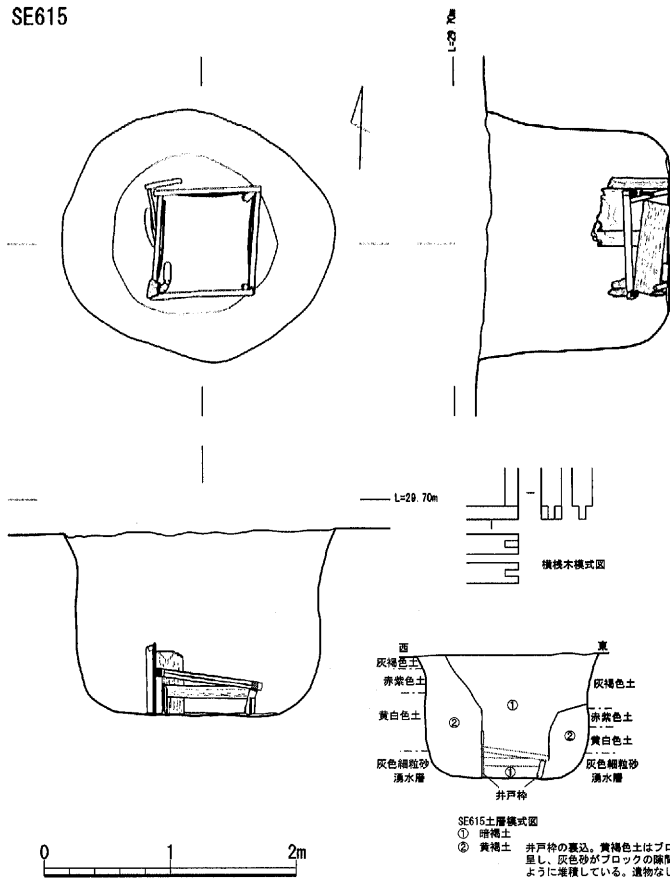


井戸枠木組模式図

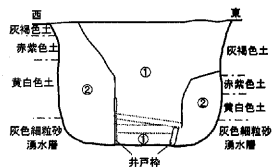
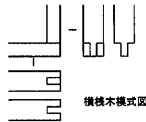


SE610土層模式図
 ① 黄褐色土
 ② 暗褐色土
 ③ 暗褐色粘土

SE615



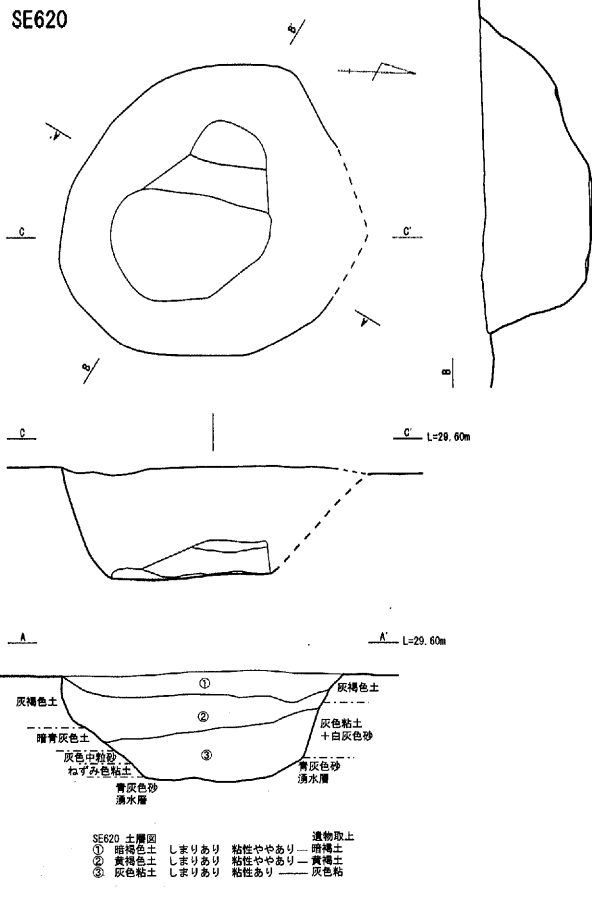
横棧木組模式図



SE615土層模式図
 ① 暗褐色土
 ② 黄褐色土
 ③ 黄褐色土

井戸枠の基込。黄褐色土はブロック状を呈し、灰色砂がブロックの隙間を埋めるように凝集している。遺物なし。

SE620



SE620 土層図
 ① 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり
 ② 黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり
 ③ 灰色粘土 しまりあり 粘性あり

遺物取上
 暗褐色土
 黄褐色土
 灰色粘土

Fig.21 SE605・610・615・620 実測図 (1/60)

短径1.86m、深さ1.31mを測る。埋土は、上から暗褐色土・暗灰粘・灰色粘・白灰砂・濃ねずみ色粘（遺物出土なし）に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE600 (Fig. 20)

調査区南のAI26・27地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.48m、短径1.16m、深さ1.27mを測る。埋土は、上から暗灰土・腐葉土（遺物出土なし）・灰色粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE605 (Fig. 21)

調査区中央よりやや南西のAL32・33～AM33地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.30～1.47m、深さ1.33～1.43mを測る。埋土は、上から黄褐色土・暗褐色土・暗灰土・褐色粘・暗灰粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE610 (Fig. 21、Pl. 11)

調査区中央よりやや南西のAM31・32～AN32地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.81～1.91m、深さ1.82mを測る。遺構検出面から約1.50m程掘り下げた後、平面プランが0.90m程度に復元できる方形の井戸枠を検出した。縦板は内側に倒れこみ、原位置を保っていない。横棧木（長さ92cm×幅6～7cm×高さ4～6cm）は2本分だけ検出し、西側の1本は支柱の上に乗っているため原位置を保つと考えている。また、端部をL字形に加工して相欠きに組み、方形の穴を開け、木栓で連結している。支柱（径6～10cm）は井戸掘り方底面に打ち込まれており、原位置を保つ。井戸枠内部と裏込とに細分されるはずだが、井戸枠自体の残りも悪く、くずれており、分けることができなかった。井戸枠は部材が少なく、抜かれている可能性がある。埋土は、上から黒灰土・暗灰土・暗青灰粘に分かれる。

出土遺物は、黒灰土はXⅢ期、暗灰土、暗青灰粘はXⅡ期の様相を示している。

SE615 (Fig. 21、Pl. 11)

調査区中央よりやや南西のAN・A032地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.17m、短径2.00m、深さ1.45mを測る。遺構検出面から約1.11m程掘り下げた後、平面プランが0.78～0.82m程度に復元できる方形の井戸枠を検出した。井戸枠は、縦板を支柱と横棧木で支える。横棧木と支柱は最下段のものだけが確認された。横棧木の下に支柱にひっかけるように横板（長さ70cm×幅1cm×高さ10～20cm）が用いられている。横棧木は端部を凸形、凹形に加工し、三枚ホゾ差で組まれている。埋土は、遺構確認面から井戸枠内まで（暗褐色土）、井戸枠裏込（黄褐色土（遺物出土なし））に分かれる。

なお、出土遺物からXⅢ期に埋没したと推測される。

SE620 (Fig. 21)

調査区中央よりやや南のAL・AM28地区で検出した。掘り方の平面プランは不整円形を呈し、径2.21～2.54m、深さ0.84mを測る。埋土は、上から暗褐色土・黄褐色土・灰色粘に分かれる。

出土遺物は、暗褐色土・黄褐色土はXⅢ期、灰色粘はXⅡ期の様相を示している。

SE625 (Fig. 22、Pl. 11)

調査区南西のAH32地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.40m、深さ1.35mを測る。遺構検出面から約0.70m程掘り下げた後、径0.60m程度の丸太割貫材を円形に組み合わせた井戸枠を検出した。井戸枠は、一木を3分割したものを結合していたものとみられるが、1つは消失している。結合部付近には穴があいており、紐などで綴じていたと推定している。2つのパーツの残りがいいことから、消失した1つは抜かれている可能性が高いと考えられる。埋土は、遺構確認面から井戸枠内まで（暗褐色土）、井戸枠裏込（上から、黄褐色土・灰色粘）に分かれる。

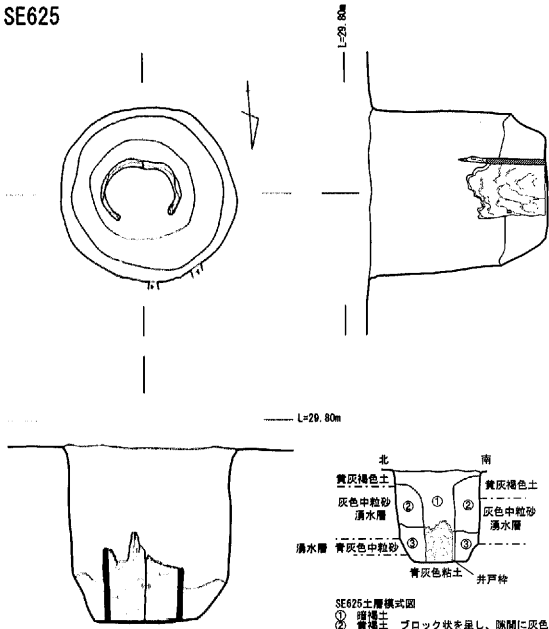
出土遺物は、各層いずれもXⅡ期の様相を示している。

SE626 (Fig. 22)

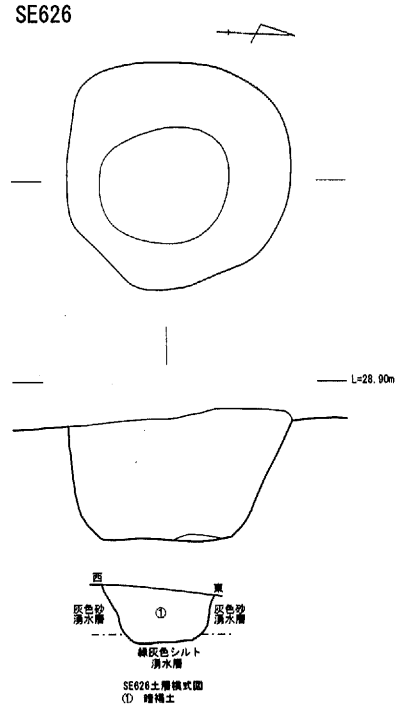
調査区北東のBB15～BC16地区で検出した。掘り方の平面プランは不整円形を呈し、径2.21～2.54m、深さ0.77～1.04mを測る。埋土は、暗褐色土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE625



SE626



SE630

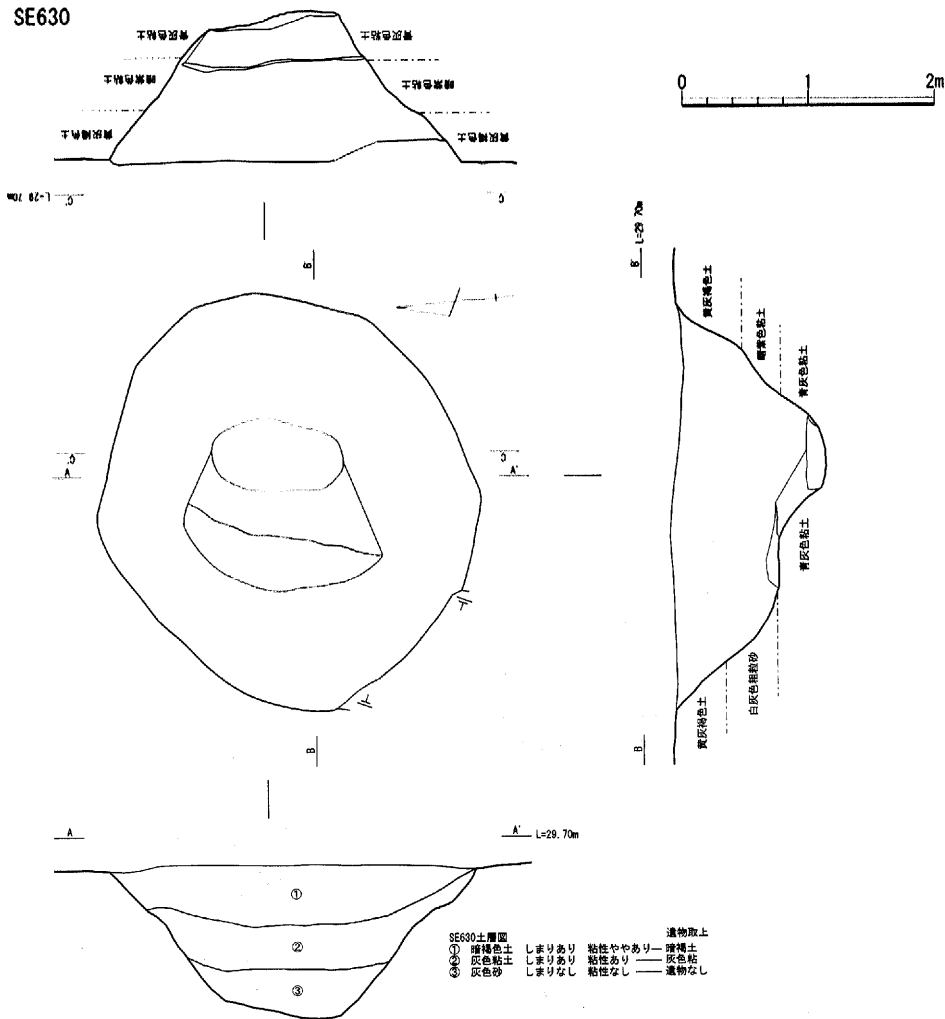
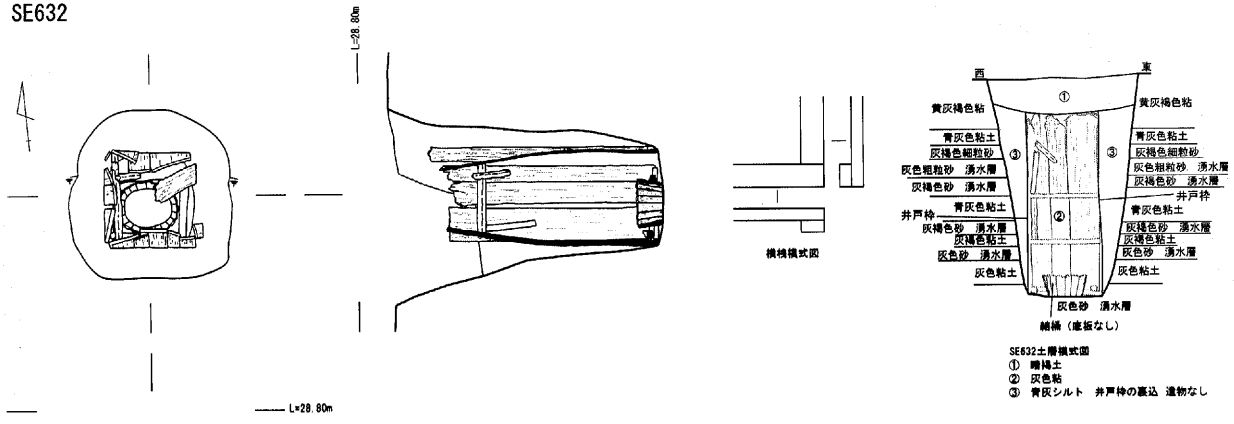
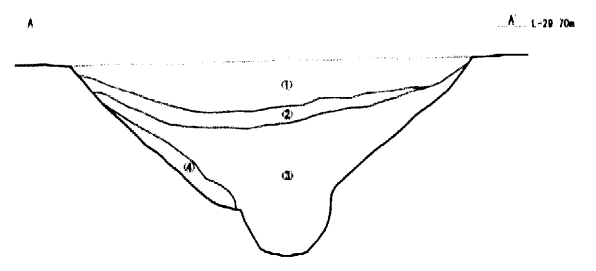
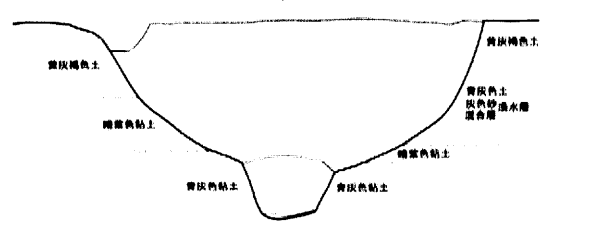
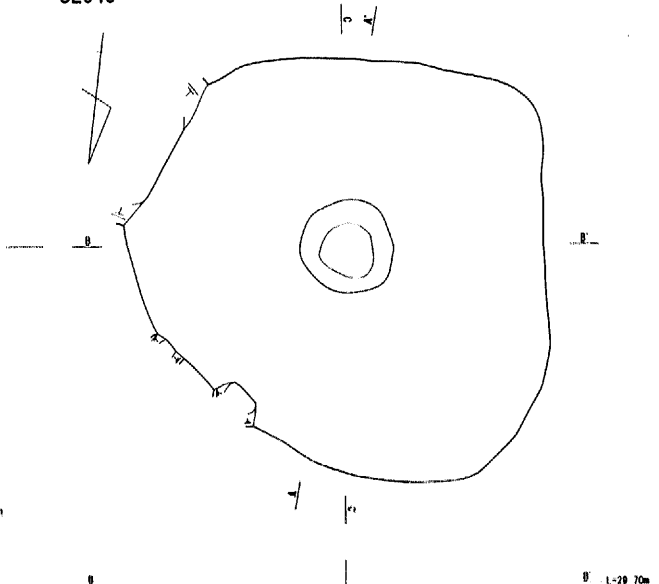


Fig.22 SE625・626・630 実測図 (1/60)

SE632



SE640



SE640土層図
 ① 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり—遺物取上
 ② 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり—黄褐色土
 ③ 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり—黒褐色土
 ④ 暗黄褐色土 しまりややあり 粘性あり—暗黄褐色土

SE645

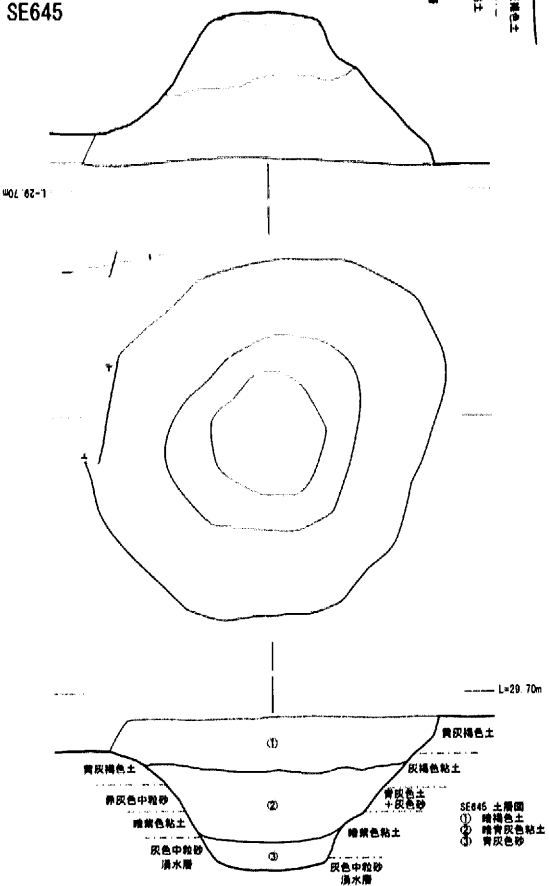


Fig. 23 SE632・640・645実測図 (1/60)

SE630 (Fig. 22)

調査区南のAI28～AJ29地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径3.37m、短径2.93m、深さ1.20mを測る。湧水層まで掘り込んでいることと、底面の一部を深く掘り下げており、集水の意図があった可能性があることから、井戸と想定している。埋土は、上から暗褐色土・灰色粘・灰色砂（遺物出土なし）に分かれる。

出土遺物は、暗褐色土に白磁椀V-4類（磁器区分D期）1点を含む以外は、XⅢ期の様相を示している。

SE632 (Fig. 23、Pl. 12)

調査区北東のAY15・16地区で検出した。掘り方の平面プランは円形～隅丸方形を呈し、径1.28～1.49m、深さ2.18mを測る。遺構検出面から約0.40m程掘り下げた後、0.60～0.70mの方形の井戸枠を検出した。井戸枠は、縦板を支柱と横棧木で支える。横棧木は、端部に枠などの加工がなく、角形にして、支柱に乗せているだけの、脆弱な構造をしている。そのためほとんどの横棧木と支柱が脱落している。最下段の横棧木も残ってはいたが原位置を保っていない。縦板は残りが良く残存長で1.80m程度もある。埋土は、遺構確認面から井戸枠検出まで（暗褐色土）、井戸枠内（灰色粘）、井戸枠裏込（青灰シルト）に分かれる。

SE640 (Fig. 23)

調査区南のAJ27～AK28地区で検出した。掘り方の平面プランは円形～隅丸方形を呈し、径3.37～3.74m、深さ1.58mを測る。埋土は、上から暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土・暗青灰粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SE645 (Fig. 23)

調査区南のAH29～AI30地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径3.06m、短径2.56m、深さ1.20mを測る。埋土に井戸枠の痕跡は認められないが、底付近で曲物片を確認している。底に据えてあった可能性がある。埋土は、上から暗褐色土・暗青灰粘・青灰砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE650 (Fig. 24)

調査区南のAI29地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.09m、短径1.71m、深さ0.98mを測る。埋土は、上から暗褐色土・暗青灰粘・灰色粘（遺物出土なし）に分かれる。

出土遺物は、暗褐色土はXⅢ期、暗青灰粘はXⅡ期の様相を示している。

SE655 (Fig. 24)

調査区中央よりやや南のA028地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.06～1.12m、深さ1.02mを測る。埋土は、上から暗褐色土・黄白土・灰色粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE665 (Fig. 24、Pl. 12)

調査区南西のAF36地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.27～1.36m、深さ1.44mを測る。底面で円形に錆が付着したような褐色に変色した部分があり、曲物が据えられていた可能性がある。埋土の堆積状況から井戸枠があったと想定している。埋土は、遺構確認面から底部まで（上から、黒色土・青灰砂）、推定井戸枠裏込（上から、褐色粘・灰色砂（遺物出土なし））に分かれる。青灰砂は底の地山が湧水で浮き上がったもの、黒色土は、全体的に均質で、自然堆積にみられる層理がみられず、埋め戻しによる堆積と判断される。

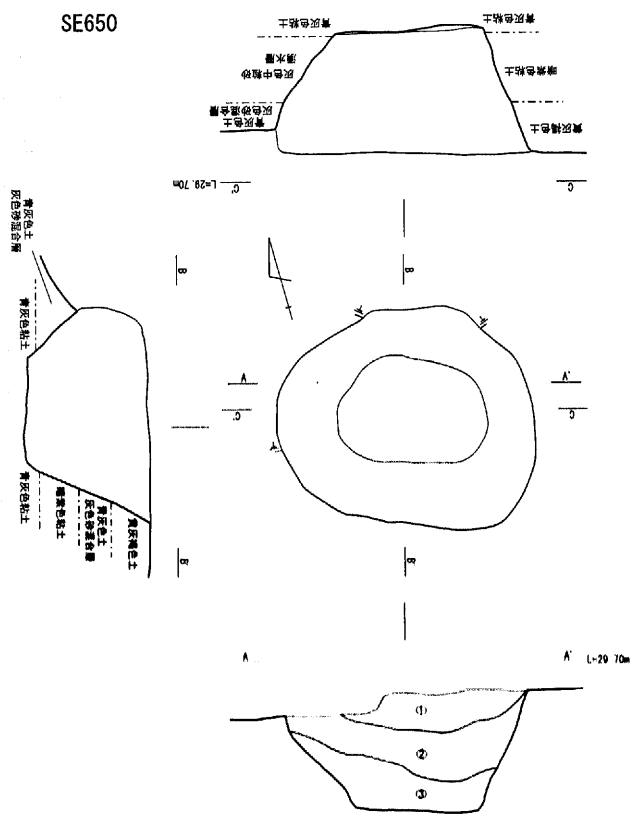
なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SE675 (Fig. 24)

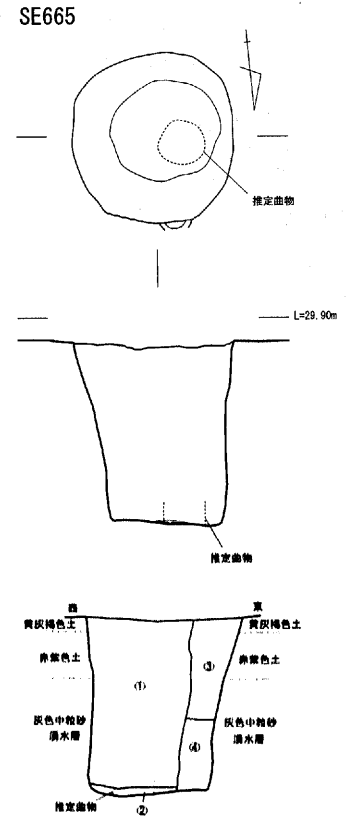
調査区南西のAJ41～AK42地区で検出した。調査区の角に位置したため、遺構の西側と北側を完掘していないが、掘り方の平面プランは概して不整円形を呈していたとみられる。残存長で径1.06～1.30m、深さ0.80mを測る。井戸枠の痕跡は確認されないが、底面を円形に一段掘り下げており、曲物の設置あるいは集水の意図があった可能性があることから、井戸と想定している。埋土は、灰褐色土の単層である。

SE685 (Fig. 24)

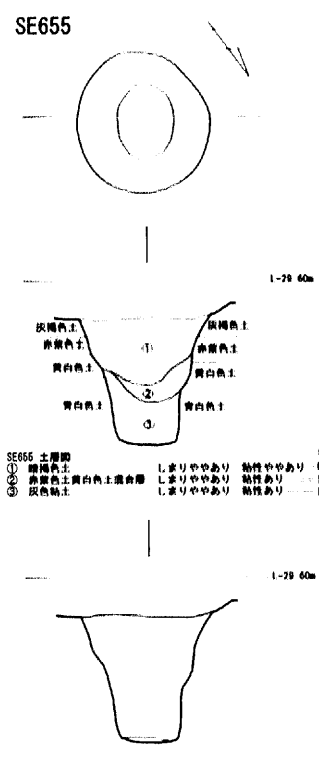
調査区南西のAI・AJ41地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径1.43m、短径1.12m、深さ1.18mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。



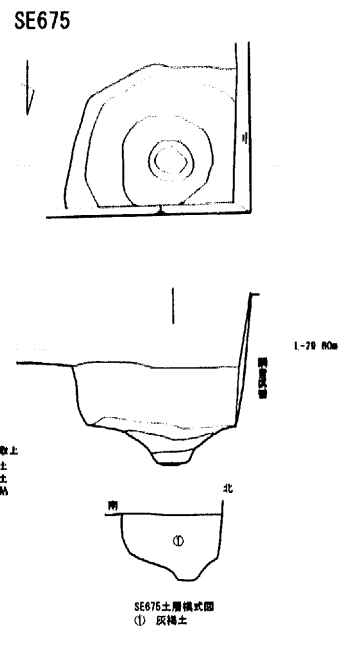
SE650 土層図
 ① 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 障層土
 ② 黄褐色粘土 しまりややあり 粘性あり 障層灰粘
 ③ 灰砂白灰砂層 遺物なし



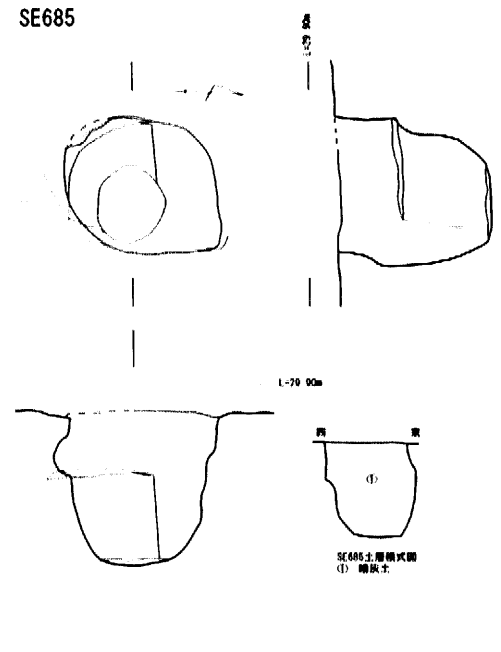
SE665土層横式図
 ① 黄褐色土
 ② 黄砂
 ③ 褐色粘 井戸跡遺込の可能性がある。
 ④ 灰砂 井戸跡遺込の可能性がある。遺物なし



SE655 土層図
 ① 障層土 しまりややあり 粘性ややあり 障層土
 ② 黄褐色土黄白土遺層 しまりややあり 粘性あり 黄白土
 ③ 灰砂土 しまりややあり 粘性あり 灰砂粘



SE675土層横式図
 ① 灰粘土



SE685土層横式図
 ① 障層土



Fig. 24 SE650・655・665・675・685 実測図 (1/60)

SE2244 (Fig. 25)

調査区南東のAF14～AG15地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.93m、短径1.60m、深さ1.14mを測る。井戸杵材などは出土していないが、埋土の堆積状況から径45cm、高さ50cm程度の円筒形の井戸杵の存在が想定される。埋土は、遺構確認面から推定井戸杵内まで（上から、灰色土・黒褐土・緑灰粘ブロック・灰色粘）、推定井戸杵裏込（緑灰粘）に分かれる。灰色土、黒褐土、緑灰粘ブロック、灰色粘は自然堆積とみられる。

なお、出土遺物はX IV期の様相を示している。緑灰粘は出土量が少なく時期を特定できないが、糸切りを伴う土師器が主体的である。

SE2863 (Fig. 25)

調査区南のAH・AI21地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.50～1.58m、深さ1.82mを測る。埋土は、上から暗褐土・暗灰色土・腐葉土（遺物出土なし）・茶褐色土に分かれる。

暗灰色土には周辺の地山土にみられる暗灰色土、黄白色粘土のブロック状の土塊を含み、埋め戻しによる堆積とみられる。暗褐土も暗灰色土と同時に埋め戻された可能性は高いと考えられる。腐葉土は自然堆積か人為的なものかの判断は難しい。

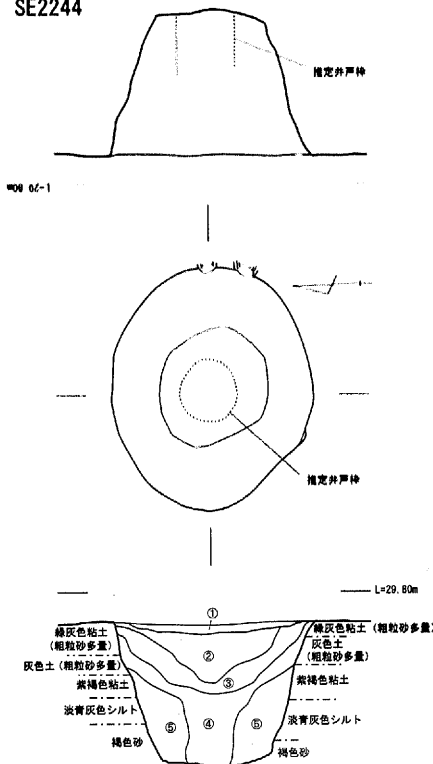
出土遺物は、暗褐土はX III期、茶褐色土はX II期の様相を示している。

道路

SF700 (Fig. 26～30、PI.13)

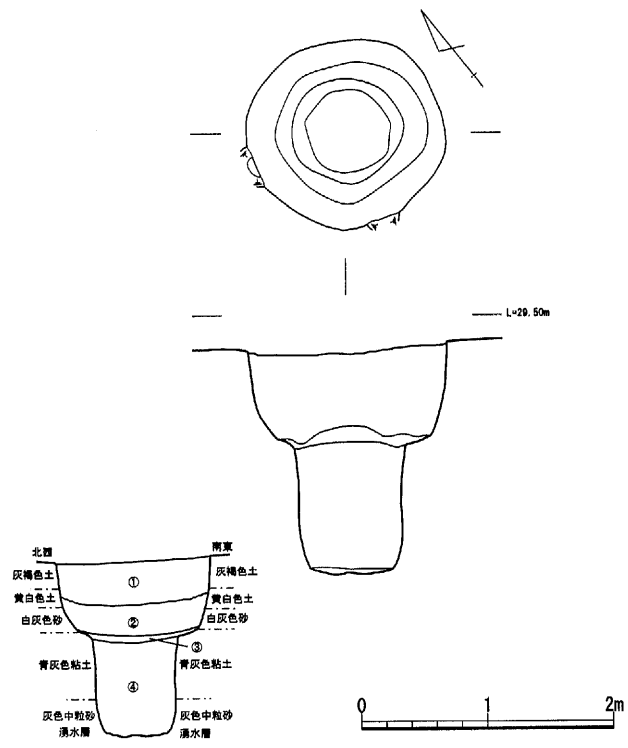
調査区南端で検出した。東西に走行している。西側はSF1000と交差する。SF1000より西側に延びている可能性はあるが、今回の調査区内では続きを確認することができなかった。東は調査区外に延び、大宰府条坊跡第122次調査で検出された道路につながり、途中で北に曲がり、本調査区のSF1100につながっていく。道路北側溝はSD520・2448になる。道路南側溝は検出長は短いものの、SD4714・4763を想定している。路面部にはSF1000との交差付近で道路に沿って帯状遺構(SX7000～R、SX4776、SX4777、

SE2244



SE2244 土層図		遺物取上	
① 灰色土	しまりややし	粘性ややし	灰色土
② 黒褐土	しまりあり	粘性やあり	黒褐土
③ 黒灰色土	しまりあり	粘性やあり	腐葉土
④ 灰色土	しまりややし	粘性あり	緑灰粘ブロック含む
⑤ 緑灰色土	しまりあり	粘性やあり	井戸杵裏込と思われる

SE2863



SE2863土層模式図	
① 暗褐土	暗褐土
② 暗灰色土	暗灰色土・黄白粘ブロックの混合層
③ 腐葉土	肉眼観察で腐葉土のように見える
④ 茶褐色土	遺物なし

Fig. 25 SE2244・2863 実測図 (1/60)

SX4779)、波板状遺構 (SX700A～F、SX4771A～G・I、SX4773A～B)、刺突痕遺構 (SX700S) などを確認した。またSF700検出中央部では調査区南壁に沿った位置で帯状遺構 (SX4753)、調査区南東隅トレンチ3内でも帯状遺構 (SX4713) をそれぞれ検出している。いずれも道路通行痕跡として知られているものである。北側溝の南肩および南側溝の北肩の間を路面幅とすると5.38～6.01m、両側溝の溝芯々間距離6.51～7.00m、道路占有幅である両側溝端は7.89m程度を測る。帯状遺構は路面など道路に関わる部分で確認されることと、いずれもごく浅く砂を多く含む傾向があることから道路通行痕跡と捉えている。砂を多く含んでいたSX7000・4779を除いて、ほとんどが硬化はしていなかった。SX700Rについては道路使用時の路面よりかなり下に位置するので、通行痕跡と理解するよりはSF700構築時の路床と考えられる。SX7000・PがSF700より後に掘削されるSD505の上に展開しているのを、調査区南壁土層観察や付近のトレンチ拡張区から確認している。このことから、SF700はSD505の廃絶後、再び道路として使用されたことが窺える。波板状遺構は、道路上に1～2m程度の間隔で連続して検出された土坑群である。大きさは長さ0.5～1m前後、深さ0.1m以下を測り、刺突痕の大半は波板状遺構の埋土を除去した段階で確認している。刺突痕遺構については、検出した波板状遺構や帯状痕跡の成立前後に展開していることを確認しており、検出したものについては、そのいずれの時期のものか、ということとは不明である。刺突痕遺構は、径10cm以下の円形を呈しており、棒状のようなもので突いた痕跡と推測される。ただ、断面観察では、深いものは18cmに及ぶものもある。実際に先の尖った鉄棒(重さ5kg前後か?)でその近辺を突いて実験したが、100回突いてもその深さには及ばなかった。ここでは、とりあえず刺突痕遺構としたが、別要因による形成についても、今後検討する必要がある。

最後に時期についてであるが、1回目道路の上限についてはXⅡ期以前に埋没する遺構が確認できないので不明である。XⅡ期に道路北側溝が埋没することから、それ以前に使用されていたと考えられる。その後SD505が一度SF700の機能を停止させるが、これもXⅣ期までに埋没する。このことから、再びSF700が道路として使用されたのはXⅣ期以降になる。最終時期については不明だが、調査区全体をみて平安時代より後の遺構、遺物は近世・近現代以降であるため、本遺構も平安時代内におさまることが想定される。

AC26～AD34地区調査区南壁土層観察

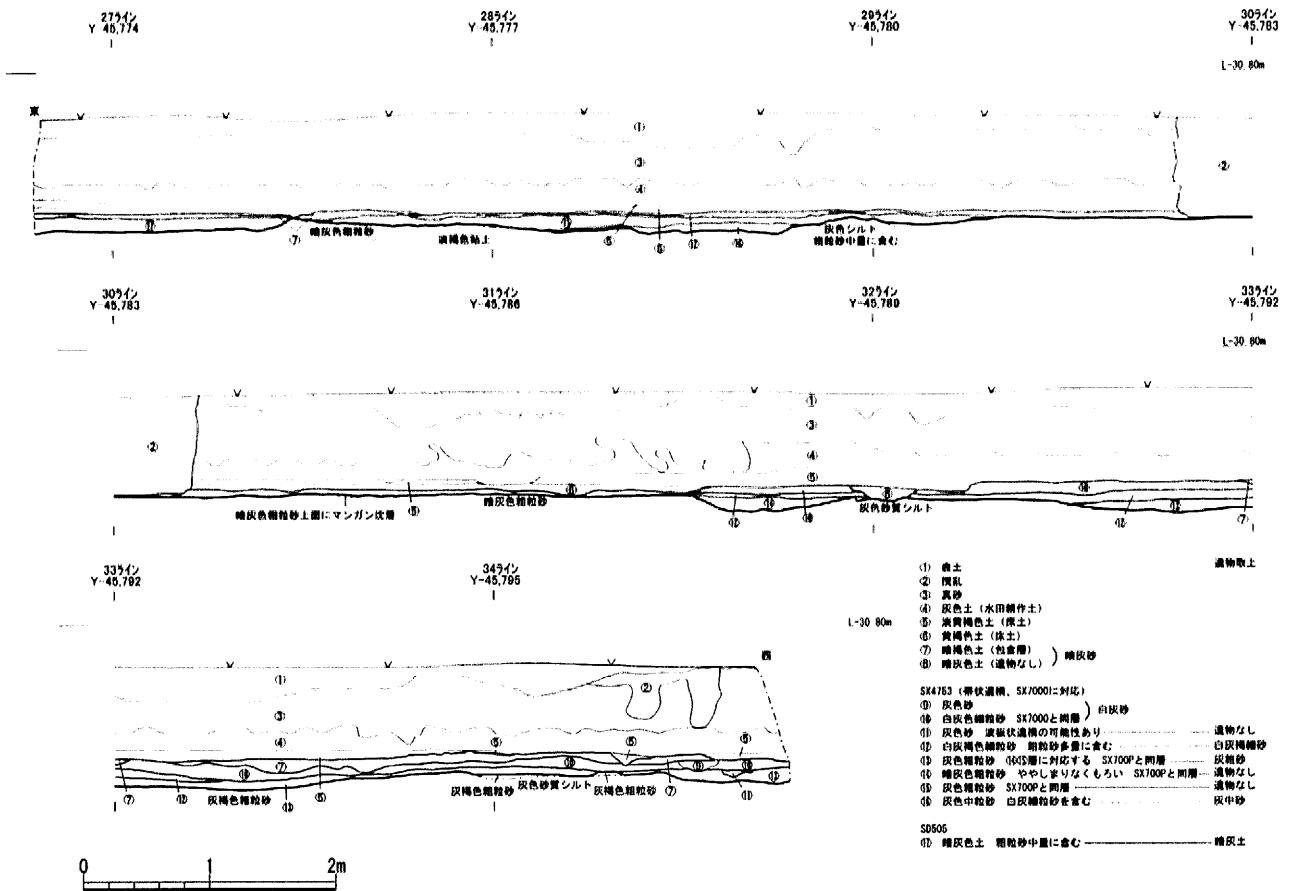


Fig.26 SF700関連土層図1 (1/60)

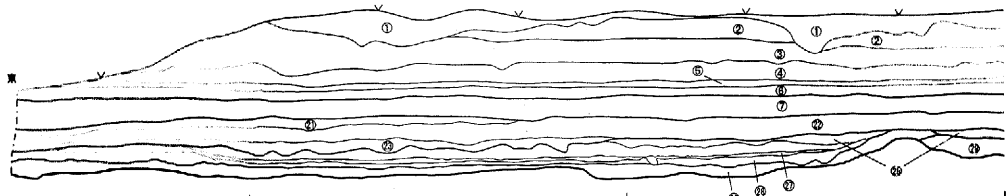
AC15~AC26地区調査区南壁土層観察

165イン
Y-45,741

175イン
Y-45,744

185イン
Y-45,747

L=30.80m



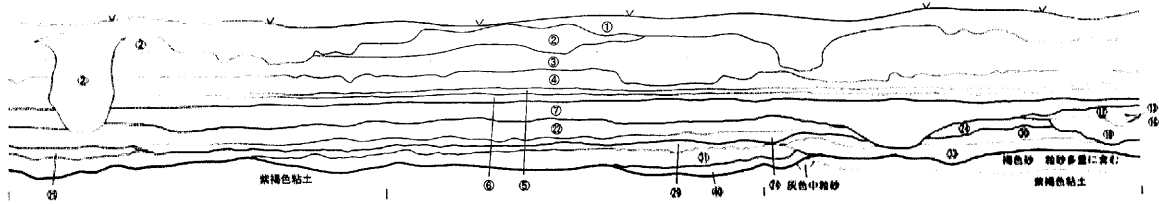
185イン
Y-45,747

195イン
Y-45,750

205イン
Y-45,753

215イン
Y-45,756

L=30.80m



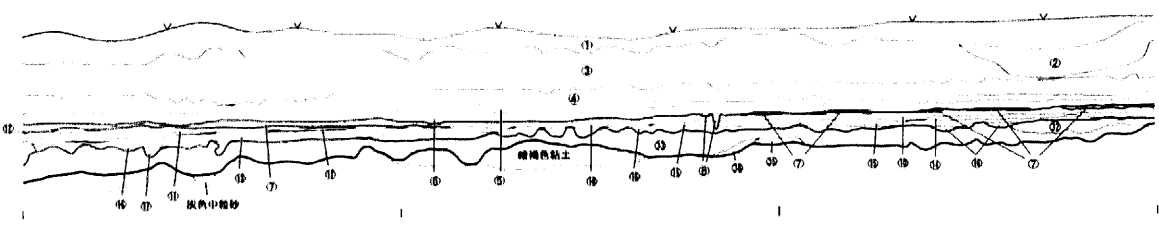
215イン
Y-45,756

225イン
Y-45,759

235イン
Y-45,762

245イン
Y-45,765

L=30.80m

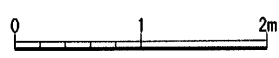
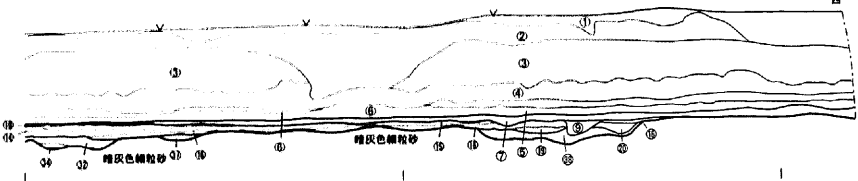


245イン
Y-45,765

255イン
Y-45,768

265イン
Y-45,771

L=30.80m



遺物取上

- ① 黄土
 - ② 礫乱
 - ③ 真砂
 - ④ 灰色土 (水田耕作土)
 - ⑤ 黄褐色土 (床土)
 - ⑥ 黄褐色土 (床土)
 - ⑦ 暗褐色土 (色合層) — 暗灰砂
 - ⑧ 暗褐色土
 - ⑨ 暗灰色土
 - ⑩ 遺物なし
- SX4753 (帯状遺構)
- ⑪ 白灰色中粒砂
 - ⑫ 灰色中粒砂 粗粒砂中量に含む
 - ⑬ 白灰色細粒砂 粗粒砂多量に含む
 - ⑭ 白灰色細粒砂 粗粒砂中量に含む
 - ⑮ 灰色中粒砂
 - ⑯ 白灰色細粒砂
 - ⑰ 白灰色細粒砂 粗粒砂多量に含む
 - ⑱ 暗褐色土 波板状遺構?
 - ⑲ 暗褐色土 白灰色細粒砂ブロックを含む 波板状遺構?
 - ⑳ 白灰色細粒砂 波板状遺構?

遺物なし

遺物取上

- S0505
- ① 黒褐色土
 - ② 暗褐色土
 - ③ 暗褐色土 白灰色細砂多量に含む
 - ④ 暗褐色土 白灰色細砂多量に含む
 - ⑤ 灰色中粒砂
 - ⑥ 白灰色細砂
 - ⑦ 暗褐色土シルト
 - ⑧ 暗褐色土シルト
 - ⑨ 暗褐色土 ⑨層に対応する
 - ⑩ 暗褐色土 粗粒砂多量に含む
 - ⑪ 暗褐色土 白灰色細粒砂しみ状に多く含む
 - ⑫ 暗灰色細粒砂
 - ⑬ 暗褐色土 ⑬層に対応する
 - ⑭ 灰色土
 - ⑮ 黄褐色土
 - ⑯ 黒褐色土
 - ⑰ 暗褐色土
 - ⑱ 灰色砂質土
 - ⑲ 灰色砂

暗灰土

Fig.27 SF700 関連土層図2 (1/60)

AB14~AE14地区調査区東壁土層観察

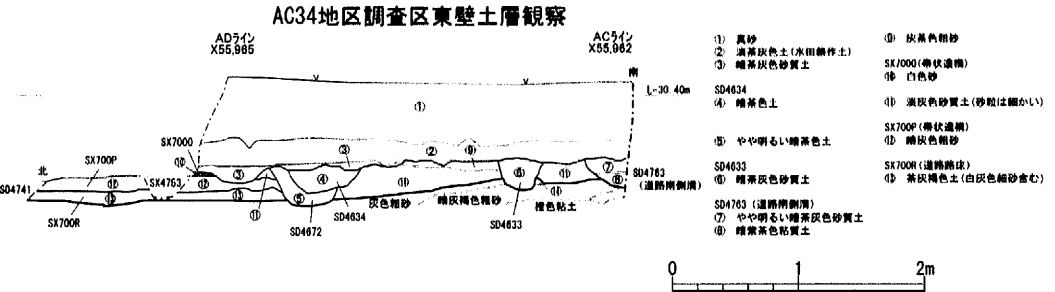
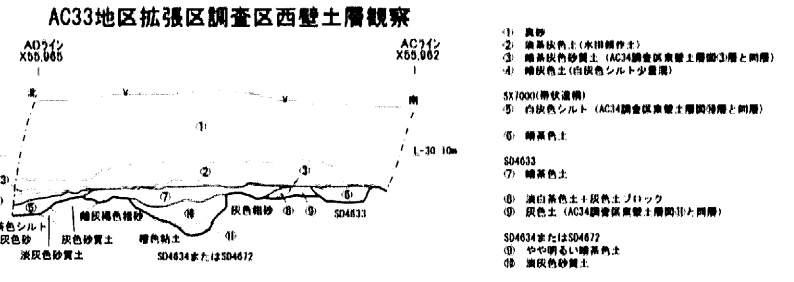
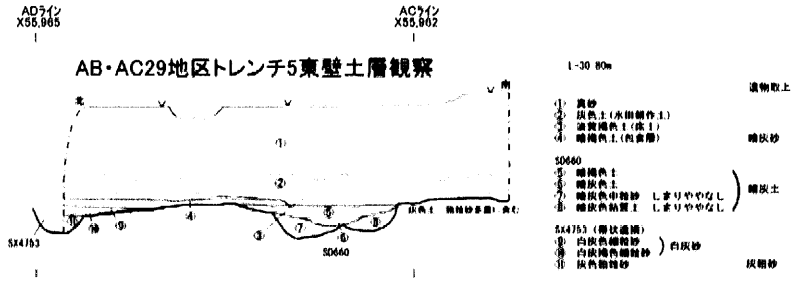
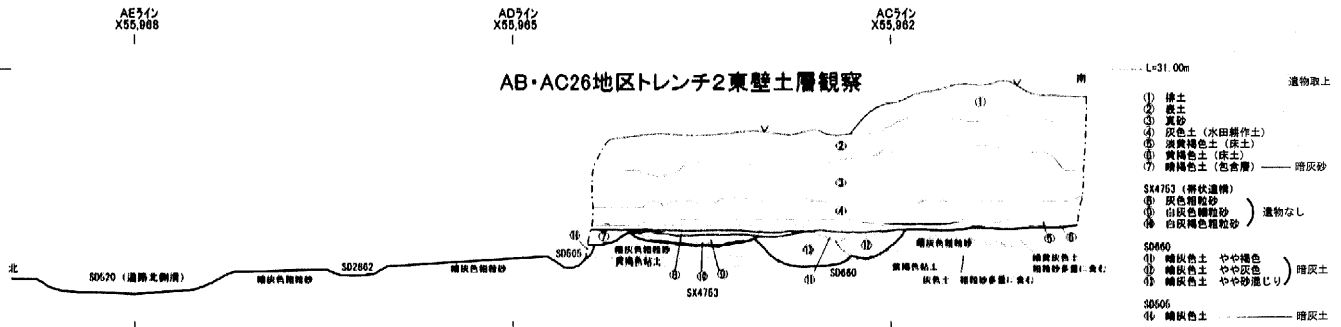
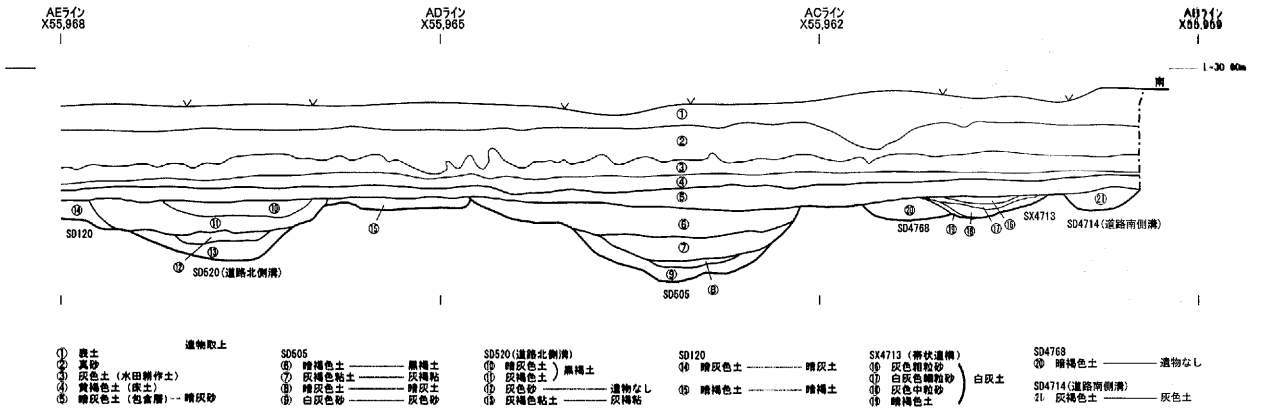
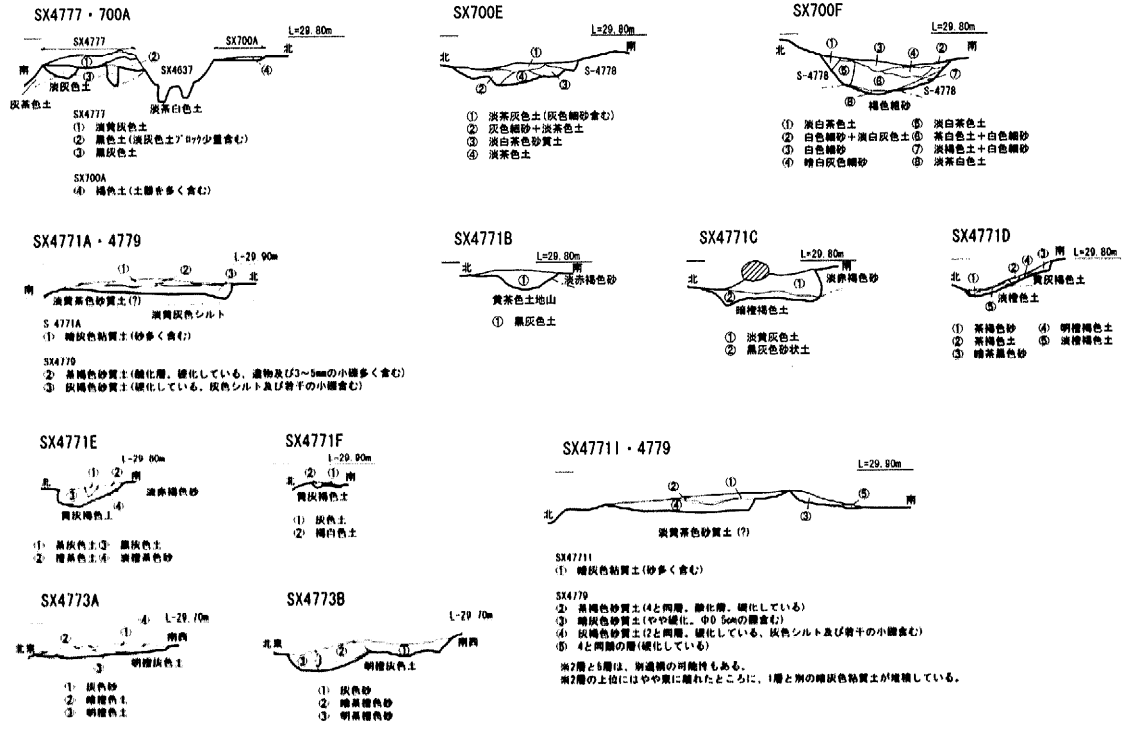
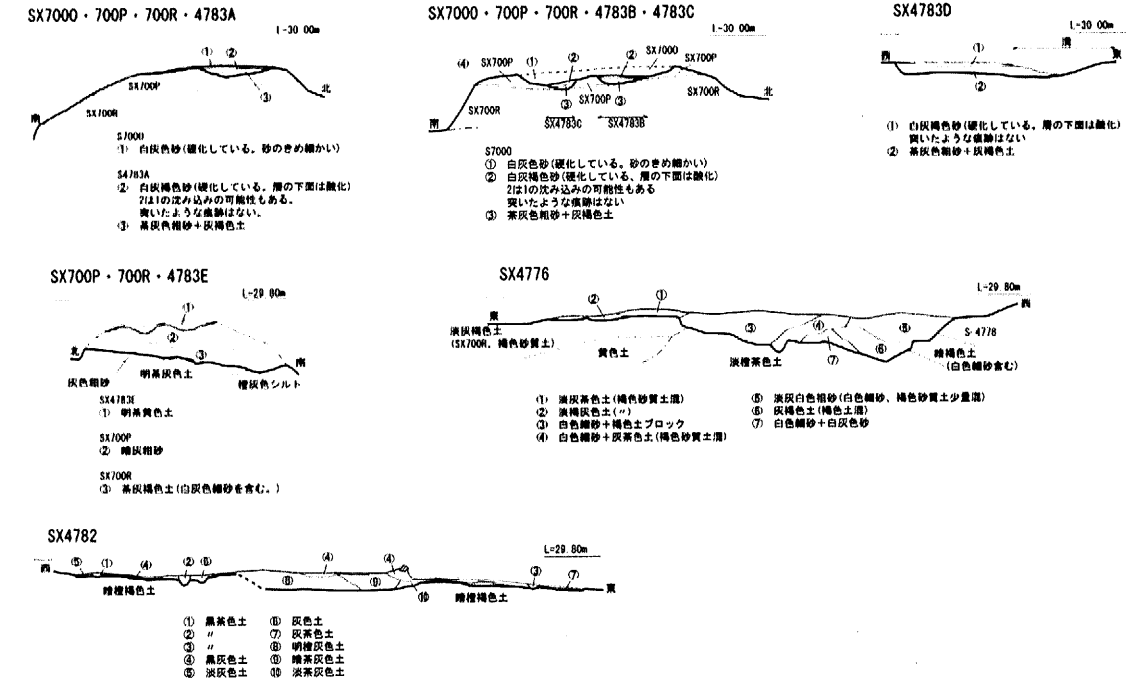


Fig. 28 SF700関連土層図3 (1/60)

SF700関連連続土坑



SF700関連帯状遺構



SF700関連刺突遺構

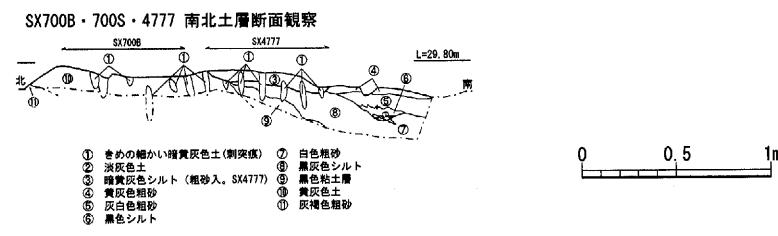


Fig.29 SF700 関連土層図4 (1/40)

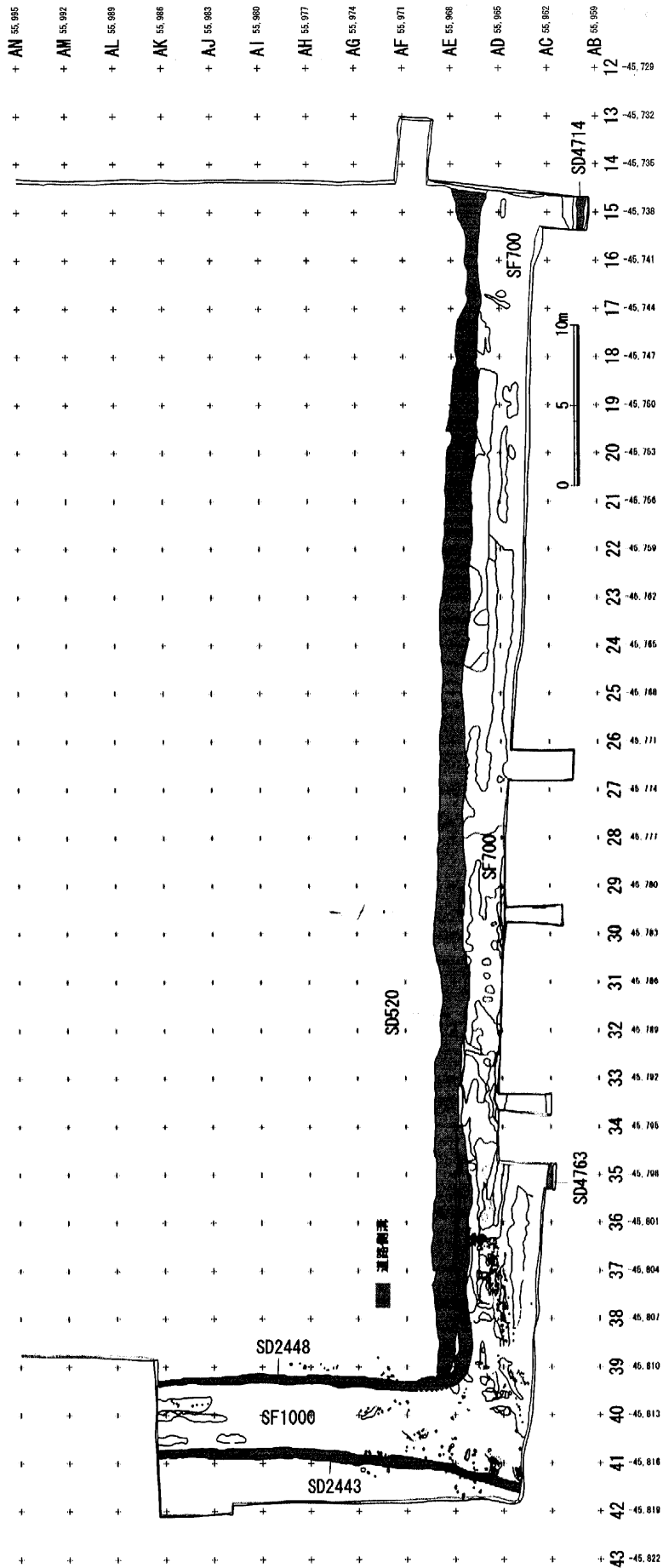


Fig. 30 SF700 - 1000 概要図 (1/400)

SF1000 (Fig. 30・31)

調査区南西で検出した。南北に走行している。両端とも調査区外に延びている。道路西側溝はSD2443、東側溝はSD2448になる。路面部には道路に沿って帯状遺構 (SX4784、SX4786)、波板状遺構 (SX705A～F)、刺突痕などを確認した。東側溝の西肩および西側溝の東肩の間を路面幅とすると3.99～4.15m、両側溝の溝芯々間距離4.41～4.78m、道路占有幅である両側溝端は4.79～5.45mを測る。帯状遺構は、硬化はしていない。波板状遺構は、1.5～3.3mの間隔で細長い土坑が連続している。SX705Dでは小穴群のみ検出している。刺突痕は遺構と認識するほどは、まとまって検出されていない。

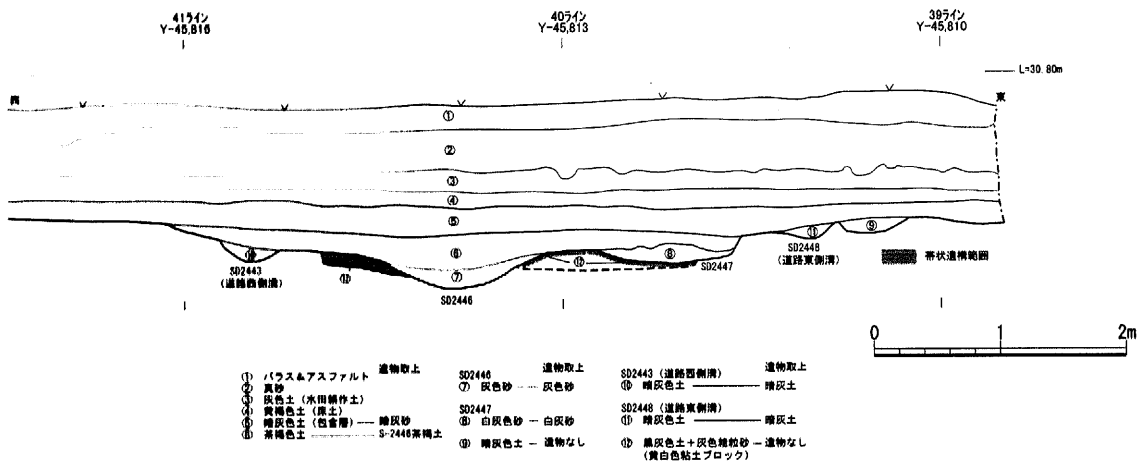
道路時期についてはXⅡ期に側溝が埋まることから、それ以前に使用されていたと考えている。その後、XⅣ期までに埋没したSD2446とSD2447が掘削されてSF1000の機能が終了する。SF700同様、道路再使用の可能性もあるが、確認はできなかった。

SF1100 (Fig. 32)

A05～BA7地区で検出した。南北に走行している。両端とも調査区外に延びている。大宰府条坊跡第122次調査で検出された道路につながり、途中で西に曲がり、本調査区のSF700につながっていく。道路西側溝はSD070、東側溝はSD060になる。東側溝の西肩および西側溝の東肩の間を路面幅とすると3.99～4.15m、両側溝の溝芯々間距離4.41～4.78m、道路占有幅である両側溝端は4.79～5.45mを測る。本遺構は、SF700・1000のような帯状遺構・刺突痕遺構・波板状遺構を確認することができなかった。

道路時期についてはXⅡ期に側溝が埋まることから、それ以前に使用されていたと考えている。その後、SD055・075が路面上に掘削されてSF1100の機能が終了する。

AK38～AK41地区SF1000関連土層観察



SF1000関連連続土坑土層図

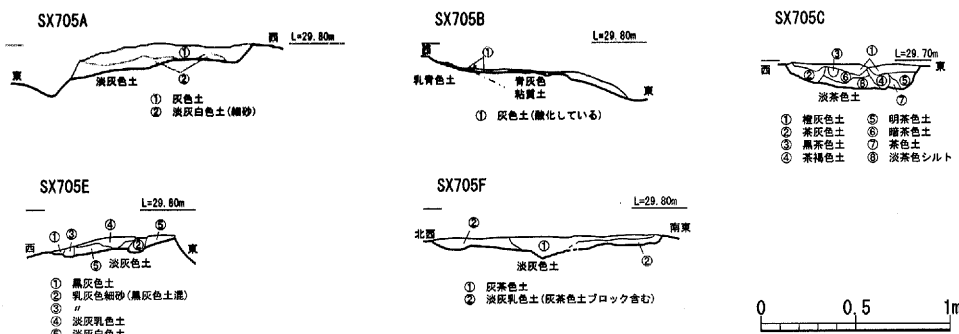
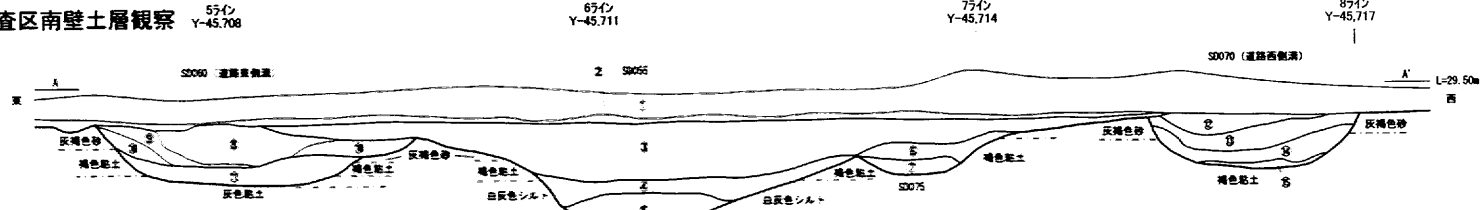


Fig. 31 SF1000 関連土層図 (上図は 1/60、下図は 1/40)

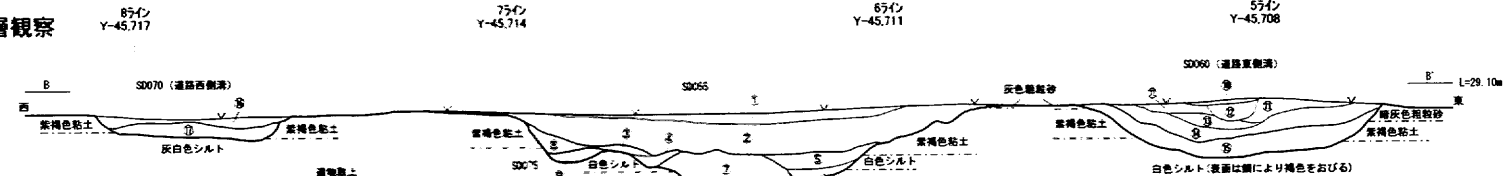
A04~A08地区調査区南壁土層観察



- 遺物取上
- ① 暗灰色砂
 - ② 黄褐色土(灰土)
- 暗灰砂
- S0055
- ③ 黒灰色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量を含む 黒灰土
 - ④ 灰褐色土質シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物
 - ⑤ 白灰色砂 しまりなし 粘性なし 鉄分で固まっているが、それ以外は脆い 白灰砂

- 遺物取上
- ⑥ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 炭化物量に含む
 - ⑦ 暗褐色土 しまりややなし 粘性あり 炭化物中量に含む
 - ⑧ 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化物多量に含む 灰褐色多量に含む
 - ⑨ 灰褐色土 しまりややあり 粘性あり 暗褐色土
- 暗褐色土
- S0070 (道路西側溝)
- ⑩ 黒灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 黒灰土
 - ⑪ 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 暗褐色土
 - ⑫ 灰褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 暗褐色土
 - ⑬ 灰色砂 しまりなし 粘性なし 灰砂
- 遺物取上

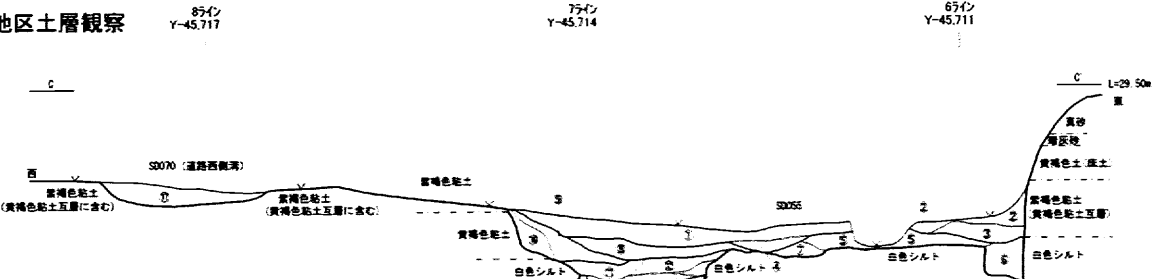
AY5~AY8地区土層観察



- 遺物取上
- ① 黒灰色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む 黒灰土
 - ② 黒灰色土(やや明) しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む
 - ③ 暗灰色土 しまりあり 粘性ややなし 炭化物量に含む
 - ④ 灰褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物中量に含む
 - ⑤ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む
 - ⑥ 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化物中量に含む
 - ⑦ 白灰色中粒砂 しまりあり 粘性なし 炭化物少量に含む 鉄分によりシマ状に層し 白灰砂
- 暗褐色土
- S0075
- ⑧ 黒灰色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む 黒灰土
 - ⑨ 灰色砂 しまりややなし 粘性なし 白灰砂

- 遺物取上
- ⑩ 黒灰色土 しまりややあり 粘性ややなし 炭化物中量に含む
 - ⑪ 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややなし 炭化物中量に含む
 - ⑫ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややなし 炭化物少量に含む 炭化物量に含む
 - ⑬ 暗褐色土 しまりややなし 粘性ややなし 炭化物中量に含む
 - ⑭ 灰色暗粒砂 しまりややなし 粘性ややあり 暗褐色土塊状に中量に含む 灰色砂
- 暗褐色土
- S0070 (道路西側溝)
- ⑮ 灰褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 微かなマンガン少量に含む 灰褐色土
 - ⑯ 灰色砂 しまりなし 粘性なし 鉄分に⑰が少量入る 灰砂
- 遺物取上

AS4~AS8地区土層観察



- 遺物取上
- ① 暗灰褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む 暗褐色中量に含む
 - ② 暗褐色土シミ状に多量に含む
 - ③ 灰褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物量に含む
 - ④ 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化物中量に含む
 - ⑤ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物中量に含む
 - ⑥ 灰色中粒砂 しまりややあり 粘性なし 炭化物中量に含む
 - ⑦ 白灰暗粒砂 しまりなし 粘性なし
 - ⑧ 灰褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む
 - ⑨ 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量に含む 暗褐色中量に含む
- 暗褐色土
- S0075
- ⑩ 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 炭化物多量に含む
 - ⑪ 黒灰色土 しまりあり 粘性あり 炭化物中量に含む
 - ⑫ 白灰色シルトブロック多量に含む
 - ⑬ 暗褐色土 しまりややなし 粘性ややなし 炭化物少量に含む
 - ⑭ 暗褐色土シミ状に多く含む
 - ⑮ 黒色土 しまりややあり 粘性あり 炭化物・暗褐色中量に含む 炭化物が沈殿している
 - ⑯ 黒色土 しまりややあり 粘性あり 炭化物・暗褐色中量に含む
 - ⑰ 灰色暗粒砂 しまりなし 粘性あり 暗褐色土ブロック中量に含む
 - ⑱ 黒色土 しまりややあり 粘性あり 炭化物少量に含む
 - ⑲ 灰色暗粒砂 しまりなし 粘性なし 白灰砂

- 遺物取上
- ⑳ 暗褐色土質シルト しまりややあり 粘性ややあり マンガン中量に含む 暗灰シルト
- 暗灰シルト

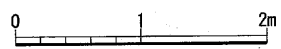


Fig. 32 SF1000関連土層図 (1/60)

竪穴住居

SI545 (Fig. 33, Pl. 13)

調査区西のA036～AP38地区で検出した。掘り方の平面プランは隅丸方形を呈し、長軸4.53m、短軸3.58m、深さは床面までが0.10m程度、掘り方0.26m程度を測る。柱穴軸が北に寄った二柱式の竪穴建物と考えられる。柱穴は柱痕を確認することができなかった。貼床の深さは底面から0.16m程あり、地山土とよく似た黄灰色土を使っている。遺構検出時には竈（東側の袖のみ）と竈に伴う焼土・炭化物の広がりを確認していた。だが本遺構は調査区の境に位置していたため、調査区を反転させてから一括で調査しようと残すことにした。その後再調査を行う前に調査が終わった地区に入ってきた工事の重機により、一部遺構が破壊されてしまった。その場所がちょうど竈の場所に該当し、もともと埋土がごくわずかにしか残っていなかったこともあり、再調査時には消失し確認することができなかった。再調査時に検出時とは異なる場所で焼土範囲を確認したが、これも竈に伴うものと考えられる。焼土・炭化物の密度はうすい。埋土は、上から黄褐色土・黄灰色土に分かれる。

なお、出土遺物から7世紀後半に埋没したと推測され、本調査区ではSD680とともに最も古い遺構である。

土坑

SK040 (添付CD PI.181)

調査区北のBH28～BI29地区で検出した。調査区の壁際に位置するため詳細は不明であるが、掘り方の平面プランは概して楕円形を呈していたとみられる。残存長で長径1.71m、短径1.50m、深さ0.34～0.43mを測る。埋土は、上から暗褐色土・暗黄褐色土に分かれる。

SK230 (Fig. 34)

調査区中央やや東のAQ15地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.74m、深さ0.63mを測る。埋土は、上から暗褐色土・黄灰色土・灰褐粘（遺物出土なし）に分かれる。

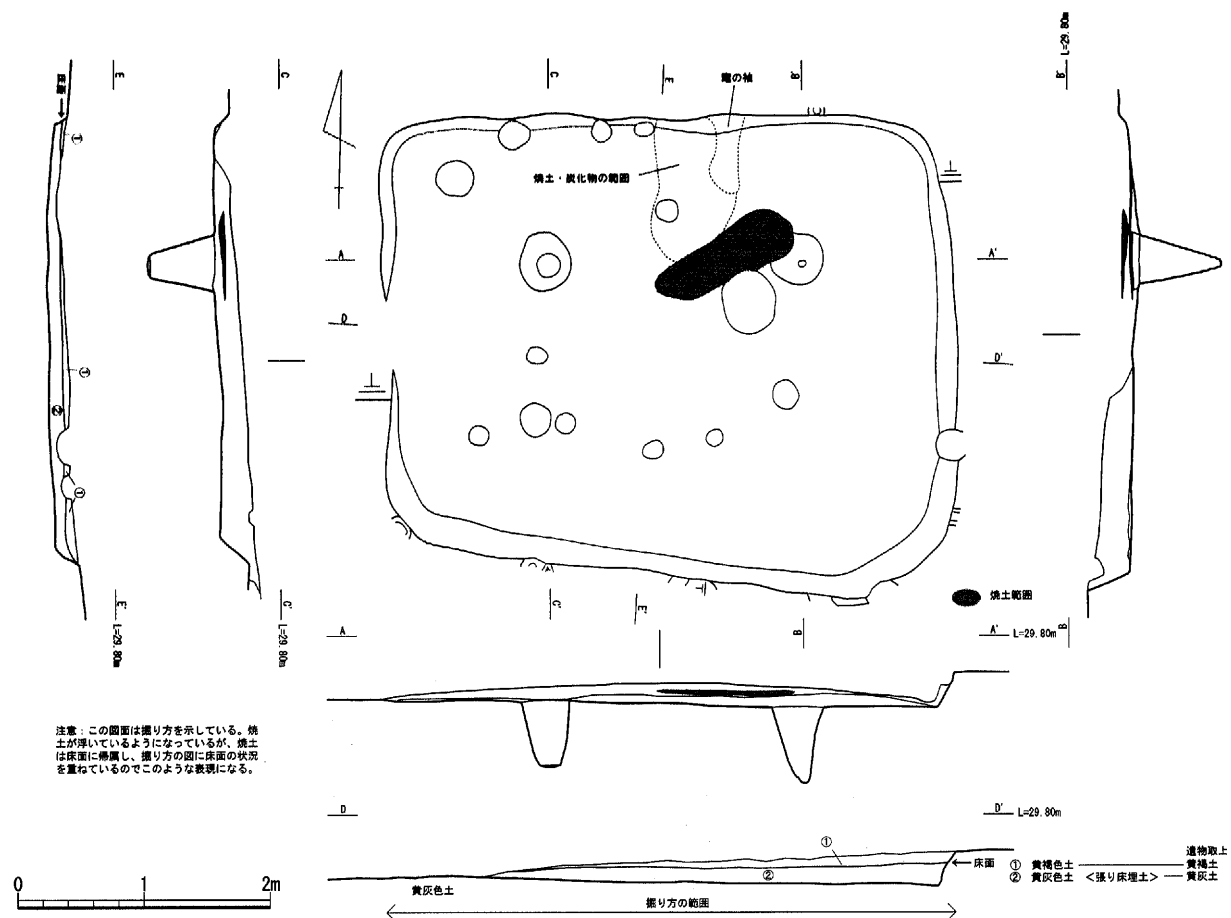


Fig.33 SI545 実測図 (1/60)

なお、出土遺物はXⅡ～XⅢ期の様相を示している。

SK265 (添付CD PI.184)

調査区中央のAS23～AR24地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.21m、短径1.38m、深さ0.17mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ～XⅢ期の様相を示している。

SK275 (添付CD PI.185)

調査区中央のAQ23～AR24地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径1.52m、短径1.23m、深さ0.54mを測る。埋土は、上から暗褐土・白灰粘に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK340 (添付CD PI.186)

調査区北西のAW・AX33地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.97m、深さ0.09mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

SK355 (添付CD PI.187)

調査区北西のAV31・32地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.27m、短径0.55m、深さ0.17mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

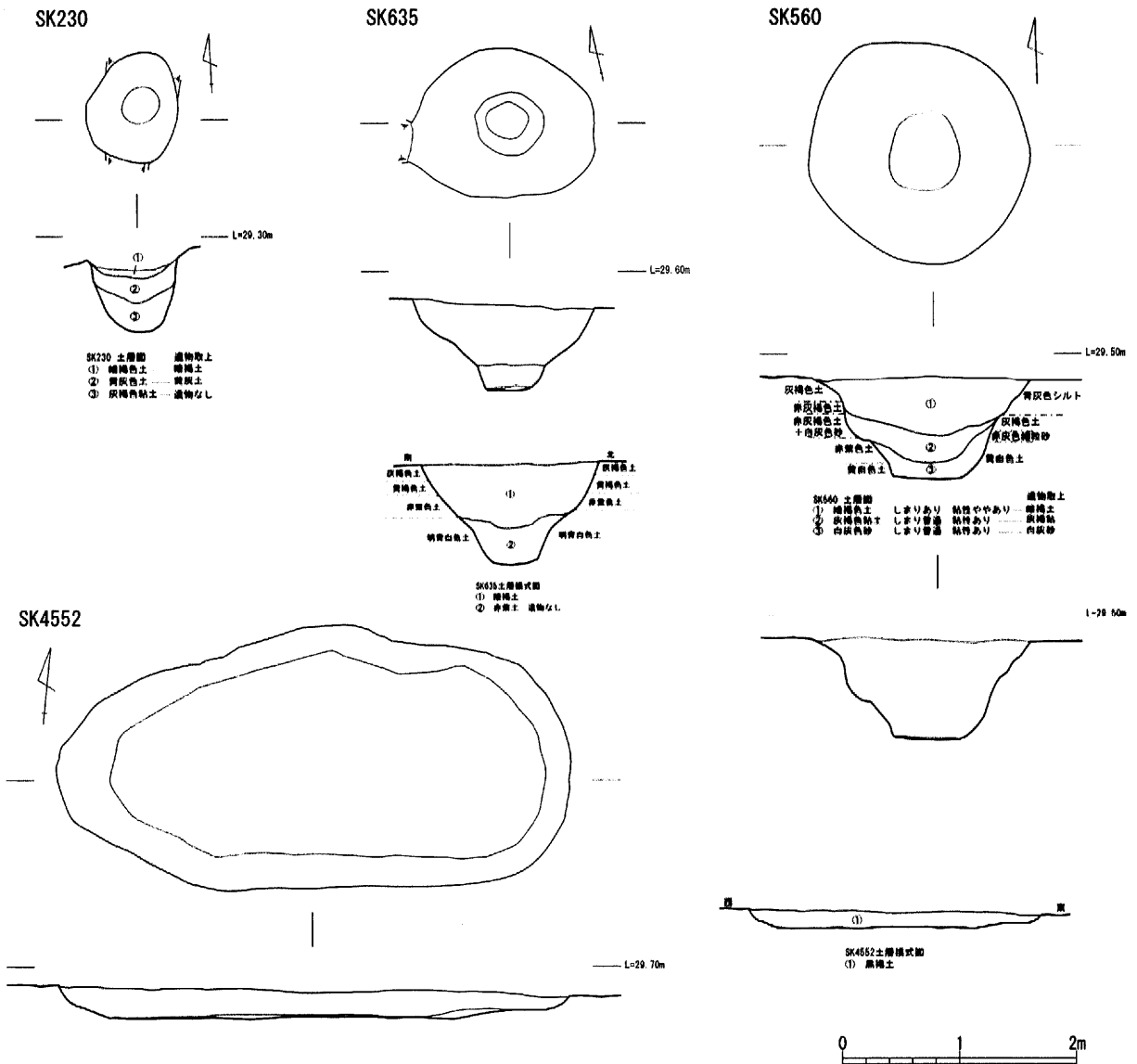


Fig. 34 SK230・560・635・4552 実測図 (1/60)

SK365 (添付CD PI.188)

調査区西のAS・AT37地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.40m、短径0.93m、深さ0.26mを測る。埋土は、上から灰色土・黒褐土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK430 (添付CD PI.189)

調査区北西のAW28～AX29地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.23m、短径1.38m、深さ0.20mを測る。埋土は、黒褐土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK460 (添付CD PI.190)

調査区中央のAR23～AS24地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.31m、短径1.88m、深さ0.22mを測る。埋土は、上から暗灰土・黄灰土・暗灰土(黄色粘ブロック)・黒灰土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK475 (添付CD PI.191)

調査区西のAS・AT32地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、残存長径0.78m以上、短径1.15m、深さ0.21mを測る。埋土は、上から暗灰褐土・黒灰土・灰色土に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK560 (Fig. 34)

調査区中央やや南のAL・AM25地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径1.82～2.01m、深さ0.86mを測る。調査時は井戸と認識していたが、明確な湧水層までは掘り込んでいないことと、底面も単純で水を溜める(集める)施設も見られないことから土坑として報告した。埋土は、上から暗褐土・灰褐粘・白灰砂に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK635 (Fig. 34)

調査区中央やや南のAM・AN26地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.58m、短径1.28m、深さ0.78mを測る。埋土は、上から暗褐土・赤紫土(遺物出土なし)に分かれる。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK1481

調査区北西のAW31・32地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.40m、短径1.21m、深さ0.25mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK2248

調査区南東のAH14・15地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.51m、短径1.24m、深さ0.12mを測る。埋土は、黒褐土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK4099

調査区南西のAJ32～AK33地区で検出した。掘り方の平面プランは攪乱により壊されているが、不整楕円形を呈していたとみられ、残存長で長径3.78m、短径2.06m、深さ0.13～0.16mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SK4101

調査区南西のAJ・AK31地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.63m、短径1.31、深さ0.12～0.27mを測る。埋土は、暗褐土の単層である。

SK4146

調査区南よりやや西のAI・AJ30地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径1.01m、短径0.57m、深さ0.23mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SK4552 (Fig. 34)

調査区中央よりやや南西のAN29・30地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径4.40m、

短径2.23m、深さ0.25mを測る。埋土は、黒褐土の単層で、層理は認められず、埋め戻されたものとみられる。土器が大量に出土しており、廃棄土坑と捉えられる。出土した遺物は一括性が高い。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

その他の遺構

不明遺構

SX010 (Fig. 35、Pl. 14)

調査区北のBB24～BE25地区で検出した。攪乱により削平されているため正確な形状は不明であるが、掘り方の平面プランは不整楕円形を呈していたとみられ、残存長で長径8.60m、短径4.76mを、深さ1.00mを測る。埋土は、上から黒褐土・黒褐土ブロック・濃ねずみ色土・灰色粘・黄灰砂に分かれる。濃ねずみ色土は黒褐土より粘性があり、還元され青みを持つ。埋土は黒褐土・黒褐土ブロック・濃ねずみ色土の一群（以下、A層群とする）と、灰色粘・黄灰砂の一群（以下、B層群とする）に大別される。A層群は黒褐土を主体に地山にみられる土のブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたものとみられる。B層群は水のある状態で、静かに堆積していったという印象を受ける。雨水の流入や溜まった水の攪拌などにより地山土が溶け出し、沈殿の過程で砂粒などの比較的大きく重い粒子は遺構周縁に堆積し、粘土などの細かく軽い粒子が遺構中央部に堆積したものと考えている。灰色粘、黄灰砂の両者の堆積は一連のもので、1回だけの堆積ではなく、幾度とない堆積の連続により形成されたものと考えられる。遺構の性格は、はっきりとしない。水が溜まっていた状況が想定されるので、池のようなものか、あるいは土取りのために掘削した後、放置し、自然に雨水がたまったものかと想定している。

なお、出土遺物はXⅣ期の様相を示している。また金属生産に関わる遺物が多く出土しており、墨書土器、石帯も出土している。

SX530 (Fig. 36、Pl. 14)

調査区南のAE30～AG32地区で検出した。掘り方の平面プランは不整隅丸方形を基本にしているが、西側部には長径2.44m、短径1.77m、深さ0.48mの土坑がとりついたような形をしている。本遺構の大きさは長径10.11m、短径2.44～7.52m、深さ0.67mを測る。遺構の性格は不明ながら多量の遺物と礫が出土しており、遺構の廃絶時に土器などを廃棄したものと考えられる。当初突出部については別遺構の可能性も考慮したが、土層観察から一つの遺構であることを確認した。また突出部は遺構内へ降りる施設の可能性も考えたが、階段状や緩いスロープを呈するわけでもない。埋土は、上から暗褐土・灰褐粘・白灰砂・赤灰細粒砂（遺物出土なし）に分かれる。

なお、出土遺物は暗褐土から龍泉窯系青磁Ⅱ-b類が1点出土しているが混入とみられ、全体的にはXⅣ期に埋没したことが窺える。

たまり状遺構

SX204

調査区北東のAW6・7地区で検出した。掘り方の平面プランは不整円形を呈し、径2.11～2.37m、深さ0.10mを測る。埋土は、暗褐土の単層である。

SX1534

調査区西のAS33～AT34地区で検出した。掘り方の平面プランは円形～隅丸方形を呈し、径2.40～2.56m、深さ0.03～0.09mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SX2278

調査区南東のAH14～AI15地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円～隅丸方形を呈し、長径3.61m、短径2.48m、深さ0.09mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ期の様相を示している。

SX2454

調査区南東のAH・AI18地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.26m、短径0.77m、深さ0.07mを測る。埋土は、黒色土の単層である。

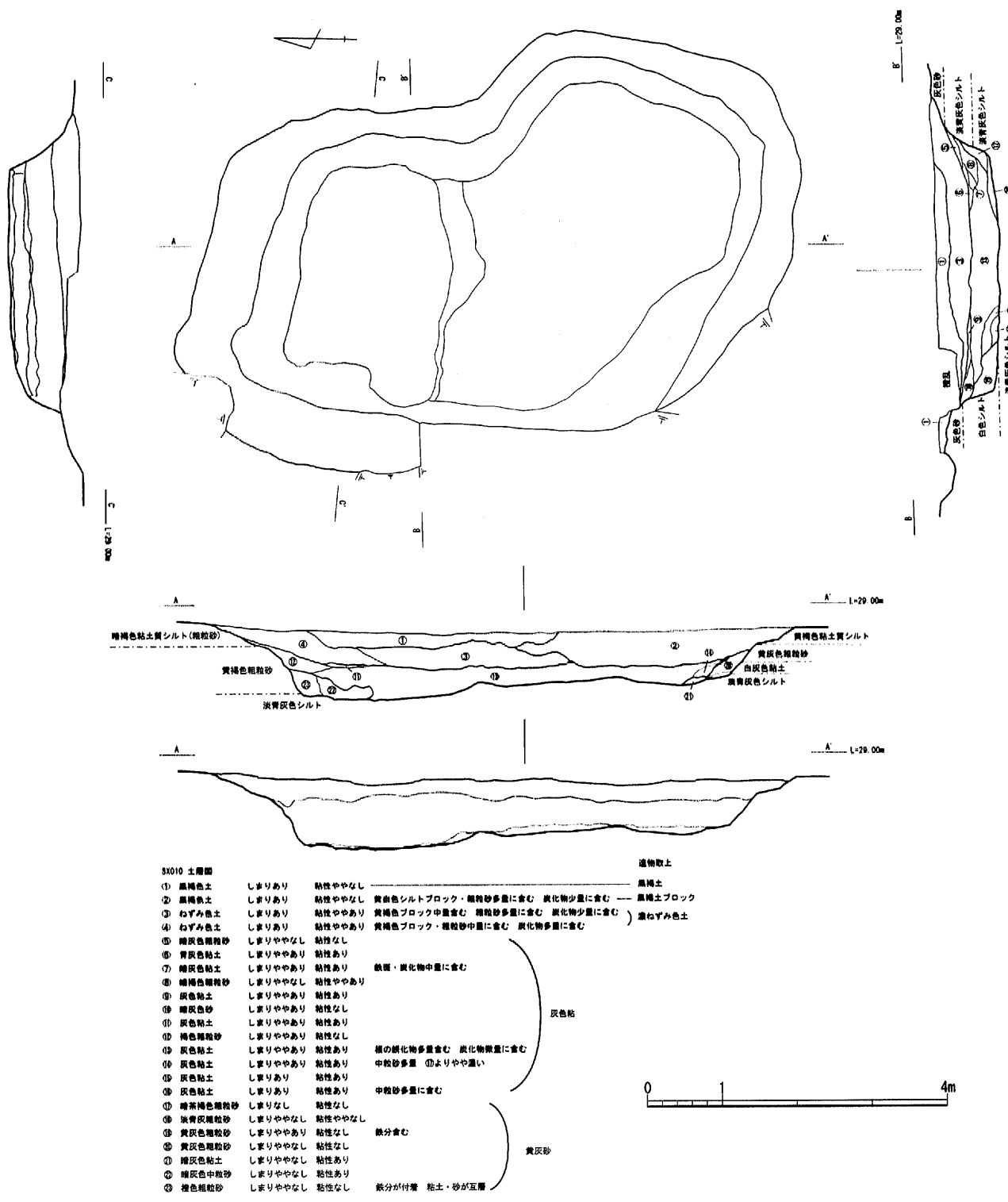


Fig. 35 SX010 実測図 (1/80)

SX2578

調査区中央よりやや南東のAK18~AL19地区で検出した。掘り方の平面プランは不整隅丸方形を呈し、長径2.56m、短径2.14m、深さ0.03~0.10mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

なお、出土遺物はX II期の様相を示している。

SX2579 (添付CD P1.202)

調査区南のAJ19地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.08m、短径1.20m、深さ0.03~0.09mを測る。埋土は、黒色土の単層である。

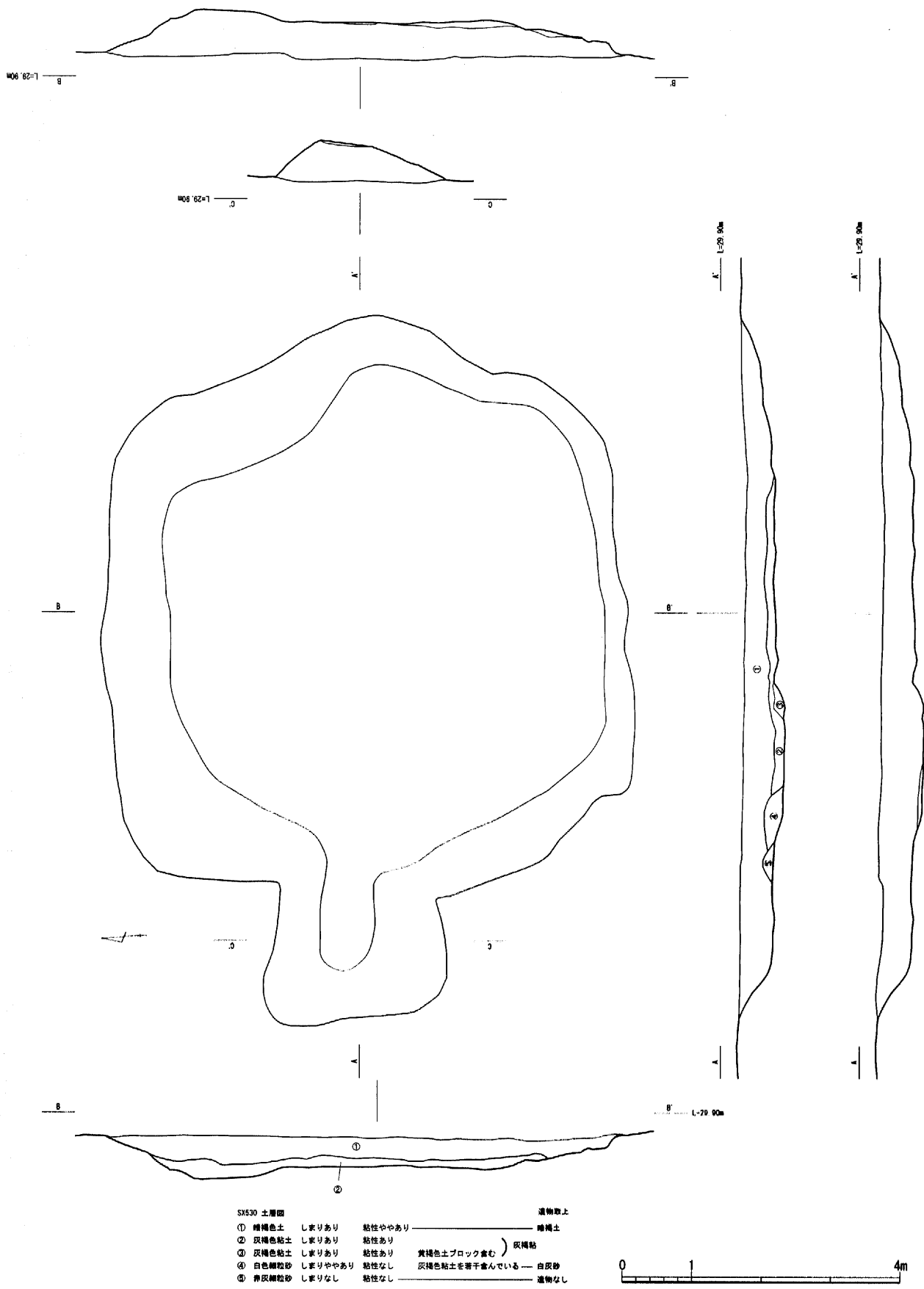


Fig. 36 SX530 実測図 (1/80)

なお、出土遺物はXⅢ期の様相を示している。

SX2624

調査区中央よりやや南東のAL19～AM21地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円～隅丸方形を呈し、長径4.28m、短径1.93m、深さ0.05～0.11mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

なお、出土遺物はXⅡ～XⅢ期の様相を示している。

SX2914 (添付CD PI.203)

調査区中央よりやや南のAH23地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.83m、短径0.58m、深さ0.10mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2979

調査区中央よりやや南東のAG・AH22地区で検出した。掘り方の平面プランは不整隅丸方形を呈し、長径2.29m、短径1.68m、深さ0.13～0.19mを測る。埋土は、暗褐色土の単層である。

SX4264

調査区中央よりやや南東のAK26・27地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径2.30m、短径0.86m、深さ0.10mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX4517

調査区中央よりやや南西のAN28地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径1.63m、短径0.94m、深さ0.08mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX4764

調査区南西のAD36・37地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.86m、短径0.48m、深さ0.01～0.04mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

小穴

SX163

調査区北のBE27地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.30m、深さ0.06mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX268E

調査区東のA04地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.29m、深さ0.15mを測る。埋土は、上から柱痕暗灰土、掘方灰色砂に分かれる。

SX686G

調査区中央のAS22地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.40m、短径0.24m、深さ0.19mを測る。掘立柱建物の一部だった可能性がある。埋土は、暗褐色土の単層である。

SX931

調査区北西のAX31地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.20m、深さ0.14mを測る。埋土は、黒褐色土の単層である。

SX1047

調査区北西のAW35地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.43m、短径0.33m、深さ0.24mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX1084

調査区北西のAW33・34地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.25m、深さ0.15mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

SX1189

調査区西のAT37地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.58m、短径0.34m、深さ0.25mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX1583

調査区中央よりやや北西のAW27地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.24m、深さ0.10mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX1823

調査区西のAW32・33地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.46m、短径0.25m、

深さ0.36mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2321D

調査区南東のAG16地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.25m、深さ0.38mを測る。埋土は、暗褐土の単層である。

SX2328

調査区南東のAG・AH15地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.42m、深さ0.13mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2434

調査区南東のAH・AI14地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.29m、深さ0.36mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2551

調査区南東のAI19地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.20m、深さ0.32mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2709G

調査区南のAF21地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.20m、深さ0.16mを測る。掘立柱建物の一部だった可能性がある。埋土は、暗褐土の単層である。

SX2744A

調査区南のAF20地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.24m、深さ0.43mを測る。掘立柱建物の一部だった可能性がある。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2802L

調査区南のAH21地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.26～0.35m、深さ0.35mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2803

調査区中央よりやや南東のAJ19地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.27m、深さ0.14mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2854

調査区南の調査区南のAG21地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.22m、深さ0.25mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX2879

調査区中央よりやや南東のAJ21地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.18m、深さ0.10mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX3251

調査区南西のAM35地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.30m、深さ0.26mを測る。埋土は、黒灰土の単層である。

SX3366

調査区南西のAK36地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.23m、深さ0.27mを測る。埋土は、暗褐土の単層である。

SX3458

調査区南西のAL36地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.23m、深さ0.14mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX3468

調査区南西のAH・AI37地区で検出した。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径0.53m、短径0.24m、深さ0.11mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX4208

調査区中央よりやや南西のAL32地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.49m、深さ0.33mを測る。埋土は、暗灰土の単層である。

SX4409

調査区中央よりやや南西のAM31・32地区で検出した。掘り方の平面プランは円形を呈し、径0.22m、深さ

0.29mを測る。埋土は、灰褐土の単層である。

攪乱

SX004

調査区北西のBA34～BC35地区で検出した。調査区の壁際に位置するため詳細は不明であるが、掘り方の平面プランは不定形を呈していたとみられる。残存長で長径4.79m、短径1.59～5.45m、深さ0.16～0.34mを測る。遺物は平安時代の遺物しか出土していないが、埋土や遺構の状況から考えて攪乱扱いにしている。埋土は、灰色土の単層である。

SX045

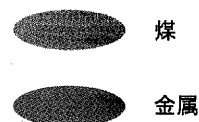
調査区北のBE31～BG30地区で検出した。調査区の壁際に位置するため詳細は不明であるが、掘り方の平面プランは概して不整楕円形を呈していたとみられる。残存長で長径5.28m、短径1.45m、深さ0.45mを測る。遺物は平安時代の遺物しか出土していないが、埋土や遺構の状況から考えて攪乱扱いにしている。埋土は、上から黒褐土・暗褐土・濃ねずみ色土に分かれる。

SX642

調査区中央よりやや北のAU18～AX20地区で検出した。掘り方の平面プランは不整楕円形を呈し、長径7.43m、短径4.80mを測る。遺物は平安時代のものだが、埋土や遺構の状況から考えて攪乱扱いにしている。埋土は、暗褐土の単層である。

3. 遺物

実測図は全て、本書に掲載している。写真及び土器計測表は、添付CDに収録している。また、実測図中で、付着物の範囲を右のように示している。



暗灰砂層出土遺物 (Fig. 37)

須恵質土器

坏 (1) 底部の破片である。残存高1.05cm、推定底径5.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切りされる。胎土は密で、~2mm程度の砂粒を少量、黒色粒をわずかに含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

緑釉陶器

蓋 (2) 口縁部~体部の破片である。推定口径15.0cm、残存高2.25cmを測る。内外面とも幅が狭く密なミガキcが施される。天井部にわずかに回転ナデが観察され、輪状つまみ貼り付けに伴うナデの可能性はある。胎土は密で、~1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、白灰色を呈する。釉が施されていたとみられるが、内面にわずかに残るのみである。残存する釉は薄緑色を呈する。

白磁

椀 (3、添付CD P1.204) 底部の破片である。残存高3.8cm、推定高台径6.6cmを測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は精良で、白色~灰色を呈する。焼成は良好。高台を除き、やや光沢のある薄緑色を呈する釉が薄くかかる。底部外面に墨書を有す。V類。

椀 (4、添付CD P1.205) 底部の破片である。残存高1.6cm、高台径5.0cmを測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は精良で、白灰色を呈する。焼成は良好。高台を除き、光沢のある淡灰緑色を呈する釉が薄くかかる。底部外面に「祥綱」とみられる墨書を有す。V類。

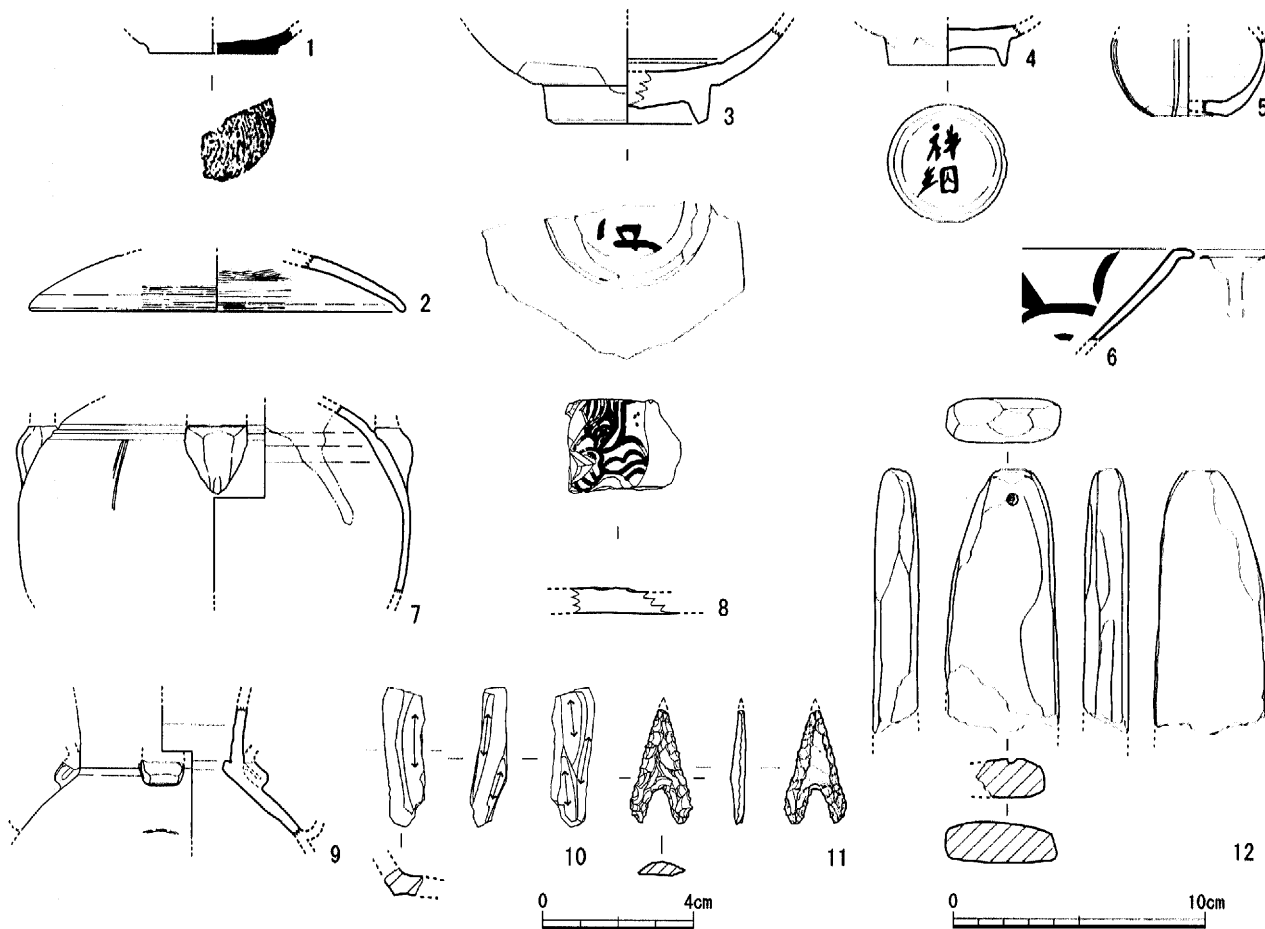


Fig. 37 暗灰砂層出土遺物実測図 (10・11は1/2、その他は1/3)

小壺 (5、添付CD P1.206) 体部下半～底部の破片である。残存高3.8cm、推定底径5.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリにより窪められ、不定方向のナデが施される。体部に縦位の沈線を有し、5本入ると推測される。胎土は精良で、灰白色を呈する。焼成は良好。内外面に光沢のある薄緑白色を呈する釉が薄くかかる。

鉢 (6) 口縁部の破片である。残存高3.7cmを測る。胎土は精良で、薄褐色を呈する。焼成は良好。内外面に薄灰緑色～濃灰緑色を呈する釉がやや厚くかかる。内面に鉄絵を有す。Ⅲ類。

水注 (7) 体部の破片である。残存高7.5cmを測る。肩部に沈線を有し、沈線以下に縦位のヘラ描きが施される。胎土は精良で、白色を呈する。焼成は良好。外面にガラス質で光沢があり薄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。耳が1ヶ所残存する。Ⅱ類。

中国陶器

盤 (8、添付CD P1.207) 底部の破片とみられる。残存長3.8cm、残存幅4.6cm、厚さ1.0cmを測る。胎土はやや密。焼成は良好で、薄褐色を呈する。内面に印文を有し、凹部に濃緑茶色を呈する釉が残存する。Ⅲ類。

黒釉陶器

壺類 (9、添付CD P1.208) 頸部～体部の破片である。残存高5.25cmを測る。胎土は精良で、薄茶白色を呈する。焼成は良好。外面および内面上位に、暗茶黒色～茶色～薄茶色を呈する釉が薄くかかる。壺耳または把手の数は3ヶ所以下と推測される。

石製品

砥石 (10、添付CD P1.209) 残存長3.75cm、残存幅1.1cm、残存厚0.95cmを測る。明白黄色を呈する粘板岩製である。断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

石鏃 (11) 先端を欠く。残存長3.0cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。明灰白色を呈する安山岩製である。

磨製石斧 (12) 残存長10.5cm、幅4.6cm、厚さ1.8cmを測る。暗灰黒色を呈する片岩製である。研磨により成形される。基部に未完通の穿孔を有す。

掘立柱建物出土遺物

SB210 出土遺物

S-210B 暗灰土出土遺物

瓦器

椀c 土器計測表参照。

S-210N 掘方暗黄灰土出土遺物 (Fig. 38)

土師器

椀c (1) 推定口径16.6cm、器高6.3cm、推定高台径7.0cmを測る。内面はミガキcが施される。外面は風化のため調整不明である。口縁部内面に沈線が入る。焼成後に口縁の一部を削り、注口としている。注口は対角にみられず、1ヶ所と考えられる。胎土は密で、～1mmの砂粒を含む。焼成は良好で、内面灰白色～褐灰色、外断面灰白色を呈する。内面に漆が付着する。漆の容器として利用したものと推測される。畿内系。

SB315 出土遺物

S-315C 灰色粘出土遺物

土師器

丸坏 (添付CD P1.210) 体部～底部の破片とみられる。残存長4.5cm、残存幅4.9cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、褐白色を呈する。

丸坏 (添付CD P1.211) 底部の破片とみられる。残存長2.5cm、残存幅3.7cm、厚さ0.55cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で、褐白色を呈する。

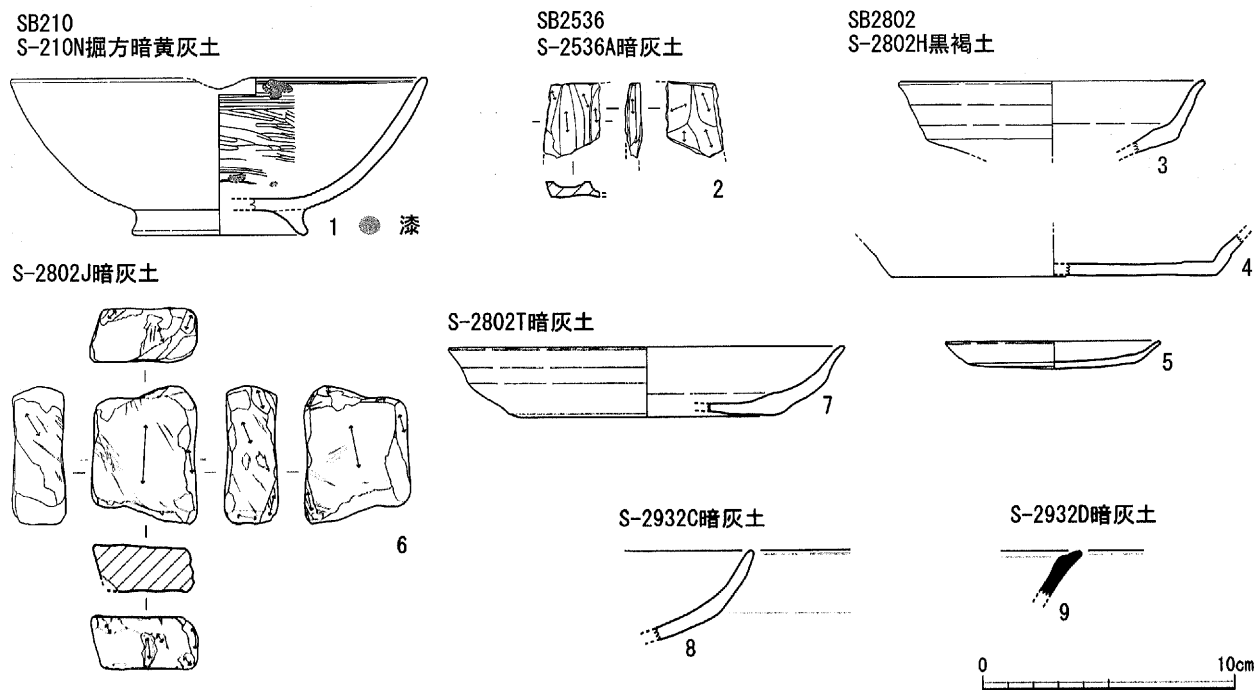


Fig. 38 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

SB2536 出土遺物

S-2536A 暗灰土出土遺物 (Fig. 38)

石製品

砥石 (2、添付CD Pl. 212) 残存長2.9cm、残存幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。明灰白色を呈する粘板岩製である。平坦な砥ぎ面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SB2802 出土遺物

S-2802G 暗灰土出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

S-2802H 黒褐土出土遺物 (Fig. 38)

土師器

坏 (3) 口縁部～体部の破片である。推定口径12.2cm、残存高2.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部はヘラ切りされる。胎土は精良。焼成は良好で、黒色を呈する。

坏a (4) 底部の破片である。残存高1.7cm、推定底径13.0cmを測る。体部は内外面とも回転ナデが施される。底部内面はナデが施され、底部外面は板状圧痕が残る。底部の切り離し技法は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含む。焼成はやや軟質で、淡灰褐色を呈する。

小皿a1 (5) 推定口径8.5cm、器高1.1cm、推定底径6.8cmを測る。体部は内外面とも回転ナデが施される。底部内面はナデが施され、底部外面は糸切りされ、板状圧痕が残る。胎土は精良。焼成は良好で、褐色を呈する。

S-2802J 暗灰土出土遺物 (Fig. 38)

石製品

砥石 (6、添付CD Pl. 213) 長さ5.6cm、幅4.2cm、厚さ2.1cmを測る。灰白色を呈する砂岩製である。平坦な砥ぎ面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

S-2802M 黒褐土出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

S-2802T 暗灰土出土遺物 (Fig. 38)

土師器

坏 a (7) 推定口径 15.8cm、残存高 2.8cm、推定底径 11.0cm を測る。体部は内外面とも回転ナデが施される。底部内面はナデが施され、底部外面はヘラ切り後、ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好で、淡灰褐色～黒褐色を呈する。

S-2802V 暗褐土出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

S-2802Y 暗灰土出土遺物

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

S-2932C 暗灰土出土遺物 (Fig. 38)

土師器

丸坏 (8) 口縁部～体部の破片である。残存高 3.6cm を測る。調整は風化により不明である。底部はヘラ切りされる。胎土は 1～2mm 程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、淡灰褐色を呈する。

S-2932D 暗灰土出土遺物 (Fig. 38)

須恵器

壺 d × f (9) 口縁部の破片である。残存高 1.9cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、内外面暗褐色、断面赤褐色を呈する。荒尾産とみられる。

溝出土遺物

SD002 出土遺物

S-15 暗褐土出土遺物 (Fig. 39)

須恵器

壺 (1) 体部～底部の破片である。残存高 24.3cm、推定底径 15.2cm を測る。内面は不定方向のナデ、外面は、体部上半は格子叩きの後カキメ、下半はタテナデが施される。胎土は密で、～7mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外断面灰色～暗茶灰色、内面灰面～暗黒灰色を呈する。内面に煤状の付着物がみられる。

青白磁

皿? (2) 皿の底部とみられる資料である。残存高 1.35cm、高台径 3.9cm を測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄青白色を呈する釉が薄くかかる。内面に篋描文を有す。

SD003 暗褐土出土遺物 (Fig. 39)

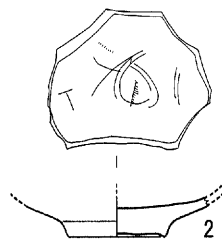
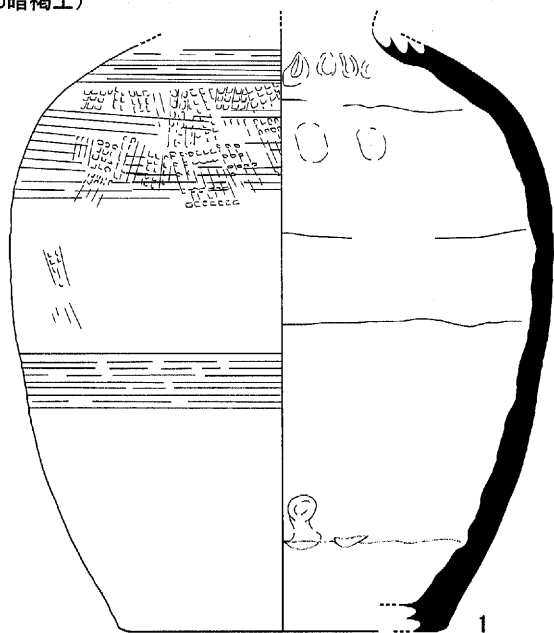
須恵器

捏鉢 (3) 底部の破片である。残存高 4.6cm を測る。内外面とも不定方向のナデ、底部は粗い工具によるナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～4mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面暗灰色、断面暗灰色～暗灰赤色を呈する。

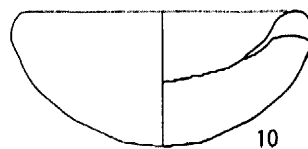
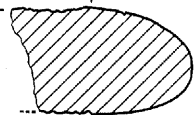
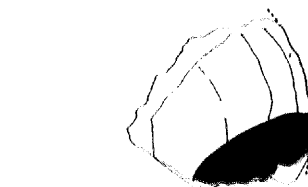
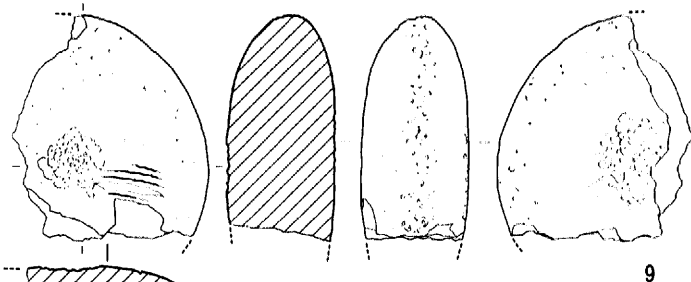
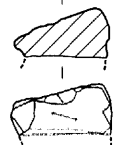
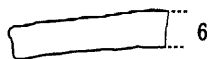
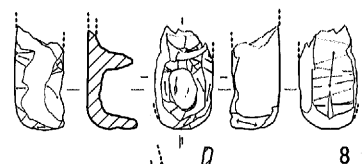
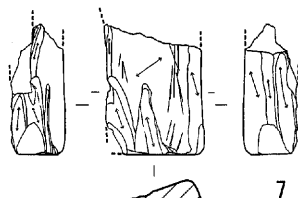
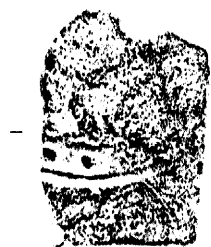
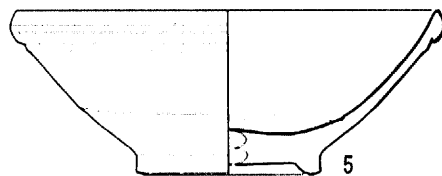
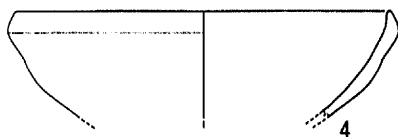
土師器

椀 (4) 口縁部の破片である。推定口径 14.9cm、残存高 4.4cm を測る。内外面の調整は風化により

SD002 (S-15暗褐土)



SD003暗褐土



SD003ねずみ色土ブロック

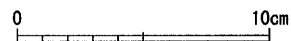
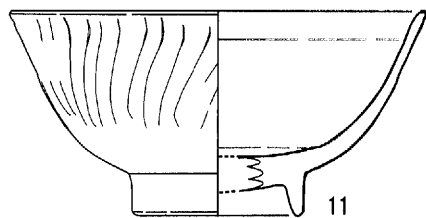


Fig. 39 溝出土遺物実測図 (1/3)

不明である。口縁部は薄い玉縁状を呈する。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、薄茶褐色を呈する。

白磁

椀(5) 1/4程度残る。推定口径16.8cm、器高6.55cm、高台径7.3cmを測る。胎土はきめ細かく、白色を呈し、黒色粒を少量含む。焼成は良好で、薄青灰色を呈する釉が厚くかかる。IV-2a類。

瓦類

平瓦(6、添付CD P1.214) 残存長10.3cm、残存幅6.8cm、厚さ1.5cmを測る。凹面には布目痕が残り、凸面に珠文が観察されるが風化により不明瞭である。一方の側縁にヘラ切りによる切断痕が残る。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、凹面薄灰色、凸面暗灰色～薄灰色～白灰色、断面暗灰色を呈する。

石製品

石鍋(添付CD P1.215) 体部～底部の破片である。残存長7.2cm、残存幅4.1cm、残存厚3.3cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。径9.0mmの穿孔を有す。割れ口を削っている。

砥石(7、添付CD P1.216) 残存長5.2cm、幅4.0cm、残存厚2.1cmを測る。暗灰黄色を呈する粘板岩(対馬産)製である。平坦な砥ぎ面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

滑石製品(8、添付CD P1.217) 残存長4.2cm、残存幅2.4cm、高さ2.0cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。上面に、平面楕円形(2.5×1.7cm)、断面逆台形(深さ1.1～1.3cm)の彫り込みを有す。2つ以上の彫り込みが、長軸方向に並んでいたものとみられる。

たたき石(9、添付CD P1.218) 残存長9.1cm、残存幅7.8cm、厚さ4.3cmを測る。暗赤褐色を呈する火成岩製である。大きな円礫を用い、表裏面中央部に敲打痕、表面に条痕が観察される。

土製品

取瓶(10) 推定口径11.3cm、器高5.4cmを測る。内面の調整は金属付着物により不明、外面はナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面灰色、断面灰色～暗灰色を呈する。内面に暗灰色～淡緑色～暗灰赤色を呈する金属が付着する。

SD003 ねずみ色土ブロック出土遺物 (Fig. 39)

白磁

椀(11) 1/2弱残存する。推定口径16.4cm、器高8.15cm、推定高台径6.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良で、空隙がわずかに入る。焼成は良好。薄灰緑色を呈する釉がやや厚くかかる。外面に縦篋花卉文を施す。V-1b類。

SD055 黒灰土出土遺物 (Fig. 40・41)

須恵器

蓋a1(1) 口縁部～天井部の破片である。口径12.4cm、器高2.25cm、天井部径5.6cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。天井部はヘラ切りされ、不定方向のナデが施される。貼り付けによりかえりが作られる。胎土は1mm程度の砂粒を多く含む。焼成は軟質で、灰白色を呈する。

甕(添付CD P1.219) 体部の破片である。残存長5.9cm、残存幅7.9cm、厚さ1.1cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。外面にヘラ描き波状文を有す。径1.0cmのボタン状の突起が貼り付けられている。胎土はやや密で、～1mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗灰色、外面灰色、断面灰色～灰赤色を呈する。

甕(2) 口縁部の破片である。残存高5.9cmを測る。内面は風化により不明瞭ながら回転ナデが観察される。外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内外面灰白色、断面灰色を呈する。

甕a(3) 口縁部の破片である。推定口径32.2cm、残存高6.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや不良で瓦質に仕上がりに、内外面黒灰色、断面灰白色を呈する。

甕(4) 口縁部の破片である。推定口径25.8cm、残存高2.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、還元は表面のみで、瓦質に仕上がりに、内外面黒灰色、断面灰色を呈する。

壺e (5、添付CD P1.220) 胴部の破片である。残存高5.7cmを測る。内面は条痕の伴う工具による不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。体部やや上位に断面三角形の突帯を貼り付ける。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内断面赤灰色、外面褐灰色を呈する。肥後系。

壺(6) 底部の破片である。残存高5.9cm、推定底径17.4cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面は斜位の平行叩きが施される。外面最下位はケズリが施される。底部は未調整とみられる。胎土は1～2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内面灰色、外面褐灰色、断面白灰色を呈する。十瓶山産とみられる。

土師器

椀(7、添付CD P1.221) 口縁部～体部の破片である。推定口径14.8cm、残存高4.1cmを測る。口縁部は内側に玉縁状に丸める。内面は風化により調整不明、外面は回転ナデが施される。胎土は1～2mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。搬入品とみられる。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿c 土器計測表参照。

片口鉢(8) 注口の一部を含む口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、内外面灰色～灰黒色、断面灰黒色を呈する。

鉢×壺(9) 底部の破片である。残存高2.7cmを測る。底径20cm程度に復元される。内面はやや幅の広いミガキが施される。外面の調整は風化により不明である。胎土は精良で、～0.5mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、内面淡灰褐色～暗褐色、外面暗褐色、断面淡灰褐色～橙色を呈する。

鉢(10) 口縁部の破片である。残存高4.75cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土は、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面暗褐色、外面赤褐色、断面暗褐色～黒色を呈する。外面に煤の付着、褐色化が観察される。

脚付鉢(11) 口縁部～底部にかけての破片である。体部外面の底部付近に脚が剥離したとみられる痕跡があり、脚付鉢と想定される。残存高6.3cmを測る。内外面ともナデが施される。外面の口縁部付近に指頭痕が残る。胎土はやや細かく、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面黒色、外面黒褐色～灰茶褐色～橙色、断面黒色～灰黄褐色を呈する。内面全体に煤が付着する。

鉢(12) 口縁部の破片である。残存高5.0cmを測る。内外面とも風化により調整が不明瞭ながら、口縁部及び外面の一部に回転ナデが観察される。胎土はきめ細かく、～2mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内外面にぶい黄橙色、断面にぶい黄橙色～橙色を呈する。

鍋(13) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内面はナデ、外面はタテハケの後ナデ、口縁部はヨコナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面灰褐色～暗褐色、外面暗褐色、断面灰褐色を呈する。

鍋(14) 口縁部の破片である。残存高2.3cmを測る。口縁部および外面はヨコナデが施される。内面の調整は風化により不明である。胎土は2～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、内面暗褐色、外面にぶい橙色～明灰褐色、断面暗褐色～明灰褐色を呈する。内面に褐色化、外面に赤色化がみられる。

鍋×鉢(15) 口縁部の破片である。残存高2.5cmを測る。口縁部および外面はナデが施される。内面の調整は摩滅により不明。胎土は～3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、淡褐色を呈する。

鍋(16) 口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、内外面淡茶褐色、断面淡茶褐色～明灰褐色を呈する。口縁部に黒色化が観察される。

盤×鉢(粗製脚付)(17) 口縁部～底部付近の体部の破片である。残存高9.7cmを測る。内面はヨコナデ、外面はナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面淡茶褐色、外面淡茶褐色～明褐色を呈する。体部下位に調整が施されず器面の粗い部分があり、脚が付いていたものとみられる。

器台(18) 脚柱部の破片である。残存高11.7cmを測る。外面は指ナデが施される。内面は棒状の芯の抜き取りにより成形される。胎土は0.5mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、淡灰褐色を呈する。

器台(19) 脚柱部の破片である。残存高8.8cmを測る。外面は指ナデが施される。内面は棒状の芯の抜き取りにより成形される。胎土は0.5～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、淡灰褐色を呈する。

SD055黑灰土

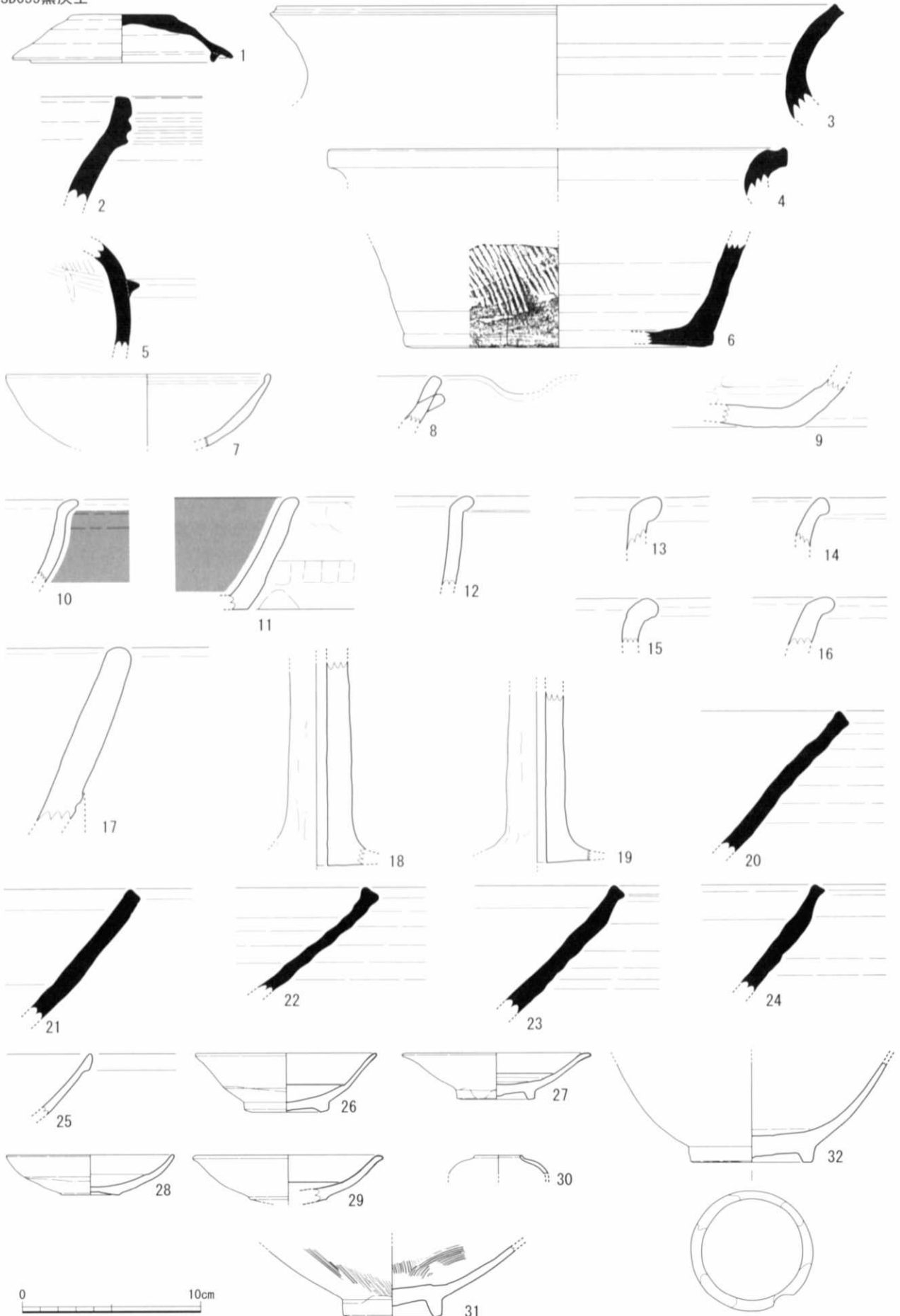


Fig. 40 SD055出土遺物実測図 (1/3)

SD055黑灰土

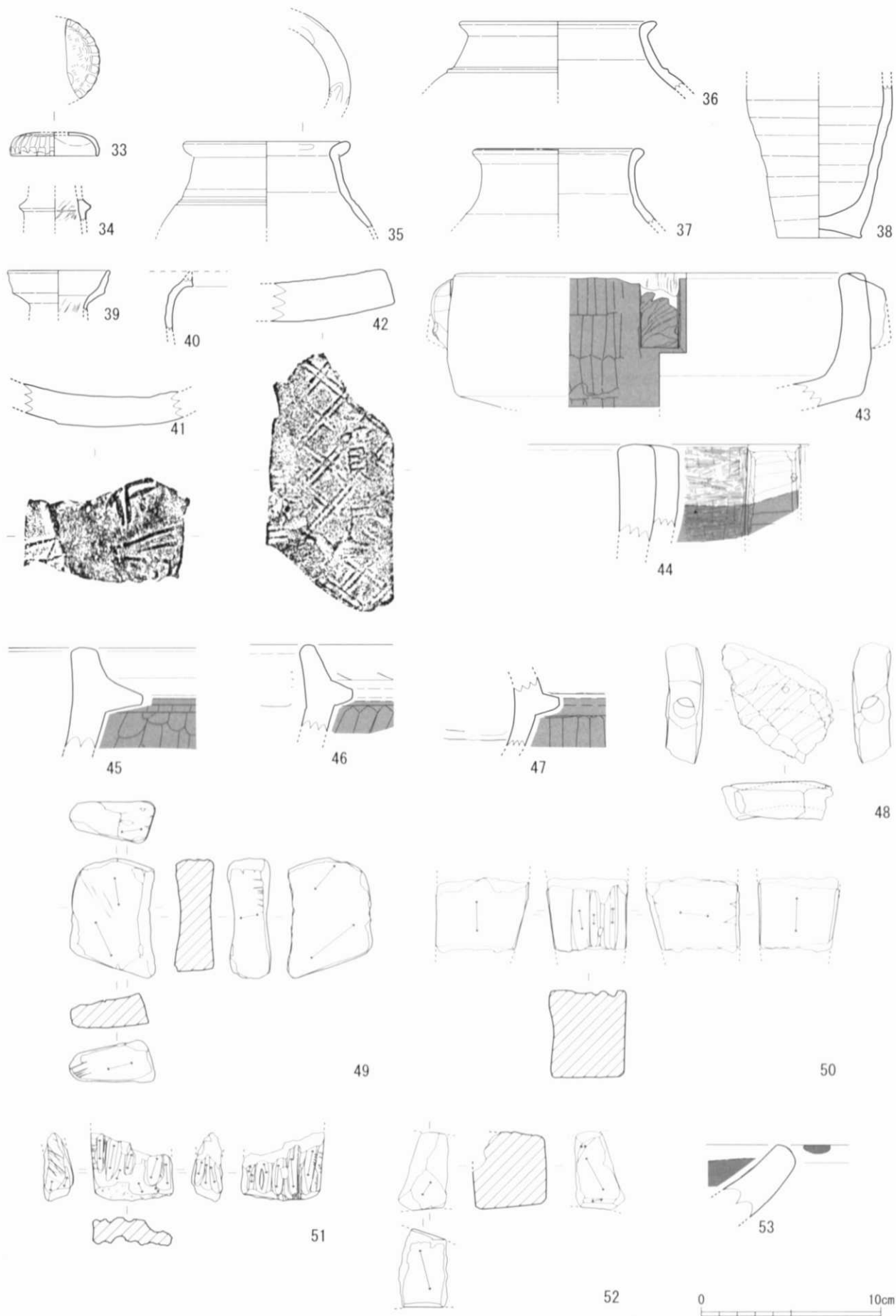


Fig. 41 SD055出土遺物実測図 (1/3)

須恵質土器

捏鉢 (20) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (21) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (22) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.9cmを測る。外面は回転ナデが施され、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。胎土はきめ細かく、黒色粒、～2mm程度の白色砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面が暗青灰色、その他が青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (23) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (24) 体部上半の破片である。残存高6.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～7mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

白磁

碗 (25) 口縁部の破片である。残存高3.5cmを測る。胎土は白褐色を呈し、精良で、空隙がわずかに入る。焼成は良好。釉はにぶい光沢のある淡灰褐色～淡緑色を呈し、薄くかかる。Ⅱ-5類。

皿 (26) 推定口径10.2cm、器高3.35cm、高台径4.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある淡灰オリーブ色を呈し、やや厚くかかる。Ⅱ-1a類。

皿 (27) 1/2程度残る。推定口径10.6cm、器高2.65cm、高台径4.5cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある明白緑色を呈し、やや厚くかかる。Ⅲ-1類。

皿 (28) 推定口径9.4cm、器高2.3cm、底径3.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉はにぶい光沢の淡黄オリーブ色を呈し、薄くかかる。Ⅵ-1a類。

皿 (29) 口縁部の破片である。推定口径10.7cm、残存高2.65cmを測る。胎土は白灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉はややにぶい光沢の暗オリーブ色を呈し、やや厚くかかる。Ⅳ-2a類？

小壺 (30) 口縁部～肩部の破片である。推定口径2.7cm、残存高1.1cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、光沢のある淡オリーブ色を呈する釉が薄くかかる。口縁部の釉はふき取られている。

同安窯系青磁

碗 (31) 底部の破片である。残存高4.1cm、推定高台径5.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉はにぶい光沢の暗黄緑色を呈し、薄くかかる。内面見込みを輪状に掻き取る。Ⅲ-2b類。

高麗青磁

碗 (32) 体部下半～底部の破片である。残存高5.7cm、高台径6.95cmを測る。胎土は濃橙色を呈し、精良。焼成は良好。釉は乳白色を呈し、気泡が入る。内外面及び高台内面に薄くかかる。内面見込みの釉をふき取る。高台に目跡が残る。

青白磁

合子蓋 (33) 1/3程度残る。推定口径3.4cm、器高1.4cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄緑青色を呈し、外面及び天井部内面に薄くかかる。

瓶 (34) 頸部の破片である。残存高1.3cmを測る。胎土は灰白色～白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄緑色を呈し、外面にやや厚くかかる。内面には絞り痕が観察される。

中国陶器

耳壺 (35) 口縁部の破片である。推定口径9.3cm、残存高4.9cmを測る。胎土は灰色を呈し精良で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好。釉は光沢のあまりない濃緑色を呈し、外面に極薄くかかる。口縁部に目跡が残る。Ⅴ-2類。

耳壺 (36) 口縁部の破片である。推定口径11.0cm、残存高3.9cmを測る。胎土は灰色～灰褐色を

呈し、精良。焼成は良好。釉は暗緑茶色を呈し、極薄くかかる。V-2類。

耳壺(37) 口縁部の破片である。推定口径9.6cm、残存高4.25cmを測る。胎土は灰色を呈し精良で、黒色粒をわずかに含む。焼成は良好。釉は茶色～黒茶色を呈し、極薄くかかる。V-2類?。

小壺(38) 体部下半～底部の破片である。残存高8.6cm、底径4.7cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリが施される。胎土は灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉は暗茶色を呈し、極薄くかかる。

朝鮮系無釉陶器

壺(39) 口縁部～頸部の破片である。推定口径5.8cm、残存高2.35cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、頸部内面には絞り痕が観察される。胎土は精良。焼成は良好で、内外面暗灰赤色、断面淡灰赤色を呈する。

不明陶器

壺(40) 口縁部の破片で、端部を欠く。残存高3.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は淡黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉はやや光沢のある暗茶色を呈し、外面に薄くかかる。内面は灰色を呈する。

瓦類

文字瓦(41、添付CD Pl.222) 残存長6.8cm、残存幅8.95cm、厚さ1.7cmを測る。凹面に布目痕、凸面に格子叩き痕が残る。凸面の叩き痕は一部ナデ消されている。胎土は密で、～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、明白茶色～薄橙色を呈する。凸面の叩きにより「佐」を陽刻する。

文字瓦(42、添付CD Pl.223) 残存長14.4cm、残存幅6.9cm、厚さ2.2cmを測る。凹面に布目痕、凸面に格子叩き痕が残る。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、明灰白色を呈する。凸面の叩きにより「賀茂」を陽刻する。

石製品

石鍋(43) 口縁部～底部の破片である。推定口径23.0cm、残存高7.55cm、底径22.9cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面全体に煤が付着する。

石鍋(44) 口縁部の破片である。残存高5.5cmを測る。薄茶銀色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。横方向に細かく削り、仕上げを行っている。耳が1ヶ所残存する。外面下半に煤が付着する。

石鍋(45) 口縁部～体部にかけての破片である。残存高5.6cmを測る。口径は26cm程に復元される。内外面ともケズリにより成形される。内面及び外面鐔以上は、使用による磨耗でケズリの単位が不明瞭となっている。青灰色を呈する滑石製である。鐔以下に煤が付着する。

石鍋(46) 口縁部～体部上半の破片である。残存高4.9cmを測る。口径17.5cm程度に復元される。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鐔以下に煤が付着する。

石鍋(47) 体部の破片である。残存高3.9cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鐔以下に煤が付着する。

SD055灰褐色土

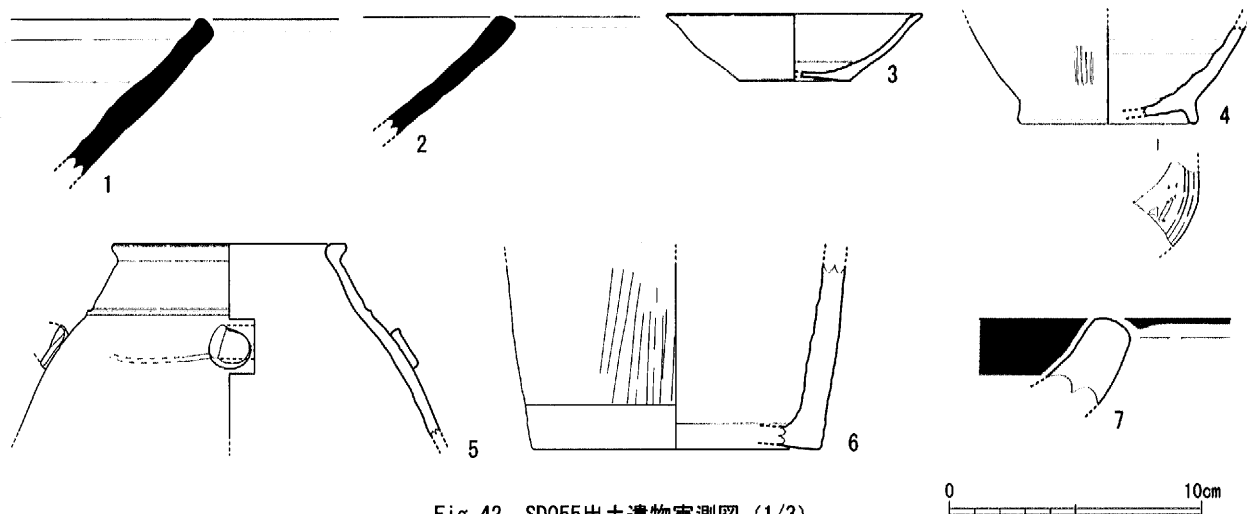


Fig. 42 SD055出土遺物実測図 (1/3)

石鍋(48) 体部の破片である。残存長6.75cm、残存幅6.2cm、厚さ2.1cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。割れ口部分から穿孔が施される。穿孔は内部で緩く曲がっている。

石鍋(添付CD P1.224) 口縁部の破片である。残存長4.7cm、残存幅10.5cm、厚さ1.5cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径4.0mmの穿孔を有す。

石鍋(添付CD P1.225) 体部の破片である。残存長3.3cm、残存幅5.8cm、厚さ1.1cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。径6.0mmの穿孔を有す。

石鍋(添付CD P1.226) 体部の破片とみられる。残存長5.6cm、残存幅3.7cm、厚さ2.1cmを測る。灰銀色を呈する滑石製である。径8mm程度の穿孔を有す。

石鍋(添付CD P1.227) 体部の破片である。残存長5.8cm、残存幅3.4cm、厚さ1.9cmを測る。灰色を呈する滑石製である。内面に断面が浅いU字状を呈する細長い窪みがあり、砥石として使用された痕跡と推測される。割れ口が削られている。

滑石製品(添付CD P1.228) 残存長5.0cm、残存幅7.9cm、厚さ1.7cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径6.0mmの穿孔を有す。権の可能性はある。

砥石(49、添付CD P1.229) 長さ6.8cm、幅4.8cm、厚さ2.4cmを測る。赤褐色を呈する砂岩製である。1面を除きほぼ全面が使用される。

砥石(50、添付CD P1.230) 残存長4.2cm、幅4.5cm、厚さ5.2cmを測る。明灰白色を呈する、きめの粗い砂岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

砥石(51、添付CD P1.231) 残存長3.8cm、幅4.6cm、厚さ1.5cmを測る。黄白色を呈する、きめの細かい泥岩または粘板岩製である。断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

砥石(52、添付CD P1.232) 残存長4.4cm、残存幅2.3cm、厚さ4.1cmを測る。黄白色を呈する砂岩製である。

土製品

取瓶(53) 口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。内外面とも器面調整が施されているが詳細は不明。胎土はやや細かく、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面灰白色、外面灰白色～黄白色、断面灰色～灰白色～黄白色を呈する。二次的な被熱により気泡が入る。外面の一部および内面に赤紫色～浅橙色～黒紫色～橙色～にぶい茶色を呈する金属が付着する。

SD055 灰褐色土出土遺物 (Fig. 42)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢(1) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面下半は斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面が灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

捏鉢(2) 体部上半の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施されるが、内面は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、灰白色を呈する。東播系。

白磁

皿(3) 推定口径10.2cm、器高2.7cm、底径4.4cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある淡オリーブ色を呈し、やや厚くかかる。V-2a類?。

越州窯系青磁

水注(4) 底部の破片である。残存高3.95cm、推定高台径7.2cmを測る。胎土は明灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉はにぶい光沢の淡オリーブ色を呈し、薄くかかる。底部外面高台内に目跡が残る。Ⅲ類?。

中国陶器

耳壺(5) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径9.3cm、残存高7.8cmを測る。胎土は灰色～淡赤紫色を呈し精良で、白色粒、黒色粒をわずかに含み、空隙が入る。焼成は良好。釉は外面濃緑色、内面暗オリーブ色を呈し、薄くかかる。耳が1ヶ所残存する。V-2類。

不明陶器

壺? (6) 体部下半～底部の破片である。残存高7.5cm、底径11.6cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテハケ、底部外面はナデが施される。体部外面の底部との境部分は回転ヘラケズリが施される。胎土はやや密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面薄灰赤色～暗黒茶色、内面暗灰赤色～淡灰赤色を呈する。

土製品

取瓶 (7) 口縁部の破片である。内外面ともナデが施される。胎土はやや細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外断面灰色～浅黄橙色を呈する。口縁部～内面に濃紺色～濃緑色～赤紫色を呈する金属が付着する。

SD055 白灰砂出土遺物 (Fig. 43)

須恵器

把手 (1) 把手とみられる破片である。残存長4.6cm、幅2.0cm、厚さ1.6cmを測る。指ナデにより成形される。胎土は精良。焼成は良好、還元は良好で、灰色を呈する。本体の胴部内面に径2.5mm、深さ7.5mm、把手中位に径2.5mm、12.0mmの2つの穿孔を有す。穿孔は現状では貫通していないが、同軸線上にあり、本来は2つの穿孔が繋がっていたものと推測される。製作過程で孔の途中がつぶれたものか、内部に土等が詰まっているだけなのか、孔が小さいため確認できない。

把手 (2) 把手とみられる破片である。長さ4.2cm、幅1.9cm、厚さ1.6cmを測る。指ナデにより成形される。胎土は精良。焼成は良好、還元は良好で、灰色を呈する。把手中位に径2.0mm、深さ3.0mmの、貫通しない穿孔を有す。1のような本体の胴部内面の穿孔は確認されない。

土師器

鉢 (3) 口縁部の破片である。残存高5.4cmを測る。内外面とも幅広のミガキcが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、浅黄橙色を呈す。部分的に褐色化している。

鉢 (4) 底部の破片である。残存高3.6cmを測る。底径40cm程に復元される。内面は体部に幅広の横方向のミガキ、底部に強めのヨコナデが施され、外面は強めのヨコナデが施される。胎土は細かく、～4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (5) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径28.9cm、残存高8.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。また、使用により磨耗している。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。注口の一部が1ヶ所残存する。東播系。

捏鉢 (6) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内面褐灰色、外断面灰色を呈する。口縁部付近の内外面に自然釉がかかる。東播系。

捏鉢 (7) 口縁部の破片である。残存高2.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は細かく、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、口縁部外面は灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (8) 口縁部の破片である。残存高1.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (9) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される、内面下半は回転ナデの後、斜めのナデが施される。胎土は密で、焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (10) 口縁部の破片である。残存高4.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。胎土は密で、焼成、還元ともに良好で、口縁部は暗灰色、その他は灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (11) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (12) 体部下半から底部の破片である。残存高5.5cmを測る。内面は使用により磨耗している。外面

はヨコナデの後、不定方向のナデが施される。底部外面は磨耗により調整不明である。胎土は細かく、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

灰釉陶器

碗c (13、添付CD P1.233) 底部の破片である。残存高2.55cm、推定高台径5.0cmを測る。外面、底部外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、明灰白色を呈する。内面に、灰白色を呈する釉がかかる。内面は擦られて平滑になっており、赤色顔料がうっすらと付着する。割れ口の一部にも赤色顔料が付着する。

白磁

碗 (14) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径20.0cm、残存高3.7cmを測る。胎土は白色を呈し精良で、空隙が入る。焼成は良好。釉は光沢のある淡灰白色を呈し、やや厚くかかる。内面に櫛描文が施される。V-4b類。

碗 (15) 口縁部を欠く破片である。残存高4.0cm、高台径5.5cmを測る。胎土は白色を呈し精良で、空隙が入る。焼成は良好。釉は光沢のある淡緑白色を呈し、やや厚くかかる。内面見込みに櫛描文が施される。VI-1b類。

同安窯系青磁

碗 (16) 底部の破片である。残存高1.95cm、高台径4.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。釉はやや光沢のある灰緑色を呈し、やや厚くかかる。I類。

青白磁

皿 (17) 底部の破片である。残存高1.5cm、高台径5.7cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄緑白色を呈し、薄くかかる。内面見込みにヘラ描きの花文が施される。

中国陶器

大甕 (18) 口縁部の破片である。残存高2.2cmを測る。胎土はやや粗く、～1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、薄灰赤色～薄青灰色を呈する。やや光沢のある茶緑色を呈する釉が斑に残る。耳が1ヶ所残存する。

壺 (19) 口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。胎土は灰色を呈し、やや密で、空隙が入る。焼成は良好。内外面に、暗赤茶色～淡灰緑色を呈する釉が薄くかかる。

盤 (20) 口縁部の破片である。残存高2.05cmを測る。胎土はやや粗く、～1mm程度の白色粒を多く含む。焼成は良好で、明白灰色～淡赤茶色、断面明白灰色を呈する。釉はほとんどはげているが、一部に緑黄色を呈する釉が残存する。I類。

盤 (21) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。胎土は灰色を呈し、密で、～1mm程度の黒色粒を少量含む。焼成は良好。外面にやや光沢のある淡緑色を呈する釉が薄くかかる。内面に、縞状にこげ茶色を呈する部分があり、鉄絵の痕跡とみられる。I類?

盤 (22) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。胎土は密で、～1mm程度の白色粒、黒色粒を少量含む。焼成は良好で、薄緑灰色を呈する。内面にこげ茶色を呈する釉が薄くかかる。II類。

不明陶器

壺 (23) 底部の破片である。残存高3.7cm、推定高台径5.2cmを測る。高台は貼り付けによるものとみられる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、外面明灰白色～淡橙色～明橙色、内面暗灰白色～暗茶灰色、断面明灰白色～暗灰色を呈する。乳白色を呈する釉がかかるが、泡状化し、ほとんど剥げている。

瓦類

軒丸瓦 (24) 残存長4.25cm、残存幅6.5cm、残存厚2.0cmを測る。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、外面暗黒灰色、断面暗黒灰色～明白灰色を呈する。珠文と花文の一部が残存する。

石製品

石鍋 (25) 口縁部・縦耳の破片である。残存高8.3cmを測る。口径は38cm程に復元される。内外面ともケズリにより成形される。淡青灰色を呈する滑石製である。外面下半に煤が付着する。

滑石加工品 (26、添付CD P1.234) 長さ4.8cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。茶色を帯びた灰褐色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。

砥石 (27、添付CD P1.235) 長さ5.8cm、幅4.6cm、厚さ2.9cmを測る。黄灰色を呈する砂岩製で

SD055白灰砂

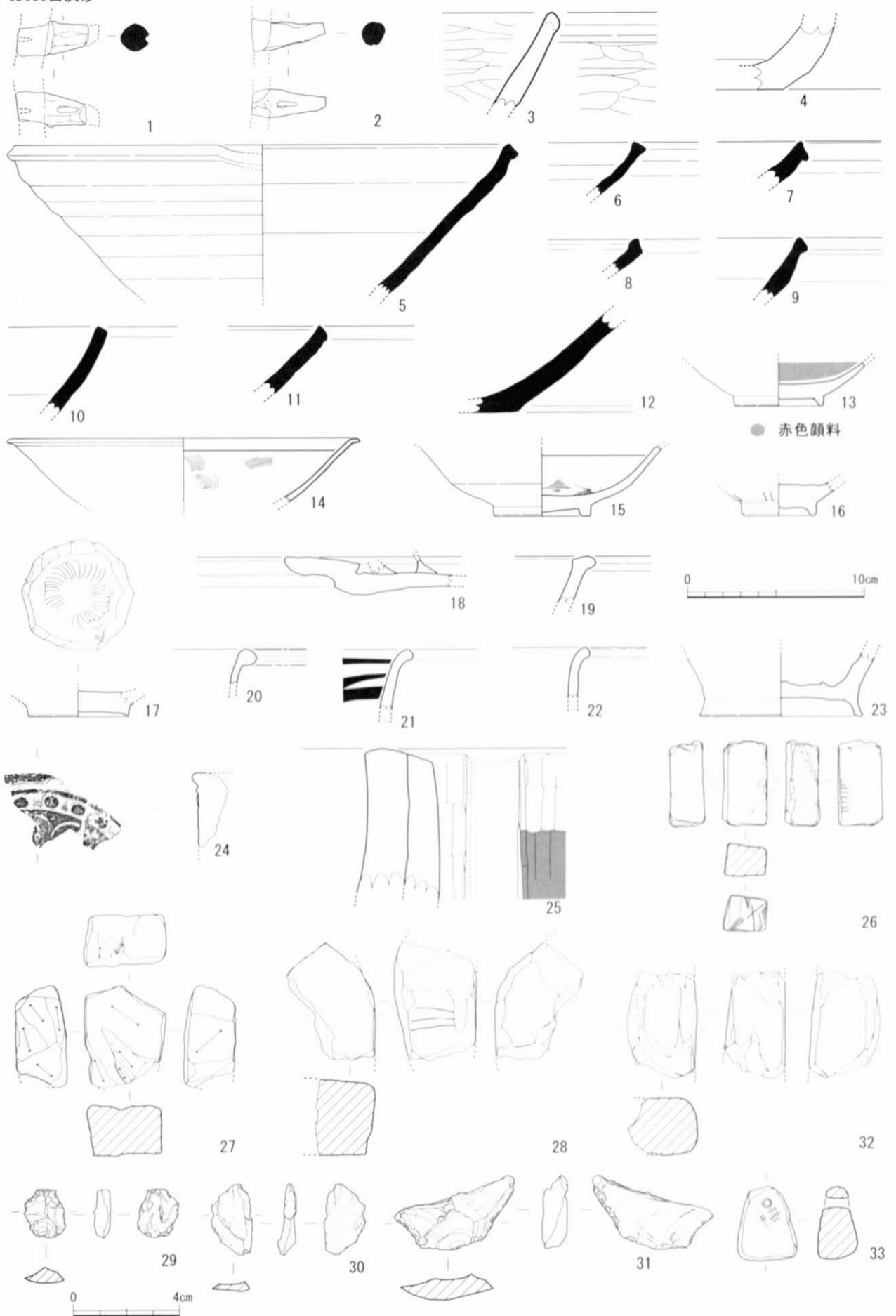


Fig. 43 SD055出土遺物実測図 (29~31は1/2、1/3)

ある。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

砥石 (28、添付CD P1.236) 残存長6.6cm、残存幅5.0cm、残存厚4.6cmを測る。赤褐色を呈する砂岩製である。平坦な砥ぎ面に、うっすらと筋状の痕跡が観察される。

石器未製品 (29) 長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。暗黒色を呈する黒曜石製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

剥片 (30) 長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmを測る。暗黒色を呈する黒曜石製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

使用剥片 (31) 長さ2.8cm、幅4.5cm、厚さ1.0cmを測る。暗黒色を呈する黒曜石製である。2辺に使用痕が観察される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

土製品

棒状製品 (32、添付CD P1.237) 残存長6.1cm、残存幅3.9cm、厚さ3.5cmを測る。調整は風化により不明。胎土は～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、外面淡褐色～暗褐色、断面淡褐色を呈する。

椀 (33、添付CD P1.238) 長さ4.2cm、幅3.4cm、厚さ2.2cmを測る。布目痕がうっすらと残り、瓦の転用とみられる。ケズリにより成形される。胎土は0.5mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、褐灰色～暗灰色を呈する。

SD060 暗褐色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

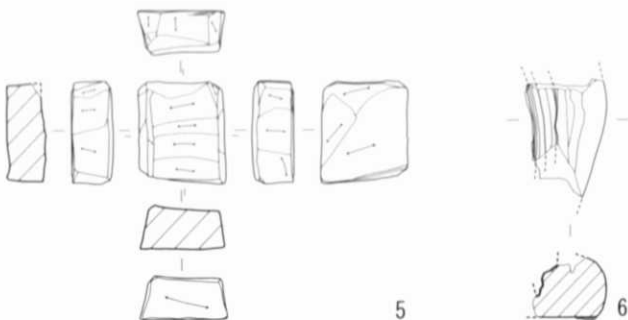
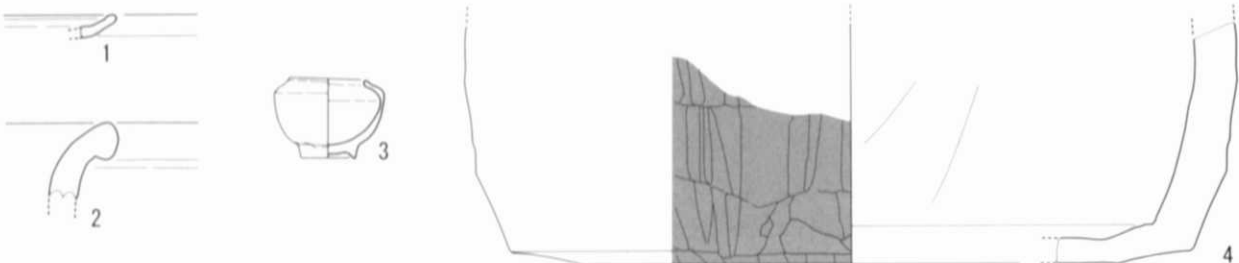
丸坏 a 土器計測表参照。

丸坏 c 土器計測表参照。

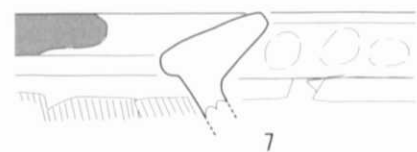
碗 c 土器計測表参照。

小皿al 土器計測表参照。

SD060暗褐色土



SD060褐色土



SD070黒灰土

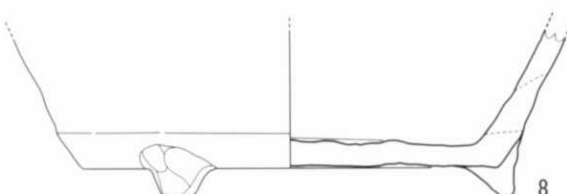


Fig. 44 溝出土遺物実測図 (1/3)

小皿(1) 口縁部の破片である。内外面の調整は風化により不明である。口縁部を折り返し、沈線状になっている。胎土はきめ細かく、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面浅黄橙色～灰白色、断面浅黄橙色を呈する。京都系とみられる。

煮炊具(2) 口縁部の破片である。残存高2.9cmである。内面の調整は風化により不明。外面はヨコナデと思われる調整が施される。胎土はきめ細かく、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面灰白色、外面にぶい黄褐色を呈する。

青白磁

小壺(3、添付CD P1.239) ほぼ完存する。口径3.0cm、器高3.1cm、底径2.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄青緑色を呈する釉が、高台を除く内外面にかかる。

石製品

石鍋(4) 体部～底部の破片である。残存高9.2cm、推定底径27.4cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。外面全体に煤が付着する。

滑石製品(5、添付CD P1.240) 長さ3.9cm、幅3.5cm、厚さ1.7cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられる。

土製品

鋳型(6、添付CD P1.241) 同心円状の製品を作成する鋳型の破片と想定される。内面(型の部分)はヨコナデ、外面は指ナデなどによる器面調整が施される。胎土は、きめは細かいが、全体的に空隙が多い。型の部分は密で、須恵質化しているように見える。焼成は良好で、外断面は薄黄灰色、型部分の表面及び断面(表面から厚さ約1mm)は灰色を呈する。底部外面に薄紫色～白色を呈する金属が付着する。外面に自然釉がかかる。円形の製品が作られると仮定すると、直径30cm以上になる。

SD060 褐色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

土師質土器

鉢×火鉢(7) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。小片であるため口径を復元することはできないが、大型品と推測される。口縁部は指押えの後、ヨコナデが施される。内面はタテハケ、外面は工具によるヨコナデが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面にぶい褐色、断面褐灰色～暗灰色を呈する。口縁部の一部に煤が付着する。

SD070 黒灰土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏c 土器計測表参照。

碗c 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

脚付鉢(8) 体部～底部の2/3程度が残る破片である。残存高5.3cm、推定底径16.5cmを測る。体部は内外面ともにヨコナデが施される。底部内面は中心部には指押え及びナデが、周辺部はヘラによる粗いナデが施され、底部外面はナデが施される。脚は、貼り付けの後、ナデが施される。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面にぶい黄橙色～褐灰色、外面薄橙色、断面明褐白色～淡黒褐色を呈する。脚は2ヶ所残存し、残存位置から3ヶ所あったものと想定される。

黒色土器A類

碗c 土器計測表参照。

SD070 暗褐土出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

石製品

石鍋（添付 CD Pl. 242） 体部の破片である。残存長 2.6cm、残存幅 6.2cm、厚さ 1.0cm を測る。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径 4.0mm の穿孔を有す。

SD070 灰褐色土出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

SD075 黒灰土出土遺物 (Fig. 45・46)

須恵器

蓋 1 (1) 口縁部の破片である。残存高 1.65cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。貼り付けによりかえりが作られる。胎土は密。焼成はやや軟質、還元はやや良好で、明灰白色を呈する。

坏 c (2) 底部の破片である。残存高 6.3cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～3mm 程度の白色砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、明白灰色を呈する。

坏 c (3) 底部の破片である。残存高 1.95cm、推定高台径 9.0cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～2mm 程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、濃灰色を呈する。

高坏 (4) 坏部の破片である。推定口径 21.6cm、残存高 1.2cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密。焼成はやや良好、還元は不良で、外面薄黒灰色～暗赤褐色、内断面暗赤褐色を呈する。

土師器

坏 c 土器計測表参照。

坏 c (5) 底部の破片である。残存高 1.75cm、推定高台径 9.4cm を測る。底部内面はナデ、外面は板状圧痕の後、ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土はやや密で、～1mm 程度の赤色砂粒を含む。焼成はやや良好で、薄白褐色を呈する。

丸坏 a 土器計測表参照。

碗 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

壺 (6) 底部の破片である。残存高 2.3cm、推定底径 12.3cm を測る。内外面ともナデが施される。円盤状の底部に体部を接合して作成している状況が観察される。胎土は密で、～1mm 程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、明黄橙色を呈する。

鉢 (7) 口縁部～底部にかけての破片である。器高 8.6cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm 程度の砂粒を含み、雲母、角閃石をわずかに含む。焼成は良好で、内面にぶい黄橙色、外断面にぶい橙色～灰黄色を呈する。口縁部～外面の一部に煤が付着する。内面下半に褐色化がみられる。

鉢 (8) 口縁部～底部にかけての破片である。推定口径 19.4cm、器高 7.35cm、推定底径 13.8cm を測る。内外面とも不定方向のナデが施される。胎土はやや粗く、～5mm 程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で薄灰褐色を呈する。内面の一部に煤の付着が、外面の一部に煤の付着と褐色化がみられる。

鉢×大碗 (9) 口縁部の破片である。残存高 2.8cm を測る。口径 20cm ほどに復元される。風化により不明瞭だが、内面の調整はミガキ、外面はナデの可能性はある。胎土は精良で、焼成は良好、灰白色を呈する。

鍋 (10) 口縁部の破片である。残存高 2.2cm を測る。内面は回転ナデが施され、外面は風化により調整不明である。胎土は粗く、～3mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面浅黄橙色～黄橙色、断面浅黄橙色を呈する。口縁部に褐色化がみられる。

鍋 (11) 口縁部の破片である。残存高 2.6cm を測る。調整は風化により不明。口縁部を貼り付けにより玉縁状に仕上げる。胎土は粗く、～3mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。

瓦器

碗 c 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

小皿 c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (12) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～2mm程度の砂粒、9mm程度の小石を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (13) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～2.5mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は青灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (14) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は青灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (15) 体部下半～底部の破片である。残存高4.8cm、推定底径7.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面は使用により磨耗している。底部は糸切りされる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、薄灰色を呈する。

白磁

碗 (16) 推定口径14.9cm、器高4.3cm、底径5.8cmを測る。胎土は精良で、薄オリーブ灰色を呈する。焼成は良好。やや光沢のある淡オリーブ色を呈する釉がやや厚くかかる。VI-2a類。

皿×坏 (17) 口縁部の破片である。残存高2.25cmを測る。口縁部は面取りが施される。胎土は精良で、薄白茶色を呈する。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

同安窯系青磁

碗 (18) 推定口径16.6cm、器高7.1cm、底径6.0cmを測る。胎土は精良で、淡褐色～橙色を呈する。焼成は良好。やや光沢のある暗オリーブ色を呈する釉が薄くかかる。III-2c類。

瓦類

平瓦 (19) 残存長16.3cm、残存幅13.5cm、厚さ2.2cmを測る。凹面は布目を軽くナデ消し、模竹痕が観察される。凸面は格子叩き、側縁部はヘラ切りされる。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、凹凸面橙色、断面薄黄橙色を呈する。

石製品

石鍋 (20) 耳部を含む体部の破片である。残存高5.1cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。内面のケズリは磨耗により不明瞭。外面に煤が付着する。

石鍋 (21) 齔部を含む体部の破片である。残存高4.4cmを測る。暗青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。齔以下に煤が付着する。

石鍋 (22) 口縁部～齔部にかけての破片である。推定口径19.6cm、残存高3.1cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。摩滅により不明瞭だが、ケズリにより成形される。齔以下に煤が付着する。

石鍋補修材 (23、添付CD P1.243) 石鍋に当てられた状態を想定した場合の高さは4.8cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。内面中央部は剥離し、内面周縁部及び外面はケズリにより成形される。周縁に円形の穿孔の痕跡が2ヶ所、中ほどに円形と方形の穿孔が各1ヶ所存在する。方形の穿孔には、鉄釘とみられる金属片が存在する。

剥片 (24) 長さ3.2cm、幅1.3cm、厚さ4.0cmを測る。暗黒灰色を呈する黒曜石製である。

SD075 黒色土出土遺物 (Fig. 46)

須恵器

蓋1 (25) 口縁部の破片である。残存高1.55cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。貼り付けによりかえりが作られる。胎土は密。焼成、還元ともに良好で、薄褐灰色を呈する。

SD075黑灰土

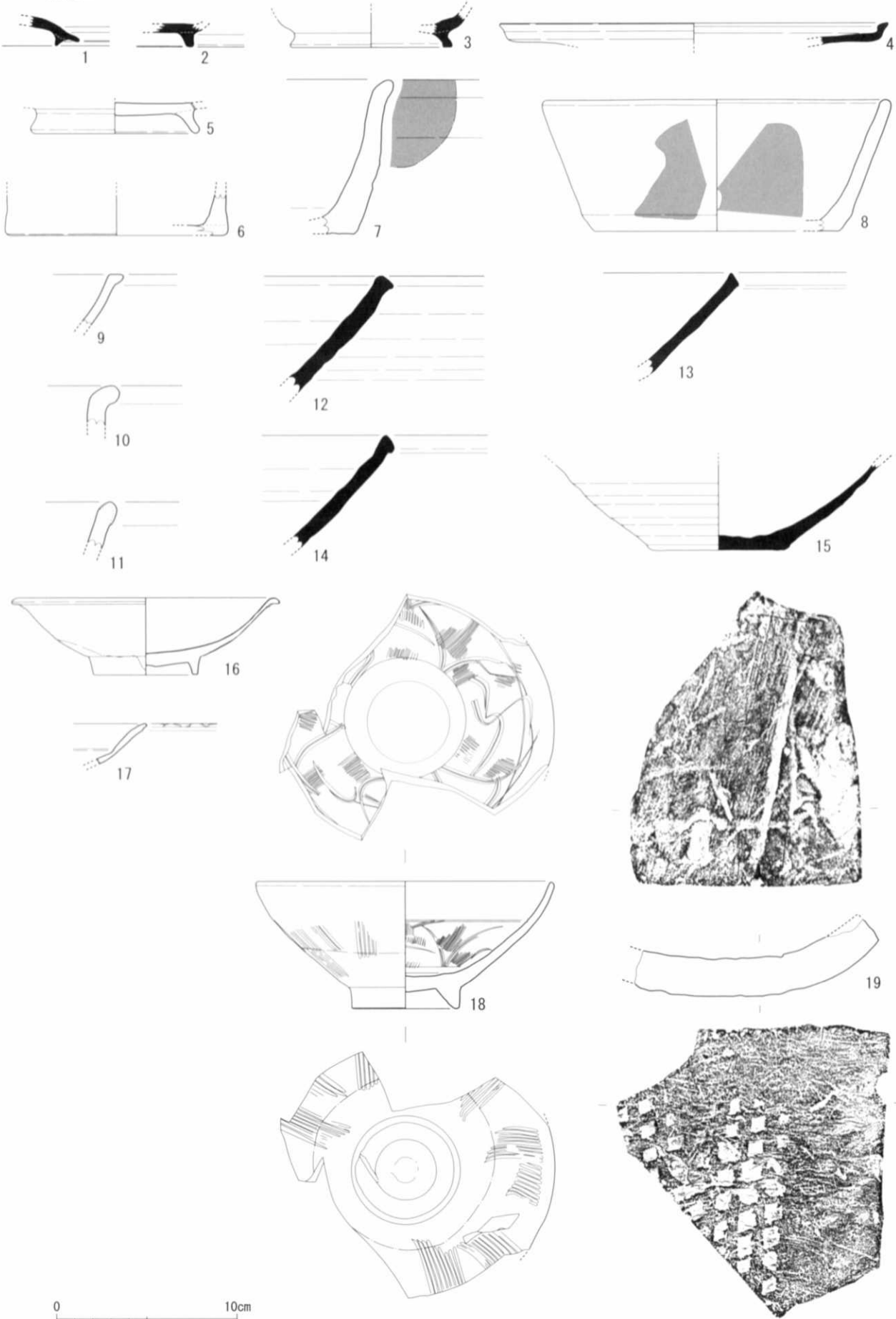
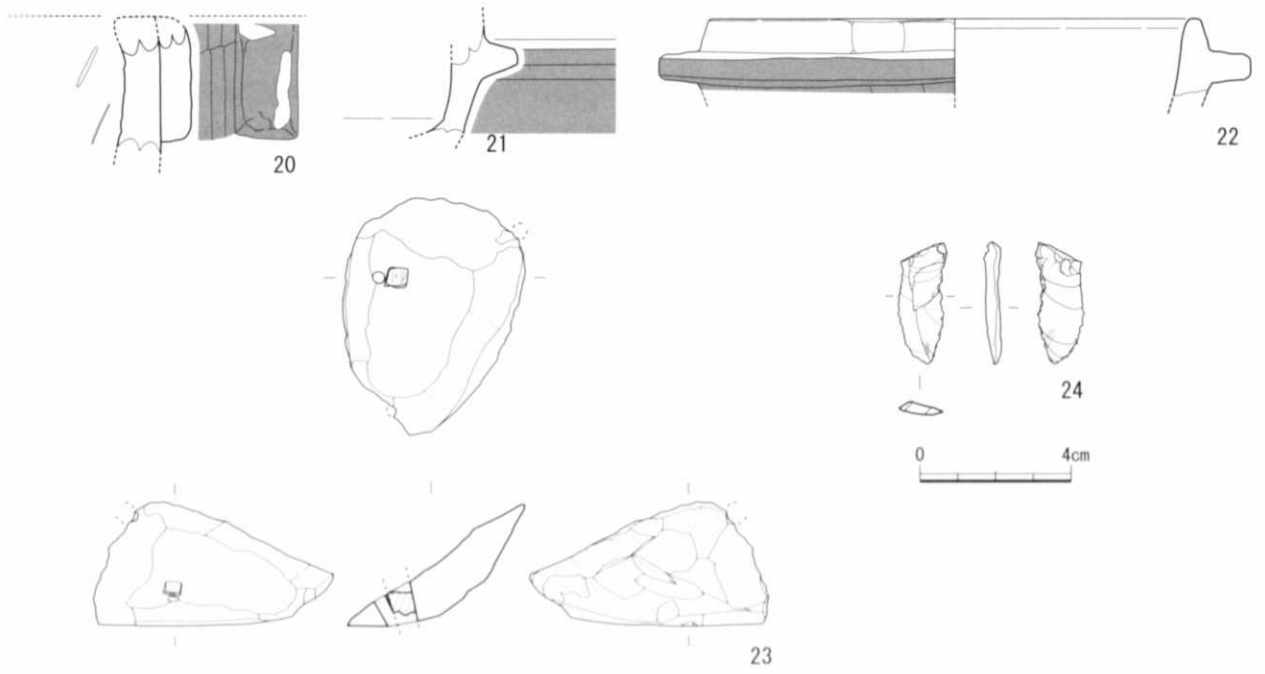


Fig. 45 SD75出土遺物実測図 (1/3)

SD075黒灰土



SD075黒色土

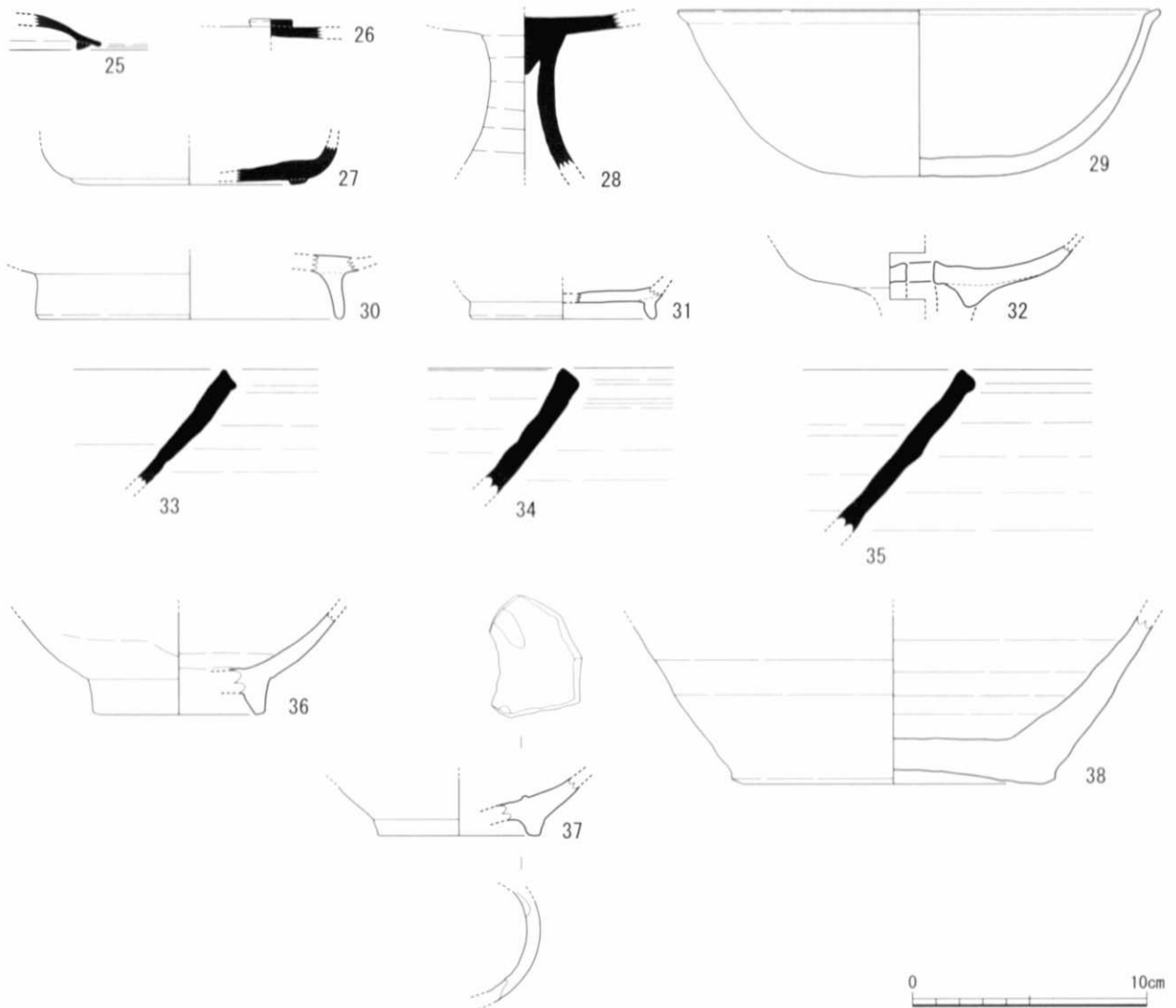


Fig. 46 SD055出土遺物実測図 (24は1/2、その他は1/3)

蓋1 (26) 天井部の破片である。残存高0.85cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面は回転ヘラケズリが施される。貼り付けにより扁平なつまみが作られる。胎土は密。焼成、還元ともに良好で、薄青灰色を呈する。

坏c (27) 底部の破片である。残存高1.7cm、推定高台径9.9cmを測る。体部は内外面とも回転ナデ、底部は内外面とも不定方向のナデが施される。貼り付けにより背の低い高台が作られる。胎土はやや密で、～2mm程度の白色砂粒を含む。焼成はやや軟質、還元はやや不良で、内断面薄褐色、外面薄灰白色～薄褐色を呈する。

高坏 (28) 坏底部～脚柱部の破片である。残存高6.8cmを測る。坏部内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。脚柱部は内外面とも回転ナデが施される。脚柱部の内部上位には粘土塊が充填されている。坏底部外面に粘土塊で凸部を作り、脚部に差し込んで接合したものとみられる。胎土は密で、～2mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内面薄褐灰色、外面薄褐灰色～薄茶灰色、断面薄茶灰色～薄黒灰色を呈する。

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

小丸坏a 土器計測表参照。

碗a (29) 推定口径20.6cm、残存高7.15cmを測る。調整は風化により不明。胎土は密。焼成はやや良好で、薄褐色～薄橙色を呈する。

碗c (30) 底部の破片である。残存高2.75cm、推定高台径13.2cmを測る。坏部内面はナデが施され、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密。焼成は良好で、高台内外面薄橙色～薄灰褐色、坏部内面黒茶褐色、断面薄灰褐色を呈する。坏部内面に煤が付着する。

碗c (31) 底部の破片である。残存高1.35cm、推定高台径8.0cmを測る。調整は風化により不明。貼り付けにより高台が作られる。胎土はやや密。焼成は良好で、薄褐灰色～薄白橙色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

器台 (32) 坏部と脚部の接合部の破片である。残存高2.65cmを測る。坏部は内外面ともヨコナデが、脚部は貼り付けに伴うナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面薄黄褐色、断面薄黄褐色～暗灰色を呈する。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (33) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面下半は回転ナデの後、不定方向のナデが施される。胎土はきめ細かく、～3.5mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (34) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はきめ細かく、～3mm程度の砂粒、1.3cm程度の石を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。口縁部に自然釉がかかる。東播系。

捏鉢 (35) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土はきめ細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部が灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

白磁

鉢 (36) 底部の破片である。残存高3.9cm、推定高台径7.4cmを測る。胎土は白褐色を呈し、密で、～2mm程度の茶色粒をやや多く含む。焼成は良好。にぶい光沢の淡白褐色を呈する釉がやや厚くかかる。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅲ類。

高麗青磁

碗 (37) 底部の破片である。残存高2.5cm、推定高台径6.9cmを測る。胎土は灰色を呈し、やや粗く、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。やや光沢のある暗緑色を呈する釉がやや厚くかかる。内面見込み及び高台に目跡が残る。Ⅲ-2類。

中国陶器

甕 (38) 底部の破片である。残存高7.25cm、推定底径13.8cmを測る。内面は回転ナデ、外面はナデと思われる器面調整が施され、底部は摩滅のため調整不明である。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好、還元はやや良好で、硬質に仕上がる。内外面暗灰色～暗灰褐色、断面薄褐灰色を呈する。

SD075 白灰砂出土遺物 (Fig. 47)

須恵器

小壺 (1) 口縁部～体部の破片である。推定口径4.0cm、残存高2.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや密で、～2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内断面薄灰色、外面灰色を呈する。

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

碗 土器計測表参照。

碗c (2) 底部の破片である。残存高1.75cm、推定高台径7.4cmを測る。調整は風化により不明。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～3mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面暗灰褐色～薄茶褐色、断面薄灰褐色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a2 (3) 口縁部～底部の破片である。推定口径9.6cm、残存高0.9cmを測る。口縁部が上方に屈曲し、口縁部内面に沈線が施される。調整は風化により不明。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、黄灰白色を呈する。

鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高3.9cmを測る。内面は回転ナデ、外面はナデが施される。胎土は密、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。内外面とも二次的な焼成で褐色化している。外面の一部に煤が付着する。

鉢 (5) 口縁部～体部の破片である。推定口径20.7cm、残存高6.5cmを測る。内外面の上半はヨコナデ、内面下半は不定方向のナデ、外面はヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面暗黒褐色、外面灰黄褐色～黒褐色、断面暗褐色を呈する。外面の一部に煤が付着する。

器台 (6) 脚部の破片である。残存高14.0cmを測る。坏部内面は平滑な器面調整が施される。脚部は指ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の長石、金雲母を含む。焼成はやや良好で、薄灰褐色を呈する。坏部内面は黒色化している。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

碗c (7、添付CD P1.244) 底部の破片である。残存高1.9cm、推定高台径6.5cmを測る。内面はミガキc、外面はナデが施され、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともにやや良好で、内面うすい暗灰色、外面灰色、断面薄黄灰色を呈する。底部外面には焼成前に「+」字形が線刻される。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (8) 口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (9) 口縁部の破片である。残存高4.6cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (10) 口縁部の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面は回転ナデの後、不定方向のナデが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (11) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は細

かく、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢(12) 口縁部の破片である。残存高7.0cmを測る。内外面は回転ナデが施される。内面下半は不定方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢(13) 口縁部の破片である。残存高5.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面下半は回転ナデの後、不定方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は細かく、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢(14) 口縁部の破片である。残存高4.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は細かく、～2.5mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。口縁部に自然釉がかかる。東播系。

白磁

小壺(15、添付CD P1.245) 底部の破片である。残存高1.8cm、推定底径3.0cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。外面下位は露胎。内面の釉はやや泡状化する。

小壺(16、添付CD P1.246) 口縁部の破片である。残存高1.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある薄緑灰色を呈する釉がやや薄くかかる。

瓦類

平瓦(17) 残存長7.3cm、残存幅5.3cm、厚さ1.5cmを測る。凹面は布目痕、凸面は格子叩き痕が残る。格子内部に「し」形の文様を伴う。胎土は密で、～3mm程度の白色砂粒を多く含む。焼成は硬質で、凹凸面灰色、断面オリーブ灰色～灰褐色を呈する。

石製品

石鍋(18) 耳部を含む口縁部の破片である。残存高5.7cmを測る。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。口縁部内面から外面にかけて煤が付着する。

石鍋(19) 鐔以下の体部の破片である。残存高6.6cmを測る。褐灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鐔以下に煤が付着する。

石鍋(20) 口縁部～鐔部の破片である。残存高5.9cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鐔以下に煤が付着する。

注口付小型容器(21、添付CD P1.247) 注口を含む体部の破片である。推定口径7.0cm、残存高2.65cm、推定底径6.4cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。外面は成形の後、横方向に軽く研磨されている。外面が黒色化している。注口は1ヶ所残存する。

滑石製品(22、添付CD P1.248) 残存長1.8cm、残存幅3.7cm、厚さ2.1cmを測る。暗灰黒色を呈する滑石製である。基本的な形はケズリにより成形される。断面V字形の溝状痕、円錐形の穿孔がみられるが、成形目的の加工ではなく、砥石のような使用により、このような痕跡が残されたものと推測される。

石鍋補修品(23、添付CD P1.249) 残存長4.8cm、残存幅10.5cm、厚さ2.4cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。突出部分の上面は、他の部分のケズリの状況と比較し、石鍋外面の成形痕が残っているものと推察される。この部分に煤が付着しているが、この煤も石鍋の段階で付いたものと考えられる。

土製品

取瓶(24) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内面は指押えにより成形され、外面は器面調整が施されるが詳細は不明。胎土は粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰色を呈する。外面の一部に黄緑色～暗黄緑色を呈する金属が付着する。

SD100 暗灰土出土遺物 (Fig. 48)

国産磁器

紅皿(1、添付CD P1.250) 推定口径5.0cm、器高1.5cm、推定高台径1.4cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある白色を呈する釉が薄くかかる。

SD075白灰砂

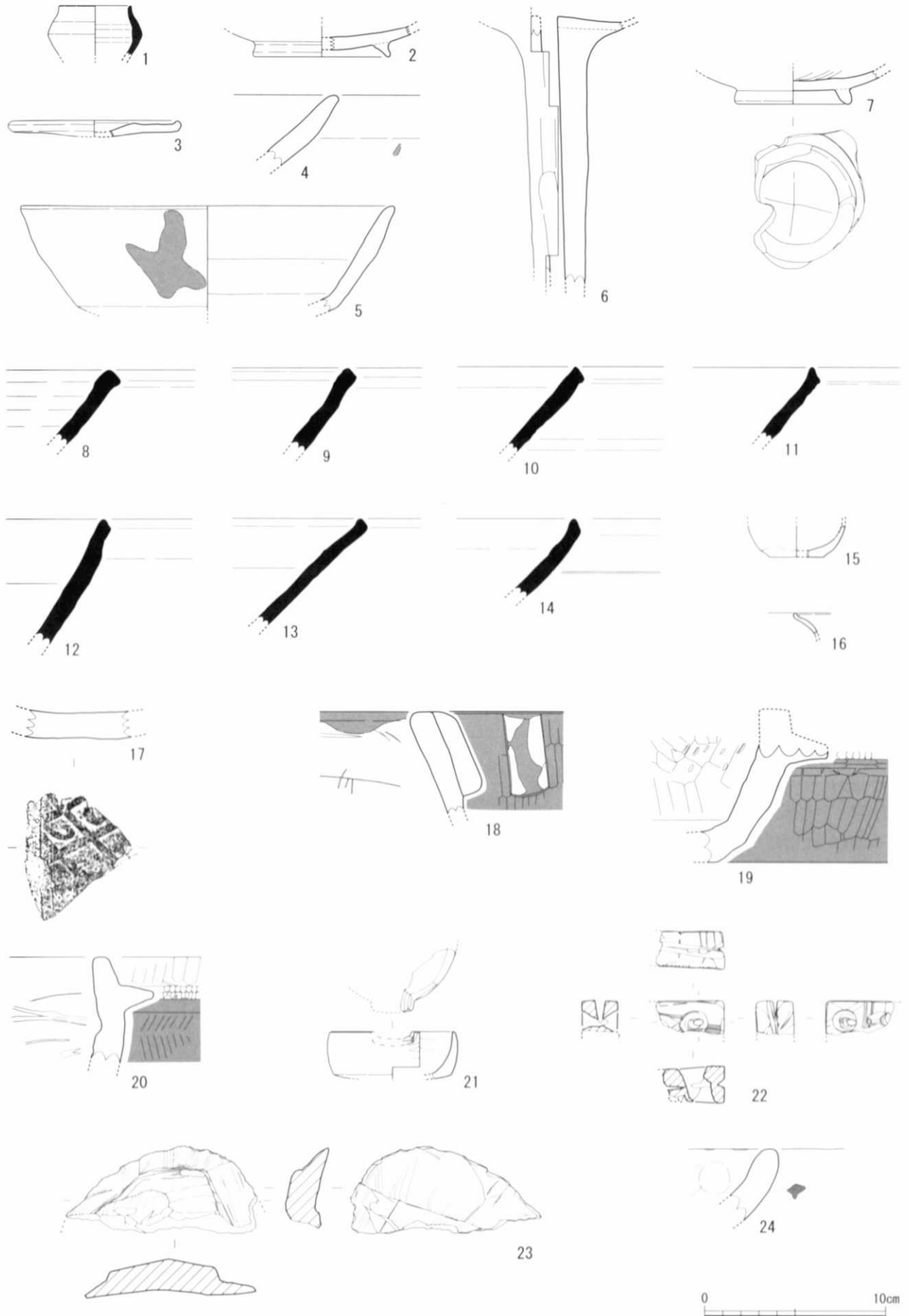


Fig. 47 SD075出土遺物実測図 (1/3)

白磁

小坏 (2、添付CD P1.251) 口縁部～底部の破片である。推定口径3.9cm、器高1.6cm、推定底径2.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。平安後期の貿易陶磁とすると未分類資料である。

SD115 黒灰土出土遺物 (Fig. 48)

須恵質土器

握鉢 (3) 底部の破片である。残存高3.8cm、推定高台径7.8cmを測る。体部内外面は回転ナデ、内面見込みは不定方向のナデが施される。貼り付けにより高台が作られ、底部外面には糸切り痕が残る。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、薄褐灰色～淡茶褐色を呈する。

SD125 暗灰土出土遺物 (Fig. 48)

須恵器

蓋1 (4) 天井部を欠損し、つまみの有無は不明である。推定口径11.65cm、残存高2.45cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、天井部はヘラ切りの後、ナデ調整、貼り付けによりかえりが作られる。胎土はやや密で、～2mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともにやや良好で、内面灰色～黄灰色、外面灰色、断面黄灰色を呈する。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SD185 灰色土出土遺物 (Fig. 48)

石製品

石包丁 (5) 長さ4.3cm、残存幅9.3cm、厚さ0.7cmを測る。暗小豆色を呈する輝緑凝灰岩 (立岩産) 製である。研磨により成形され、穿孔が2ヶ所確認される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。弥生時代中期とみられる。

SD245 褐色土出土遺物 (Fig. 48)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

碗c 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a 土器計測表参照。

小皿c 土器計測表参照。

石製品

石包丁 (6) 長さ3.9cm、残存幅8.8cm、厚さ0.7cmを測る。濃灰白色を呈する片岩製である。研磨により成形される。穿孔が2ヶ所、および、穿孔途中のものが1ヶ所確認される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。弥生時代中期とみられる。

SD250 暗褐土出土遺物 (Fig. 48)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

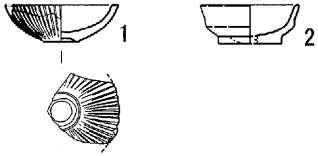
小皿a1 土器計測表参照。

手づくね土器 (7) 口縁部～体部の破片である。器高3.0cmを測る。径7cm程度に復元される。指押さえにより成形される。胎土は、～2mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。

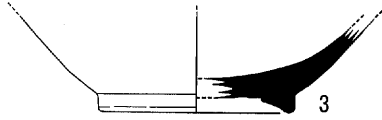
中国陶器

盤 (8) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径31.2cm、残存高6.3cmを測る。胎土は薄褐灰色を呈し、やや密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。釉は外面暗黄緑色、内面薄黄茶色を呈し、薄赤色～白灰色を呈する化粧土の上に薄くかかる。内面に鉄絵が施される。I-1b類。

SD100暗灰土



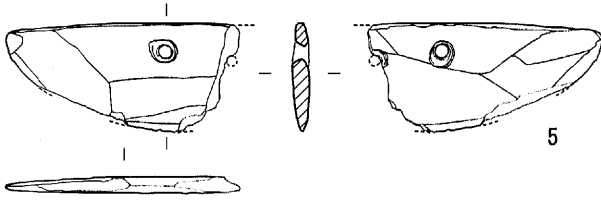
SD115黑灰土



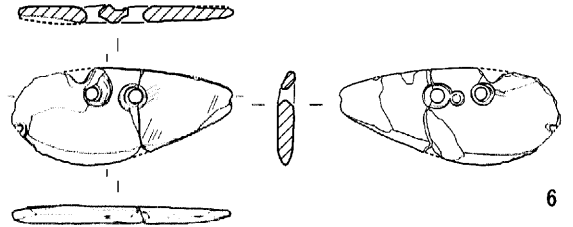
SD125暗灰土



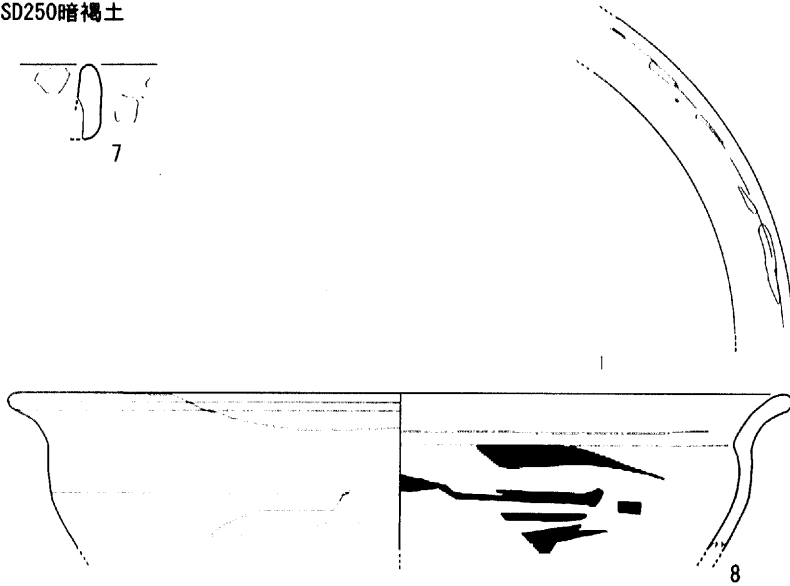
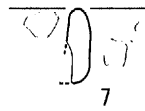
SD185灰色土



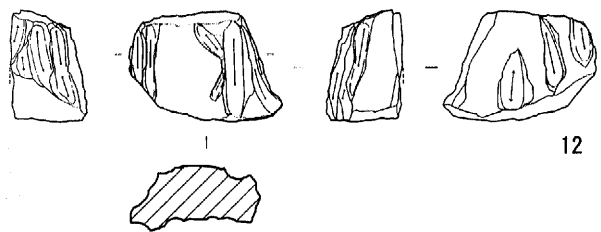
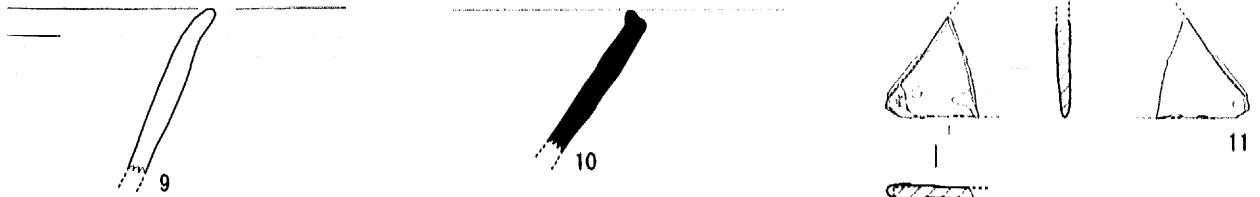
SD245褐色土



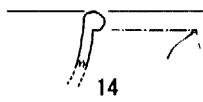
SD250暗褐色土



SD260暗褐色土



SD343暗灰土



SD380黑色土

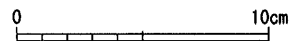
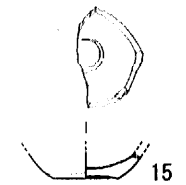


Fig. 48 溝出土遺物実測図 (1/3)

SD260 暗褐色土出土遺物 (Fig. 48)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (9) 口縁部～体部上半の破片である。残存高 6.6cm を測る。口縁部は回転ナデが施される。体部の調整は風化により不明。胎土は 2～3mm 程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや軟質で、内外面淡灰褐色、断面淡灰褐色～灰色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (10) 口縁部～体部の破片である。残存高 5.7cm を測る。内面はナデ、外面はヨコナデ、口縁部は回転ナデが施される。胎土は 2～3mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内断面暗青灰色、外面暗青灰色～黒灰色を呈する。東播系。

金属製品

鉄製品 (11、添付 CD P1.252) 残存長 4.1cm、残存幅 3.7cm、厚さ 0.6cm を測る。表面に円形の痕跡がみられるが、裏面では確認できないので、穿孔の類ではないようである。種類や用途は不明である。

石製品

砥石 (12、添付 CD P1.253) 長さ 4.5cm、幅 6.0cm、残存厚 3.1cm を測る。暗黄褐色を呈する砂岩製である。断面が浅い U 字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

土製品

不明製品 (13、添付 CD P1.254) 円形の製品と仮定すると、推定口径 3.6cm、残存高 1.3cm を測る。胎土はやや粗く、～4.0mm 程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面淡黄褐色～暗橙色、外面暗茶色～暗黒灰色、断面暗灰色～淡黄褐色を呈する。鋳型の可能性がある。

SD343 暗灰土出土遺物 (Fig. 48)

中国陶器

器種不明 (14、添付 CD P1.255) 口縁部の破片である。残存高 2.35cm を測る。図の右側に示すように、粘土の貼り付けがあり、耳等が付いていた可能性がある。胎土は暗灰色を呈し密。焼成は良好。口縁部に濃茶色を呈する釉が薄くかかる。

SD380 黒色土出土遺物 (Fig. 48)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

黒色土器 B 類

碗 c 土器計測表参照。

瓦器

碗 c 土器計測表参照。

白磁

小壺 (15、添付 CD P1.256) 底部の破片である。残存高 1.1cm、推定底径 2.6cm を測る。胎土は薄褐色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。外面下位は露胎。

SD385 灰色土出土遺物 (Fig. 49)

須恵質土器

捏鉢 (1) 口縁部の破片である。残存高 5.35cm を測る。内外面ともに回転ナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は 3～5mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面白灰色、外面白灰色～暗灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高 2.9cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好で、灰色を呈する。東播系。

石製品

石鍋 (3) 残存高4.6cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。

SD385 灰色砂出土遺物 (Fig. 49)

須恵質土器

捏鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高4.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (5) 口縁部の破片である。残存高2.6cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は0.2mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

瓦類

丸瓦 (6、添付CD P1.257) 残存長5.25cm、残存幅4.6cm、厚さ1.9cmを測る。凹面には布目痕が残る。凸面は風化により調整不明である。側面は、凹面側から切り込みを入れた後、割った痕跡が観察される。胎土はやや密で、～1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、薄灰白色を呈する。凸面に墨書が観察される。

土製品

円盤状土製品 (7、添付CD P1.258) 径2.0cm、厚さ0.7cmを測る。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、暗黒褐色～明茶褐色～薄茶褐色を呈する。中央に焼成後とみられる穿孔がある。片面に一条の溝状の窪みがある。

SD505 黒褐土出土遺物 (Fig. 49)

土師器

坏a (8) 底部の破片である。残存高9.9cm、推定底径8.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。底部外面は糸切りされ、板状圧痕がみられる。胎土は密で、～2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや良好で、淡黄褐色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢 (9) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は密で、～5mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや良好で、淡黄褐色を呈する。口縁部に部分的な褐色化がみられる。

鉢 (10) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内面は風化により調整不明、外面はヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面橙色、外断面明白橙色を呈する。

鉢 (11) 口縁部の破片である。残存高3.05cmを測る。内面はミガキ、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、金雲母を含む。焼成はやや良好で、内面暗茶褐色～茶褐色、外面暗茶褐色～薄黄橙色、断面薄茶褐色を呈する。内外面上半に褐色化がみられる。

須恵質土器

捏鉢 (12) 口縁部の破片である。残存高4.75cmを測る。内面は回転ナデの後、斜め方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～6mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (13) 口縁部の破片である。残存高4.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、外面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は暗黄灰色、その他は灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (14) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、内面下半はタテ方向のナデが施される。胎土はやや密で、～3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

白磁

椀 (15、添付CD P1.259) 底部の破片である。残存高2.2cm、高台径6.3cmを測る。胎土は薄褐白

色を呈し精良で、黒色粒を含む。焼成は良好。内面および高台上位に、にぶい光沢の薄褐白色を呈する釉が薄くかかる。内面に櫛或いはハケによる文様がみられる。未分類。

壺類 (16) 口縁部の破片である。残存高2.1cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある薄灰黄色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

石製品

石鍋 (添付CD P1.260) 体部の破片とみられる。残存長4.5cm、残存幅7.4cm、厚さ1.3cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径5.5mmの穿孔を有す。

滑石製品 (添付CD P1.261) 残存長7.5cm、幅8.2cm、厚さ1.8cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。

滑石製品 (添付CD P1.262) 残存長5.5cm、残存幅6.7cm、厚さ1.8cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径6.5mmの穿孔を有す。

滑石製品 (添付CD P1.263) 残存長5.0cm、残存幅9.8cm、厚さ2.2cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。径8mm程度の穿孔を有す。石鍋の破片の転用とみられる。

土製品

不明製品 (17、添付CD P1.264) 残存高4.05cmを測る。外面には指頭痕がみられる。内面は工具により器面調整が施される。胎土は密で、焼成は良好、内面薄褐灰色、外面薄灰色～薄茶褐色、断面灰白色～薄茶色～薄灰色を呈する。

SD505 灰褐粘出土遺物 (Fig. 49)

須恵質土器

捏鉢 (18) 口縁部の破片である。残存高3.45cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

土製品

不明製品 (19、添付CD P1.265) 残存長4.6cm、残存幅7.7cm、残存厚2.35cmを測る。指押えやナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、淡黄褐色を呈する。箱型の製品が想定される。

SD505 暗灰土出土遺物 (Fig. 49)

瓦質土器

鉢 (20) 口縁部の破片である。残存高2.35cmを測る。内外面とも風化により調整不明、口縁部は回転ナデが施される。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、明白褐色を呈する。

白磁

壺 (21、添付CD P1.266) 壺底部の破片とみられる。残存高1.05cmを測る。胎土は密。焼成は良好で、内断面薄白橙色、外面薄黄灰色を呈する。外面に「高」とみられる墨書を有す。

石製品

石鍋 (22) 口縁部の破片である。推定口径22.8cm、残存高4.35cmを測る。内外面ともケズリにより成形される。耳部側面では、ケズリの単位をまたいだ細かな筋状の痕跡があり、細かく削って仕上げを行っているものとみられる。灰白色～灰色を呈する滑石製である。

土製品

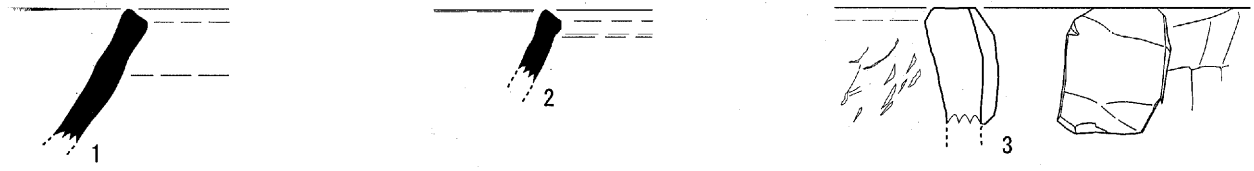
棒状製品 (23、添付CD P1.267) 残存長7.1cm、幅4.3cm、厚さ3.75cmを測る。表面は不定方向のナデが施される。端部では粘土の接合痕が観察される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、表面黄灰色、断面明黄灰色を呈する。

SD505 灰色砂出土遺物 (Fig. 49)

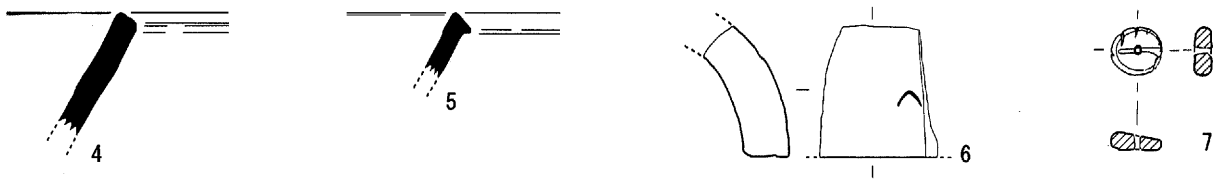
土師器

鍋 (24) 口縁部の破片である。残存高2.3cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。

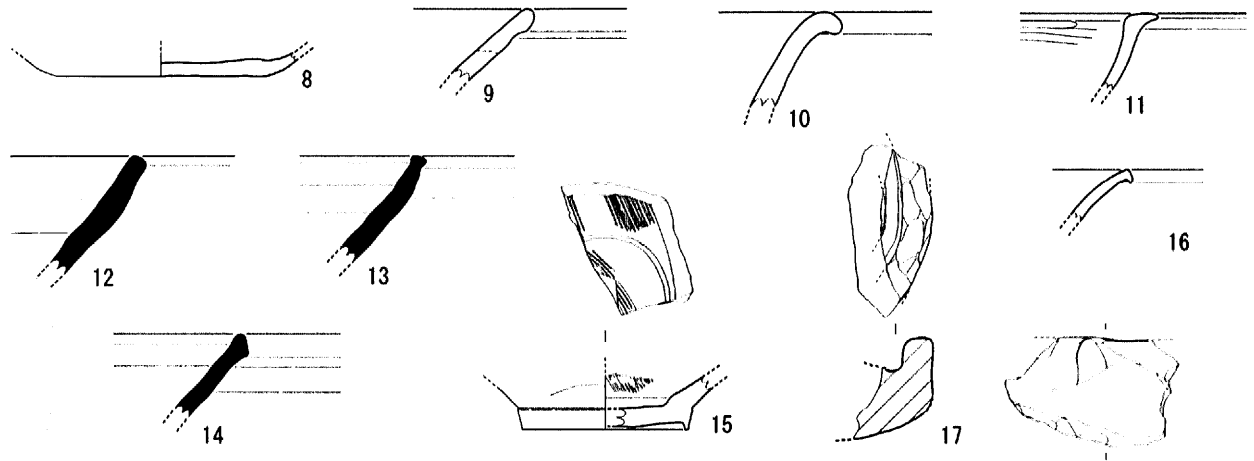
SD385灰色土



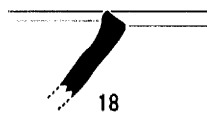
SD385灰色砂



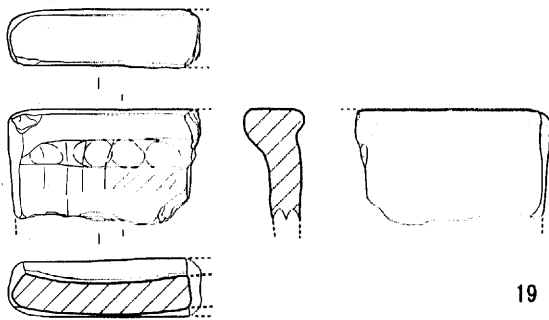
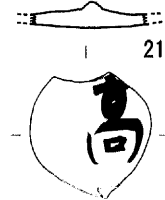
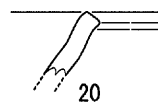
SD505黑褐土



SD505灰褐粘



SD505暗灰土



SD505灰色砂

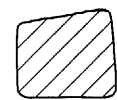
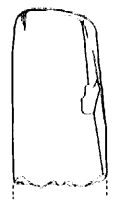
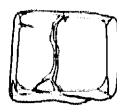
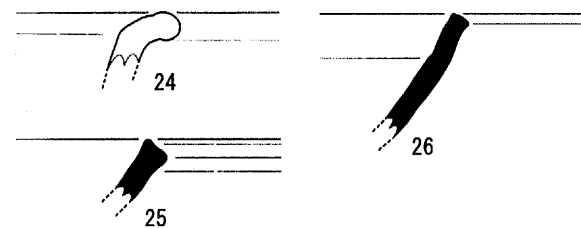


Fig. 49 溝出土遺物實測圖 (1/3)

須恵質土器

捏鉢 (25) 口縁部の破片である。残存高 2.5cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成は良好、還元はやや良好、内外面暗灰色、断面明白灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (26) 口縁部～体部上半の破片である。残存高 5.0cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土はやや密で、～2mm 程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、明青灰色を呈する。東播系。

石製品

滑石加工品 (添付 CD P1.268) 残存長 5.6cm、残存幅 6.9cm、厚さ 1.0cm を測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径 5.0mm の穿孔を有す。

SD520 黒褐土出土遺物 (Fig. 50)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (1) 口縁部の破片である。残存高 3.35cm を測る。内面は風化により調整不明、外面はタテ方向のナデが施される。胎土は密で、～2mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内断面淡黄褐色、外面暗褐色を呈する。外面に褐色化がみられ、煤が付着する。

須恵質土器

捏鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高 2.0cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや密で、焼成、還元はともにやや不良、内面暗灰色～暗黄褐色、外面暗灰色、断面淡黄褐色を呈する。東播系。

石製品

硯 (3、添付 CD P1.269) 残存長 5.7cm、残存高 1.0cm、残存幅 1.8cm を測る。黒灰色を呈する片岩製である。

打製石斧 (4) 残存長 8.7cm、幅 7.0cm、厚さ 2.1cm を測る。黒灰色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

土製品

不明土製品 (5、添付 CD P1.270) 長さ 4.8cm、幅 4.45cm、厚さ 1.4cm を測る。指ナデが施される。胎土は密で、焼成は良好、明黄灰色～暗茶褐色～淡黒褐色を呈する。

取瓶 (6) 口縁部の破片である。残存高 2.8cm を測る。内面は金属付着物のため調整不明、外面は器面調整が施されるが詳細は不明である。胎土はやや密で、～2mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面淡灰色～明黄灰色、断面淡灰色～明茶褐色を呈する。口縁部～内面に暗灰色～明茶褐色を呈する金属が付着する。

SD520 灰褐粘出土遺物 (Fig. 50)

土師器

坏 a (7) 底部の破片である。残存高 1.15cm、推定底径 10.5cm を測る。体部は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。底部は糸切りされる。胎土は密で、～3mm 程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、内面淡黄褐色、外断面淡黄橙色を呈する。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

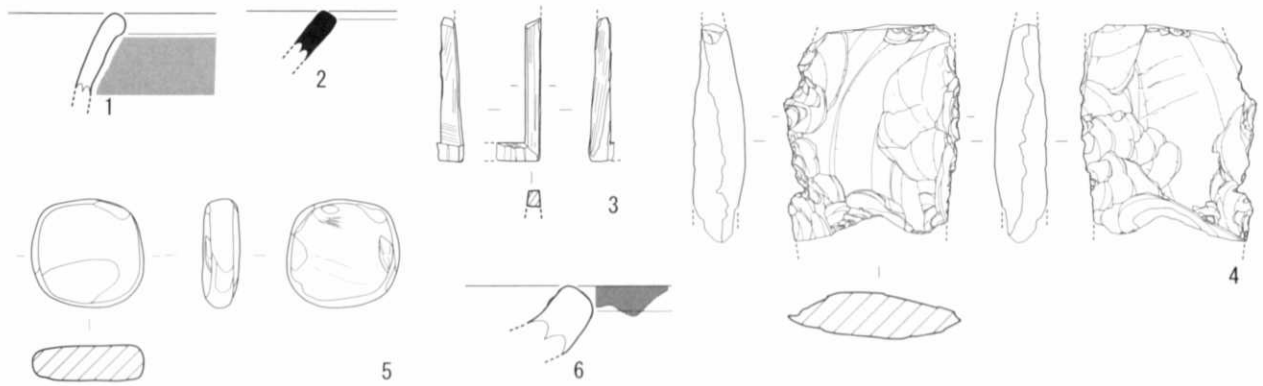
鉢 (8) 口縁部～体部上半の破片である。残存高 5.95cm を測る。内面は風化により調整不明、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～2mm 程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。

鍋 (9) 口縁部の破片である。残存高 5.0cm を測る。内面はナデが施され、外面は煤により調整不明。胎土はやや粗く、～4mm 程度の砂粒、金雲母をやや多く含む。焼成は良好で、内面暗赤茶色、外面暗黒褐色、断面暗灰白色を呈する。口縁部に褐色化がみられ、外面に煤が付着する。

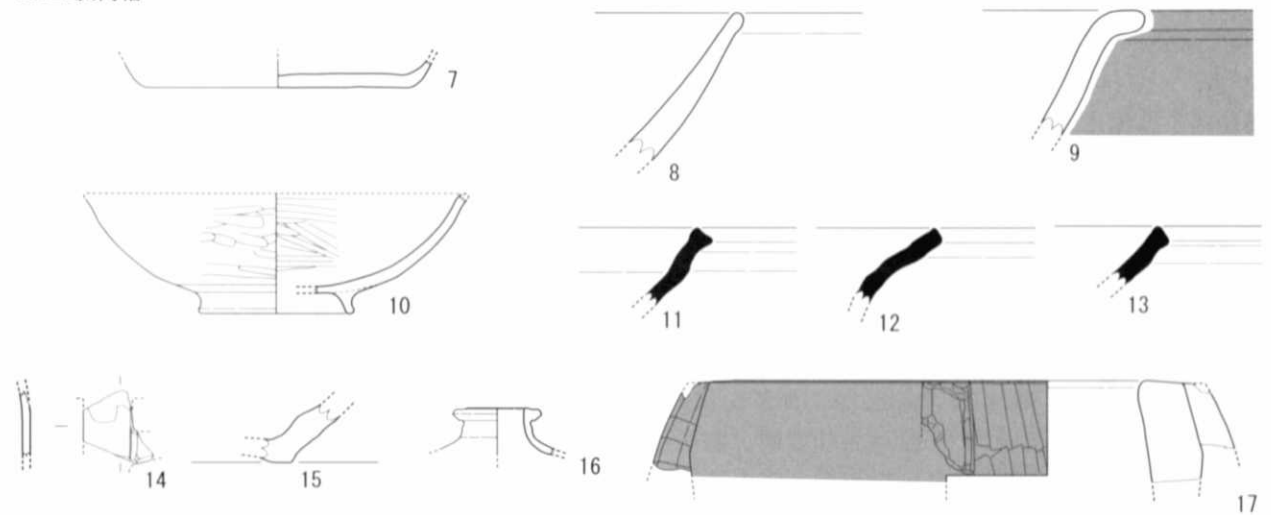
瓦器

椀 c (10) 口縁部を欠いた体部～底部の破片である。推定口径 15.3cm、残存高 4.8cm、推定高台径

SD520黒褐土



SD520灰褐粘



SD556黒色土

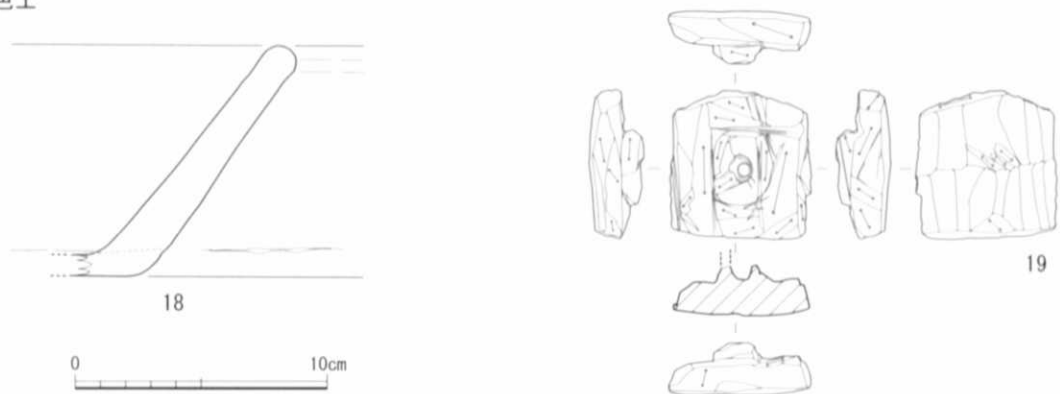


Fig. 50 溝出土遺物実測図 (1/3)

6.2cmを測る。内外面ともミガキcが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、焼成、還元ともにやや良好で、内外面暗灰色、断面明灰白を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (11) 口縁部の破片である。残存高3.15cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。胎土はやや密で、～4mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は暗黒灰色、その他は明青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (12) 口縁部の破片である。残存高3.15cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、明青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (13) 口縁部の破片である。残存高2.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成、還元はともに良好、内面明青灰色、外面明青灰色～暗黒灰色、断面明灰白色を呈する。東播系。

越州窯系青磁

器台 (14、添付 CD P1.271) 香炉等をのせていたとみられる器台の破片である。残存長 2.9cm、残存幅 2.8cm、厚さ 0.4cm を測る。胎土は薄灰色を呈し、精良。焼成は良好。内外面ともに、やや光沢のある暗オリーブ色を呈する釉が薄くかかる。近接する SX530 暗褐土からも同様の破片が出土している (Fig. 100 の 38)。同一個体の可能性もある。

中国陶器

甕 (15) 底部の破片である。残存高 2.35cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや密で、～4mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗灰赤色、外面暗灰黄色、断面明灰赤色～暗灰色を呈する。

小壺 (16) 口縁部の破片である。推定口径 3.5cm、残存高 1.9cm を測る。胎土は薄褐白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、薄褐灰色を呈する釉が薄くかかる。

石製品

石鍋 (17) 口縁部の破片である。推定口径 18.8cm、残存高 3.9cm を測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。外面に煤が付着する。耳が 1ヶ所残存する。

SD556 黒色土出土遺物 (Fig. 50)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (18) 残存高 9.25cm を測る。口径 30cm 以上に復元される。内外面とも不定方向のナデが施される。胎土は粗く、～5mm 程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内断面明茶褐色～薄黒褐色、外面暗黒褐色～薄黒褐色を呈する。底部内面に黒色化、体部～底部外面に褐色化がみられる。

石製品

滑石製品 (19、添付 CD P1.272) 長さ 5.9cm、幅 5.65cm、高さ 2.1cm を測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形されるが、側面に未加工箇所がみられる。石鍋の破片を転用したもので、裏面は石鍋外面の加工痕を残す。中央部分を断面凸字形に成形し、凸字部中央を凹形に削り窪めている。

SD595 出土遺物

S-595 暗褐土出土遺物 (Fig. 51)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

脚付鉢 (1) 底部の破片である。残存高 3.85cm、推定底径 12.8cm を測る。調整は風化により不明。貼り付けにより脚が作られる。脚は指ナデにより成形される。脚は 1ヶ所残存する。胎土は 1～2mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面黒灰色、外断面淡褐色～橙色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高 4.7cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

石製品

砥石 (3) 残存長 9.3cm、幅 5.3cm、厚さ 3.9cm を測る。暗灰色を呈する砂岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅い U 字状を呈する溝状の砥ぎ痕、敲打痕が観察される。

S-2581 暗灰土出土遺物

須恵器

壺 (添付 CD P1.273) 体部の破片である。推定胴部最大径 14.6cm、残存高 4.9cm、推定底径 3.2cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。外面上半はカキ目が施される。胎土は 2～3mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内面青灰色、外面灰色～暗灰色、断面灰色～淡赤褐色を呈する。

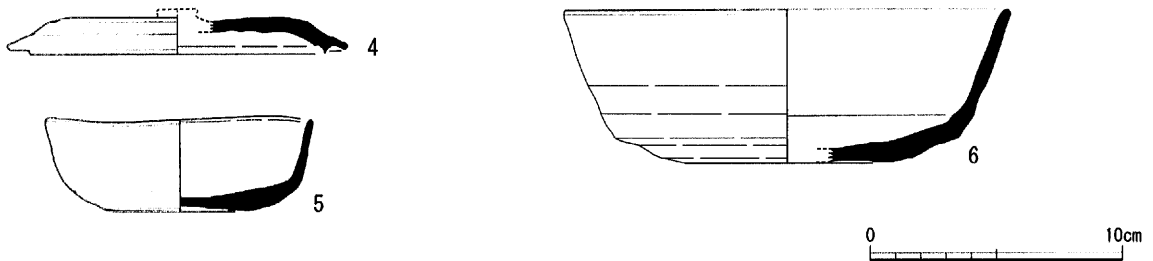
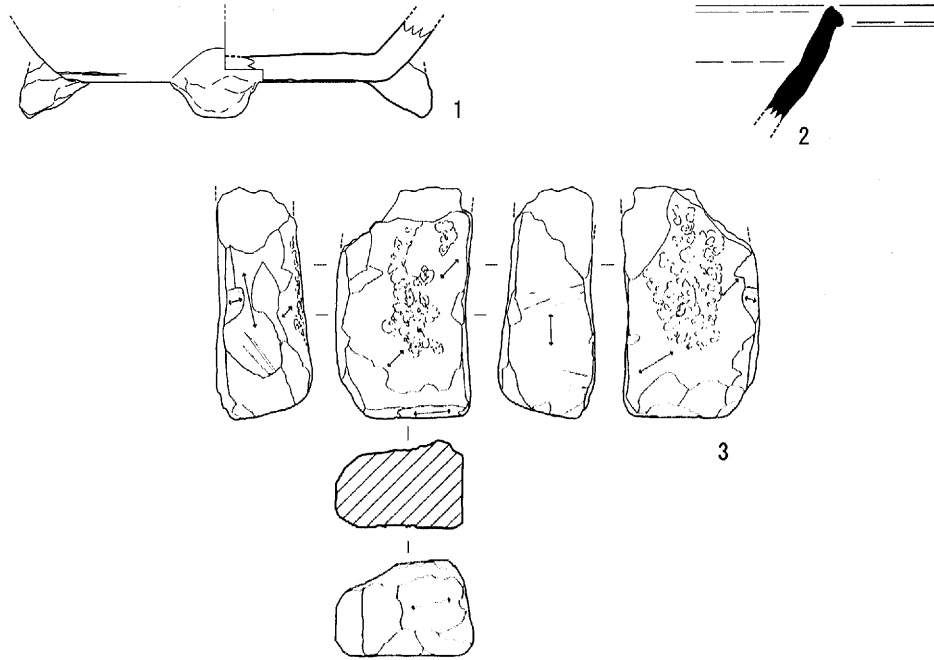


Fig. 51 溝出土遺物実測図 (1/3)

SD680 白灰砂出土遺物 (Fig. 51)

須恵器

蓋c1 (4) 口縁部の破片である。推定口径13.5cm、残存高1.7cm、推定底径11.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。天井部は回転ヘラケズリが施される。つまみ接合に伴う回転ナデの痕跡が観察される。貼り付けによりかえりが作られる。胎土は2～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、内断面青灰色、外面青灰色～暗灰色を呈する。7世紀後半とみられる。

坏a (5) 口径10.6cm、器高3.7cm、底径5.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部はヘラ切り後、未調整である。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、黒灰色を呈する。7世紀後半とみられる。

坏a (6) 推定口径17.7cm、器高6.1cm、推定底径8.0cmを測る。体部は回転ナデが施され、底部の調整は風化により不明である。胎土は2～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともにやや良好で、淡褐灰色を呈する。7世紀後半とみられる。

甕 (添付CD P1.274) 体部の破片である。残存長5.9cm、残存幅8.8cm、厚さ0.8cmを測る。内面は同心円とみられるあて具痕が残り、外面は格子叩きの後カキ目が施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや不良で、内断面灰褐色、外面灰褐色～灰黒色を呈する。

SD2443 暗灰土出土遺物 (Fig. 52)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (1) 底部の破片である。残存高3.2cmを測る。外面は回転ナデが施され、内面は使用による磨耗で、調整痕が消えている。胎土は1mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。

SD2446 茶褐色土出土遺物 (Fig. 52)

土師器×瓦器

碗c×丸坏c (2) 底部の破片である。残存高2.1cm、推定高台径7.2cmを測る。内面はミガキ、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成はやや軟質で、内面灰白色、外断面黒色を呈する。底部外面にヘラ記号を有す。

越州窯系青磁

器台 (3、添付CD P1.275) 肩部の破片とみられる。残存高2.6cmを測る。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は良好。内外面に、にぶい光沢のある暗緑灰色を呈する釉が薄くかかる。SX530 暗褐色からも同様の破片が出土している (fig. 100 の38)。同一個体の可能性もある。

SD2446 灰色砂出土遺物 (Fig. 52)

須恵質土器

捏鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高2.55cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を微量含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

鉢 (5) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。外面下半は回転ヘラケズリが施される。胎土は2～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。

同安窯系青磁

碗 (6) 底部の破片である。残存高2.8cm、高台径5.5cmを測る。胎土は白色～白灰色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある淡黄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅲ-2類。

SD2447 茶褐色土出土遺物 (Fig. 52)

土師器

坏a (7) 底部の破片である。残存高1.45cm、推定底径12.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部切り離し技法は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

小皿a (8) 底部の破片である。残存高0.95cm、底径6.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切りされる。胎土は精良。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

鉢 (9) 口縁部の破片である。残存高4.9cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は3～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

瓦器

碗c (10) 推定口径17.2cm、器高4.7cm、推定高台径8.1cmを測る。調整は風化により不明である。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面灰色～灰黒色、断面灰白色を呈する。

石製品

砥石 (11) 残存長6.4cm、残存幅6.7cm、厚さ2.9cmを測る。茶褐色を呈する泥岩もしくは頁岩製である。平坦な砥ぎ面に、敲打痕が観察される。

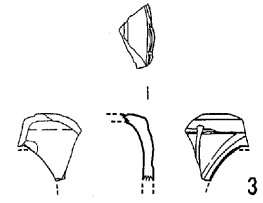
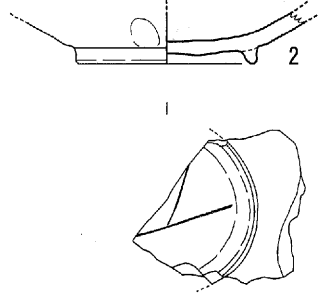
土製品

セン (12) 残存長10.0cm、残存幅8.0cm、残存厚3.7cmを測る。胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。

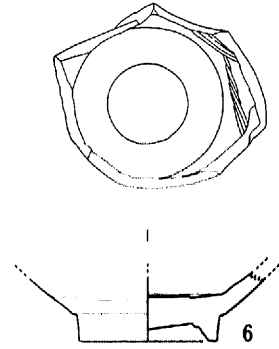
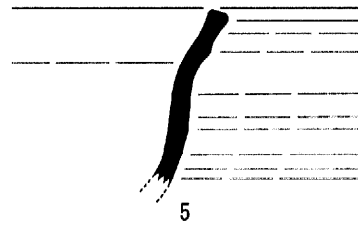
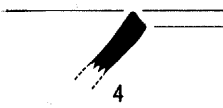
SD2443暗灰土



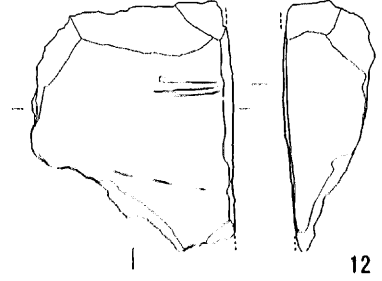
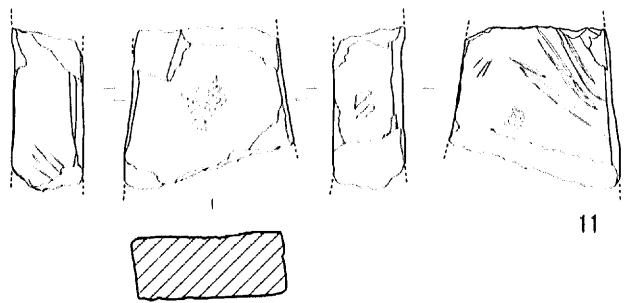
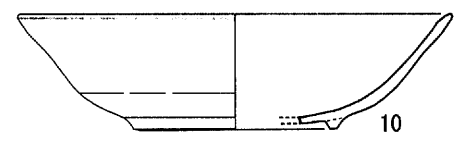
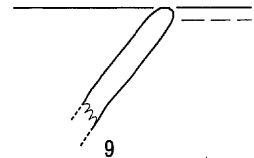
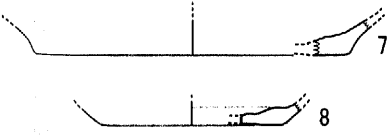
SD2446茶褐土



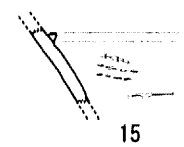
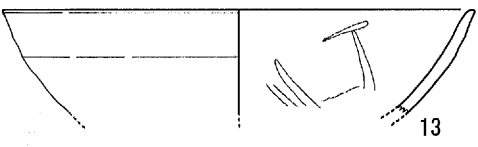
SD2446灰色砂



SD2447茶褐土



SD2447白灰砂



SD2448暗灰土

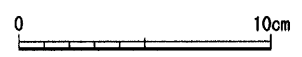
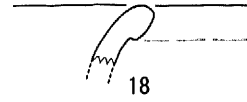


Fig. 52 溝出土遺物実測図 (1/3)

SD2447 白灰砂出土遺物 (Fig. 52)

瓦器

椀 (13) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径 18.8cm、残存高 4.3cm を測る。内面はミガキ c、外面の調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成は不良、還元は良好で、内外淡黒灰色～白灰色、断面白灰色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (14) 口縁部の破片である。残存高 1.25cm を測る。内面の調整は風化により不明、外面は回転ナデが施される。胎土は 1mm 程度の砂粒を微量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。東播系。

朝鮮系無釉陶器

壺 (15) 体部の破片である。残存高 3.5cm を測る。内面はヨコナデ、外面は格子叩きの後ナデが施される。貼り付けにより断面三角形を呈する突帯が作られる。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、内外面暗青灰色、断面淡赤褐色を呈する。

SD2448 暗灰土出土遺物 (Fig. 52)

土師器

椀 c (16) 底部の破片である。残存高 2.0cm、推定高台径 6.6cm を測る。内面の調整は風化により不明、外面はミガキ c が施される。底部外面は板状圧痕の後、ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成はやや軟質で、内面灰黒色、外面淡灰褐色～橙色、断面にぶい橙色～褐灰色を呈する。

小皿 a1 土器計測表参照。

小皿 c (17) 推定口径 8.8cm、器高 2.2cm、推定高台径 4.5cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好で、内外面淡灰褐色、断面淡灰褐色～褐灰色を呈する。

鍋 (18) 口縁部の破片である。残存高 2.4cm を測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は 3～5mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面褐色～暗褐色、断面褐色を呈する。内外面に褐色化がみられる。

瓦器

椀 c (19) 底部の破片である。残存高 1.6cm、推定高台径 6.1cm を測る。調整は風化により不明であるが、外面に指頭痕が確認される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好で、内外面黒色、断面灰白色を呈する。

SD2681 黒灰土出土遺物 (Fig. 53)

石製品

石鏃 (1) 長さ 3.1cm、幅 2.0cm、厚さ 0.5cm を測る。暗灰黒色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SD2682 暗褐土出土遺物 (Fig. 53)

石製品

滑石製品 (2、添付 CD P1.276) 長さ 4.6cm、幅 3.1cm、高さ 2.3cm を測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。中央に半球状の窪みを有し、側面に沈線状の削りが一周する。

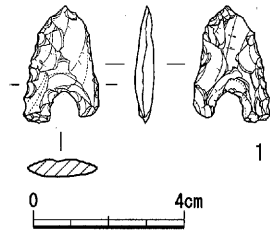
砥石 (3) 長さ 14.2cm、幅 8.0cm、厚さ 4.8cm を測る。明灰白色を呈する砂岩製である。砥ぎ面は 5 面観察される。平坦な砥ぎ面の他、右側面下位に、断面が浅い V 字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SD3129 黒灰土出土遺物 (Fig. 53)

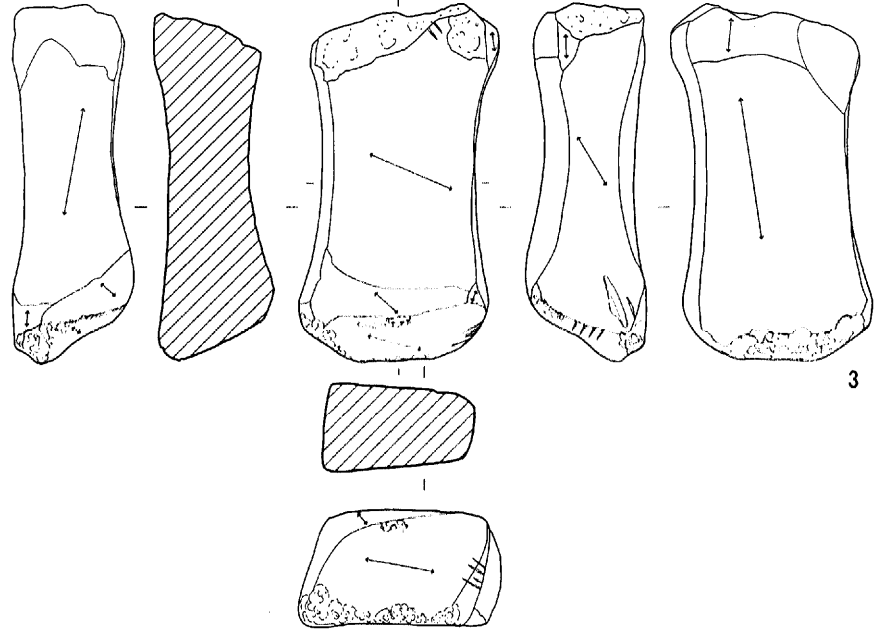
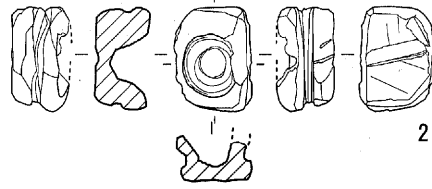
白磁

小壺蓋 (4、添付 CD P1.277) 完存する。径 3.2cm、器高 1.05cm を測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。上面に、やや光沢のある薄灰緑色を呈する釉がかかる。華南産。

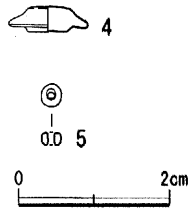
SD2681 黒灰土



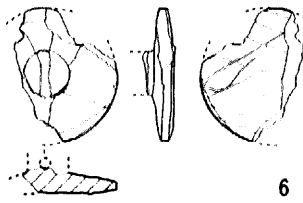
SD2682 暗褐土



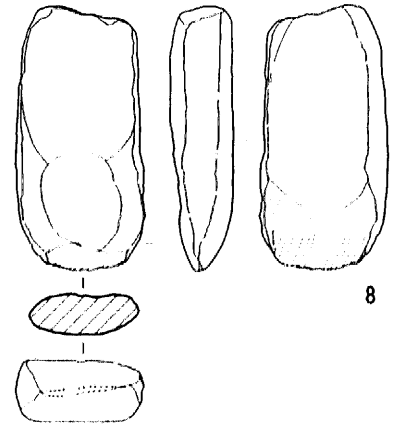
SD3129 黒灰土



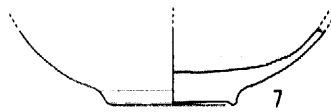
SD3998 黒灰土



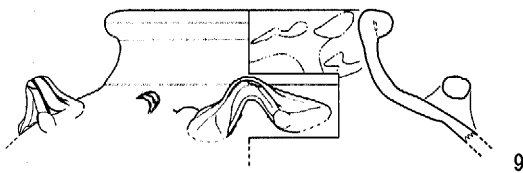
SD4629 暗灰土



SD4017 黒灰土



SD4672 暗褐土



SD4753 白灰砂



SD4763 灰褐土

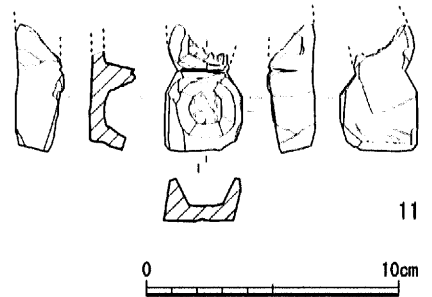


Fig. 53 溝出土遺物実測図 (5は1/1、1は1/2、その他は1/3)

ガラス製品

小玉 (5、添付 CD P1.278) 径4.0mm、高さ2.5mm、穴の直径1.2mmを測る。暗青緑色を呈する。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SD3998 黒灰土出土遺物 (Fig. 53)

石製品

石鍋補修品 (6、添付 CD P1.279) 残存長5.4cm、残存幅4.1cm、残存高1.3cmを測る。径5.4cmに復元される。暗黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。円盤状の本体に、円柱状の突起が付いた形態を成す。突起部には側面から穿孔が施される。石鍋の破片を転用したものとみられ、下面に石鍋外面の成形痕がうっすらと残る。

SD4017 黒灰土出土遺物 (Fig. 53)

青白磁

皿 (7) 底部の破片である。残存高3.15cm、底径5.3cmを測る。胎土は薄白褐色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。

SD4629 暗灰土出土遺物 (Fig. 53)

石製品

磨製石斧 (8) 長さ10.5cm、幅5.1cm、厚さ2.5cmを測る。暗緑青色～茶褐色を呈する緑色片岩製である。研磨により成形される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SD4672 暗褐土出土遺物 (Fig. 53)

中国陶器

耳壺 (9) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径11.2cm、残存高5.2cmを測る。胎土は精良で、薄褐色～暗灰褐色を呈する。焼成は良好。外面および口縁部内面に、やや光沢のある濃緑色を呈する釉が薄くかかる。口縁部内面の釉はほとんどはがれている。口縁部内面に褐白色を呈する化粧土が観察される。耳が1ヶ所残存する。Ⅲ類。

SD4753 白灰砂出土遺物 (Fig. 53)

黒釉陶器

天目椀 (10、添付 CD P1.280) 底部の破片である。残存高1.3cm、高台径3.8cmを測る。胎土は薄白褐色を呈し精良で、黒色粒を含む。焼成は良好。内面および外面上位に、やや光沢のある黒色を呈する釉が厚くかかる。

SD4763 灰褐土出土遺物 (Fig. 53)

石製品

滑石製品 (11、添付 CD P1.281) 残存長5.1cm、幅3.1cm、高さ1.8cmを測る。明灰黒色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。平面形は、角ばった8字状を呈す。上面には、平面八角形(2.2×2.2cm)、断面逆台形(深さ1.1cm)の彫り込みがある。彫り込みは長軸方向に2つ以上並ぶものとみられる。

井戸出土遺物

SE020 暗褐土出土遺物 (Fig. 54)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

土製品

取瓶 (1、添付 CD P1.282) 口縁部の破片である。外面は指押えにより成形される。内面の調整は金属附着物により不明である。胎土はやや細かく、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面灰

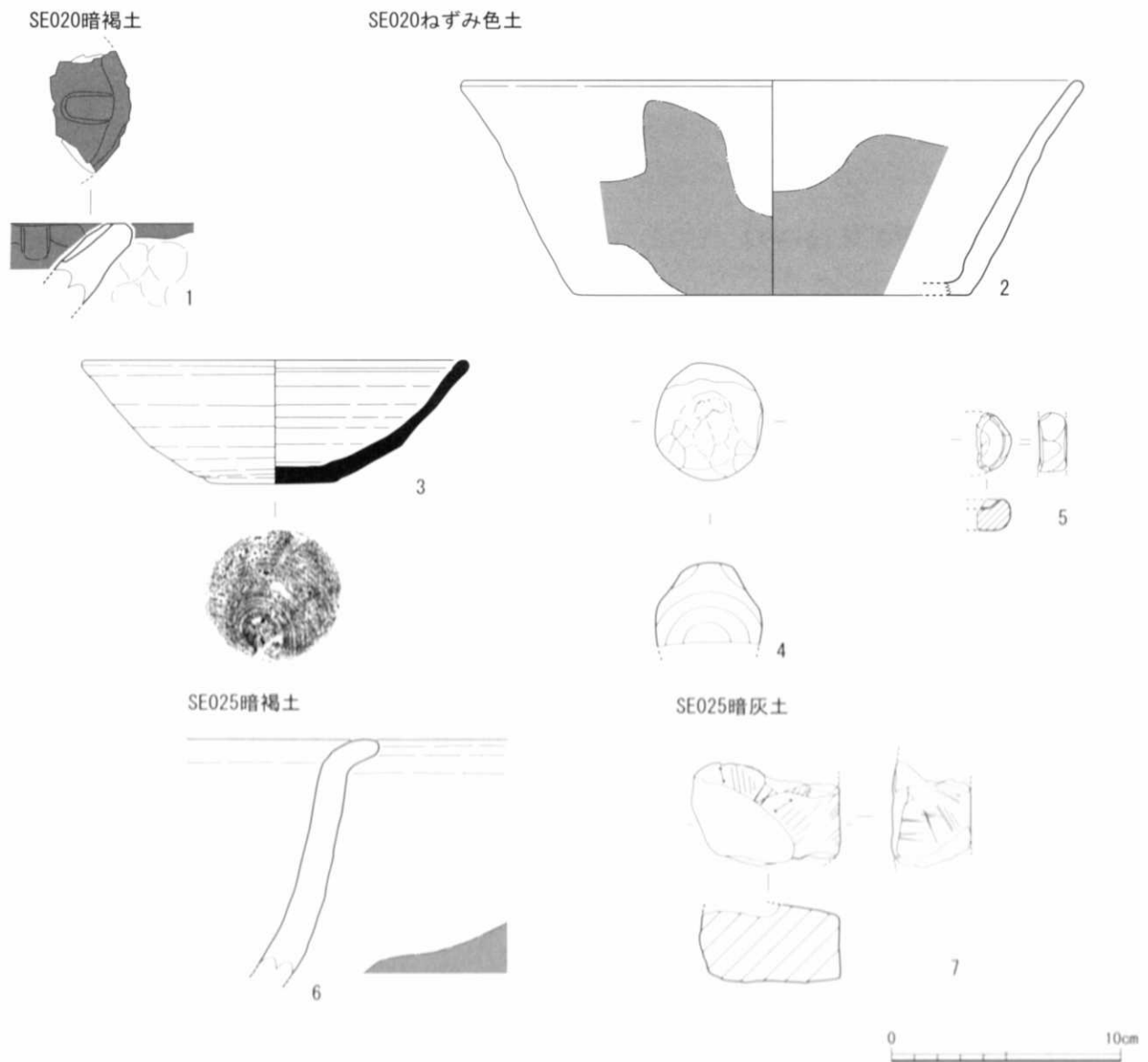


Fig. 54 井戸出土遺物実測図 (1/3)

色～褐灰色、断面淡緑灰色～灰色～褐灰色を呈する。口縁部内面に、注口あるいは工具ではさんだ痕跡が1ヶ所残存する。口縁部～内面に赤紫色～橙色～濃紺色～暗黄緑色を呈する金属が付着する。

SE020 ねずみ色土出土遺物 (Fig. 54)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (2) 口縁部～底部の破片である。推定口径27.2cm、器高9.4cm、推定底径17.3cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテハケの後、ヨコナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、にぶい橙色～褐灰色～黒褐色を呈する。内外面に煤が付着する。内面下半がやや磨耗しており、捏鉢としての使用が想定される。

須恵質土器

椀 (3、添付CD P1.283) 完存する。口径16.9cm、器高5.4cm、底径5.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切りされる。胎土はやや密で、～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、灰色を呈する。東播系。

木製品

球形木製品 (4、添付CD P1.284) 下半を欠損する。長さ5.2cm、幅4.7cm、残存高3.8cmを測る。

ケズリにより成形される。用途は不明である。

土製品

鋳型? (5、添付CD P1.285) 鋳型の破片と推測される。残存長2.6cm、残存幅1.5cm、厚さ1.4cmを測る。指押えにより成形される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、灰色を呈する。

SE025 暗褐色土出土遺物 (Fig. 54)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

鍋 (6) 口縁部～体部の破片である。残存高10.3cmを測る。口径50cm程度に復元される。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～6mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面にぶい黄橙色、外面灰黄色～暗灰黄色、断面薄黄灰色を呈する。体部外面下半に煤が付着する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

SE025 暗灰土出土遺物 (Fig. 54)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

瓦質土器

不明製品 (添付CD P1.286) 残存長5.4cm、残存幅8.4cm、厚さ3.7cmを測る。胎土は密で、1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、表面灰白色、断面灰白色～暗灰色を呈する。穿孔を有す。

石製品

砥石 (7) 残存長4.6cm、残存幅6.5cm、厚さ3.5cmを測る。明灰白色を呈する砂岩製である。砥ぎ面は2面あり、擦痕の他、溝状の砥ぎ痕が観察される。

SE025 灰色粘出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

SE050 暗灰粘出土遺物 (Fig. 55)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a 土器計測表参照。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

椀 (1) 口縁部の破片である。残存高3.6cmを測る。内外面とも、幅が狭く密なミガキcが施される。口縁部内面に沈線を有する。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒灰色、断面灰白色を呈する。いぶしにより表面が黒化し、やや光沢がある。畿内系。

小皿 (2) 口縁部の破片である。残存高1.35cmを測る。口径11～12cm程度に復元される。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒灰色、断面面灰白色を呈する。いぶしにより表面が黒化し、やや光沢がある。畿内系。

白磁

椀 (3) 大半が残る。口径16.9cm、器高6.65cm、高台径6.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄黄緑色を呈し薄くかかる。白堆線、輪花が6ヶ所施される。II-4b類。

木製品

題籤 (4、添付CD P1.287) 残存長7.2cm、幅4.55、厚さ0.45cmを測る。風化により加工痕は不明である。墨痕等は観察されない。

柄 (5、添付CD P1.288) 柄部のみほぼ完存する。柄は長さ12.55cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmを測る。

SE050暗灰粘



SE050黄白・青灰粘ブロック



Fig. 55 SE050出土遺物実測図 (1/3)



X線撮影で内部に茎が残ることが確認され、推定長9.3cm、刀身の幅は2.1cmを測る。目釘が1ヶ所存在する。

金属製品

刀片(6) 刀身の破片である。残存長4.05cm、残存幅2.55cm、背の厚さ0.4cmを測る。

石製品

砥石(7) 残存長10.7cm、残存幅5.9cm、残存厚8.3cmを測る。黄灰色～暗灰色を呈する火成岩製である。裏面の割れ口に、擦痕が観察され、割れ口も部分的に使用したものとみられる。

砥石(8、添付CD P1.289) 残存長14.6cm、幅10.0cm、厚さ6.5cmを測る。暗灰黒色を呈する砂岩製である。擦痕のほか、断面がV字状を呈する細い溝状痕、断面が浅いU字状を呈する溝状痕、円形に彫り窪めた痕跡、敲打痕が観察される。

SE050 黄白・青灰粘ブロック出土遺物 (Fig.55)

土師器

小椀(9) 口縁部・体部の破片である。推定口径9.0cm、残存高2.7cmを測る。内面はミガキcが施され、外面は指押えの後ナデが施される。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、薄褐灰色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢(10) 口縁部の破片である。残存高4.5cmを測る。内面はミガキcが施され、外面はほとんどが風化により不明ながらヨコナデが一部観察される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰白色を呈する。

SE150 暗褐土出土遺物 (Fig.56)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a2(1) 推定口径8.6cm、残存高0.95cm、推定底径6.8cmを測る。口縁部内面は折り返しにより沈線状を呈す。調整は内外面とも風化により不明である。胎土は細かく、～1mm程度の砂粒を微量に含む。焼成は良好で、灰白色を呈する。

鉢?(2) 口縁部の破片である。残存高2.75cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土はやや粗く、～2.5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、にぶい橙色～にぶい褐色を呈する。口縁部に褐色化がみられる。

鍋(3) 口縁部の破片である。残存高2.3cmを測る。内面は風化により調整不明、外面はヨコナデが施される。胎土は細かく、～2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。

鍋(4) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。口径40cm程に復元される。内面はヨコナデ、外面はタテハケが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、橙色を呈する。外面にしみ状の褐色化がみられる。

鍋(5) 口縁部の破片である。残存高2.4cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテハケが施される。胎土はやや細かく、～2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙色を呈する。

鍋(6) 口縁部の破片である。残存高6.3cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテハケが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面橙色、外面灰白色、断面橙色～灰白色を呈する。

瓦器

椀c(7) 底部の破片である。残存高1.4cm、推定高台径3.0cmを測る。内面は幅の狭いミガキ、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好で、内外面灰黒色、断面灰白色を呈する。畿内系。

椀c(8) 口縁部の破片である。残存高2.8cmを測る。内外面とも幅の狭いミガキが密に施される。胎土は精良。焼成は良好で、内外面灰黒色、断面灰白色を呈する。畿内系。

椀(9、添付CD P1.290) 底部の破片である。残存高1.05cmを測る。内面はミガキc、外面はヘラ切り後、ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、内面黒褐色、外断面灰白色を呈する。外面に「上」とみられる墨書が観察される。

須恵質土器

鉢(10) 口縁部の破片である。残存高2.6cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや密で、～1.5mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。東播系。

石製品

石鍋(11) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.6cmを測る。口径30cmほどに復元される。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鏝以下に煤が付着する。

滑石製品(12、添付CD P1.291) 長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ1.6cmを測る。ケズリにより成形される。青灰色を呈する滑石製である。

SE150 黒灰土出土遺物 (Fig. 56)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

鍋(13) 口縁部の破片である。残存高2.0cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテ方向のナデが施される。胎土は細かく、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内断面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈する。外面に煤が付着する。

石製品

石鍋(14、添付CD P1.292) 推定口径29.0cm、器高3.25cm、推定底径24.7cmを測る。銀灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。体部上半が欠損した石鍋の割れ口を再加工したものと思われる。

SE150 濃青灰粘出土遺物 (Fig. 56)

須恵質土器

捏鉢(15) 口縁部～体部上半の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面の口縁部付近に指頭痕がみられ、下半は回転ナデの後、不定方向のナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は青灰色、その他は灰色を呈する。東播系。

木製品

曲物底板(16、添付CD P1.293) 長軸14.8cm、短軸13.8cm、厚さ0.5cmを測る。正円形にはなっていないが、風化や欠損ではなく、元々このような形に加工されている。側面には径2～3mm程度の釘穴が2ヶ所観察される。

SE150 暗灰粘出土遺物 (Fig. 56)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

小皿 a1 (17、添付CD P1.294) 口縁部～底部の破片である。推定口径9.5cm、残存高1.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部はヘラ切りとみられる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰白色を呈する。内面に墨書が観察される。

SE150 黄褐土ブロック出土遺物 (Fig. 56)

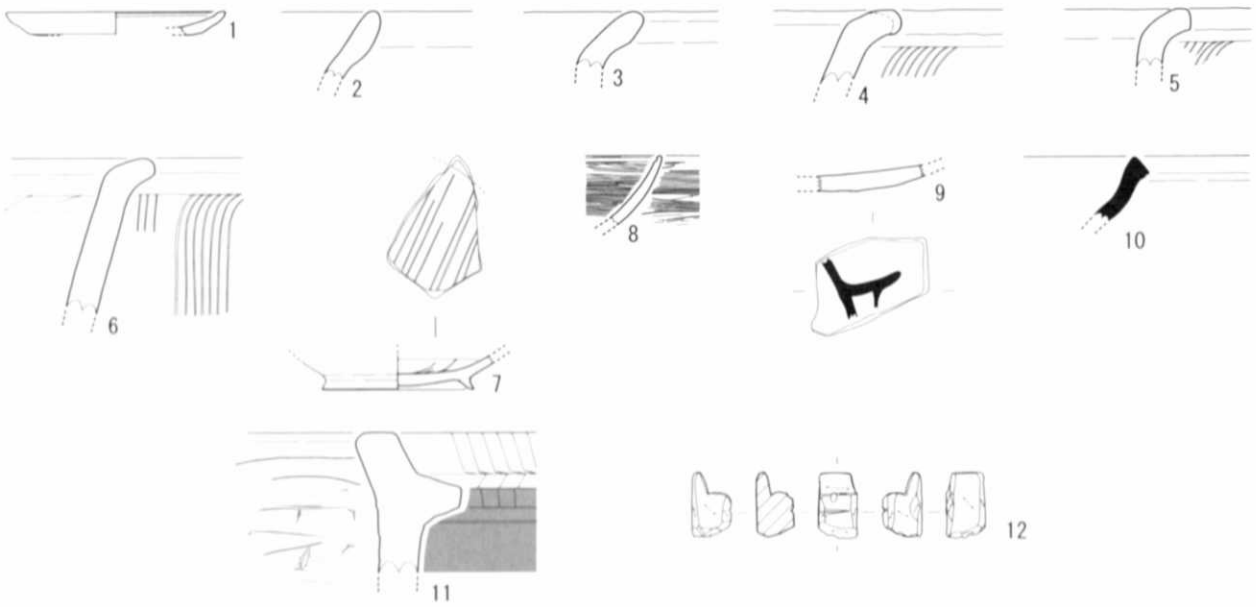
土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

小皿(18) 口縁部の破片である。残存高1.75cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土はやや密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面灰白色、断面灰色を呈する。

鍋(19) 口縁部～体部上半の破片である。残存高10.5cmを測る。口径50cm程に復元される。内面はヨコナデ、外面はタテハケが施される。胎土は細かく、～4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面橙色、断面にぶい橙色を呈する。外面に煤が付着する。

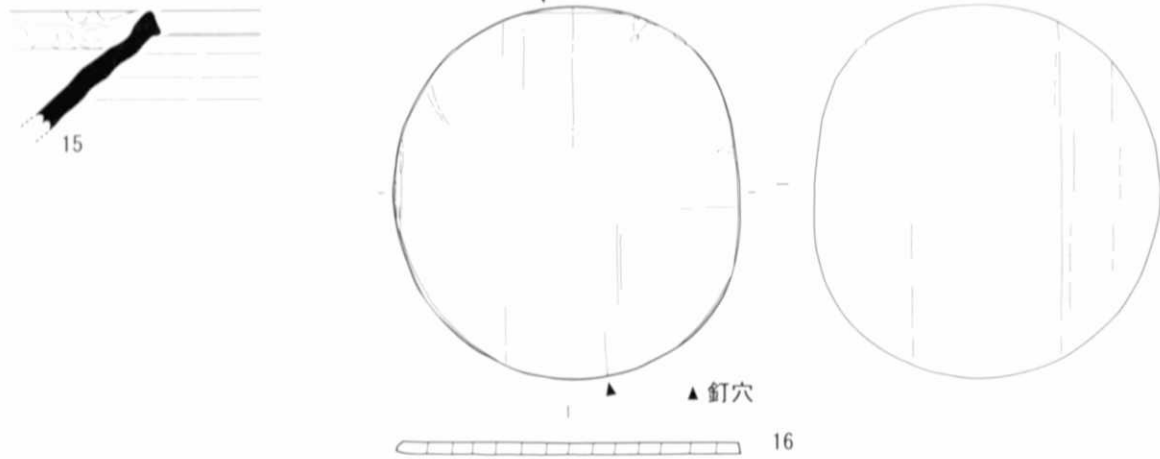
SE150暗褐土



SE150黒灰土



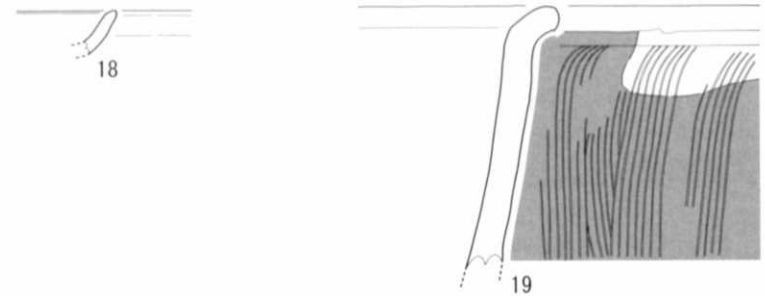
SE150濃青灰粘



SE150暗灰粘



SE150黄褐土ブロック



0 10cm

Fig. 56 SE150出土遺物実測図 (1/3)

SE150 井戸枠 (Fig. 57 ~ 65)

木製品 (表1)

縦板 (1 ~ 13、添付CD P1.295 ~ 307) 残存長164.1 ~ 184.0cm、幅13.6 ~ 31.4cm、厚さ2.4 ~ 3.0cmを測る。割りの後、出っ張った部分を手斧などで削り、成形される。残存する小口には、斧などによる粗い切断痕が残る。

横棧木 (14 ~ 25、添付CD P1.308 ~ 323) 長さ83.9 ~ 87.0cm、幅9.0 ~ 9.8cm、厚さ4.4 ~ 6.4cmを測る。割りの後、手斧などで、成形される。樹皮を剥いただけのようにみられる面もある (15、17、19 ~ 21)。小口を凸形 (14 ~ 19)、凹形 (20 ~ 25) に加工する。加工痕は不明瞭だが、鋸や鑿などによるものと推測される。

支柱 (26 ~ 34、添付CD P1.324 ~ 331) 長さ51.6 ~ 53.9cm、幅6.9 ~ 9.4cm、厚さ3.5 ~ 5.6cmを測る。割りの後、手斧などで成形される。小口はつぶれており、痕跡は不明瞭だが、鋸により切断されたものとみられる。

曲物 (34、添付CD P1.332) 径50.9cm、残存高34.1cmを測る。厚さ0.5cm程度の板を撓め、樹皮で留める。内面には撓め安いように、縦や斜めに切り込みが施される。帯板が巻かれていた痕跡が残る。帯板は3段以上とみられる。

裏板 (添付CD P1.333 ~ 347) 縦板の合せ目に外側から当てられていた、薄手の板である。残存長112.0 ~ 173.6cm、幅6.0 ~ 14.4cm、厚さ0.3 ~ 1.1cmを測る。基部に径6 ~ 7mmの穿孔を有するものがある。

SE150 青灰粘出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE175 暗褐色土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 (1) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。内外面とも幅が狭く密なミガキcが施される。口縁部内面に沈線が施される。胎土はやや密。焼成は良好で、内外面灰黒色、断面黄灰色を呈する。畿内系。

SE190 暗褐色土出土遺物 (Fig. 66)

白磁

合子蓋 (2、添付CD P1.348) ほぼ完存する。口径5.0cm、器高3.55cm、天井部径3.6cmを測る。胎土は薄褐色白色 ~ 白色を呈し、精良。焼成は良好。外面にやや光沢のある淡緑灰色を呈する釉がかかる。天井部内面に釉がたまっている。

SE195 暗褐色土出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE195 濃ねずみ色土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

丸坏 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

灰釉陶器

椀 (3、添付CD P1.349) 底部の破片である。残存高2.15cm、高台径5.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切り後未調整、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、~1mm程

番号	Pl.	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
1	295	縦板	175.5 + α	31.0	2.6	
2	296	縦板	172.0 + α	31.4	2.7	
3	297	縦板	175.0 + α	13.6	2.4	
4	298	縦板	164.1 + α	15.2	2.0	
5	299	縦板	174.8 + α	31.1	2.8	
6	300	縦板	174.3 + α	30.2	2.6	
7	301	縦板	172.9 + α	30.7	2.8	
8	302	縦板	173.0 + α	30.7	2.7	
9	303	縦板	171.4 + α	31.0	2.9	
10	304	縦板	168.7 + α	30.5	2.4	
11	305	縦板	181.6 + α	29.6	3.0	
12	306	縦板	184.0 + α	30.9	2.6	
13	307	縦板	170.3 + α	30.0	2.4	
14	308	横棧木	85.6	9.0	5.7	
15	309	横棧木	85.0	9.0	5.3	1面は樹皮を剥いただけか？
16	310	横棧木	84.2	9.6	4.5	
17	311	横棧木	84.2	9.4	4.4	1面は樹皮を剥いただけか？
18	312	横棧木	85.3	9.6	5.5	
19	313	横棧木	86.4	9.2	5.8	1面は樹皮を剥いただけか？
20	314	横棧木	85.1	9.8	5.4	1面は樹皮を剥いただけか？
21	315	横棧木	86.4	9.4	5.2	1面は樹皮を剥いただけか？
22	316	横棧木	83.9	9.2	5.0	
23	317	横棧木	85.0	9.4	5.4	
24	318	横棧木	87.0	11.4	6.4	
25	319	横棧木	86.6	10.0	6.3	
	320	横棧木	72.2 + α	8.3	3.8 + α	
	321	横棧木	77.3 + α	7.6	4.3	
	322	横棧木	80.6 + α	6.8 + α	3.0 + α	
	323	横棧木	77.8 + α	9.2	5.1	
26	324	支柱	52.6	8.1	5.3	
27	325	支柱	52.6	7.2	5.6	
28	326	支柱	53.1	7.8	5.3	
29	327	支柱	51.6	9.4	3.6	
30	328	支柱	53.8	8.1	5.6	
31	329	支柱	53.7	7.2	3.5	
32	330	支柱	53.2	8.6	5.4	
33	331	支柱	53.9	6.9	5.6	
34	332	曲物	50.9	34.1		
	333 左	裏板	150.8 + α	8.8	0.7	
	333 右	裏板	146.0 + α	7.8	1.0	
	334 左	裏板	150.3 + α	11.1 + α	0.3 + α	
	334 右	裏板	147.8 + α	7.6	0.3	
	335	裏板	166.1 + α	10.6	0.6	基部から約3.5cmの所に径6mmの穿孔
	336	裏板	159.0 + α	10.5	0.5	基部から約3.5cmの所に径7mmの穿孔
	337 左	裏板	162.8 + α	10.8	1.1	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	337 右	裏板	112.0 + α	10.0 + α	0.6 + α	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	338 左	裏板	153.5 + α	11.4	1.1	基部から約4cmの所に径7mmの穿孔
	338 右	裏板	134.0 + α	12.7	0.3	基部から約4cmの所に径7mmの穿孔
	339 左	裏板	152.5 + α	13.2	0.4	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	339 右	裏板	151.8 + α	11.8	0.5	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	340 左	裏板	157.0 + α	14.4	0.6	基部から約5cmの所に径6mmの穿孔
	340 右	裏板	154.6 + α	10.6	0.7	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	341 左	裏板	168.3 + α	9.8	0.8	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	341 右	裏板	173.6 + α	7.1	0.5	
	342 左	裏板	159.0 + α	11.6	0.5	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	342 右	裏板	155.8 + α	6.0	0.6	
	343 左	裏板	147.7 + α	10.8	0.4	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	343 右	裏板	149.2 + α	9.8	0.8	
	344 左	裏板	167.5 + α	10.8	0.9	基部から約4.5cmの所に径6mmの穿孔
	344 右	裏板	152.9 + α	7.1	0.5	
	345 左	裏板	163.3 + α	14.2	0.8	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	345 右	裏板	160.8 + α	9.6	0.6	基部から約4cmの所に径6mmの穿孔
	346	裏板	157.4 + α	11.0	0.8	基部から約3.5cmの所に径7mmの穿孔
	347	裏板	157.7 + α	10.6	0.8	

表1 SE415 井戸枠計測表

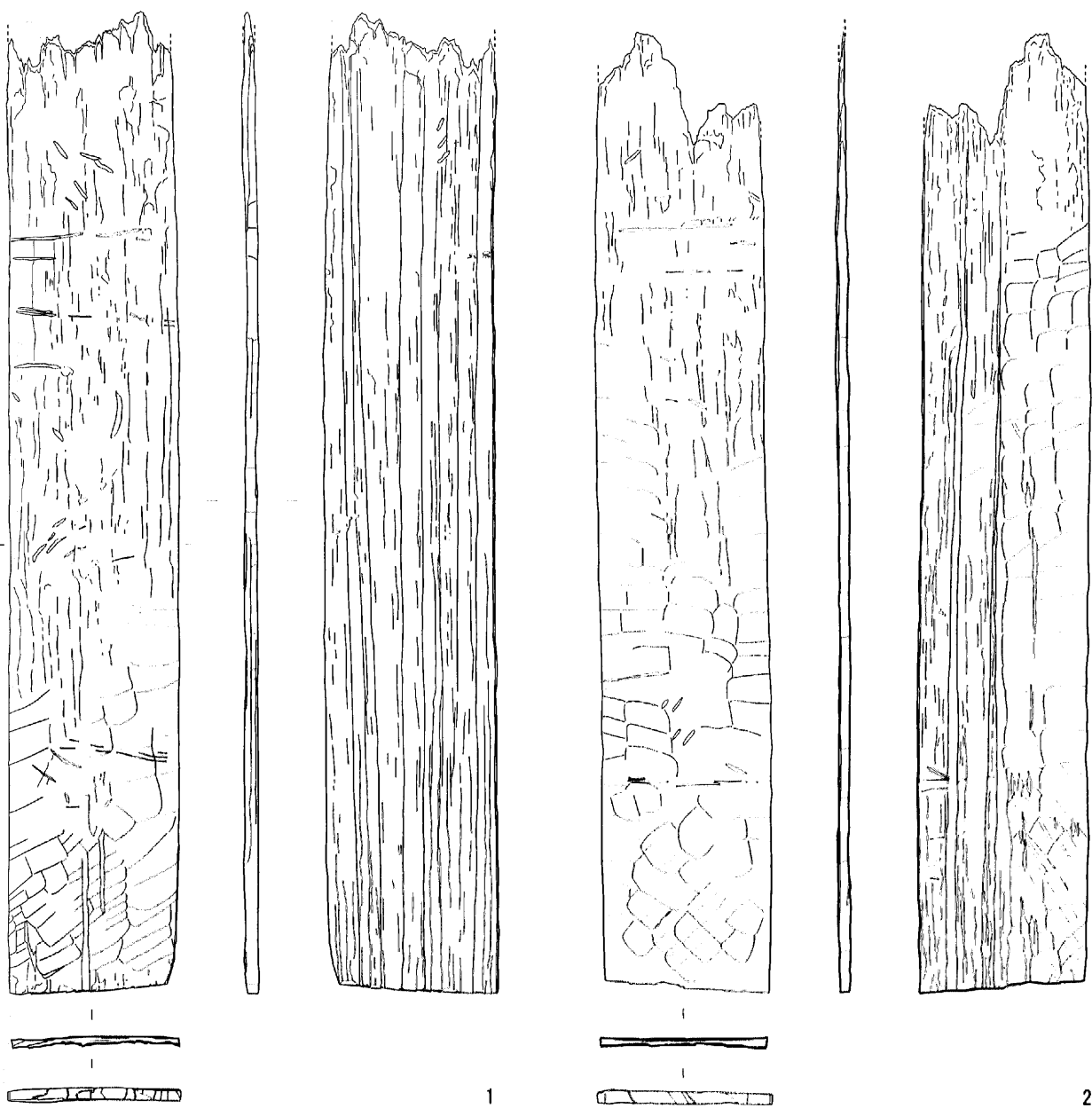


Fig. 57 SE150出土遺物実測図 (1/12)

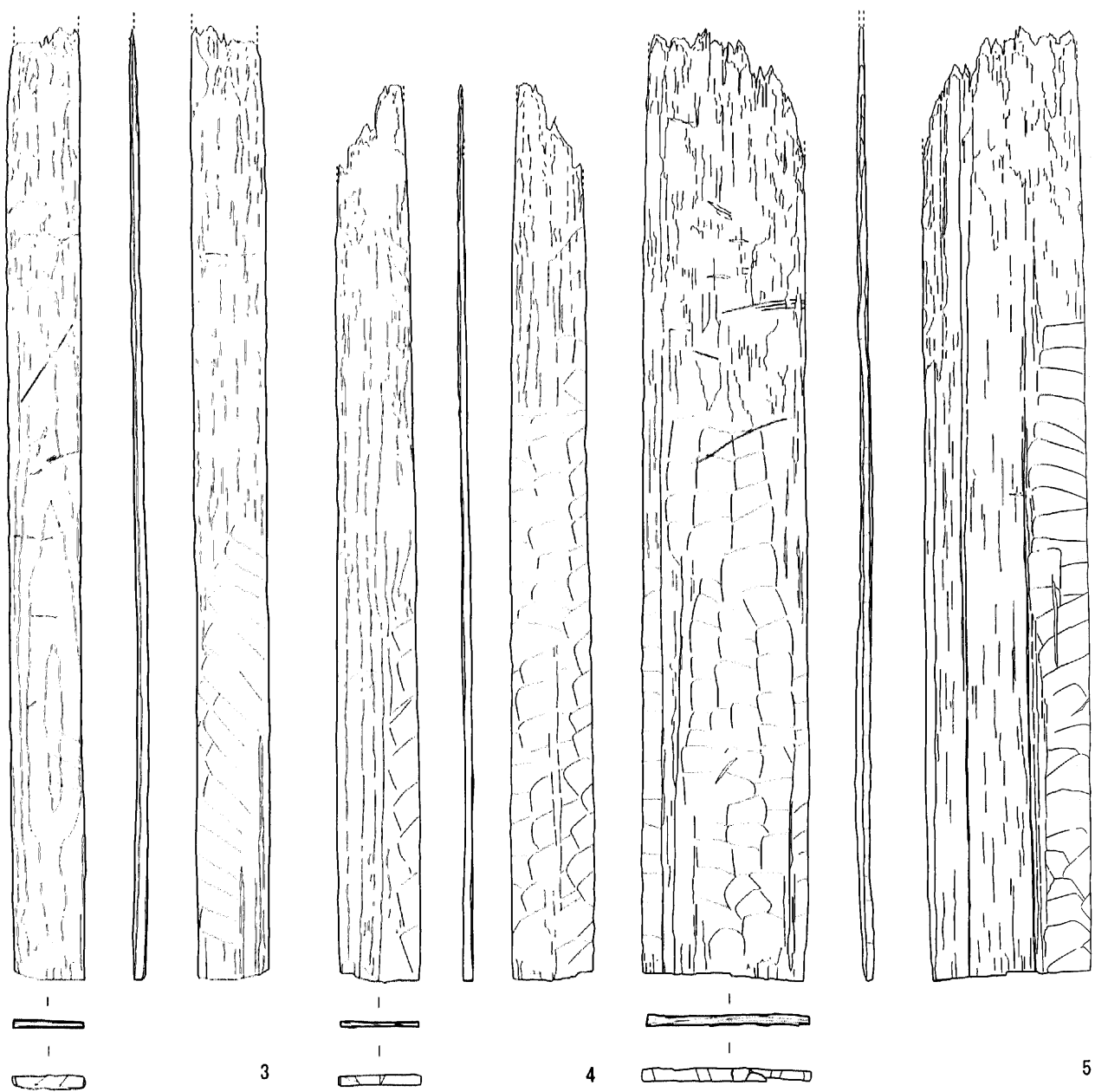


Fig. 58 SE150出土遺物実測図 (1/12)

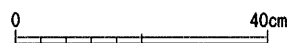
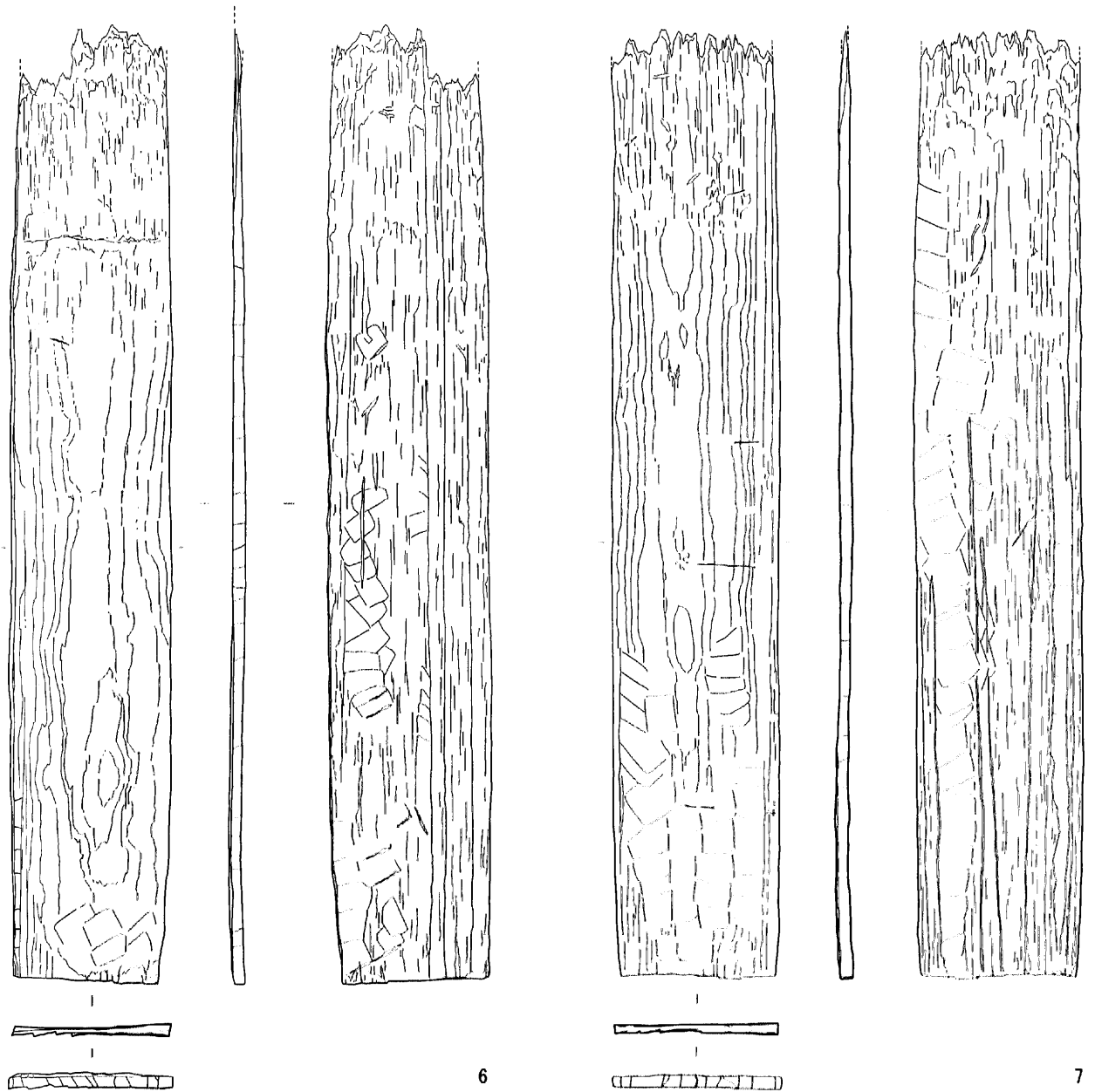


Fig. 59 SE150出土遺物実測図 (1/12)

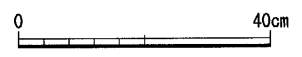
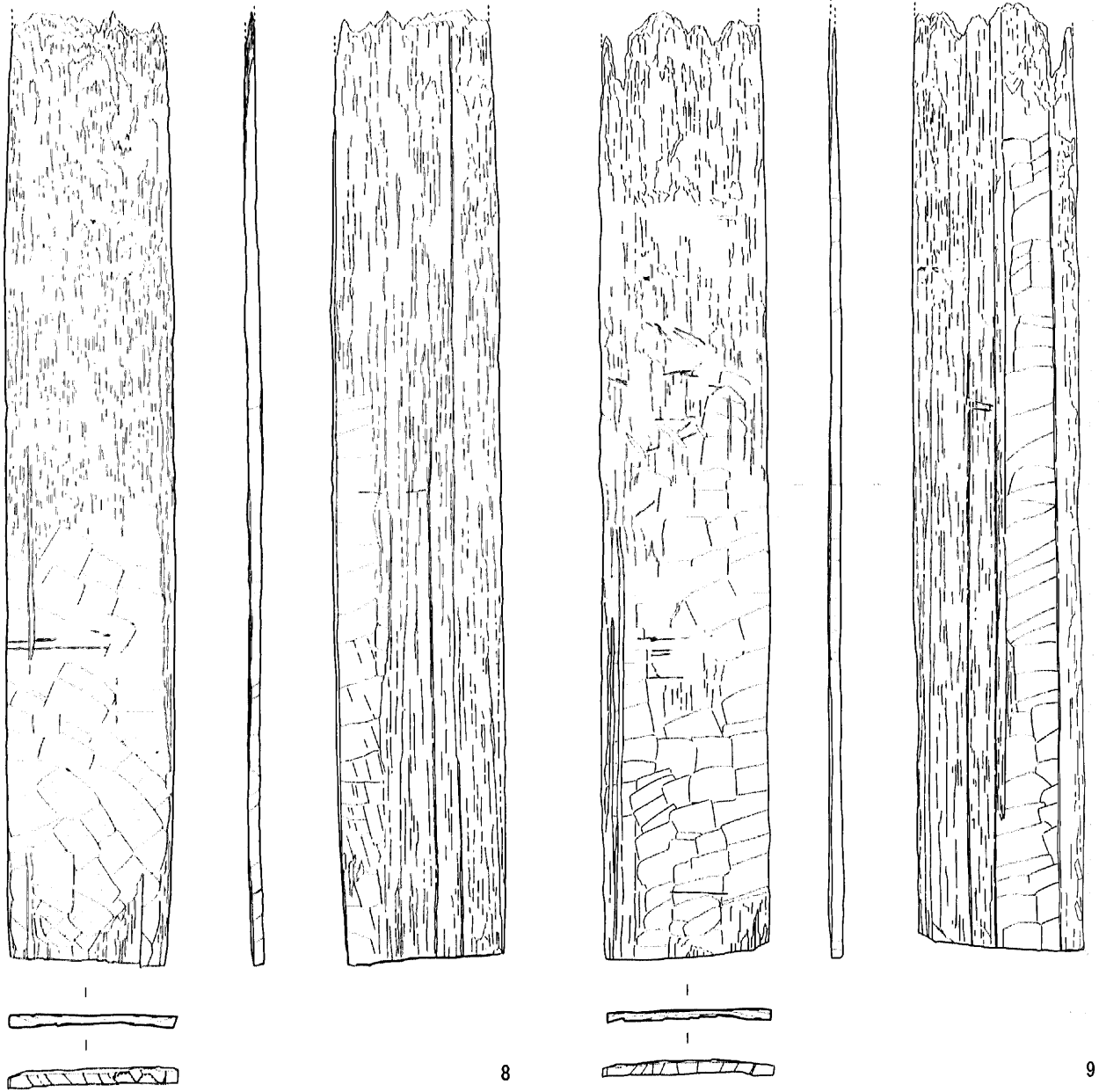


Fig. 60 SE150出土遺物実測図 (1/12)

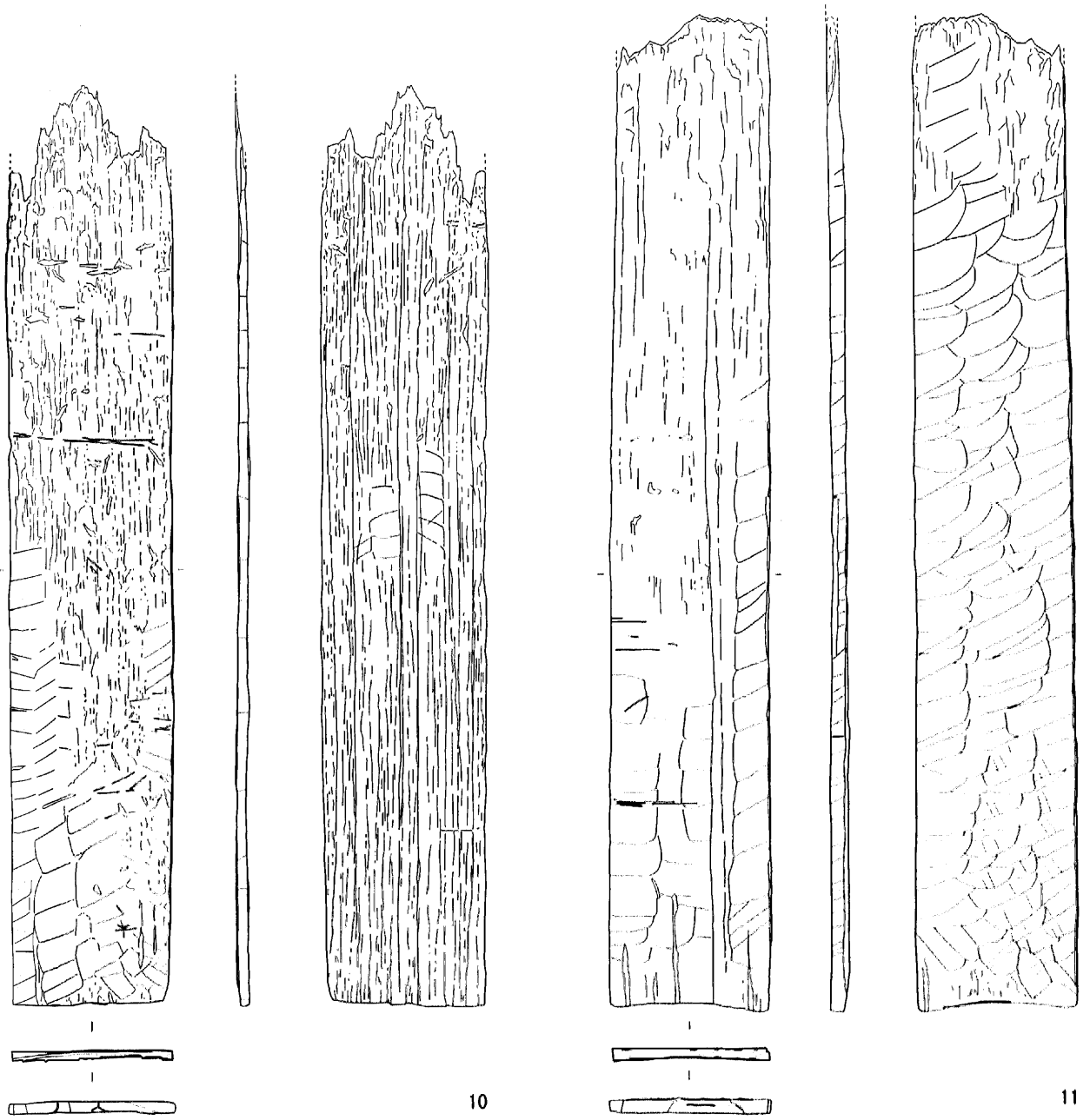


Fig. 61 SE150出土遺物実測図 (1/12)

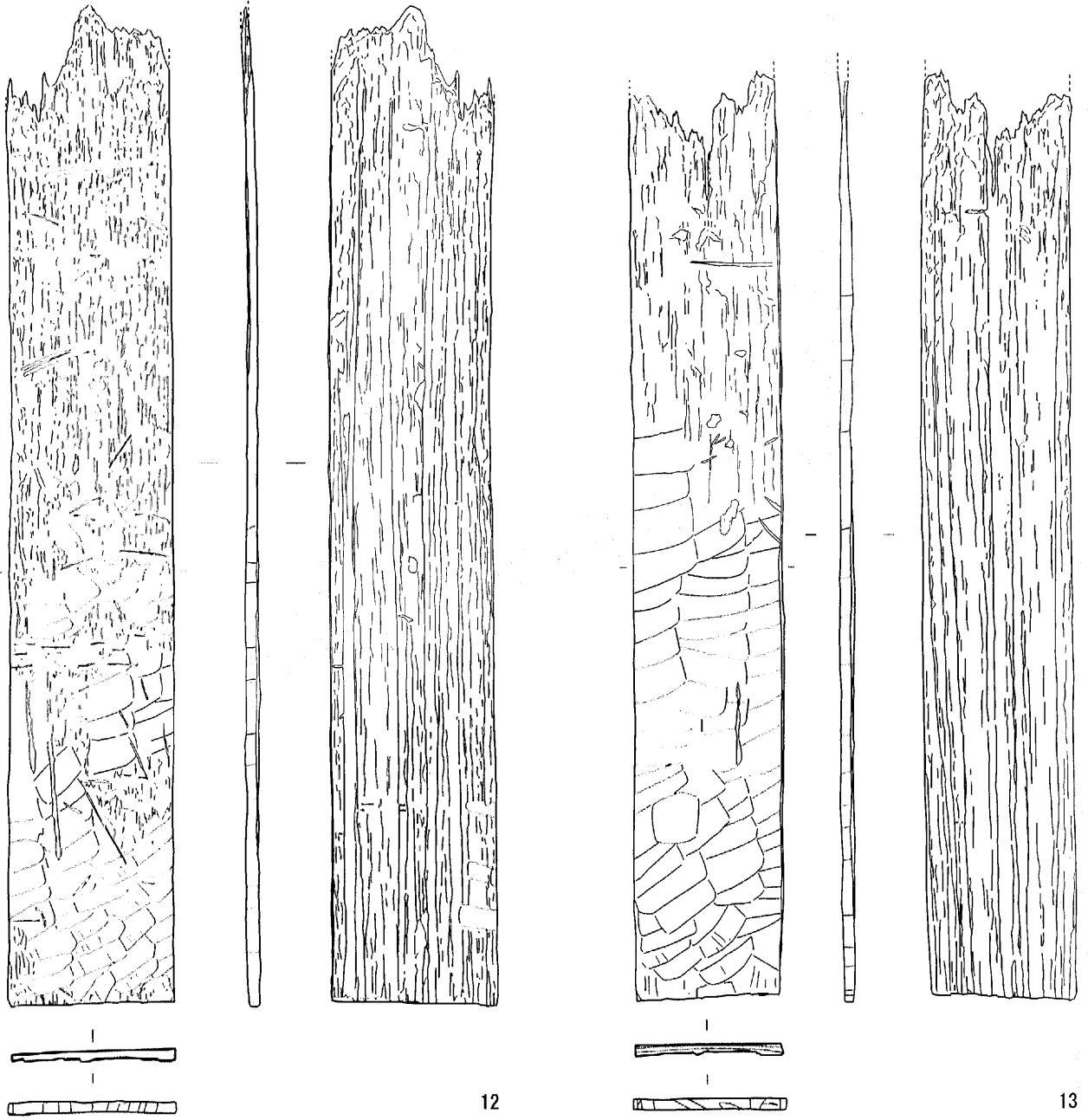


Fig. 62 SE150出土遺物実測図 (1/12)

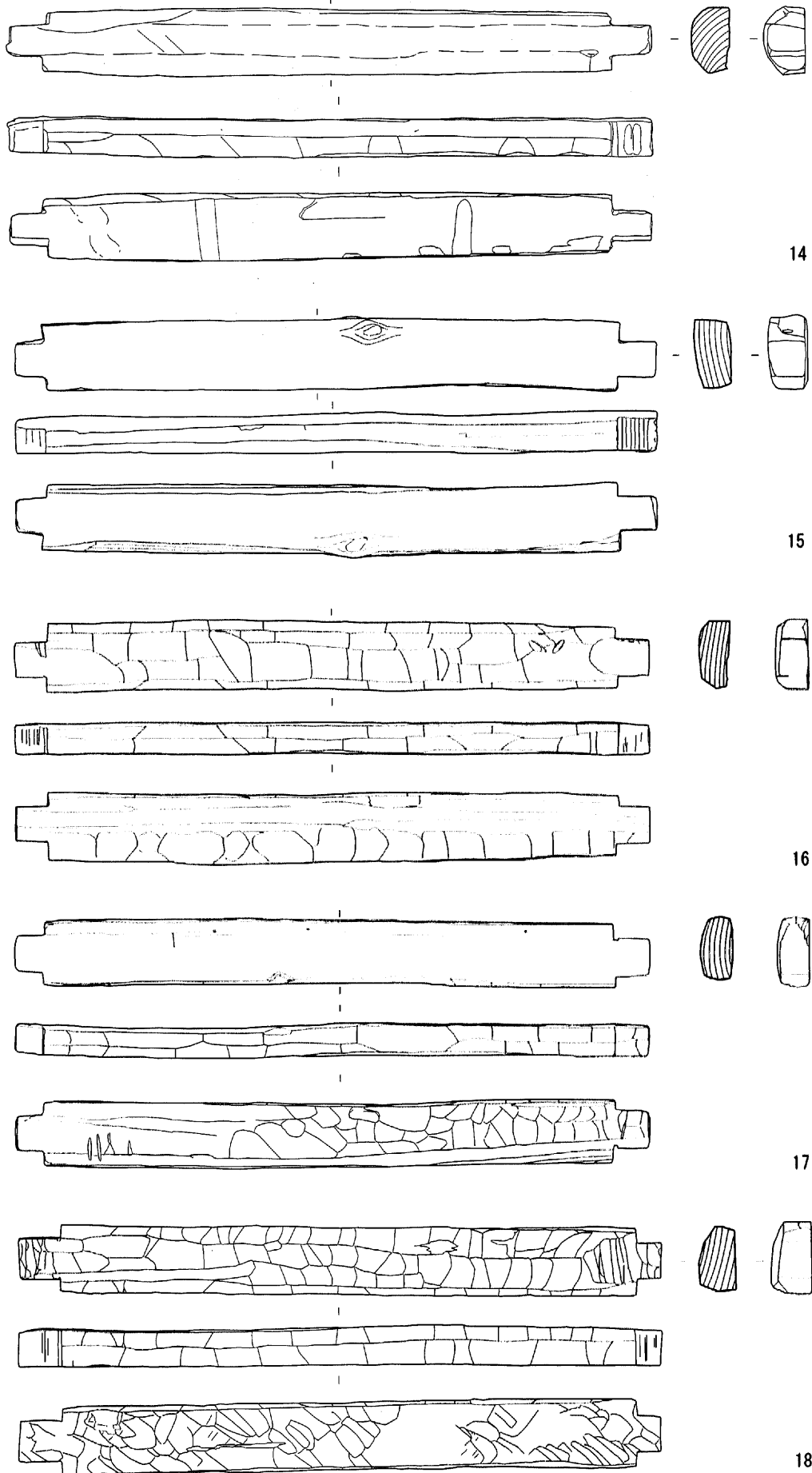


Fig. 63 SE150出土遺物実測図 (1/8)

0 40cm

SE150井戸枠

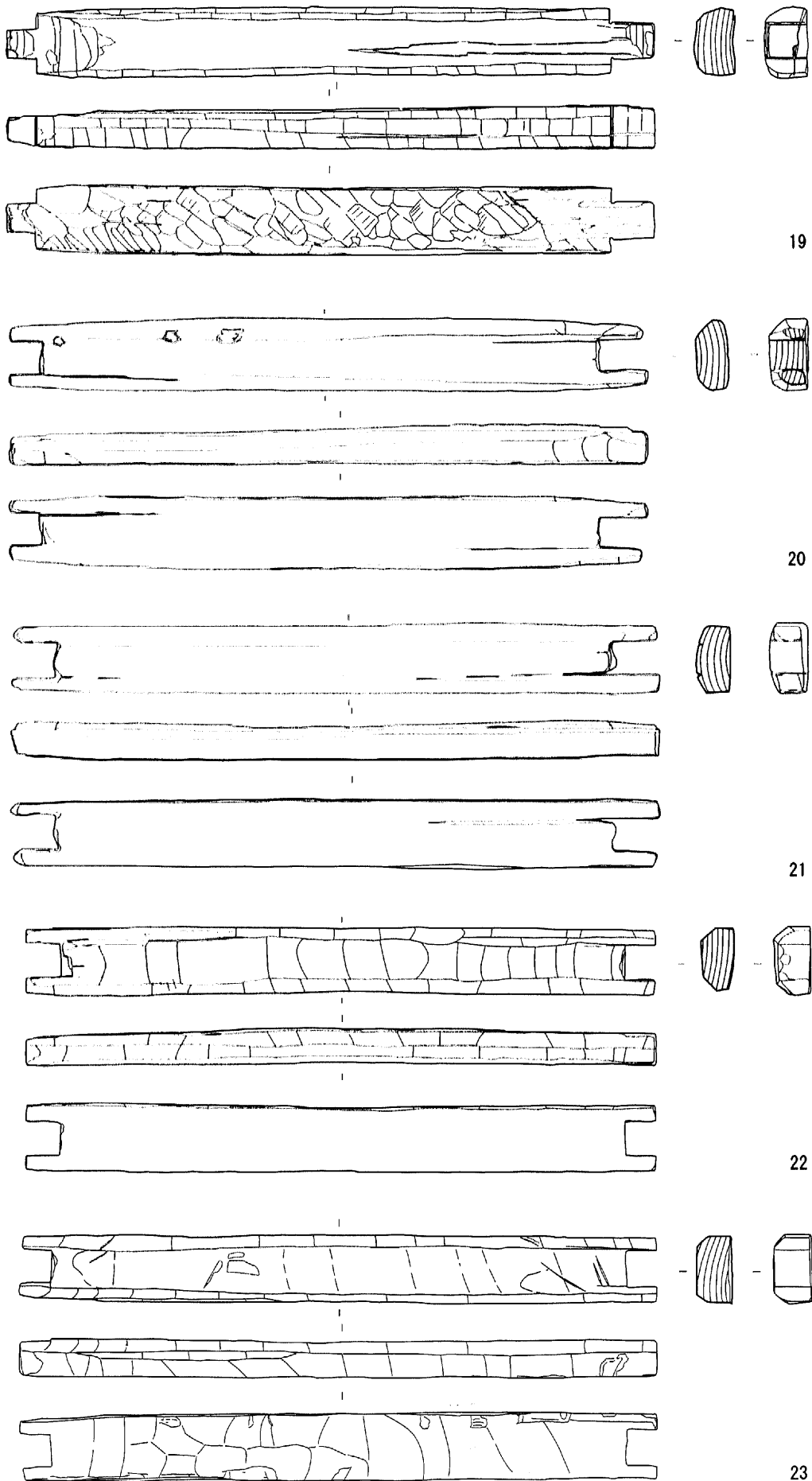
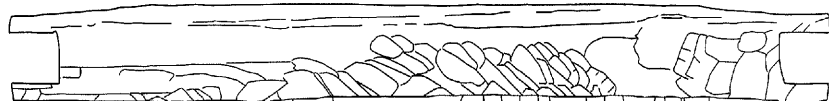
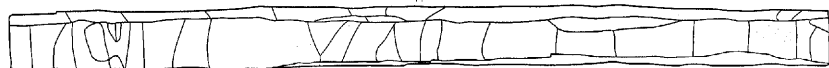
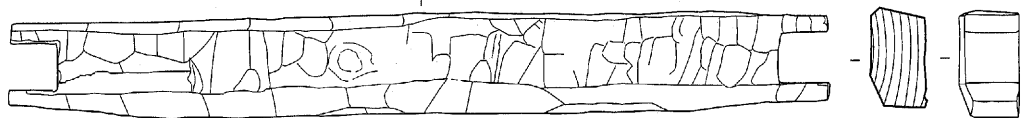


Fig. 64 SE150出土遺物実測図 (1/8)

0 40cm

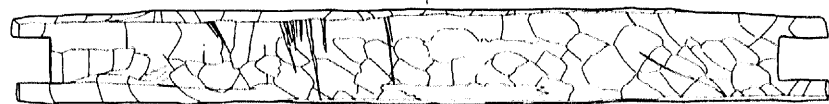
SE150井戸枠



24



25



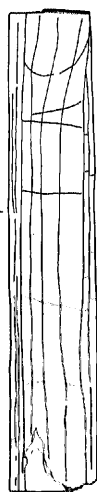
26



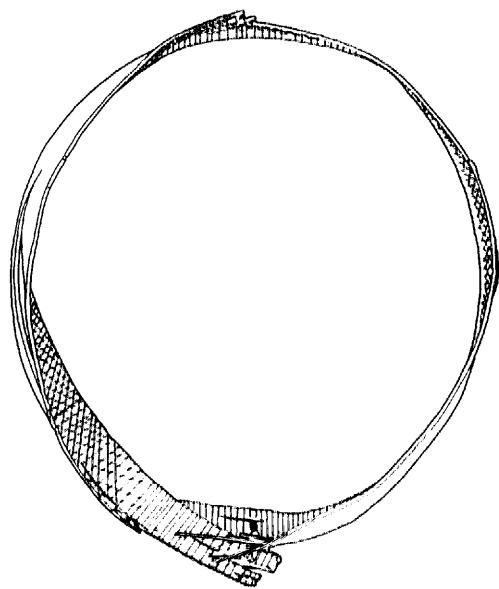
27



28



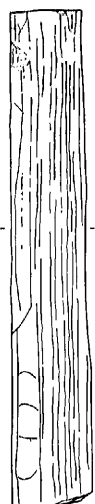
29



30



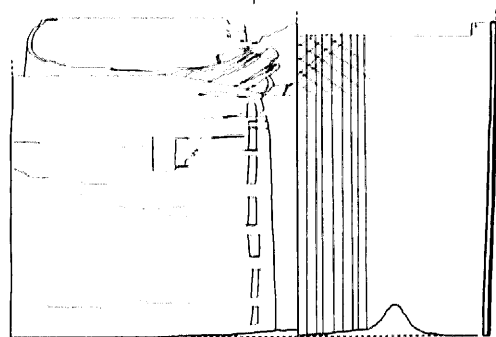
31



32



33



34

0 40cm

Fig. 65 SE150出土遺物実測図 (1/8)

度の白色砂粒を含む。焼成は良好で、内外面暗灰黄色、断面内外面よりやや薄い暗灰黄色を呈する。内面は使用により磨耗している。赤色顔料が付着する。底部外面に墨書が観察される。重複して書かれており、内容は不明である。

SE195 ねずみ色土出土遺物

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

SE205 暗灰土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

鉢 (4) 口縁部～体部上半の破片である。残存高 4.4cm を測る。内面は風化により調整不明、外面は回転ナデが施される。胎土は細かく、～1mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面橙色、断面灰色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (5) 底部の破片である。残存高 4.9cm、底径 12.6cm を測る。内外面とも回転ナデ、底部外面はナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm 程度の砂粒を含む。焼成、還元ともにやや良好で、内断面薄黄灰色、外面淡灰色～暗灰茶色を呈する。

SE205 暗褐色土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 (6) 口縁部の破片である。残存高 3.8cm を測る。内面は幅が狭く密な、ミガキ c が施される。外面は、指頭痕が観察されるが、風化により調整不明。胎土は精良。焼成はやや良好で、内外面灰黒色、断面白灰色を呈する。畿内系。

SE205 灰色粘出土遺物

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

SE235 黒灰土出土遺物

土師器

坏 a 土器計測表参照。

SE235 暗灰粘出土遺物 (Fig. 66)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 c 土器計測表参照。

木製品

下駄 (7、添付 CD P1.350) 残存長 22.1cm、幅 12.15cm、高さ 4.7cm を測る。台と歯を一木で作る。歯は平面六角形、立面は台形を呈する。前穴の周辺には指の痕とみられる窪みが観察される。右足用と想定される。

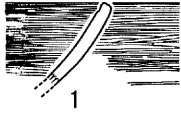
SE270 暗灰粘出土遺物 (Fig. 67)

土師器

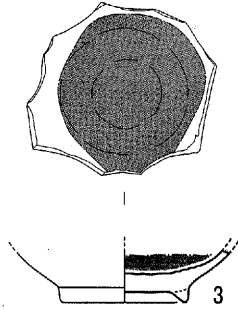
丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

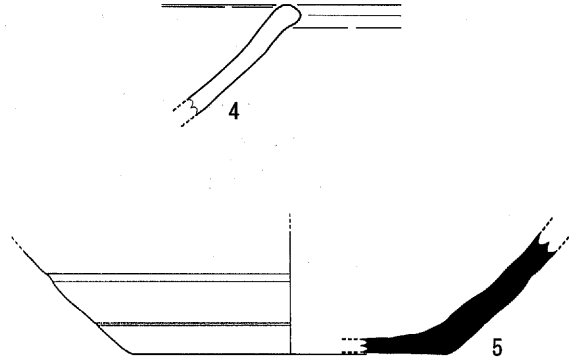
SE175暗褐土



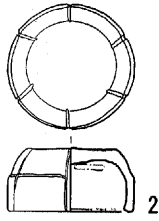
SE195濃ねずみ土



SE205暗灰土

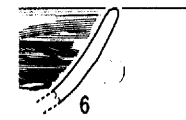


SE190暗褐土

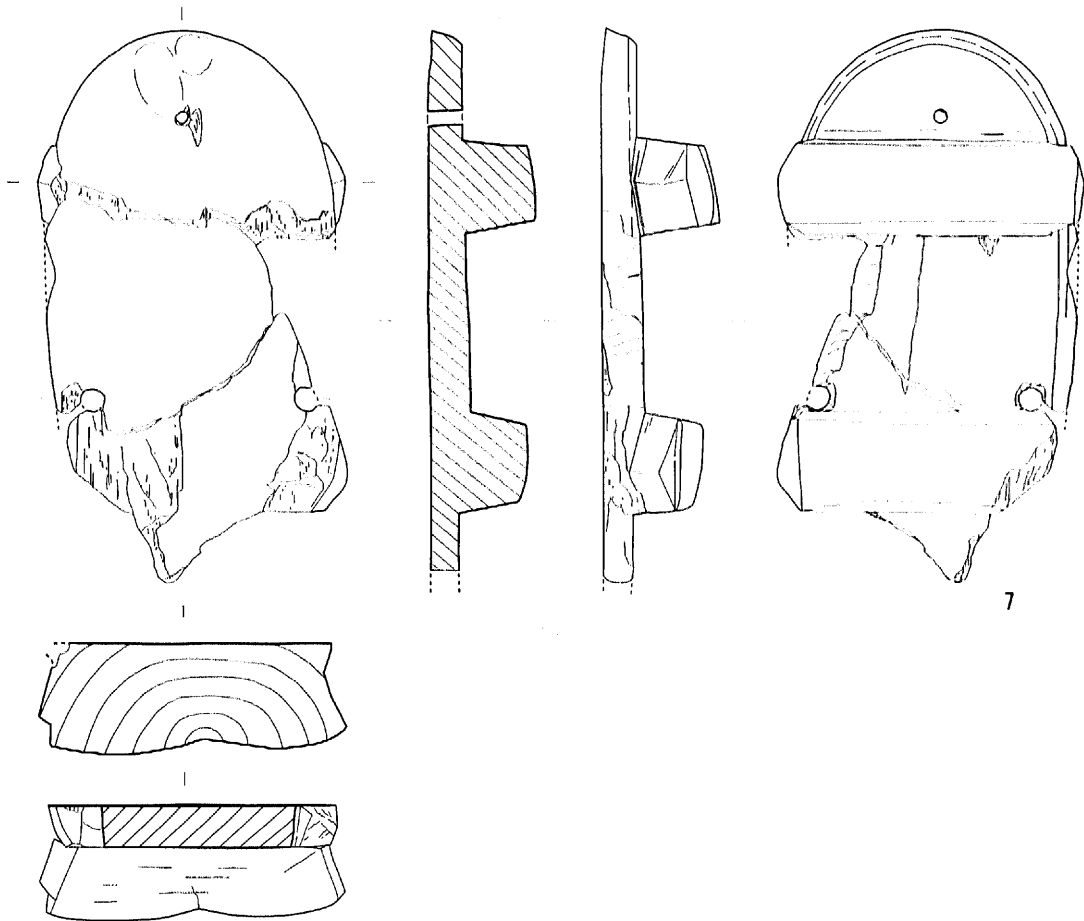


● 赤色顔料

SE205暗褐土



SE235暗灰粘



0 10cm

Fig. 66 井戸出土遺物実測図 (1/3)

鉢(1) 口縁部～底部の破片である。推定口径20.4cm、器高6.6cm、推定底径13.0cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面灰黄褐色～黒褐色、外面灰黄褐色～灰白色、断面にぶい黄橙色を呈する。内外面に黒色化、褐色化がみられる。

木製品

底板(2、添付CD P1.351) 曲物等の底板とみられる破片である。推定径5.65cm、残存高0.5cmを測る。上面は3～5mm程度の縁を残し黒色化している。下面は、縁から幅8mm程度を厚く残し、内部を鑿などにより削られている。側面には釘穴等はみられない。

石製品

石鍋(3) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径19.1cm、残存高5.75cmを測る。暗黒灰色～暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。内面は黒色化し、外面には煤が付着する。耳が1ヶ所残存する。

SE270 暗褐色土出土遺物 (Fig. 67)

土師器

鍋(4) 口縁部の破片である。残存高4.3cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は1～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面にぶい橙色、外面暗褐色～黒褐色、断面にぶい橙色～淡灰褐色を呈する。外面に煤の付着、褐色化がみられる。

須恵質土器

捏鉢(5) 口縁部の破片である。残存高2.85cmを測る。内面は回転ナデの後不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は7mm程度のチャートを含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面暗灰色、断面灰色を呈する。東播系。

SE280 暗褐色土出土遺物 (Fig. 67)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏c(6) 体部下半～底部の破片である。残存高4.1cm、推定高台径8.0cmを測る。内面はミガキb、外面は回転ナデが施される。外面に板状圧痕が残る。貼り付けにより高台が作られる。胎土は1mm程度の砂粒を微量含む。焼成は良好で、暗褐色～黒褐色を呈する。

碗c(7) 体部下半～底部の破片である。残存高4.1cm、推定高台径8.2cmを測る。底部内面はミガキc、体部外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦類

平瓦(8) 残存長14.2cm、残存幅16.4cm、厚さ1.4cmを測る。凹面は布目痕が残り、凸面は格子叩きが一部ナデ消される。側面には切断の痕跡が残り、凹面側から、厚みの半分程度まで切り込みを入れた後削った様子が観察される。削った部分は未調整である。胎土は密で、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、明灰色～薄赤茶色を呈する。

SE280 暗褐色土(青灰粘質シルトブロック) 出土遺物 (Fig. 67)

土師器

小丸坏a 土器計測表参照。

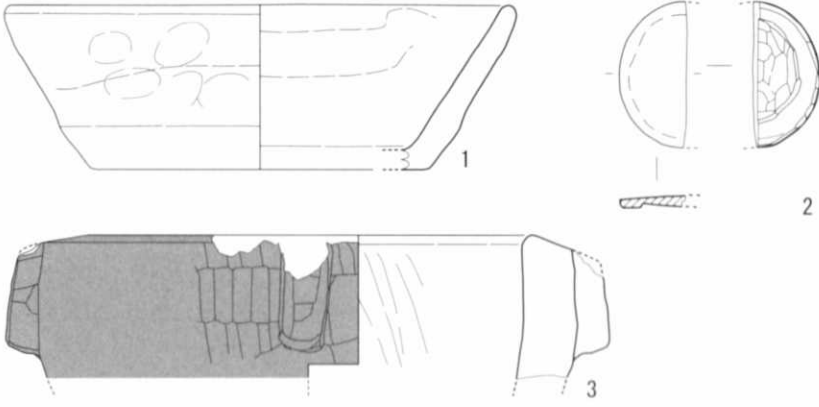
小丸坏c(9) 口径9.0cm、器高3.1cm、高台径4.65cmを測る。内面はミガキb、外面は回転ナデが施される。高台は貼り付けにより作られる。胎土は1～2mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、内面灰褐色、外断面褐灰色を呈する。

SE300 黒灰土出土遺物 (Fig. 67)

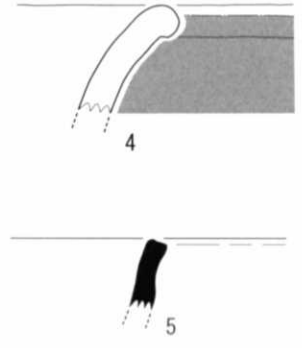
土師器

丸坏a 土器計測表参照。

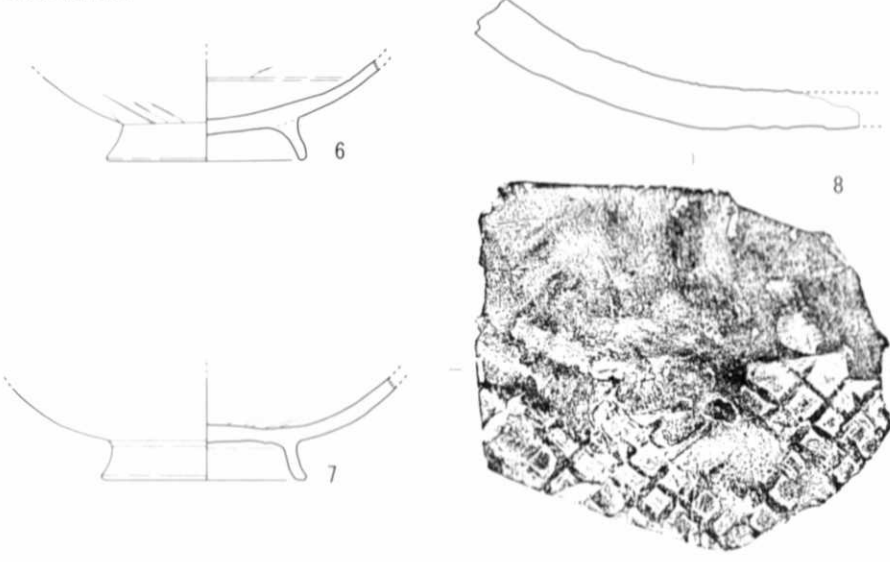
SE270暗灰粘



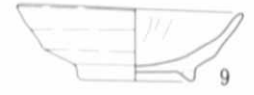
SE270暗褐土



SE280暗褐土



SE280暗褐土（青灰粘質シルトブロック）



SE300黒灰土

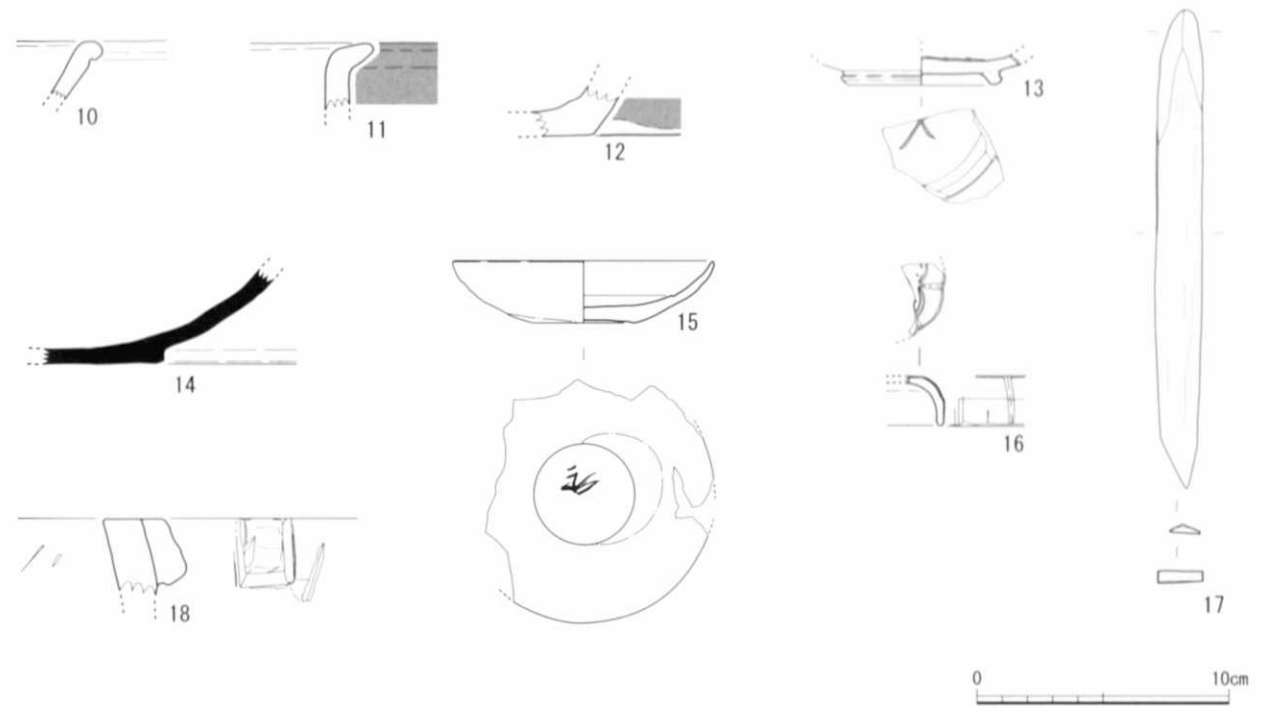


Fig. 67 井戸出土遺物実測図 (1/3)

小皿a1 土器計測表参照。

鉢? (10) 口縁部の破片である。残存高2.35cmを測る。調整は風化により不明。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は軟質で、淡褐色を呈する。

鍋 (11) 口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は~3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面淡褐色、外面暗褐色、断面褐灰色~にぶい橙色を呈する。外面に煤が付着する。

鍋 (12) 底部の破片である。残存高2.05cmを測る。内面はナデ、外面はヨコナデが施される。胎土は3~5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面暗褐色~淡褐色、断面褐灰色を呈する。外面に煤が付着する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

椀c (13、添付CD P1.352) 底部の破片である。残存高1.2cm、推定高台径6.4cmを測る。内面はミガキ、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面暗灰色、断面灰白色を呈する。底部外面に文字の下半部とみられる線刻を有す。

須恵質土器

捏鉢 (14) 底部の破片である。残存高3.85cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。底部は糸切りされる。内面は使用により磨耗している。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、暗青灰粘を呈する。

白磁

皿 (15、添付CD P1.353) 推定口径10.4cm、器高2.45cm、底径4.0cmを測る。胎土は精良で、薄灰色を呈する。焼成は良好。薄灰緑色を呈する釉が薄くかかる。底部外面に墨書が観察される。内容は不明である。VI-1a類。

青白磁

合子蓋 (16) 器高2.0cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄青白色を呈する釉が外面及び天井部内面にやや厚くかかる。

木製品

木べら (17、添付CD P1.354) 長さ19.6cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。先端はケズリにより成形される。

石製品

石鍋 (18) 残存高3.1cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。

SE300 灰色粘出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

SE320 黒褐土出土遺物 (Fig.68)

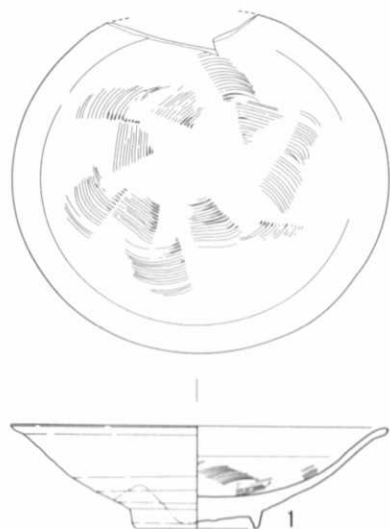
土師器

坏a 土器計測表参照。

白磁

椀 (1) 大半が残る。口径14.2cm、器高4.15cm、高台径4.6cmを測る。胎土は薄黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。内面に櫛描文が施される。VI-1b類。

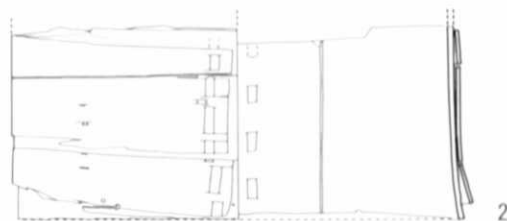
SE320黒褐土



SE320井戸枠



3



2

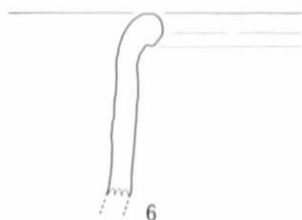


4

5

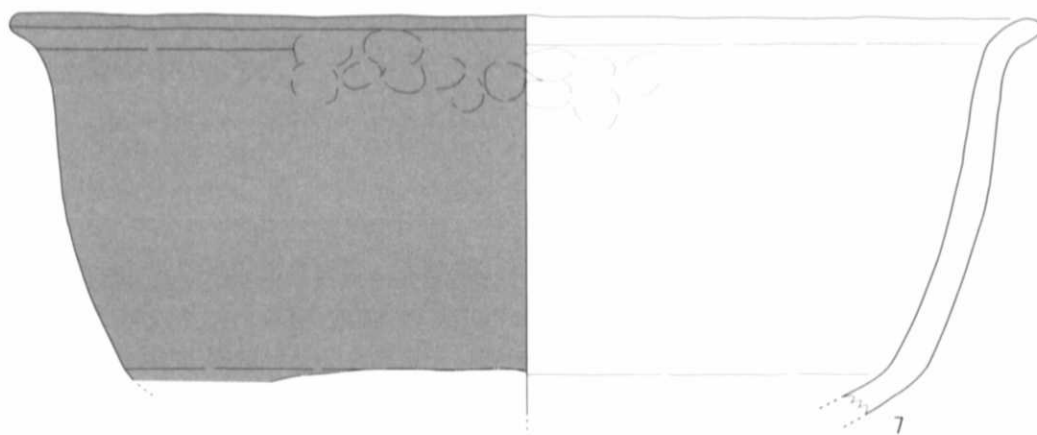
0 20cm

SE362黒灰土

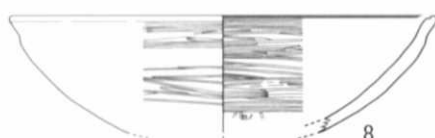


6

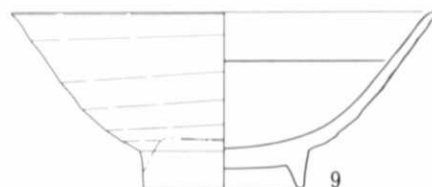
SE362暗灰土



7



8



9

Fig. 68 井戸出土遺物実測図 (2~5は1/8、その他は1/3)

0 10cm

SE320 暗褐色土（褐色粘ブロック）出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

椀 c 土器計測表参照。

瓦器

椀 c 土器計測表参照。

SE320 井戸枠 (Fig. 68)

木製品

曲物 (2、添付 CD P1.355) 径44.7cm、残存高20.4cmを測る。厚さ0.5cm程度の板を撓め、樹皮で留める。外側に厚さ0.3～0.4cm程度の帯板を3段有す。帯板の間には幅8cm、厚さ0.2cm程度の板を挟み込んでいる。

縦板 (3、添付 CD P1.356) 残存長49.8cm、残存幅12.7cm、厚さ2.1cmを測る。平面、側面は風化により加工痕は不明である。小口は弧状に加工される。鑿などによるものとみられる。

縦板 (4、添付 CD P1.357) 残存長40.65cm、残存幅13.7cm、厚さ1.2cmを測る。上の小口は平滑で、切断後に丁寧に削ったものとみられる。下の小口は手斧などによる加工痕が残る。他は割ったままで処理はされていないものとみられる。下位に長さ7.0cm、幅5.5cmの方形の割り貫きがあり、鑿などによるものとみられる。

縦板 (5、添付 CD P1.358) 残存長40.8cm、残存幅6.5cm、厚さ2.4cmを測る。上の小口は平滑な加工、下の小口は手斧などによる加工とみられる。他は割ったままとみられる。下位に長さ6.9cm、幅3.5cm以上の方形の割り貫きがあり、鑿などによるものとみられる。

SE362 黒灰土出土遺物 (Fig. 68)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鍋 (6) 口縁部の破片である。残存高7.35cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の白色砂粒を含む。焼成はやや良好で、内外面薄こげ茶色～薄灰褐色、断面薄灰色～薄灰褐色を呈する。全体に褐色化がみられる。

SE362 暗褐色土出土遺物

丸坏 a 土器計測表参照。

丸坏 c 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

SE362 暗灰土出土遺物 (Fig. 68)

土師器

鍋 (7) 口縁部～底部の一部の破片である。口径38.6cm、残存高16.1cm、底径29.8cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。口縁部付近には指押えの痕跡が残る。底部外面は不定方向のナデが施される。胎土はやや密で、1～4mm程度の砂粒を非常に多く含む。焼成は良好で、内面褐色～暗褐色～黒褐色、外面暗褐色～黒褐色～にぶい黄橙色、断面橙色～暗灰色～黒褐色を呈する。体部は内外面とも褐色化がみられ、外面には煤が付着する。

瓦器

椀 (8) 口縁部～体部の破片である。推定口径16.0cm、残存高4.7cmを測る。内外面とも幅の狭いミガキ c が施される。口縁部内面に沈線を有す。胎土はやや密。焼成、還元ともにやや良好で、内外面薄灰色～薄白灰色、断面白色を呈する。畿内系。

白磁

椀 (9) 大半が残る。口径16.0cm、器高7.05cm、高台径6.0cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑色釉がやや厚めにかかる。V-2a類。

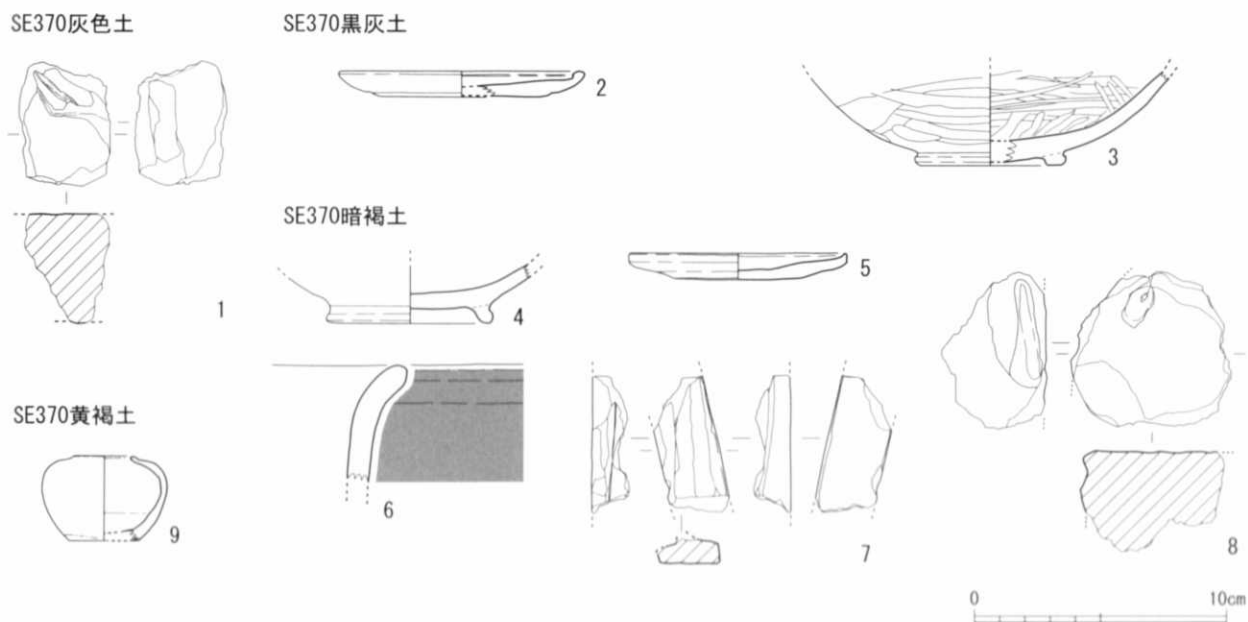


Fig. 69 井戸出土遺物実測図 (1/3)

SE370 灰色土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

丸坏 (添付 CD P1.359) 体部の破片とみられる。残存長 3.3cm、残存幅 6.9cm、厚さ 0.6cm を測る。調整は風化により不明である。胎土はやや密で、~1mm 程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、外面薄灰色、断面褐白色~薄灰色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

石製品

石鍋 (添付 CD P1.360) 口縁部の破片である。残存長 10.0cm、残存幅 10.5cm、厚さ 2.0cm を測る。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径 7.0mm の穿孔を有す。

その他

焼土塊 (1) 残存長 5.0cm、残存幅 3.7cm、厚さ 4.4cm を測る。胎土は 1~3mm 程度の砂粒を含み、茶褐色を呈する。器面に繊維質のものが押し当てられた痕跡が観察される。

SE370 黒灰土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小皿 a (2) 推定口径 9.8cm、器高 1.0cm、推定底径 6.4cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。底部はヘラ切りされ、板状圧痕を有す。胎土は精良、焼成は良好で、暗褐色~淡褐色を呈する。京都系。

瓦器

椀 c (3) 体部下半~底部の破片である。残存高 3.8cm、高台径 6.0cm を測る。内外面ともミガキ c が施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は 1mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、還元はやや不良で、内面黒色、外断面黒色~灰白色~灰色を呈する。

SE370 暗褐土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

丸坏 (添付 CD P1.361) 体部の破片とみられる。残存長 5.3cm、残存幅 4.6cm、厚さ 0.5cm を測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、~1mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、外面褐白色、断面褐白色~薄灰色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

丸坏 c × 椀 c (4) 底部の破片である。残存高 2.4cm、高台径 6.6cm を測る。内面は風化により調整不明、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は 1~2mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡褐色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a(5) 推定口径8.7cm、器高1.05cm、推定底径5.1cmを測る。体部は内外面とも回転ナデが施される。底部は、内面はナデが施され、外面はヘラ切り後板状圧痕を有す。胎土は精良。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。京都系。

鍋(6) 口縁部の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は1～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。外面に煤が付着する。

土製品

不明製品(7、添付CD P1.362) 残存長5.4cm、残存幅3.0cm、残存厚1.5cmを測る。器面は平滑な調整が施される。胎土は密。焼成は良好で、赤褐色～黒褐色を呈する。

その他

焼土塊(8) 残存長6.4cm、残存幅6.3cm、残存厚4.0cmを測る。胎土はやや粗く、1～3mm程度の砂粒を多く含む。赤褐色を呈する。

SE370 黄褐色土出土遺物 (Fig. 69)

黒色土器A類

碗c 土器計測表参照。

白磁

小壺(9、添付CD P1.363) 推定口径2.4cm、器高3.4cm、推定高台径2.8cmを測る。胎土は明褐色を呈し精良で、空隙が入る。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある明黄灰色を呈する釉が薄くかかる。外面下位～底部は露胎。

SE400 黒褐色土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿c 土器計測表参照。

瓦器

碗c(1、添付CD P1.364) 1/3程度残る。口径16.0cm、器高5.45cm、高台径6.75cmを測る。内外面ともミガキcが施される。底部外面には板状圧痕がみられ、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、内面暗灰色、外面暗灰色～灰白色、断面灰白色を呈する。底部外面に焼成後、「夫」字が線刻される。

碗c 土器計測表参照

小皿a1 土器計測表参照。

白磁

碗(2) 推定口径15.8cm、器高5.8cm、推定高台径5.6cmを測る。胎土は薄褐色を呈し精良で、7mm程度の赤色小石、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。にぶい光沢の薄黄褐色を呈する釉が薄くかかる。II-1類。

碗(3) 大半が残る。口径9.2cm、器高6.7cm、高台径7.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が厚くかかる。IV-1a類。

碗(4) 高台端部を欠く底部の破片である。残存高3.8cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。外面に篋描文が施される。XII-1b類。

中国陶器

鉢(5) 口縁部の破片である。残存高3.5cmを測る。胎土は暗灰色～暗赤灰色を呈し粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好。暗緑色を呈する釉が薄くかかる。I-2b類。

器種不明(6、添付CD P1.365) 口縁部の破片である。残存高6.55cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好で、薄黄褐色を呈する。

石製品

石鍋(7) 口縁部～体部の破片である。推定口径16.0cm、残存高7.0cm、推定底径13.8cmを測る。

暗青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳は2ヶ所残存する。残存位置から、耳は対角に4ヶ所あったものとみられる。

SE400 灰褐土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

坏 a 土器計測表参照。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

白磁

皿 (8) 大半が残る。口径10.7cm、器高2.7cm、高台径3.9cmを測る。胎土は薄灰白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑色を呈する釉が薄くかかる。VI-1b類。

鉢 (9) 体部下半～底部の破片である。残存高4.35cm、高台径8.5cmを測る。胎土は薄灰白色を呈し精良で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。光沢のある薄黄緑色を呈する釉が薄くかかる。II類。

中国陶器

盤 (10) 口縁部の破片である。残存高2.95cmを測る。胎土は白灰色を呈し精良で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。内面に黄緑色～乳白色を呈する釉が薄くかかる。

石製品

滑石製不明品 (11、添付CD P1.366) 器状の製品である。体部最大径6.0cm、器高2.2cmを測る。明黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。

SE400 黒灰土出土遺物 (Fig. 71)

土師器

坏 c (1) 口径17.9cm、器高5.25cm、推定高台径10.4cmを測る。内面はミガキc、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。底部外面には板状圧痕が観察される。胎土は3～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、淡褐色を呈する。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鍋 (2) 口縁部～体部の破片である。推定口径41.4cm、残存高18.1cmを測る。口縁部はヨコナデが施される。他の部分の調整は風化や煤の付着により不明である。胎土はやや密で、1～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面にぶい黄橙色～褐色～暗褐色、外面褐色～暗褐色～黒色、断面にぶい橙色を呈する。内面上半～外面に煤の付着、褐色化がみられる。

白磁

鉢 (3) 口縁部の破片である。残存高3.1cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。II類。

石製品

権 (4、添付CD P1.367) 長さ7.0cm、残存幅4.7cm、厚さ3.8cmを測る。明白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片の転用とみられ、石鍋の成形痕や使用時に付着した煤が残る。

SE400 灰色土出土遺物 (Fig. 71)

土師器

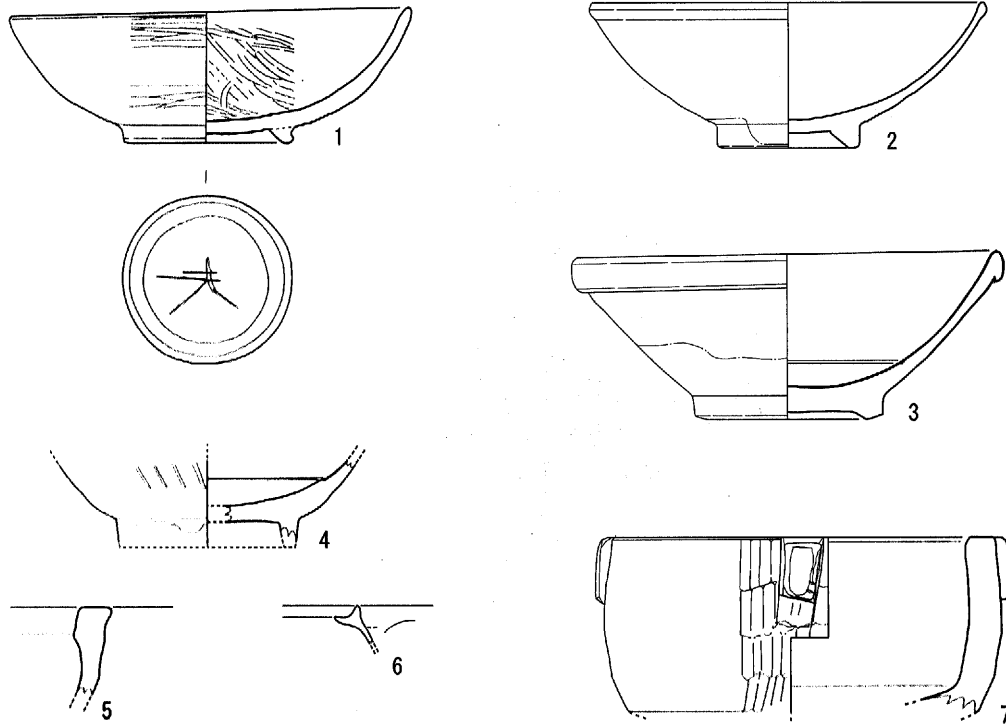
丸坏 a 土器計測表参照。

碗 c 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

火舎 (5) 推定口径16.8cm、器高9.4cm、推定底径13.0cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成は良好で、内面褐色～褐灰色～黒色、外面橙色～褐灰色～暗褐色、断面橙色～褐灰色～黒色を呈する。脚は2ヶ所残存する。残存位置から、脚は本来3ヶ所あったものとみられる。脚

SE400黒褐土



SE400灰褐土

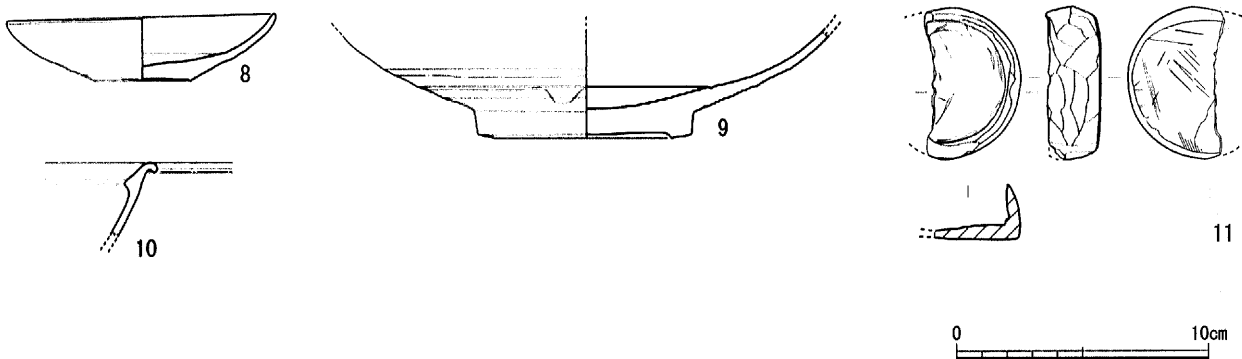


Fig. 70 SE400出土遺物実測図 (1/3)

は貼り付けにより作られ、指押えにより成形される。

器台(6) 脚柱部の破片である。残存高16.5cmを測る。外面は指ナデが施され、内面は棒状の芯の抜き取りにより成形される。胎土は雲母を含む。焼成はやや軟質で、外面淡橙色～暗褐色、断面端橙色～橙色を呈する。

黒色土器A類

椀c(7) 底部の破片である。残存高1.9cm、推定高台径6.3cmを測る。内面はミガキc、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面黒色、外断面淡褐色～灰色を呈する。

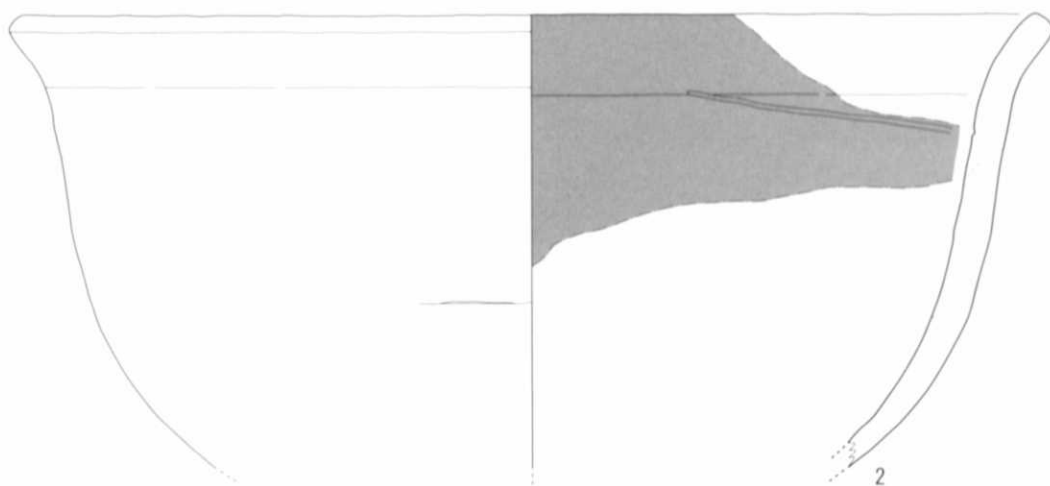
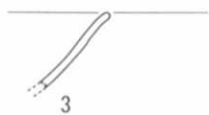
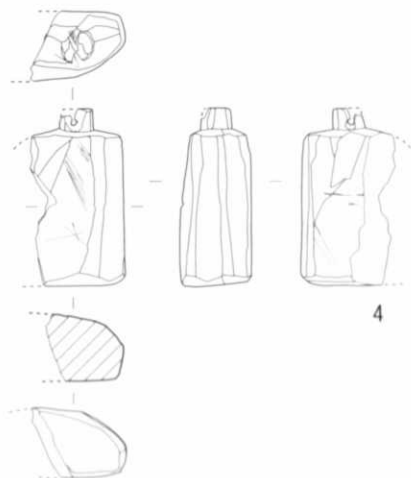
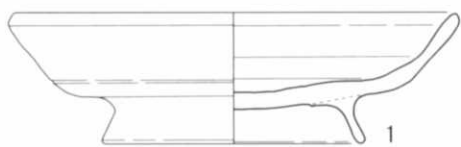
瓦器

椀c(8、添付CD P1.368) 推定口径14.8cm、器高5.1cm、高台径7.0cmを測る。内外面ともミガキcが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒灰色、断面灰白色を呈する。底部外面に「夫」の線刻を有す。

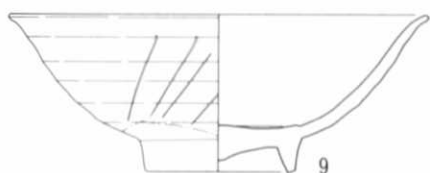
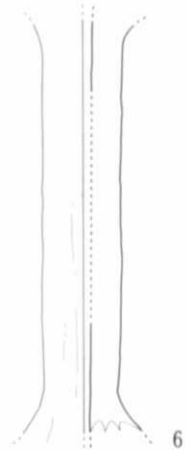
白磁

椀(9) 推定口径16.8cm、器高6.3cm、高台径6.0cmを測る。胎土は灰白色を呈し、密で、～1mm程度の黒色粒を含む。焼成は良好。釉はにぶい光沢の白色を呈し、泡状化する。V-2b類。

SE400黒灰土



SE400灰色土



SE400暗灰粘



0 10cm

Fig. 71 SE400出土遺物実測図 (1/3)

瓦類

瓦玉 (10、添付 CD Pl. 369) 長さ 3.05cm、幅 3.55cm、厚さ 1.3cm を測る。ケズリにより成形される。胎土は密で、～1mm 程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、灰白色～薄黒灰色を呈する。

土製品

土玉 (11、添付 CD Pl. 370) 径 2.2cm の球形を呈する。胎土は精良。焼成は良好で、褐色～暗褐色を呈する。

SE400 暗灰粘出土遺物 (Fig. 71)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

椀c 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿 a1 (12、添付 CD Pl. 371) 推定口径 8.1cm、残存高 0.85cm、推定底径 6.1cm を測る。体部は内外面とも回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り後、ナデが施される。胎土は密。焼成は良好で、薄白褐色を呈する。内外面に墨書が観察される。内容は不明。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

小皿a 土器計測表参照。

SE405 黒褐土出土遺物 (Fig. 72)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (1) 口縁部の破片である。残存高 1.8cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

白磁

壺類 (2) 口縁部の破片である。推定口径 9.5cm、残存高 2.7cm を測る。胎土は灰色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある薄青灰色を呈する釉が薄くかかる。

中国陶器

壺 (3、添付 CD Pl. 372) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径 10.0cm、残存高 5.15cm を測る。胎土は明黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。口縁部内外面～体部外面上位に、暗茶褐色～茶褐色を呈する釉がかかるが、ほとんどはげている。体部外面に線刻により文様が施される。口縁部に目跡が残る。未分類。

SE405 暗灰土出土遺物 (Fig. 72)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

鉢 (4) 推定口径 28.9cm、残存高 11.7cm、推定底径 13.8cm を測る。内面の調整は風化により不明、外面はナデが施される。胎土は 2～3mm 程度の砂粒を多く含む。焼成は軟質で、灰色を呈する。

SE410 黒灰土出土遺物 (Fig. 72)

須恵器

甕 (5) 口縁部の破片である。残存高 4.9cm を測る。内外面とも回転ナデが施される。外面下位には平行叩き痕が観察される。胎土は精良。焼成はやや軟質、還元はやや不良で瓦質に仕上がる。内面黒灰色～灰白色、外面黒灰色、断面灰白色を呈する。

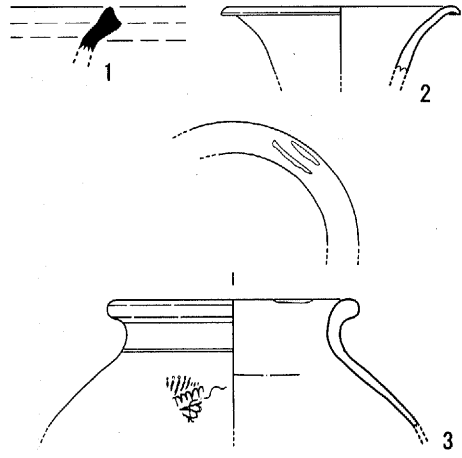
土師器

坏a 土器計測表参照。

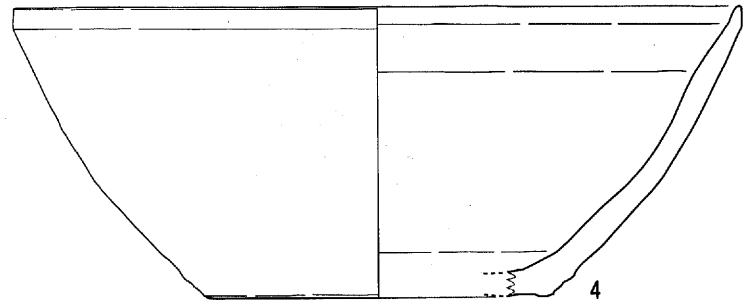
丸坏a 土器計測表参照。

椀c 土器計測表参照。

SE405黒褐土



SE405暗灰土



SE410黒灰土

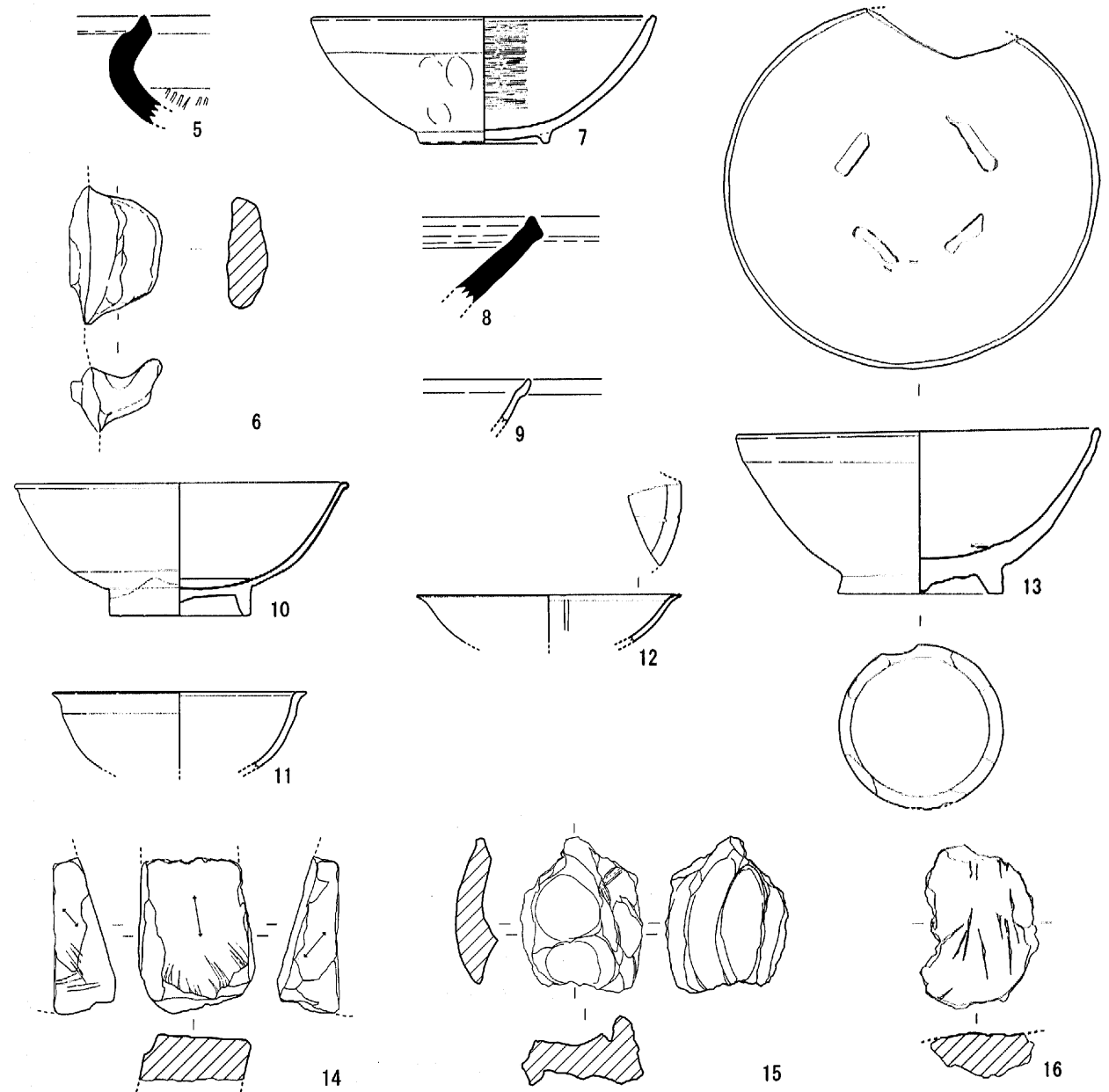


Fig. 72 井戸出土遺物実測図 (1/3)



小皿a1 土器計測表参照。

把手(6) 残存長6.8cm、残存幅4.2cmを測る。指押えにより成形される。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

瓦器

椀c(7) 推定口径15.6cm、残存高5.8cm、推定高台径5.4cmを測る。内面は幅の狭く密なミガキcが施され、外面は指頭痕が観察されるが、調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒灰色、断面灰白色～灰褐色を呈する。畿内系。

須恵質土器

捏鉢(8) 口縁部の破片である。残存高3.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施される。胎土は1～2mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。東播系。

灰釉陶器

玉縁椀(9) 口縁部の破片である。残存高2.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好で、明灰色を呈する。内外面に、白灰色を呈する釉が薄くかかる。百代寺窯式。

白磁

椀(10) ほぼ完存する。口径15.15cm、器高6.05cm、高台径6.4cmを測る。胎土は明白褐色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄褐色を呈する釉が厚くかかる。釉には貫入が入る。V-3a類。

小椀(11) 口縁部の破片である。推定口径11.5cm、残存高3.5cmを測る。胎土は白色を呈し精良で、空隙が入る。焼成は良好。光沢のある薄緑灰色を呈する釉がやや厚くかかる。XIV類。

皿(12) 口縁部の破片である。推定口径12.0cm、残存高2.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄灰色～薄灰褐色を呈する釉が薄くかかる。白堆線、輪花が1ヶ所残存する。V-2b類。

高麗青磁

椀(13) ほぼ完存する。口径16.5cm、器高7.25cm、高台径7.5cmを測る。胎土は灰色を呈しやや精良で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。にぶい光沢の明黄緑色を呈する釉がかかる。内面見込み及び高台に目跡が残る。III-2b類。

石製品

砥石(14) 残存長7.0cm、幅5.3cm、残存厚2.8cmを測る。黄褐色を呈する砂岩製である。

その他

焼土塊(15) 残存長7.1cm、残存幅5.5cm、残存厚3.1cmを測る。胎土は1～4mm程度の砂粒を多く含む、茶褐色を呈する。

焼土塊(16) 残存長7.1cm、残存幅5.5cm、残存厚3.1cmを測る。胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む、茶褐色を呈する。

SE410 灰褐色土出土遺物 (Fig. 73)

須恵質土器

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

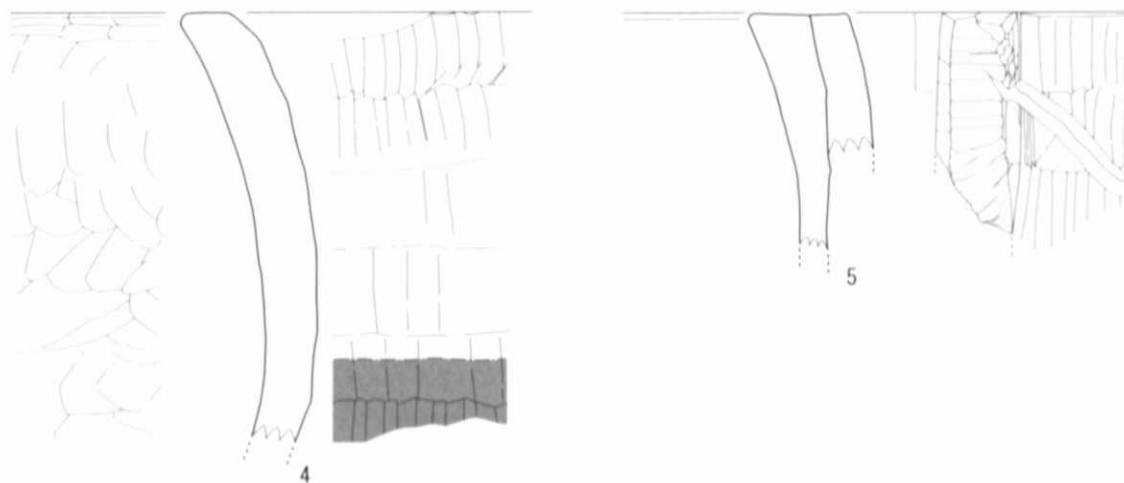
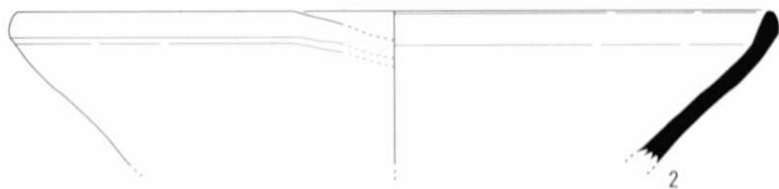
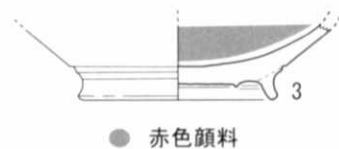
捏鉢(1) 口縁部～体部の破片である。推定口径30.6cm、残存高3.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土は3～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面暗灰色、断面淡赤褐色～暗灰色を呈する。東播系。

捏鉢(2) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径30.6cm、残存高6.1cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、内面暗灰色、外面灰色～暗灰色、断面灰色を呈する。東播系。

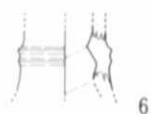
灰釉陶器

椀(3) 底部の破片である。残存高3.0cm、推定高台径7.4cmを測る。内面は磨耗により調整不明、外面は回転ナデが施される。底部は糸切りされる。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼

SE410灰褐土



SE415黒灰土



SE415灰色土

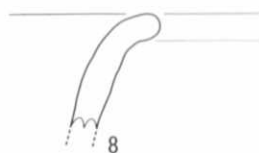


Fig. 73 井戸出土遺物実測図 (1/3)

成は良好で、灰色を呈する。内面に灰白色を呈する釉がかかる。内面にうっすらと赤色顔料が付着する。よく擦られており赤色顔料を擦ったものとみられる。

石製品

石鍋(4) 残存高17.2cmを測る。口径60cm程度に復元される。明白銀色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。外面下位に煤が付着する。

石鍋(5) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.45cmを測る。口径は25cm程度に復元される。淡白茶色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。割れ口を削っており、破片を転用しようとしたものとみられる。

SE410 暗灰粘出土遺物

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

SE415 黒灰土出土遺物 (Fig. 73)

青白磁

壺類(6) 頸部の破片である。残存高2.65cmを測る。胎土は白色を呈し精良で、黒色粒を含む。焼成は良好。外面に、光沢のある薄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。内面は露胎。

SE415 灰色土出土遺物 (Fig. 73)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鍋(7) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径37.6cm、残存高9.0cmを測る。内面は風化により調整不明、外面はヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗褐灰色、外断面暗橙色を呈する。

鍋(8) 口縁部の破片である。残存高4.6cmを測る。内外面ともにヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面暗褐灰色、断面暗灰橙色を呈する。内外面全体に褐色化がみられる。

黒色土器 B 類

椀 c 土器計測表参照。

白磁

皿(9) 大半が残る。口径9.8cm、器高2.6cm、底径3.5cmを測る。胎土は明白褐色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄灰色を呈する釉が薄くかかる。V-2a 類。

SE415 灰色土(黄褐粘ブロック)出土遺物

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

SE415 暗灰粘出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

SE415 暗灰粘(オケ外)出土遺物

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

SE415 桶 (Fig. 74・75)

番号はFig.74・75における番号

木製品 (表 2)

結桶側板 (1～20、添付CD P1.373～392) 20枚で構成される。残存長26.3～55.2cm、幅3.3～11.15cm、厚さ1.0～1.4cmを測る。側面は非常に平滑な処理が施される。内外面は手斧などにより削られるとみられるが不明瞭である。

結桶底板 (21、添付CD P1.393) 径54.5cm、厚さ2.65cmを測る。割った後部分的に手斧などで削られる。側面は加工痕は残っておらず、丁寧に仕上げられている。2つの部材から成り、部材はダボにより連結する。4ヶ所にV字形の切り込みが入る。切り込みは鑿などによるものとみられる。

番号	Pl.	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
1	373	側板	44.4 +α	11.3	1.1
2	374	側板	43.0 +α	9.6	1.2
3	375	側板	43.9 +α	8.1	1.3
4	376	側板	44.1 +α	10.7	1.3
5	377	側板	44.4 +α	10.1	1.1
6	378	側板	36.3 +α	9.1	1.1
7	379	側板	32.7 +α	10.9	1.0
8	380	側板	26.3 +α	3.3	1.1
9	381	側板	33.3 +α	11.1	1.3
10	382	側板	30.3 +α	10.2	1.3
11	383	側板	36.4 +α	10.6	1.3
12	384	側板	33.5 +α	4.7	1.1
13	385	側板	35.5 +α	10.0	1.4
14	386	側板	41.8 +α	11.1	1.3
15	387	側板	38.7 +α	11.2	1.2
16	388	側板	42.0 +α	11.0	1.3
17	389	側板	41.0 +α	10.2	1.2
18	390	側板	55.2 +α	9.5	1.2
19	391	側板	42.3 +α	11.5	1.1
20	392	側板	48.3 +α	8.5	1.2
21	393	底板	54.5	-	2.7

表 2 SE415 桶計測表

SE445 暗灰粘出土遺物 (Fig. 76)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

石製品

紡錘車 (1、添付CD P1.394) 外径8.7cmを測る。明黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。中央に1.7cm四方の方形の穴が穿たれる。

SE445 暗褐色土出土遺物 (Fig. 76)

黒色土器 A 類

小皿 a1 (2) 推定口径11.1cm、器高1.4cm、推定底径8.2cmを測る。内面は風化により不明瞭ながらミガキが施される。外面は回転ナデが施される。底部はヘラ切りの後、板状圧痕がみられる。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面黒褐色、外断面暗灰黄色を呈する。

瓦器

碗 c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (3) 口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成はやや不良、還元はやや良好、内断面浅灰黄色、外面暗灰黄色を呈する。東播系。

白磁

壺類 (4) 体部の破片である。残存高2.9cmを測る。外面上位に横方向の沈線、その沈線以下に縦方向の沈線を有す。胎土は精良で、白色を呈する。焼成は良好。外面に、白色を呈する釉が薄くかかる。

不明陶器

甕 (5) 口縁部～体部上半の破片である。残存高8.0cmを測る。口径33cm程に復元される。体部内面はあて具痕をナデ消している。口縁部は折り返しにより肥厚させる。胎土はやや密で、1mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面紫灰色～赤灰色、断面青灰色を呈する。外面及び頸部内面に、緑褐色を呈する釉がかかる。釉は部分的に不透明な青灰色に発色する。

SE415桶

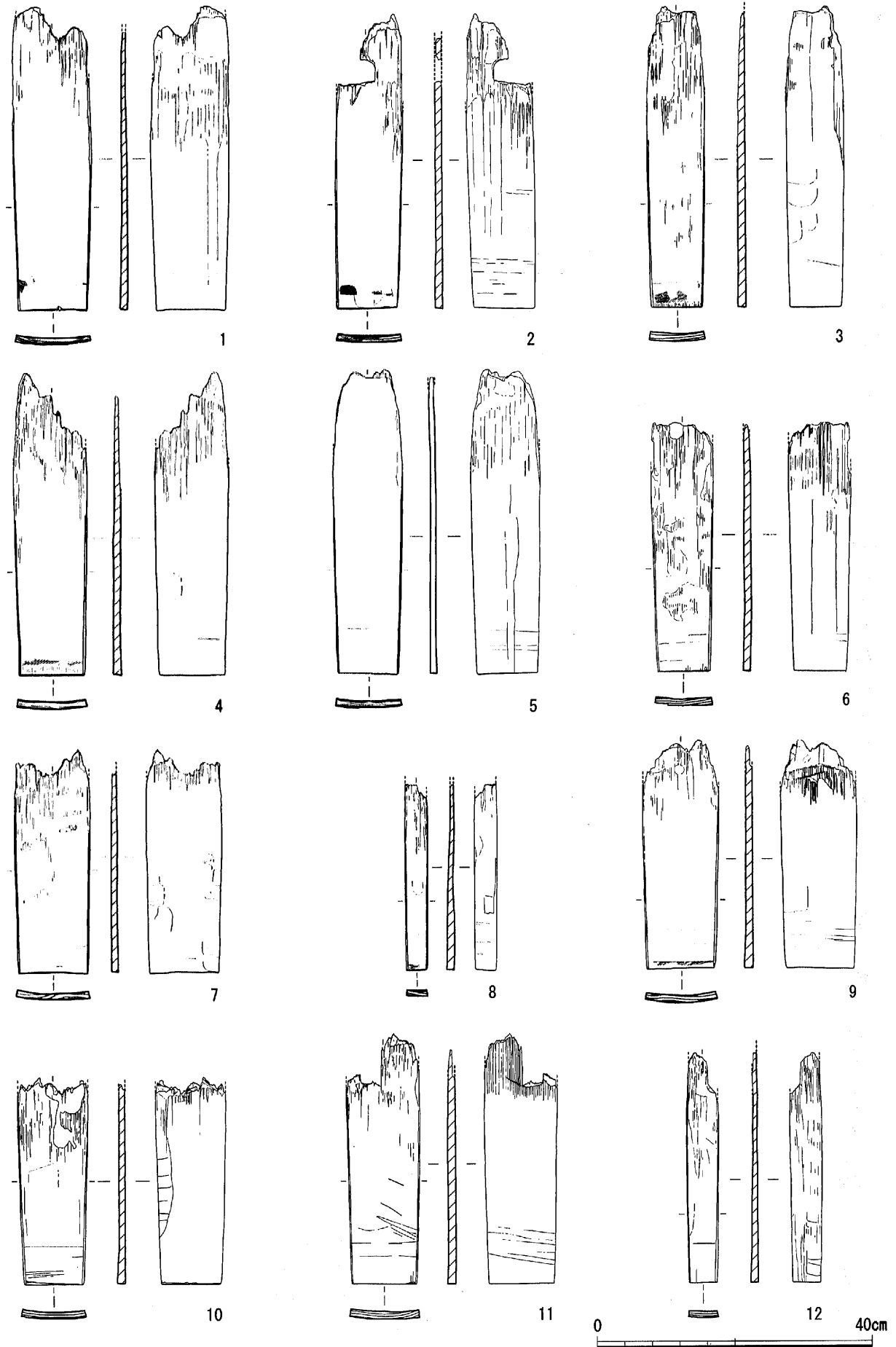


Fig. 74 SE415出土遺物実測図 (1/8)

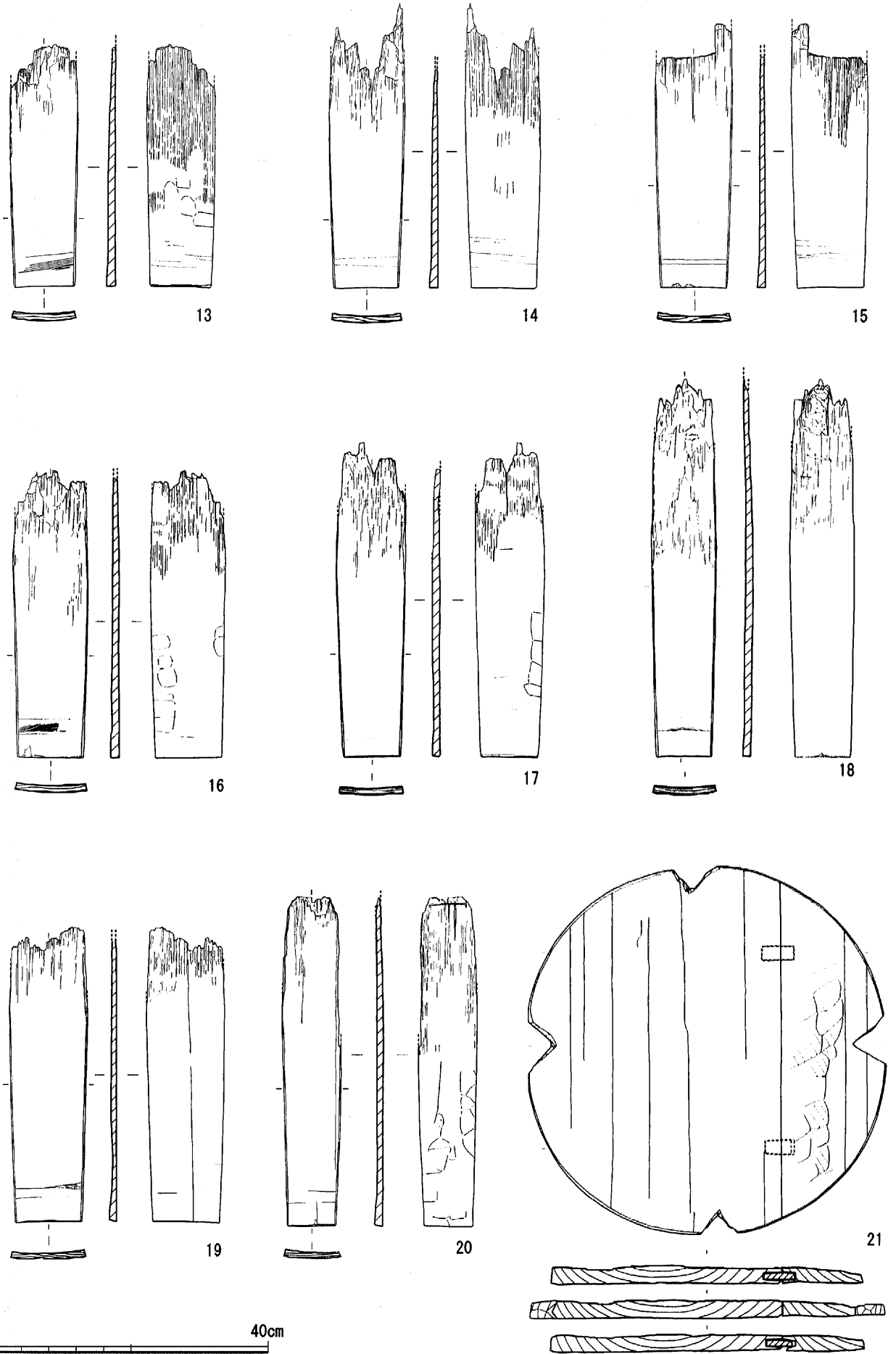
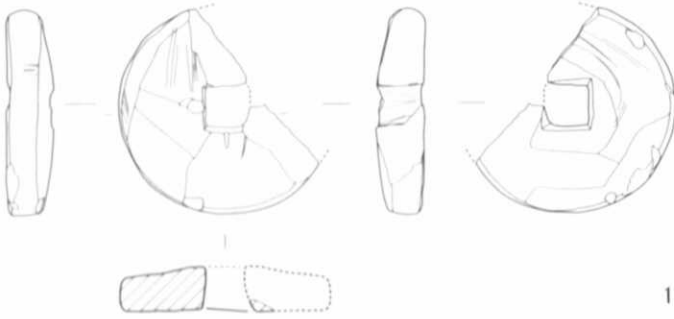


Fig. 75 SE415出土遺物実測図 (1/8)

SE445暗灰粘



SE445暗褐土

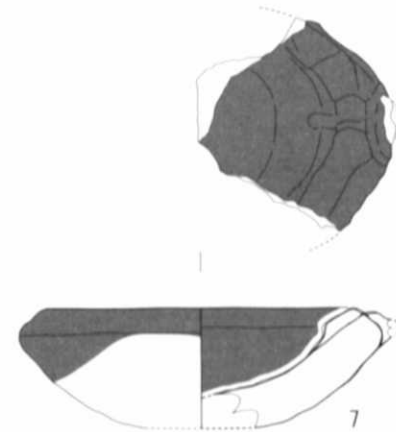
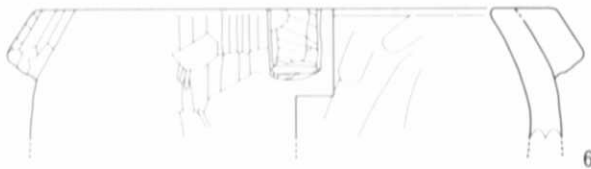
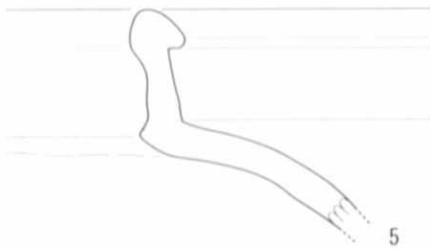
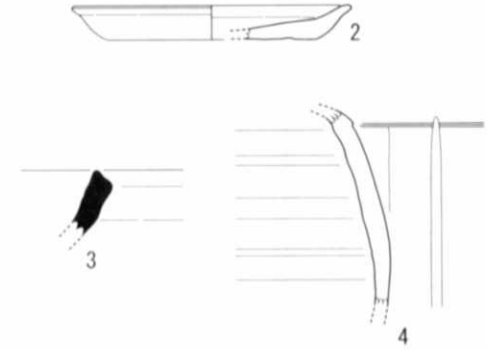


Fig. 76 SE445出土遺物実測図 (1/3)



石製品

石鍋 (6) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径27.2cm、残存高5.25cmを測る。明褐灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。

土製品

取瓶 (7) 口縁部～体部の破片である。推定口径14.4cm、残存高4.8cmを測る。内面は金属付着物により調整不明、外面は不定方向のナデが施される。胎土は粗く、～1mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外断面は灰色を呈する。内外面に赤茶色～橙色～黒褐色～淡緑黄色～濃緑色を呈する金属が付着する。注口が1ヶ所残存する。

SE455 黒褐土出土遺物

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

SE455 灰褐土出土遺物 (Fig. 77)

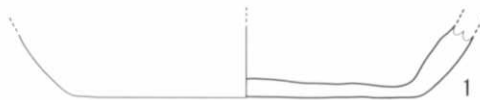
土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (1) 底部の破片である。残存高2.9cm、推定底径13.8cmを測る。体部内面は風化により調整不明、外面はヨコナデが施される。底部は内外面とも不定方向のナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の白色粒を微量含む。焼成はやや不良で、明黄褐色～暗黄褐色を呈する。外面に褐色化がみられ、二次的に火を受けているものと推察される。

SE455灰褐土



SE455暗褐粘

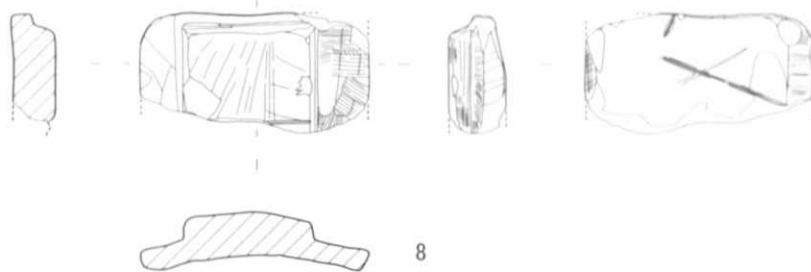
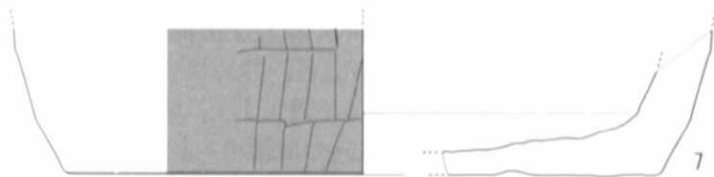
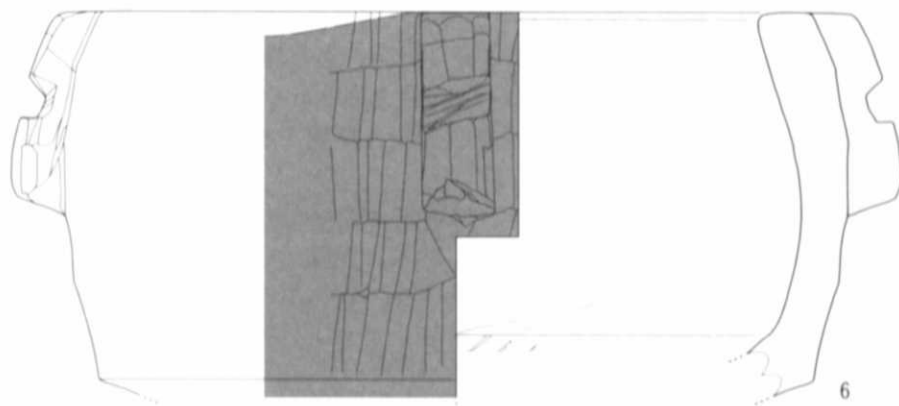
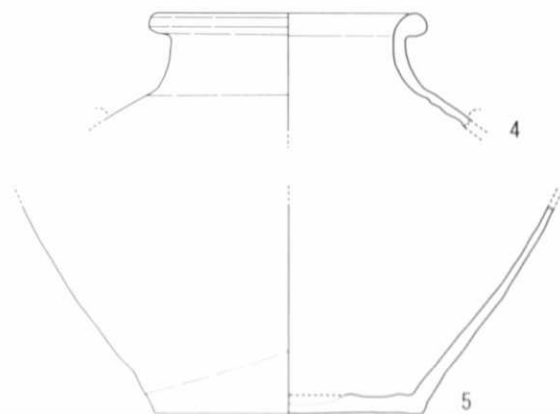
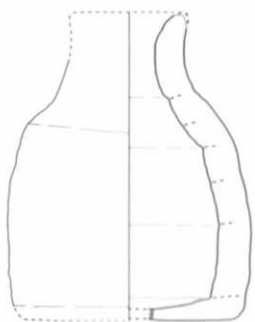


Fig. 77 SE455出土遺物実測図 (1/3)

瓦器

- 椀c 土器計測表参照。
小皿a1 土器計測表参照。
小皿a 土器計測表参照。

SE455 黒灰土出土遺物

土師器

- 丸坏a 土器計測表参照。

丸坏（添付CD P1.395） 口縁部の破片である。残存長2.3cm、残存幅3.1cm、厚さ0.35cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成はやや良好で、内外面にぶい橙色、断面にぶい橙色～褐白色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

SE455 暗褐粘出土遺物 (Fig.77)

土師器

- 丸坏a 土器計測表参照。
小皿a1 土器計測表参照。

壺(2) 推定口径4.7cm、残存高12.2cm、推定底径9.2cmを測る。内面はナデ、外面はヨコナデ、底部外面はナデが施される。頸部内面には絞り痕が観察される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、薄白褐色～濃こげ茶色を呈する。

白磁

水滴(3、添付CD P1.396) 把手を欠くが大半が残る。胴部最大径4.25cm、器高3.3cm、底径2.8cmを測る。胎土は薄黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑色～薄茶色を呈する釉がかかる。外面下位は露胎。天井部に珠文、肉彫りにより六弁を描く。穿孔が2ヶ所観察される。内部に何か（小石或いは器壁が剥離したもの等）が入っていることが窺えるが、現状では不明である。

中国陶器

耳壺(4) 口縁部の破片である。口径11.0cm、残存高4.65cmを測る。胎土は薄灰色を呈し、精良。焼成は良好。外面に薄黄緑色を呈する釉が極薄くかかる。IV類？。

壺類(5) 体部下半～底部の破片である。残存高9.3cm、底径10.5cmを測る。胎土は薄灰色を呈し、精良。焼成は良好。外面に薄黄緑色を呈する釉が極薄くかかる。外面下位は露胎。

石製品

石鍋(6) 口縁部～底部の破片である。推定口径28.2cm、残存高15.4cm、推定底径28.4cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に褐色化、煤の付着がみられる。

石鍋(7) 体部下半～底部の破片である。残存高5.8cm、推定底径23.6cmを測る。内外面ともケズリにより成形される。暗灰黄色～暗銀色を呈する滑石製である。外面は底部にまで煤が付着する。

滑石製加工品(8、添付CD P1.397) 残存長4.8cm、幅9.1cm、厚さ1.8cmを測る。ケズリにより成形される。暗白灰色を呈する滑石製である。横軸方向の断面の形状や突出部の上面及び下面のケズリの状況から、石鍋の破片を転用したものと推測される。

SE465 黄褐土出土遺物 (Fig.78)

土師器

坏a(1) ほぼ完存する。口径14.4cm、器高2.5cm、底径9.4cmを測る。底部は指押えにより丸みを持たせている。内外面とも、体部上半はヨコナデ、体部下半～底部は不定方向のナデが施される。胎土は密。焼成はやや良好で、内面薄白褐色、外面薄白褐色～薄黒褐色、断面薄灰色を呈する。京都系。

- 丸坏a 土器計測表参照。

SE465 暗灰土出土遺物 (Fig. 78)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

石製品

滑石製品 (2、添付 CD P1.398) 残存長13.0cm、残存幅5.6cm、厚さ2.0cmを測る。灰白色を呈する滑石製である。石鍋の破片を転用したものとみられ、周縁部を新たにケズリ、成形する。上下面には石鍋使用時に付着した煤や成形痕が残る。

SE480 暗褐土出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE480 灰色粘出土遺物 (Fig. 78)

白磁

小壺 (3、添付 CD P1.399) 体部～底部の破片である。残存高6.6cm、高台径3.9cmを測る。胎土は明灰白色を呈し、精良。焼成は良好。外面に、やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉がやや厚くかかる。華南産。

SE485 暗褐土出土遺物

土師器

坏a 土器計測表参照。

坏? (添付 CD P1.400) 口縁部の破片である。残存長2.8cm、残存幅3.6cm、厚さ0.35cmを測る。調整は風化により不明である。胎土はやや密。焼成はやや良好で、褐白色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

SE485 暗褐土 (黄白粘ブロック) 出土遺物 (Fig. 78)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

石製品

石鏃 (4) 残存長1.6cm、残存幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。暗灰黒色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SE490 黒色土出土遺物 (Fig. 78)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢 (5) 注口を含む口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。調整は風化により不明。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、明灰黄色を呈する。

黒色土器A類

片 (添付 CD P1.401) 底部の破片である。残存長4.5cm、残存幅4.9cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土はやや密。焼成はやや良好で、灰白色～褐白色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (6) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径34.2cm、残存高6.9cmを測る。内外面とも回

転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～4mmの砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、明黄白色を呈する。東播系。

石製品

石鍋(7) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径14.6cm、残存高5.1cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に煤が付着する。

SE490 暗灰粘出土遺物 (Fig.78)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀c(8) 完形品である。口径17.6cm、器高5.9cm、高台径7.2cmを測る。内外面ともミガキcが施される。底部外面には板状圧痕がみられ、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部は暗黒灰色、その他は明白灰色を呈する。体部外面下半に、焼成前に「カ」字状の線刻が施される。

椀c(9) 推定口径16.2cm、器高4.85cm、高台径7.1cmを測る。内外面ともミガキcが施される。底部外面は回転ナデが施され、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、焼成、還元ともに良好、内断面明灰色、外面明灰色～暗黒灰色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

SE495 暗褐色出土遺物 (Fig.78)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢(10) 口縁部の破片である。残存高2.8cmを測る。内面は風化により調整不明、外面はヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面暗茶褐色、外面薄黄褐色、断面薄黄褐色～明茶褐色を呈する。

鉢(11) 口縁部の破片である。残存高4.9cmを測る。内外面ともヨコナデの後、ミガキが施される。胎土はやや密で、～1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、内外面薄橙色、断面薄橙色～明黄灰色～暗灰色を呈する。内面の口縁部付近が斑に褐色化する。

片(添付CD Pl.402) 残存長1.9cm、残存幅2.7cm、厚さ0.3cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、褐色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢(12) 口縁部の破片である。残存高2.85cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の赤色粒を微量含む。焼成はやや良好、還元はやや不良で、内面明白灰色、外断面薄黄灰色、口縁部外面暗黄灰色を呈する。東播系。

白磁

椀(13、添付CD Pl.403) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径13.3cm、残存高3.95cmを測る。胎土は薄黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある薄灰黄色を呈する釉が薄くかかる。広東系、未分類。

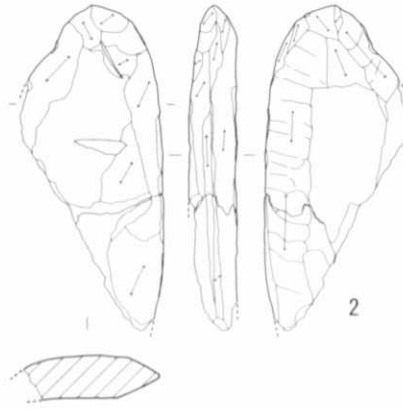
石製品

石鍋(14) 口縁部の破片である。残存高6.9cmを測る。内外面ともケズリにより成形される。暗黒色～暗灰色～灰白色を呈する滑石製である。外面に褐色化、黒色化がみられる。

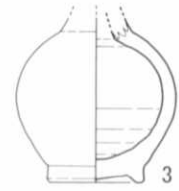
SE465黄褐土



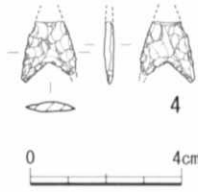
SE465暗灰土



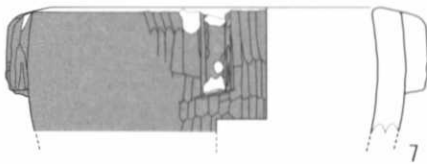
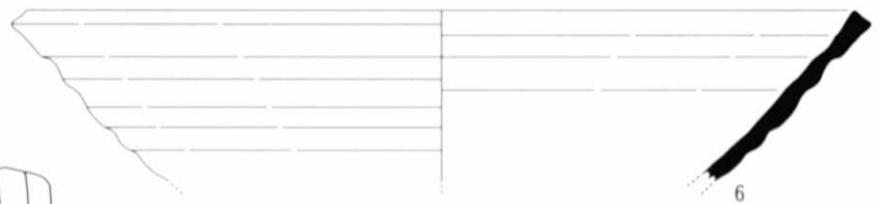
SE480灰色粘



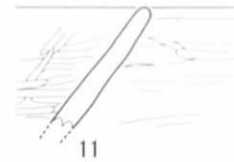
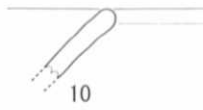
SE485暗褐土 (黄白粘ブロック)



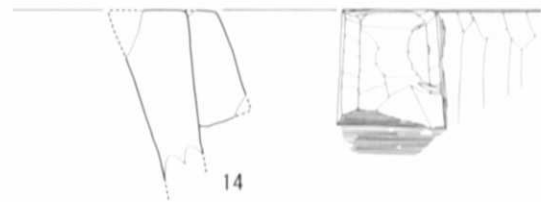
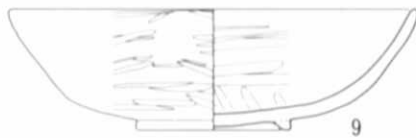
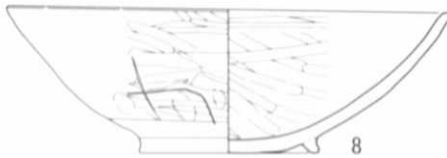
SE490黒色土



SE495暗褐土



SE490暗灰粘



SE495黒褐土



SE500暗灰土

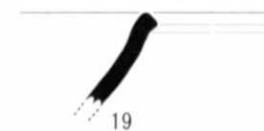
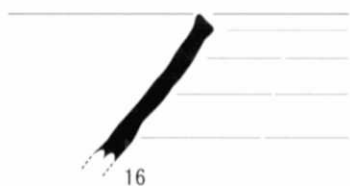


Fig. 78 井戸出土遺物実測図 (4は1/2、その他は1/3)

SE495 黒褐色土出土遺物 (Fig. 78)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢 (15) 口縁～体部の破片である。推定口径29.2cm、残存高6.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、外面下位には指頭痕が残る。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、内外面明橙色、断面浅黄橙色を呈する。内面口縁部付近が斑に褐色化する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (16) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、明灰色を呈する。東播系。

灰釉陶器

壺? (17) 口縁部の破片である。残存高1.6cmを測る。口径20cm程に復元される。胎土は薄灰色を呈し、精良。焼成は良好。外面に光沢のある薄灰青色～薄緑色～褐色を呈する釉がやや厚くかかる。

SE500 暗灰土出土遺物 (Fig. 78)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏a (18) 底部の破片である。残存高1.65cmを測る。内面は回転ナデの後、ミガキb、体部外面は回転ナデが施され、底部はヘラ切りされる。胎土は密で、焼成はやや良好、内面薄白褐色、外面淡白灰色～薄黒灰色、断面薄白褐色～薄黒灰色を呈する。底部中央が焼成前に穿孔される。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (19) 口縁部の破片である。残存高3.75cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。

SE510 黒褐色土出土遺物 (Fig. 79)

土師器

高台片 (添付CD P1.404) 残存長5.5cm、残存幅7.3cm、厚さ0.45cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、外面褐灰色、断面褐灰色～褐白色を呈する。内面に褐色を呈する漆が付着する。

小皿a1 (1) 推定口径9.1cm、器高1.35cm、推定底径6.6cmを測る。体部は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデ、底部外面は糸切りの後ナデが施される。胎土は密で、焼成は良好、内外面淡黄褐色、断面淡黄褐色～黄褐色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高2.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成、還元ともにやや良好で、明白灰色を呈する。東播系。

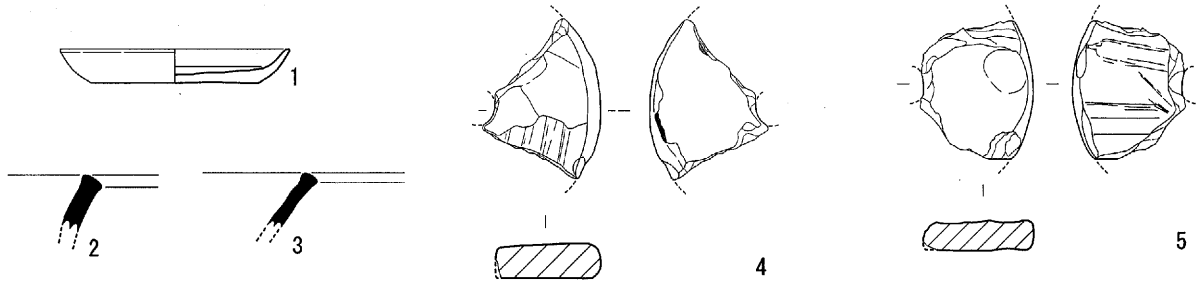
捏鉢 (3) 口縁部の破片である。残存高2.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成、還元ともにやや良好で、明白灰色を呈する。

土製品

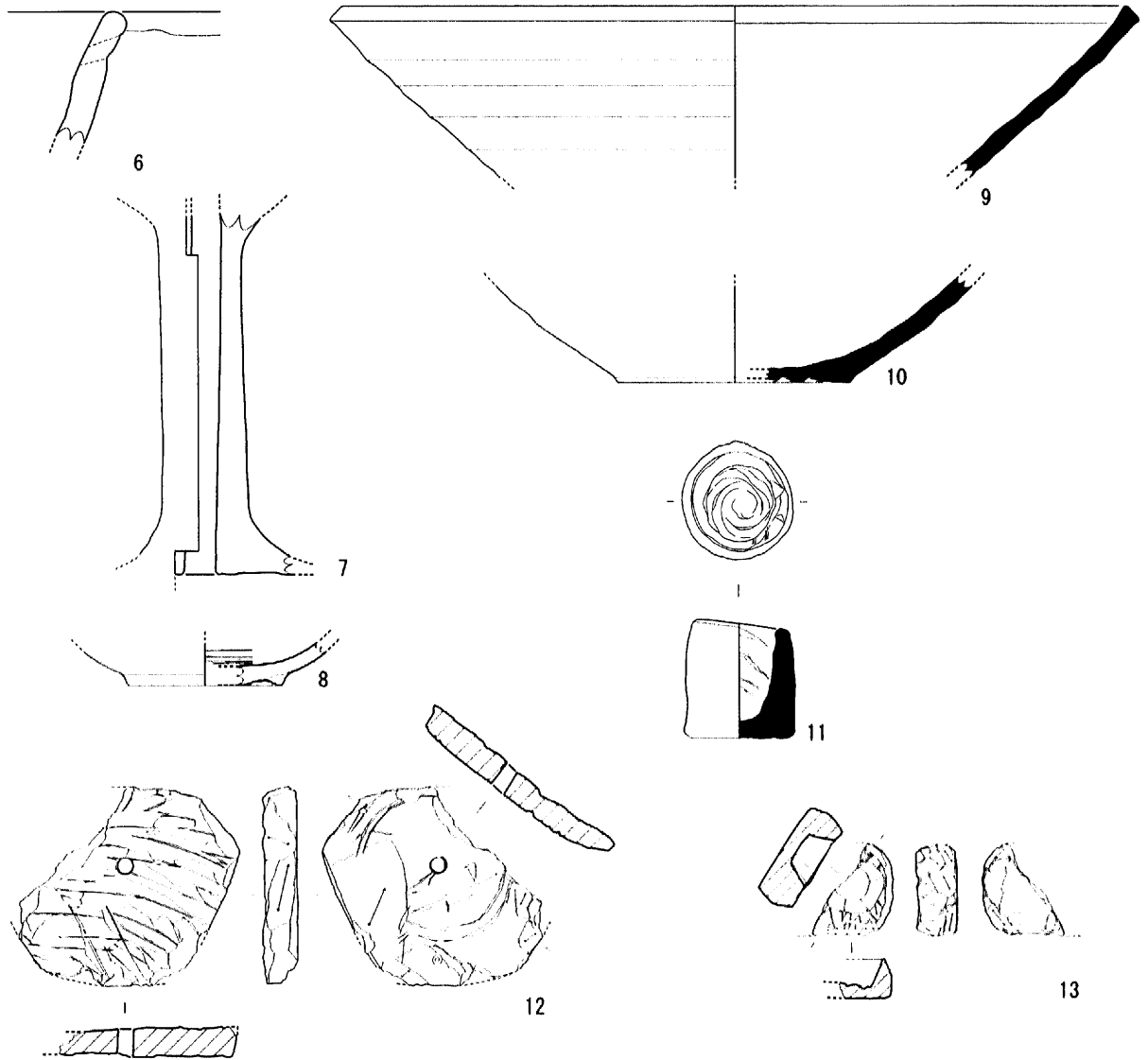
円盤状土製品 (4、添付CD P1.405) 推定外径10.0cm、厚さ1.4cm、推定内径1.5cmを測る。上面はハケ、下面は風化により調整不明、側面はナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂中を少量含む。焼成はやや良好で、表面暗灰色～淡黄褐色～明白灰色、断面黄褐色～明白灰色を呈する。紡錘車と想定される。

円盤状土製品 (5、添付CD P1.406) 推定外径10.5cm、厚さ1.2cm、推定内径2.1cmを測る。上面に指頭痕残り、側面はナデが施され、その他は風化により調整不明である。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒

SE510黒褐土



SE510灰褐土



SE510灰色粘

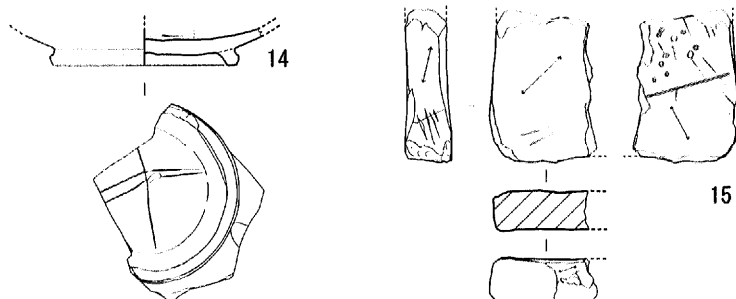


Fig. 79 SE510出土遺物実測図 (1/3)

をやや多く含む。焼成はやや良好で、暗黒褐色～淡黄褐色を呈する。紡錘車と想定される。

SE510 灰褐色出土遺物 (Fig. 79)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏a×c 土器計測表参照。

丸坏 (添付 CD P1.407) 底部付近の破片とみられる。残存長5.0cm、残存幅5.0cm、厚さ0.5cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密。焼成はやや良好で、褐白色を呈する。内面に褐色を呈する漆が付着する。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢(6) 口縁部の破片である。残存高5.65cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土は粗く、～6mm程度の砂粒を非常に多く含む。焼成は良好で、明橙色～淡黄褐色を呈する。

器台(7) 脚部の破片である。残存高15.2cmを測る。脚部外面はタテ方向のナデが施される。胎土はやや密で、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面淡黄褐色、断面暗灰色～淡黄褐色を呈する。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

碗c(8) 底部の破片である。残存高1.8cm、高台径6.3cmを測る。内面はミガキc、外面はヨコナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土はやや密で、焼成、還元ともにやや良好で、内外面暗灰色、断面明白灰色を呈する。畿内系。

須恵質土器

捏鉢(9) 口縁部、体部上半の破片である。推定口径34.0cm、残存高7.3cmを測る。内面は回転ナデの後不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。内面下半は使用により磨耗している。胎土はやや密で、～3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともにやや良好で、明灰白色を呈する。東播系。

捏鉢(10) 体部下半～底部の破片である。残存高4.1cm、底径9.6cmを測る。内面は回転ナデの後不定方向のナデ、外面は回転ナデの後斜め方向のナデが施される。内面は使用により磨耗している。底部は不定方向のナデが施される。胎土はやや粗く、～6mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともにやや良好で、明灰白色を呈する。東播系。

不明製品(11、添付 CD P1.408) 口径4.1cm、器高5.05cm、底径6.65cmを測る。外面はヨコナデが施され、内面はしぼり痕が残る。底部はナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。

石製品

滑石製品(12、添付 CD P1.409) 残存長8.4cm、残存幅9.1cm、厚さ1.5cmを測る。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。上面のケズリ痕は、洗濯板状を呈する。中央部が穿孔され、下面には穿孔を中心にした同心円状の溝が2条めぐる。紡錘車を製作する途中の資料かと想定される。

滑石製品(13、添付 CD P1.410) 残存長3.8cm、高さ1.7cm、残存幅3.4cmを測る。灰白色～黒褐色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられ、上下面には石鍋の成形痕及び石鍋の段階で付着した煤が残る。

SE510 灰色粘土出土遺物 (Fig. 79)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

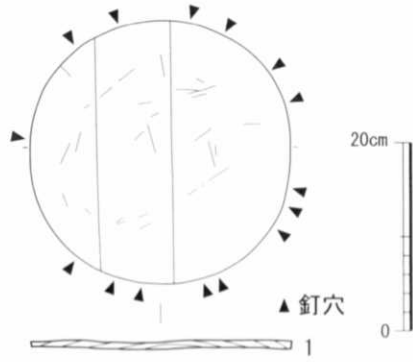
小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

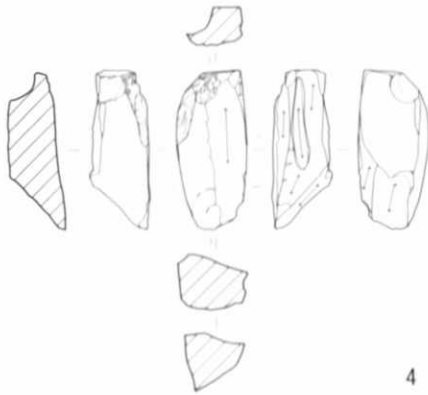
碗c 土器計測表参照。

碗c(14、添付 CD P1.411) 高台部の破片である。残存高1.3cm、推定高台径7.4cmを測る。内面はミガキc、体部外面は回転ナデ、底部外面は板状圧痕の後回転ナデが施され、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、焼成は良好、還元はやや良好、内面暗黒色、外断面明灰白色を呈する。底部外面には焼成前に「キ」

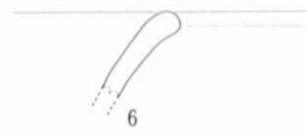
SE510黒灰粘



SE515暗灰粘



SE525暗灰土 (黄白粘ブロック)



SE525暗灰土



Fig. 80 井戸出土遺物実測図 (1は1/8、その他は1/3)

字状の線刻が施される。

石製品

砥石 (15、添付CD P1.412) 残存長6.1cm、残存幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。明灰白色を呈する天草石製である。平坦な砥ぎ面の他、細い溝状、小さな凹形の砥ぎ痕が観察される。

SE510 黒灰粘出土遺物 (Fig. 80)

木製品

曲物底板 (1、添付CD P1.413) 径27.6cm、厚さ0.95cmを測る。ケズリにより成形される。側面に径2～3mmの釘穴が多数みられる。内外面 (図示した面は内面) に、使用によるものとみられる傷が多数観察される。外面にも傷があり、ひっくり返しての使用があったのだろうか。検出時は側板 (幅19.5cm、厚さ0.2cm) が付いていたが、半壊状態であったため、取り上げ時に、側板は外れてしまった。

石製品

石鍋 (2) 口縁部～体部の破片である。推定口径20.0cm、残存高8.15cmを測る。暗黒色～明灰色を呈する滑石製である。内外面ともケズリにより成形される。外面に煤が付着する。耳が1ヶ所残存する。

石鍋 (添付CD P1.414) 体部の破片である。残存長7.7cm、残存幅12.1cm、厚さ2.3cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径9.0mmの穿孔を有す。割れ口を含め全体に煤が付着する。内面に敲打痕、外面に穿孔途中の痕跡が観察される。これらの部分には煤が付着していない。

SE515 暗灰粘出土遺物 (Fig. 80)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

脚付鉢 (3) 底部の破片である。残存高4.3cm、推定底径33.4cmを測る。体部は内外面ともヨコナデ、底部は内外面とも不定方向のナデが施される。貼り付けにより脚が作られ、ナデが施される。胎土はやや密で、～5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面淡黄褐色～暗茶褐色、断面淡黄褐色～白灰色を呈する。脚が1ヶ所残存する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

石製品

砥石 (4、添付CD P1.415) 長さ6.4cm、幅2.8cm、厚さ2.4cmを測る。黒灰色を呈する粘板岩製である。平坦な砥面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕、断面半球状の砥ぎ痕が観察される。

土製品

鋳型 (5、添付CD P1.416) 長さ4.9cm、幅3.05cm、高さ1.9を測る。全面指ナデが施される。胎土は密で、焼成はやや良好、淡赤褐色～淡赤灰色を呈する。土師質。この鋳型でできる製品の大きさは、長さ3.8cm、幅2.15cm、高さ1.6cmと推定される。

SE525 暗灰土 (黄白粘ブロック) 出土遺物 (Fig. 80)

土師器

鍋 (6) 口縁部の破片である。残存高3.5cmを測る。内面はヨコナデ、外面はナデが施される。胎土は粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面淡茶褐色、外面暗茶褐色、断面暗赤褐色～淡茶褐色を呈する。外面に褐色化がみられる。

片 (添付CD P1.417) 残存長4.3cm、残存幅5.8cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成はやや不良で、薄橙色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

片 (添付CD P1.418) 残存長1.8cm、残存幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成はやや不良で、薄橙色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

須恵質土器

捏鉢 (7) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.65cmを測る。内面上半は回転ナデ、下半は不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。口縁部に自然釉がかかる。東播系。

SE525 暗灰土出土遺物 (Fig. 80)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

土製品

取瓶 (8) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内面は金属附着物のため不明、外面はナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内断面淡褐灰色～淡黄白色、外面淡褐灰色～淡黄白色を呈する。内面に淡茶色～淡黄緑色を呈する金属が付着する。

SE525 黒色粘出土遺物

土師器

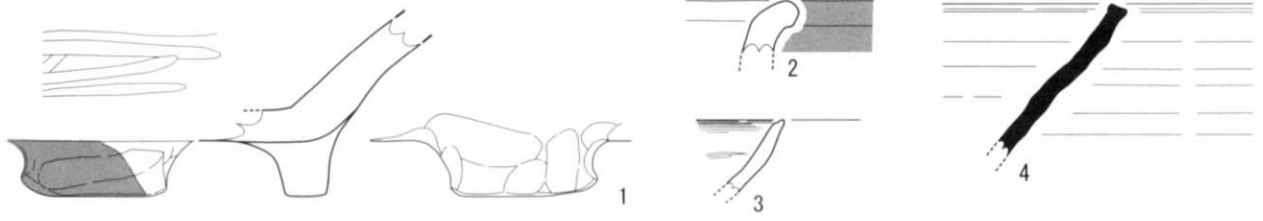
丸坏a 土器計測表参照。

SE535 暗褐土出土遺物 (Fig. 81)

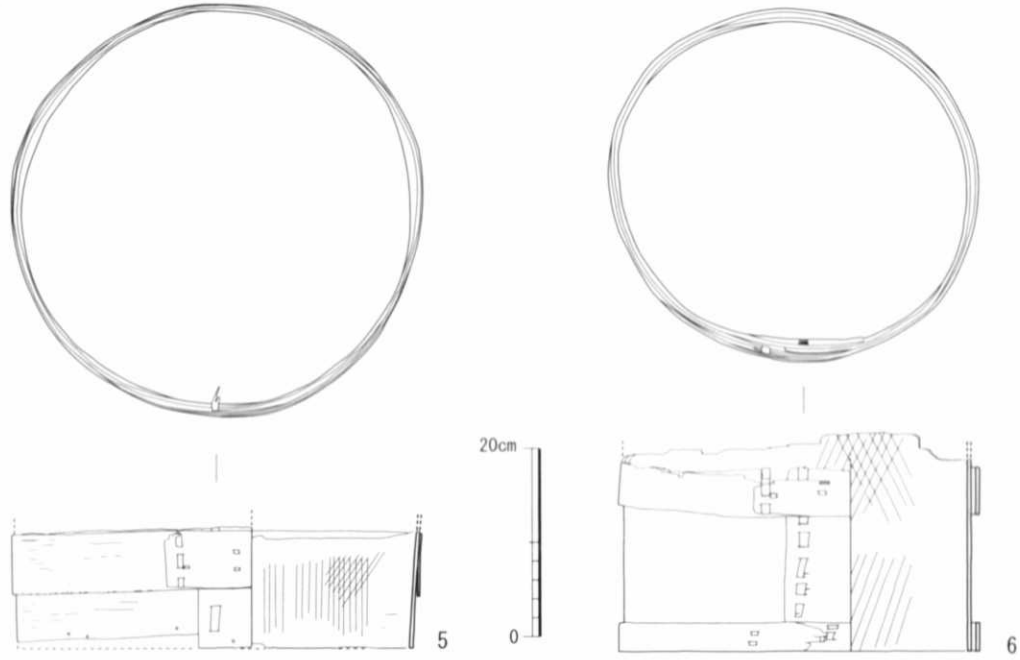
土師器

脚付鉢 (1) 脚を伴う底部の破片である。残存高7.1cmを測る。底径50cmほどに還元される。内面はミガキが施され、外面は風化により調整不明、貼り付けにより脚が付けられ、指ナデが施される。胎土は

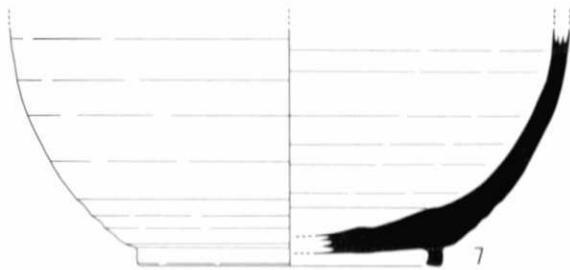
SE535暗褐土



SE535井戸枠



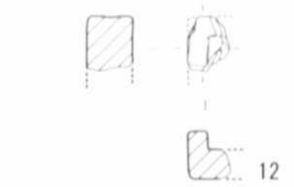
SE540暗褐土



SE540灰褐土



SE555暗褐土



SE555暗灰粘

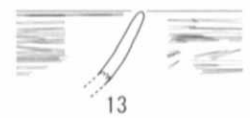


Fig. 81 井戸出土遺物実測図 (5・6は1/8、その他は1/3)

やや細かく、～4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面橙色、断面淡赤橙色、脚暗褐色を呈する。脚が1ヶ所残存する。内外面に褐色化がみられ、脚内面に煤が付着する。

鍋？(2) 口縁部の破片である。残存高2.1cmを測る。内面は風化により調整不明、外面はナデが施される。胎土は細かく、～7mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色、断面灰白色を呈する。外面に煤が付着する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

椀(3) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内面はミガキcが施され、外面は風化により調整不明、口縁部に沈線が入る。胎土は細かく、焼成は良好で、内面黒灰色、外面灰白色～灰色、断面灰白色を呈する。畿内系。

須恵質土器

捏鉢(4) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。口縁部外面に自然釉がかかる。東播系。

SE535 灰褐色土出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE535 井戸枠 (Fig. 81)

木製品

曲物(5、添付CD P1.419) 径43.5cm、残存高12.9cmを測る。厚さ0.4cmの板を撓め、樹皮で留める。内面には撓め易いように縦、斜めの切り込みが入る。厚さ0.2cmの帯板を1段回す。

曲物(6、添付CD P1.420) 径38.1cm、残存高23.2cmを測る。厚さ0.4cm程度の板を撓め、樹皮で留める。内面には撓め易いように斜めの切り込みが入る。外側に2段の帯板を回す。

SE540 暗褐色土出土遺物 (Fig. 81)

須恵器

壺(7) 体部下半～底部の破片である。残存高9.5cm、高台径10.1cmを測る。内面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデ、外面は回転ナデの後、斜め方向のナデ消し、外面底部付近は回転ヘラケズリ、底部外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密。焼成は良好、還元はやや良好で、明白灰色を呈する。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

SE540 灰褐色土出土遺物 (Fig. 81)

土師器

鍋(8) 口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内断面明白茶色、外面暗茶褐色を呈する。外面に褐色化がみられる。

SE555 暗褐色土出土遺物 (Fig. 81)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢(9) 口縁部の破片である。残存高3.25cmを測る。内外面とも風化により調整不明。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内外面薄茶褐色～暗茶褐色、断面薄茶褐色～薄白灰色を呈する。

鍋(10) 口縁部の破片である。残存高1.45cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、

～4mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内断面明褐白色、外面明白橙色を呈する。

石製品

砥石 (11) 残存長10.8cm、幅8.4cm、厚さ6.4cmを測る。灰白色を呈する砂岩製である。平坦な砥ぎ面の他、細い溝状痕、敲打痕が観察される。

土製品

鑄型? (12、添付CD P1.421) 鑄型の破片と想定される。残存長2.2cm、残存幅1.7cm、高さ1.9cmを測る。胎土は密で、～3mmの砂粒を含む。焼成は良好で、薄黄灰色を呈する。土師質である。

SE555 暗灰粘出土遺物 (Fig. 81)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

椀 (13) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内外面とも、幅が狭く密なミガキcが施される。口縁部に沈線が入る。胎土は密。焼成は良好、還元はやや不良で、明灰白色を呈し、表面の黒化はみられない。畿内系。

SE570 暗褐土出土遺物

土師器

小丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀c 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

石製品

滑石製品片 (添付CD P1.422) 長さ3.3cm、残存幅2.3cm、厚さ2.1cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。幅2mm程度の断面V字状の溝状痕、径1.7cm程度の掃鉢状の窪みが観察される。砥石として使用されたものと推測される。

SE575 暗褐土出土遺物 (Fig. 82)

土師器

坏a (1) 推定口径14.9cm、器高2.7cm、推定底径10.6cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切りされる。胎土は密で、0.1～0.5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a (2) 底部の破片である。残存高0.7cm、推定底径6.4cmを測る。内面は回転ナデの後ナデ、体部外面は回転ナデが施され、底部は糸切りされる。胎土は密。焼成はやや軟質で、内面暗灰褐色、外面灰褐色、断面灰褐色を呈する。

鍋 (3) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面灰褐色、外面灰褐色～淡桃色、断面灰褐色を呈する。内面に煤が付着する。

石製品

滑石製品 (4、添付CD P1.423) 残存長4.9cm、幅4.1cm、残存高1.4cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。平面長方形を呈し、周縁を1段高く掘り残す。中ほどに、径2.2cmの円柱状の突出部を作り、突出部を砲弾形に彫り窪める。同様の突出部が長軸方向に2つ以上並ぶものと推測される。

SE575 暗灰粘出土遺物 (Fig. 82)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

坏 (添付 CD P1.424) 底部の破片である。残存長 2.5cm、残存幅 3.8cm、厚さ 0.6cm を測る。底部切り離しはヘラ切りとみられる。胎土は密で、～1mm 程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内面薄褐白色、外面暗灰色、断面薄褐白色～暗灰色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

坏 (添付 CD P1.425) 体部の破片とみられる。残存長 3.5cm、残存幅 2.9cm、厚さ 0.4cm を測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm 程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや良好で、褐白色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

瓦器

椀 c 土器計測表参照。

椀 c (5) 底部の破片である。残存高 1.4cm、推定高台径 6.3cm を測る。内面はミガキ c、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒色、断面灰白色を呈する。底部外面に「×」形のヘラ記号を有す。

中国陶器

耳壺 (6) 口縁部の破片である。残存高 2.95cm を測る。胎土は薄灰色を呈し精良で、白色粒をわずかに含む。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある暗緑茶色～褐灰色を呈する釉が薄くかかる。口縁部は釉がふき取られる。口縁端部に目跡状の付着物がみられる。V-2 類。

SE575 井戸枠 (Fig. 82)

木製品

曲物 (7、添付 CD P1.426) 長軸 57.6cm、短軸 51.6cm、残存高 30.0cm を測る。厚さ 0.7cm 程度の板を撓め、樹皮で留める。外面に厚さ 0.4cm、幅 5.6～6.5cm の帯板が 2 段回る。側板と帯板の間に、厚さ 0.2～0.4cm、幅 4.7～6.7cm の縦板が 4 ヶ所入る。

SE580 井戸枠 (Fig. 82)

木製品

曲物 (8、添付 CD P1.427) 径 39.5cm、残存高 18.6cm を測る。厚さ 0.5cm 程度の板を撓め、樹皮で留める。内面に縦の切り込みが入る。外面に 2 段分の帯板と縦板の痕跡が残る。

SE585 黒灰土出土遺物

土師器

坏 a 土器計測表参照。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 c 土器計測表参照。

SE585 青灰土出土遺物 (Fig. 82)

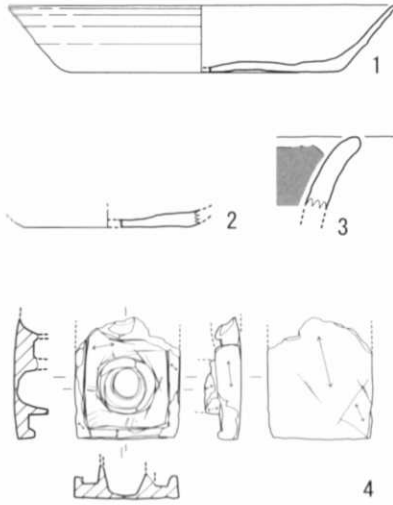
土師器

脚付鉢 (9) 脚部の破片である。残存高 5.8cm を測る。指ナデにより成形される。体部は内外面ともヨコナデが施される。胎土は 3～5mm 程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面淡灰褐色、外面淡褐色、断面淡灰褐色～灰色を呈する。

瓦器

椀 c (10) 口縁部～体部の破片である。口径 15.2cm、残存高 4.8cm を測る。内外面とも、幅の狭いミガキ c が施されるが、内面は風化により不明瞭である。外面には指押え痕が残る。口縁部内面に沈線が施される。胎土は密。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒灰色、断面灰白色を呈する。畿内系。

SE575暗褐土



SE575暗灰粘



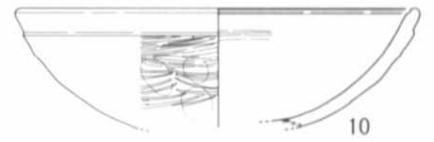
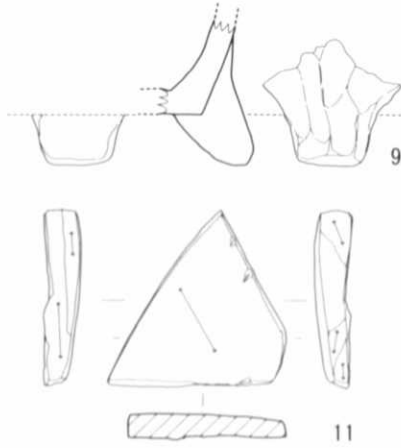
SE575井戸枠



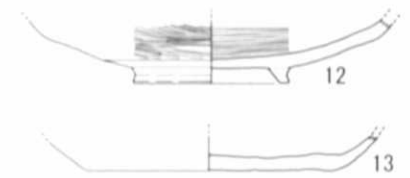
SE580井戸枠



SE585青灰土



SE585暗灰粘



SE590暗褐土

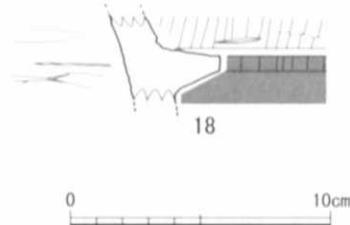
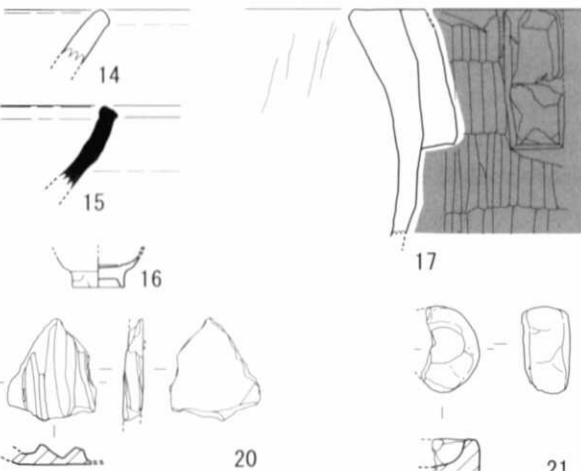


Fig. 82 井戸出土遺物実測図 (7・8は1/8、その他は1/3)

石製品

砥石 (11) 長さ7.1cm、幅5.9cm、厚さ1.3cmを測る。暗灰色を呈するきめの細かい砂岩製である。砥ぎ面は3面観察される。

SE585 暗灰粘出土遺物 (Fig. 82)

土師器

大坏c×碗c (12) 底部の破片である。残存高2.6cm、推定高台径6.0cmを測る。内外面ともミガキcが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

坏a (13) 底部の破片である。残存高1.4cm、底径8.5cmを測る。体部は内外面とも回転ナデ、底部内面は回転ナデの後ナデ、底部外面は糸切りされる。胎土は密で、2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、黄灰褐色を呈する。

SE590 暗褐色土出土遺物 (Fig. 82)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

鉢 (14) 口縁部の破片である。残存高2.2cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は2～3mm程度の砂粒を含む。焼成は軟質で、内面灰褐色、外面灰褐色～暗褐色、断面灰褐色～暗褐色を呈する。外面に褐色化が観察される。

須恵質土器

捏鉢 (15) 口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。内面は回転ナデの後ナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は2～3mm程度の砂粒を微量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。東播系。

白磁

小坏×小壺 (16、添付CD P1.428) 底部の破片である。残存高1.25cm、高台径2.0cmを測る。胎土は精良で、薄褐色～白色を呈する。焼成は良好。高台内を除く内外面にやや光沢のある薄緑白色～薄褐色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

石製品

石鍋 (17) 口縁部～体部上半の破片である。残存高9.1cmを測る。赤褐色～青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に煤が付着する。

石鍋 (18) 体部の破片である。残存高3.6cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。鋸以下に煤が付着する。

滑石加工品 (19、添付CD P1.429) 長さ3.1cm、幅2.5cm、残存高1.5cmを測る。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。裏面に2ヶ所、摺鉢状の穿孔が観察される。断面が角ばったU字形を呈する製品と想定されるが、用途は不明である。

砥石 (20) 残存長4.1cm、残存幅3.5cm、厚さ0.8cmを測る。灰白色を呈するきめの細かい泥岩または粘板岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

土製品

鋳型 (21、添付CD P1.430) 推定口径3.75cm、残存高1.8cm、推定底径1.9cmを測る。胎土は精良。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。土師質である。

鋳型 (22、添付CD P1.431) 長さ4.2cm、幅2.8cm、高さ1.45cmを測る。外面はナデが施され、内面は型押しによる成形とみられる。胎土は1～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、橙色を呈する。土師質である。この型から作られる製品は、長さ2.8cm、幅1.4cm、高さ0.8cmの涙形を呈する。製品の用途は不明である。

鋳型 (23、添付CD P1.432) 残存長2.5cm、残存幅1.85cm、高さ1.2cmを測る。外面はナデが施され、内面は型押しによる成形とみられる。胎土は精良。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。土師質である。

SE590 灰色粘出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE605 黄褐土出土遺物 (Fig. 83)

須恵質土器

甕 (1) 口縁部の破片である。推定口径25.8cm、残存高8.2cmを測る。口縁部上面は沈線状の凹みがめぐ。頸部は内外面とも回転ナデが施される。体部外面は平行叩きが施され、内面はあて具痕がナデ消されている。体部と頸部の接合部内面は工具による平滑なナデが施される。胎土は密。焼成は良好で、灰色を呈する。

SE605 暗褐土出土遺物 (Fig. 83)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高5.4cmを測る。内面は回転ナデの後斜め方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は2~3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色を呈する。東播系。

SE605 暗灰土出土遺物 (Fig. 83)

石製品

滑石製品 (3、添付 CD P1.433) 残存長11.4cm、幅10.2cm、厚さ2.35cmを測る。暗灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。中央に貫通する穿孔が1ヶ所、未貫通の穿孔が2ヶ所ある。筋状の傷が多数残る。石鍋の破片を転用したものとみられる。

SE605 暗灰粘出土遺物 (Fig. 83)

金属製品

鉄斧 (4、添付 CD P1.434) 刃部・袋部の先端を欠く。残存長6.65cm、残存幅4.8cm、刃部厚0.8cmを測る。

SE610 黒灰土出土遺物 (Fig. 83)

土師器

鉢 (5) 口縁部の破片である。残存高2.1cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は2~3mm程度の砂粒を含む。焼成は軟質で、外断面橙色、内面橙色~褐色を呈する。

片 (添付 CD P1.435) 残存長3.1cm、残存幅2.4cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。内面に黒色を呈する漆が付着する。

須恵質土器

捏鉢 (6) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、還元はやや良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (7) 口縁部の破片である。残存高3.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、~1mm程度の砂粒を微量含む。焼成は良好、還元はやや良好で、淡灰色を呈する。東播系。

土製品

円盤状土製品 (8、添付 CD P1.436) 推定径6.0cm、残存高1.1cmを測る。調整はナデとみられる。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、淡橙色を呈する。

SE610 暗灰土出土遺物 (Fig. 83)

須恵器

甕 (9) 口縁部の破片である。残存高8.6cmを測る。頸部は、内外面とも回転ナデが施される。体部は、外面は格子叩き痕が残り、内面はあて具痕がナデ消されている。胎土はやや密で、2~3mm程度の砂粒を微量含む。焼成は軟質、還元はやや不良で、内断面灰褐色、外面淡橙色~灰褐色を呈する。

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

瓦器

碗(10) 口縁部～体部の破片である。推定口径13.0cm、残存高3.6cmを測る。内外面とも、幅が狭く密なミガキcが施される。口縁部内面に沈線が入る。胎土は精良。焼成は良好で、内面黒色～褐灰色、外面黒色～暗褐色、断面灰色を呈する。搬入品。

石製品

軽石加工品(11) 残存長4.3cm、残存幅5.1cm、厚さ2.2cmを測る。暗灰色を呈する軽石製である。一部を浅いU字状に窪めている。

SE610 暗青灰粘出土遺物 (Fig. 83)

須恵器

甕(12) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径29.6cm、残存高10.0cmを測る。頸部は内外面とも回転ナデが施される。体部外面は格子叩き痕が残り、内面は不定方向のナデによりあて具痕が消されている。体部と頸部の接合部内面は指押え及び指ナデが施される。胎土は3～8mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好、還元はやや良好で、瓦質に仕上がりに、内外面黒灰色、断面灰白色を呈する。

白磁

小壺(13、添付CD Pl.437) 完存する資料である。口径2.85cm、器高3.4cm、底径2.7cmを測る。底部は回転ヘラケズリにより、わずかに窪められている。胎土は薄白褐色を呈し、精良で、空隙がわずかに入る。焼成は良好。やや光沢のある薄灰黄色を呈する釉がかかる。体部下位～底部は露胎。

石製品

石鍋(14、添付CD Pl.438) 推定口径31.2cm、器高14.1cm、推定底径28.7cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が2ヶ所残存し、残存位置から本来4ヶ所あったものとみられる。内外面に煤が付着する。

SE610 井戸枠 (Fig. 83)

木製品

横棧木(15、添付CD Pl.439) 残存長44.0cm、幅7.3cm、厚さ4.4cmを測る。下面は割ったままとみられ、その他の面を手斧などにより成形される。端部をL字形に加工し、その中央に0.9cm四方の方形の穴を穿つ。

横棧木(16、添付CD Pl.440) 残存長94.2cm、幅6.4cm、厚さ4.4cmを測る。径6.5cm程度の丸太の上下面を手斧により成形し、側面は加工痕がみられず、樹皮を剥いただけとみられる。両端をL字形に加工し、その中央に0.9cm四方の方形の穴を穿つ。

SE615 暗褐色土出土遺物 (Fig. 84・85)

須恵器

甕(1) 口縁部の破片である。残存高8.3cmを測る。口径35cm程度に還元される。頸部は内外面とも回転ナデが施される。体部外面は格子叩き痕が残り、体部内面はあて具痕がナデ消される。胎土は精良。焼成はやや不良、還元はやや良好で、瓦質に仕上がりに、暗灰色を呈する。

甕(2) 口縁部の破片である。残存高4.8cmを測る。内面は回転ナデ、頸部外面は回転ナデ、体部外面は平行叩きが施される。胎土は密で、0.5mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。

土師器

坏a 土器計測表参照。

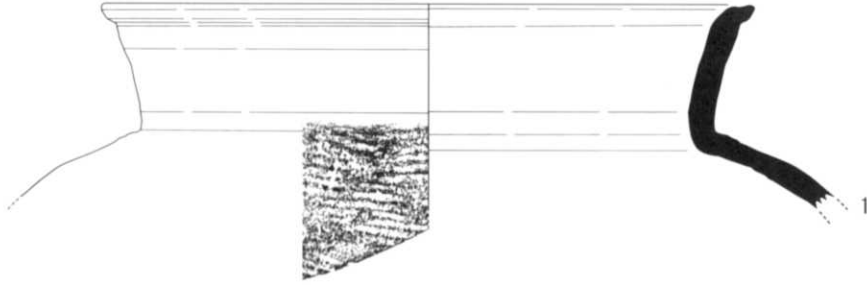
小皿a1 土器計測表参照。

鉢(3) 口縁部の破片である。残存高3.7cmを測る。内面はミガキ、外面は回転ナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

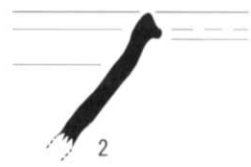
瓦器

坏a(4) 推定口径16.3cm、器高2.9cm、推定底径7.8cmを測る。内外面とも回転ナデの後ミガキcが施される。底部は糸切りされる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、内外面黒色、断面灰色を呈する。

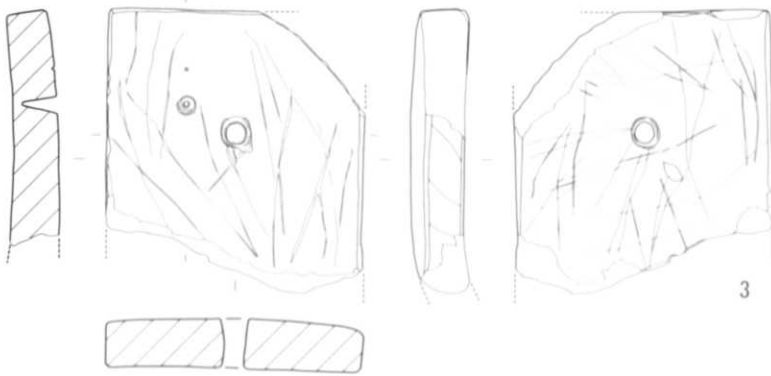
SE605黄褐土



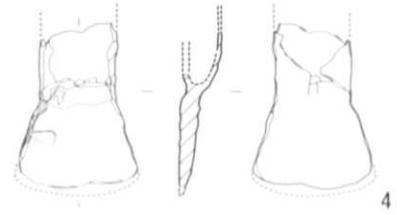
SE605暗褐土



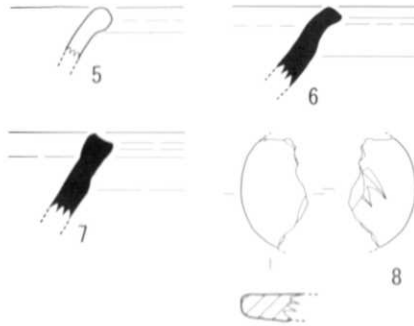
SE605暗灰土



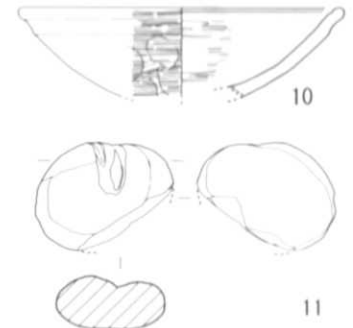
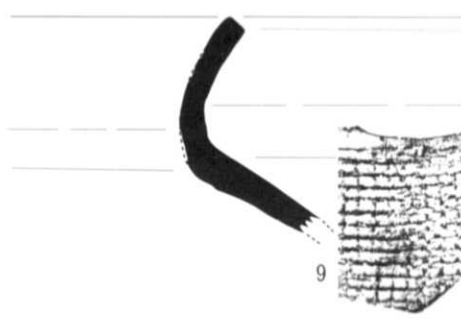
SE605暗灰粘



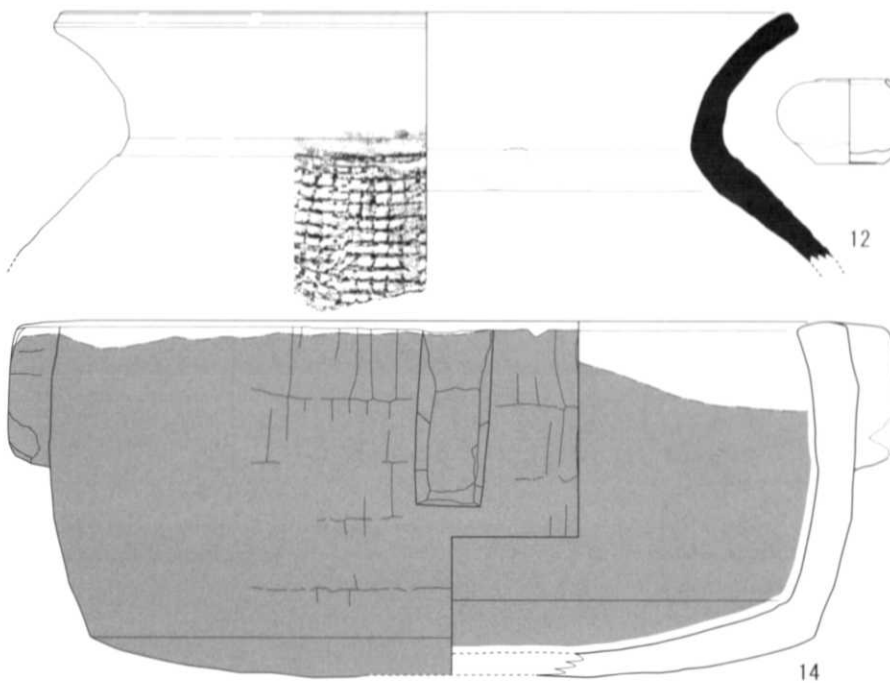
SE610黒灰土



SE610暗灰土



SE610暗青灰粘



SE610井戸杵

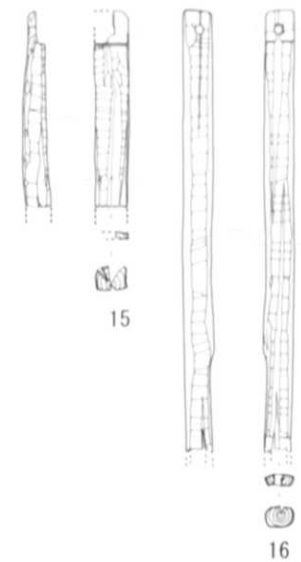


Fig. 83 井戸出土遺物実測図 (15・16は1/8、その他は1/3)

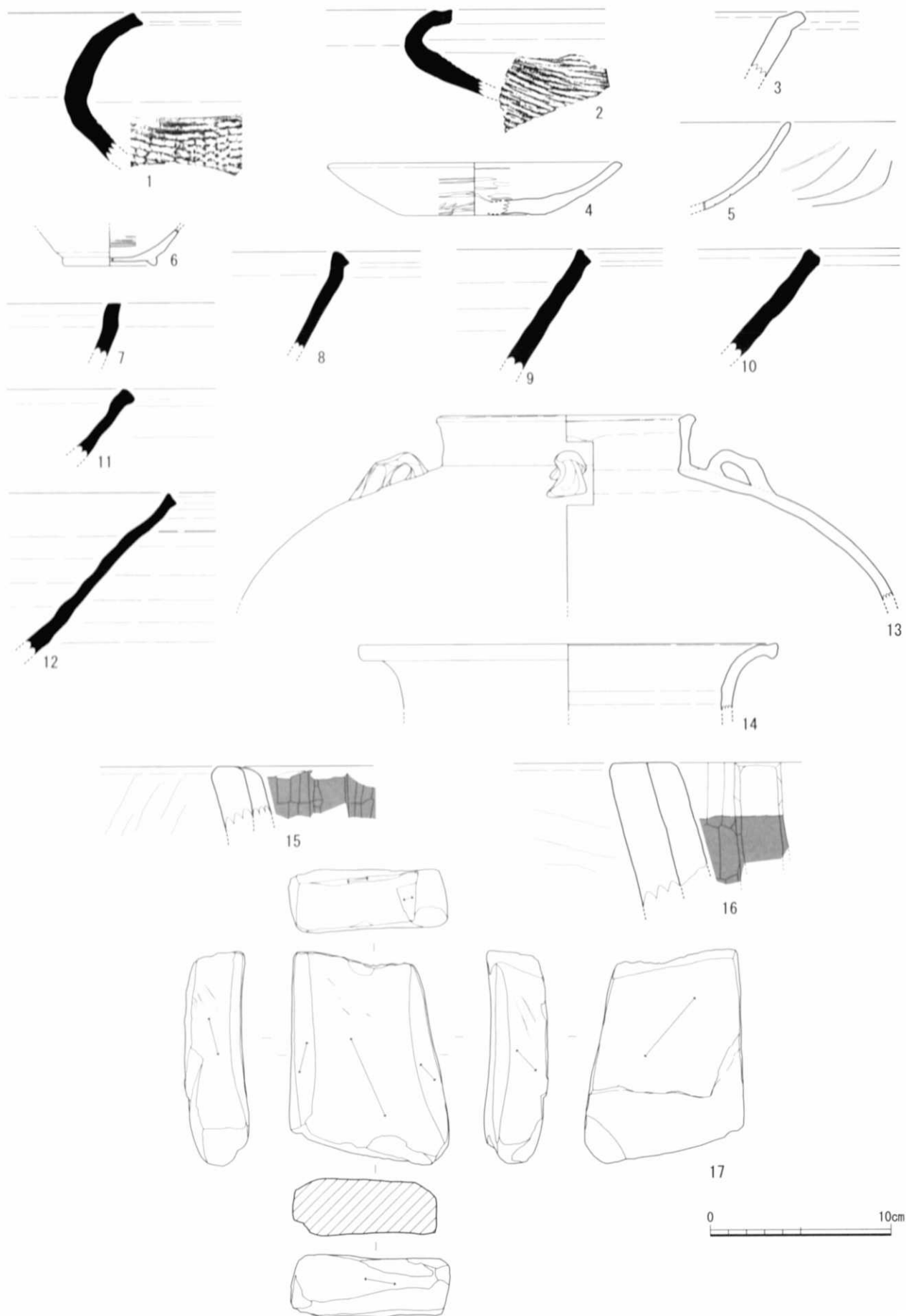


Fig. 84 SE615出土遺物実測図 (1/3)

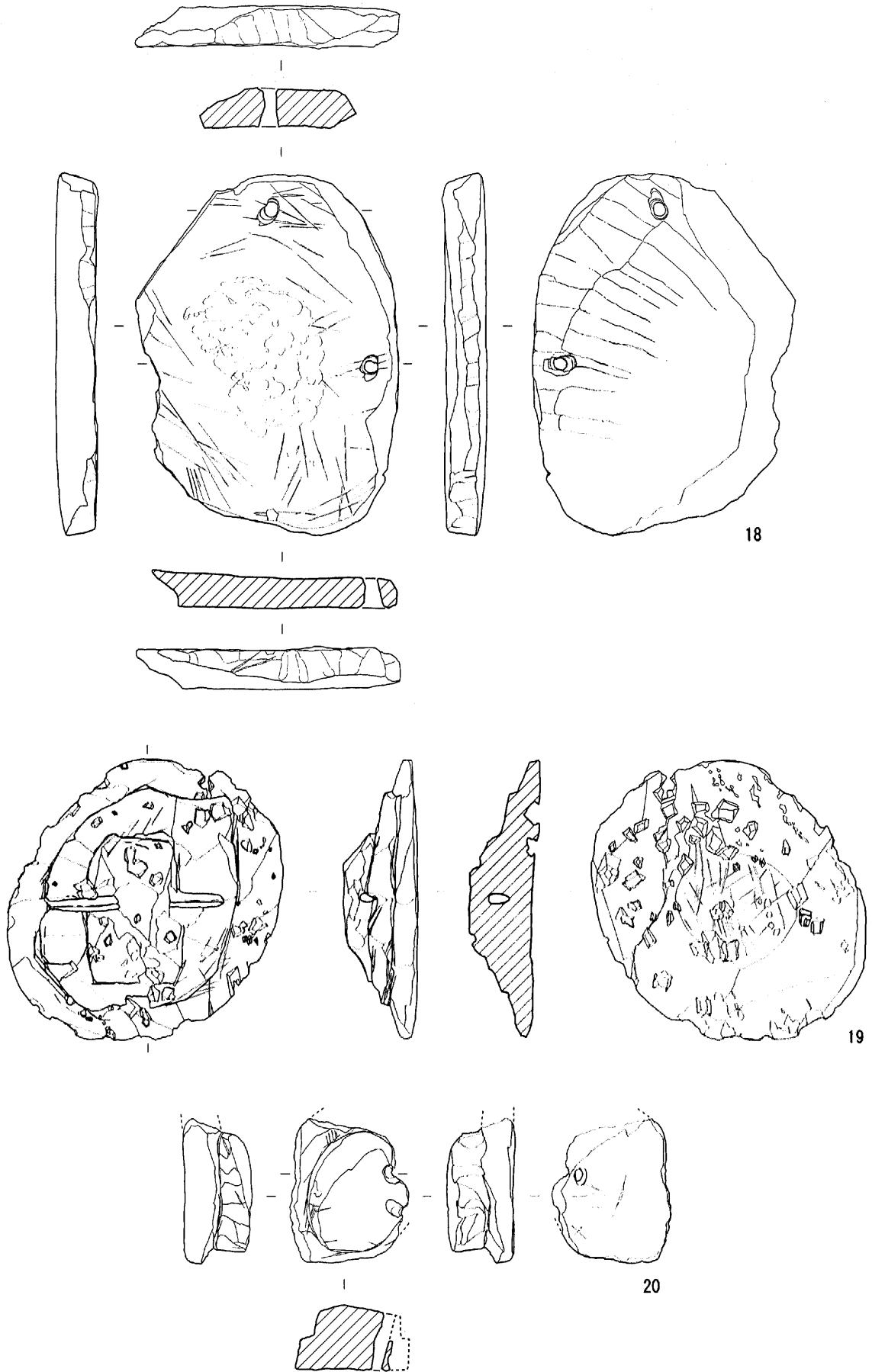


Fig. 85 SE615出土遺物実測図 (1/3)

椀(5、添付CD P1.441) 口縁部～体部の破片である。残存高4.9cmを測る。内外面とも風化により不明瞭ながらミガキcが施される。外面にはヘラ描きによる文様を有す。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、口縁部外面黒色、その他は灰白色を呈する。

小椀c(6) 底部の破片である。残存高2.05cm、高台径5.2cmを測る。内面はミガキc、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや不良で、内外面黒色、断面黒色～灰色を呈する。

須恵質土器

鉢(7) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内面は回転ナデの後、斜め方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内面青灰色、外断面灰色を呈する。

捏鉢(8) 口縁部の破片である。残存高5.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、口縁部外面は暗灰色、その他は灰白色を呈する。搬入品。

捏鉢(9) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は灰色、その他は灰白色を呈する。

捏鉢(10) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好、還元はやや良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢(11) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内面は回転ナデの後、斜め方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、口縁部外面は暗灰色、その他灰白色を呈する。東播系。

捏鉢(12) 口縁部～体部上半の破片である。残存高9.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内外面暗灰色、断面灰色を呈する。搬入品。

中国陶器

耳壺(13) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径14.4cm、残存高10.45cmを測る。胎土はやや密で、～2mm程度の砂粒をやや多く含み、灰色を呈する。焼成は良好。口縁部内面～外面に、暗オリーブ色を呈する釉が薄くかかる。口縁部上面は釉がふき取られている。頸部と体部の接合部付近内面に化粧土が観察される。耳が1ヶ所残存する。Ⅲ類。

朝鮮系無釉陶器

壺(14) 口縁部の破片である。推定口径23.2cm、残存高3.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内外面暗灰色、断面暗赤褐色を呈する。

石製品

石鍋(15) 口縁部の破片である。残存高3.7cmを測る。口径20cm程に復元される。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に煤が付着する。

石鍋(16) 口縁部の破片である。残存高8.1cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面下半に煤が付着する。

砥石(17) 長さ11.9cm、幅8.8cm、厚さ3.6cmを測る。明灰白色を呈する砂岩製である。

滑石製品(18、添付CD P1.442) 長さ18.9cm、幅13.7cm、厚さ2.3cmを測る。黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の転用とみられ、石鍋の成形痕が残る。穿孔が2ヶ所ある。全面に煤が付着する。煤は穿孔内部にも付着している。上面に敲打痕が観察される。敲打痕は煤付着後についたものとみられる。

石鍋補修材(19、添付CD P1.443) 長さ14.7cm、幅14.0cm、厚さ3.9cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。表面には、3～8mm程度、深さ2～15mm程度の四角形の割り貫きが多数観察される。

石鍋補修材(20、添付CD P1.444) 残存長7.6cm、残存幅6.1cm、厚さ3.5cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられ、石鍋時に付着した煤が残り、新たな加工により、煤の一部が削られている。穿孔が2ヶ所確認され、その内の一つには、釘等との隙間を防ぐために補填されたとみられる滑石(または滑石粉)が残存する。

SE620 暗褐色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鍋(1) 口縁部～体部の破片である。残存高14.0cmを測る。内面はヨコナデ、外面上半はタテナデ、外面下半は斜め方向のナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰褐色、外面黒褐色、断面灰褐色～灰色を呈する。外面には煤が付着する。

鍋(2) 口縁部の破片である。残存高6.3cmを測る。内面はヨコナデが施される。外面の調整は煤の付着により不明である。胎土は～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰褐色～暗褐色、外面暗褐色～黒褐色、断面褐灰色を呈する。外面に煤が付着する。口縁部の内外面に褐色化、黒色化がみられる。

黒色土器B類

鉢(3、添付CD P1.445) 体部の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面とも幅の広いミガキcが施される。外面のミガキは風化により不明瞭になっている。胎土は～1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面黒灰色、断面灰褐色を呈する。なお、4および以下の5、6は、接合はしないものの、胎土や調整、焼成の具合などから、同一個体の可能性が高い。

鉢(4、添付CD P1.446) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内外面ともミガキcが施される。胎土は1～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面黒灰色、断面灰褐色を呈する。

脚付鉢(5、添付CD P1.447) 体部下半～底部の破片である。残存高8.2cmを測る。内面の調整は風化により不明、外面はミガキが施されているようだが、風化により不明瞭になっている。脚が貼り付けにより作られる。脚は指ナデにより成形される。脚は1ヶ所残存する。胎土は2～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面灰黒色、断面灰色を呈する。

瓦類

椀(6) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内面は幅の狭く密なミガキc、外面は幅は狭いがやや粗いミガキcが施される。口縁部内面に沈線を有す。胎土は精良。焼成は良好で、内外面灰黒色、断面灰色を呈する。畿内系。

丸瓦(7) 残存長18.5cm、残存幅9.3cm、厚さ1.7cmを測る。凹面は布目痕、凸面は格子叩き痕が残る。部分的にナデ消される。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、淡黒灰色～淡赤灰色を呈する。

SE620 黄褐色土出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

SE620 灰色粘出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE625 暗褐色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

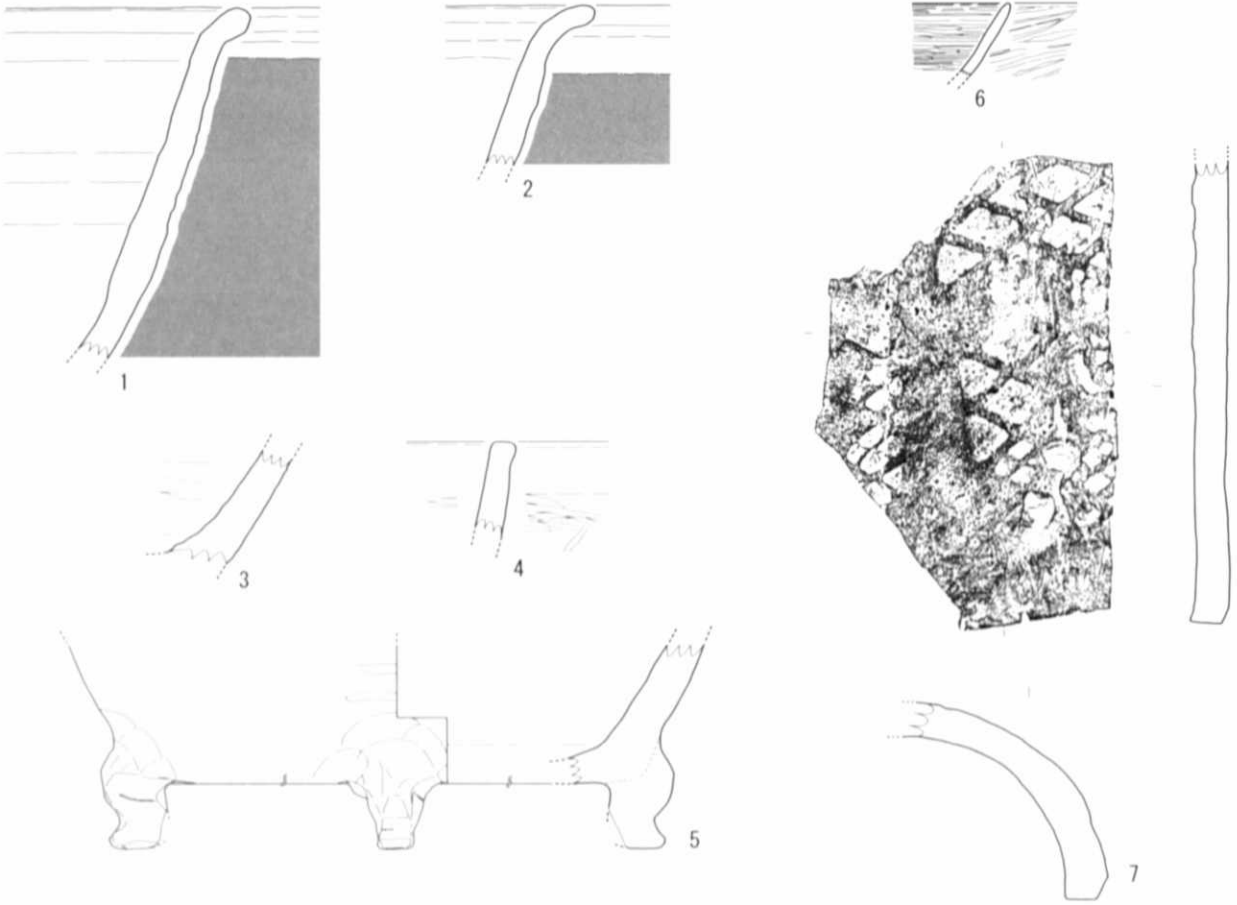
丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

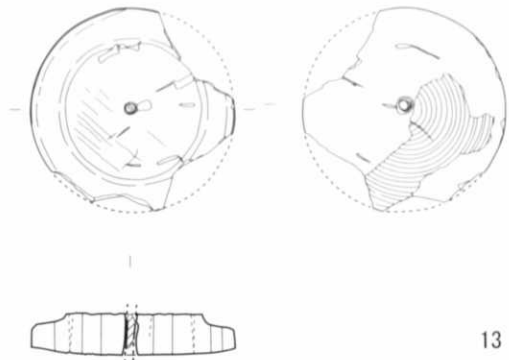
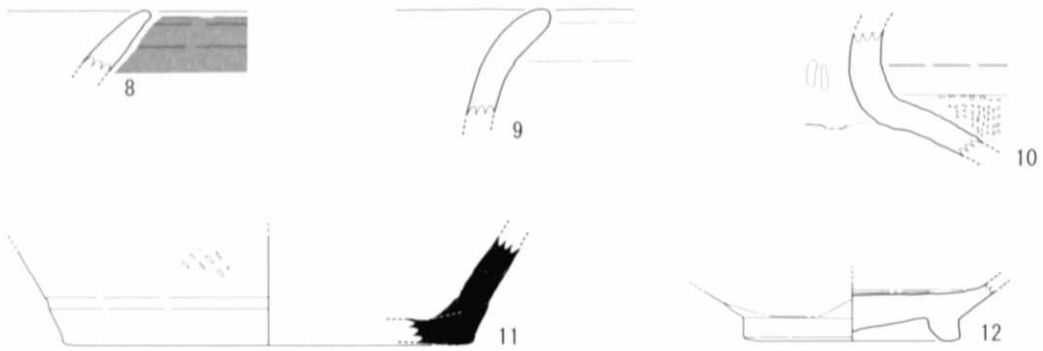
鉢?(8) 口縁部の破片である。残存高2.45cmを測る。内面は回転ナデが施され、外面の調整は煤の付着により不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面灰褐色、外面黒色～暗褐色、断面灰褐色～褐灰色を呈する。

鍋(9) 口縁部の破片である。残存高4.2cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は5～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

SE620暗褐土



SE625暗褐土



SE625黄褐土

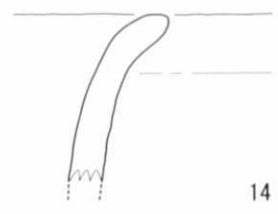


Fig. 86 井戸出土遺物実測図 (1/3)

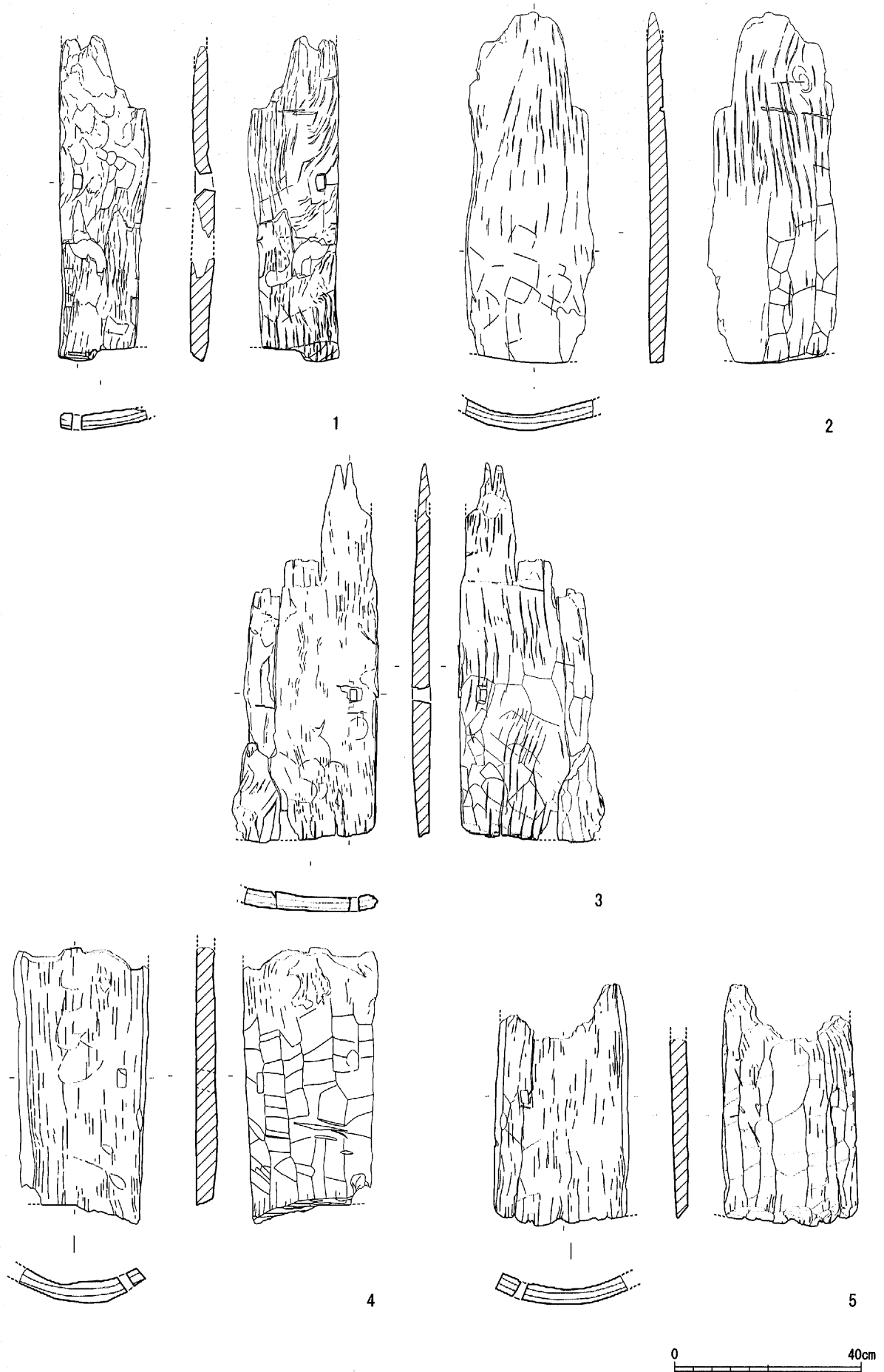


Fig. 87 SE625出土遺物実測図 (1/12)

瓦器

椀c 土器計測表参照。

椀 土器計測表参照。

灰釉陶器

甕(10) 頸部～体部上位の破片である。残存高5.1cmを測る。頸部は内外面とも回転ナデが施される。体部外面は格子叩き痕が残り、内面はあて具痕をナデ消している。胎土は空隙が入りやや粗く黒灰粒を含む。焼成は良好で、灰色を呈する。頸部内面及び外面に白灰色～灰緑色を呈する釉がかかる。

須恵質土器

甕(11) 底部の破片である。残存高4.4cm、推定底径16.3cmを測る。内面は不定方向のナデが施され、外面は格子叩き痕が残る。体部外面最下位にはヨコナデが施される。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。

白磁

鉢(12) 底部の破片である。残存高2.4cm、高台径8.6cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄緑～薄緑白色を呈する釉が薄くかかる。内面見込みの釉は輪状に掻き取られる。

Ⅲ類。

木製品

紡錘車(13、添付CD Pl.448) 径8.1cm、厚さ1.65cmを測る。ロクロによる回転ケズリにより成形される。ロクロに固定するための爪の痕跡が4ヶ所確認される。中央に径5.0mmの穿孔を有し、内部に木製の軸の一部が残存する。

SE625 黄褐色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

鍋(14) 口縁部の破片である。残存高6.7cmを測る。口径50cm程に還元される。内外面ともヨコナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面暗褐色～黒褐色、外面灰褐色、断面灰褐色～にぶい橙色を呈する。内面は斑状に黒色化する。

SE625 井戸枠 (Fig. 87)

木製品

削り物(1～5、添付CD Pl.449～453) 削り物の井戸枠である。1～3及び4・5は接合する。

	残存長	残存幅	厚さ	
1	70.0cm	19.6cm	4.9cm	(添付CD Pl.449)
2	75.4cm	27.9cm	3.9cm	(添付CD Pl.450)
3	81.8cm	30.8cm	4.0cm	(添付CD Pl.451)
4	59.6cm	29.0cm	4.8cm	(添付CD Pl.452)
5	32.4cm	29.0cm	3.8cm	(添付CD Pl.453)

内外面とも手斧などにより成形される。下小口に残る加工痕は粗く、原木を伐採したままの状態ではないかとみられる。1と5の左側、3と4の右側に長さ3～4cm、幅2cm程度の方形の削り貫きを有す。

SE626 暗褐色土出土遺物 (Fig. 88)

須恵器

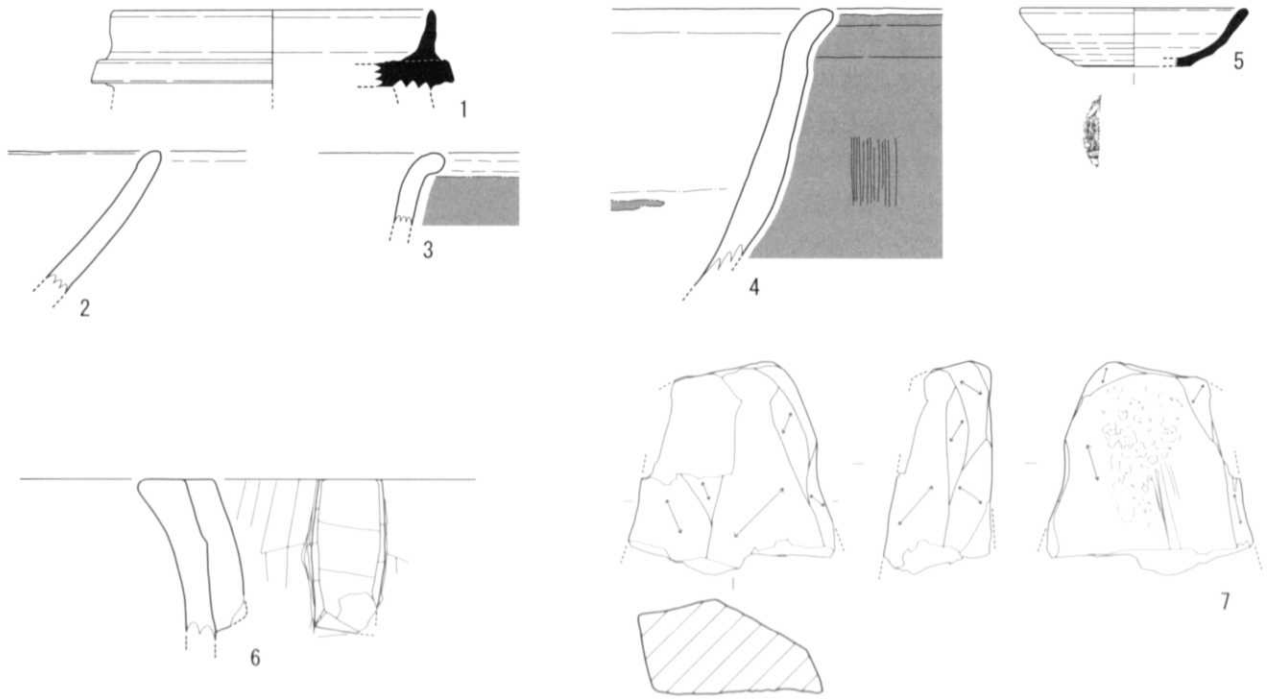
円面硯(1) 推定口径12.6cm、残存高3.15cm、推定タガ径14.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密。焼成は良好、還元はやや良好で、内面黒色、外面淡青灰色、断面紫灰色を呈する。内面にかすかに墨痕とみられる黒ずみが観察される。

土師器

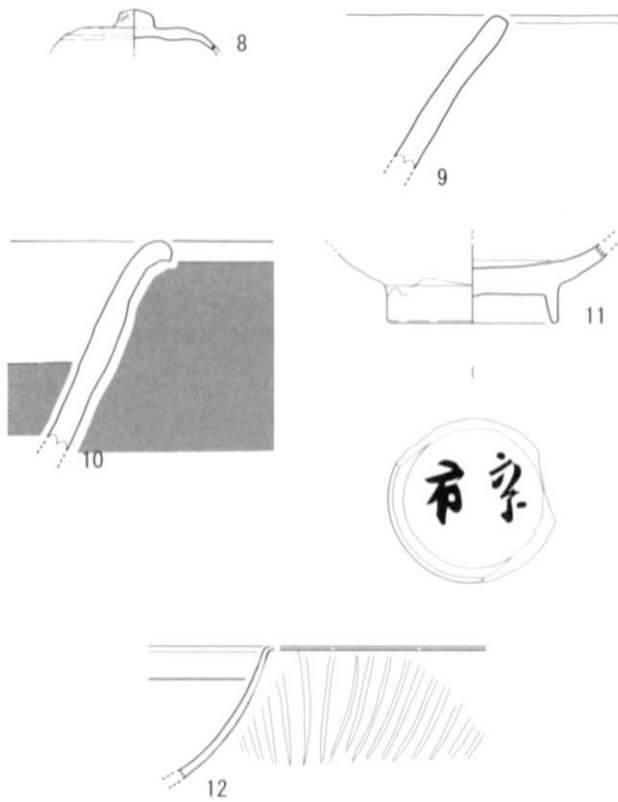
小皿a1 土器計測表参照。

鉢(2) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.7cmを測る。内面はヨコナデが施され、外面の調製は風化により不明である。胎土は粗く、1～3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面暗褐色、外面暗橙色、断面暗褐色～灰褐色を呈する。内面が褐色化している。

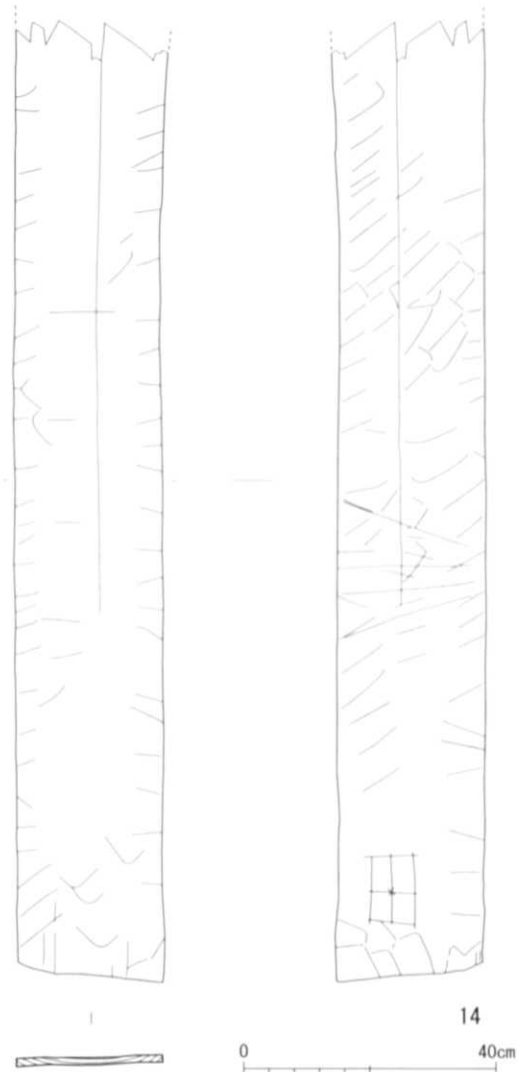
SE626暗褐色土



SE630暗褐色土



SE632井戸枠



SE630灰色粘

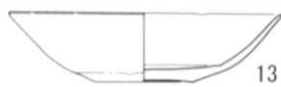


Fig. 88 井戸出土遺物実測図 (14は1/12、その他は1/3)

鍋(3) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内面の調整は摩滅のため不明、外面はヨコナデが施される。胎土は粗く、3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面灰橙色、外面暗褐色、断面白灰色～灰橙色を呈する。外面は煤が付着する。

鍋(4) 口縁部～体部上半の破片である。残存高11.2cmを測る。内面はヨコナデ、外面はタテハケの後、ヨコナデが施される。胎土は粗く、5mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面灰橙色、外面褐色～淡桃色、断面灰橙色～灰色～橙色を呈する。内面下半が褐色化し、部分的に煤が付着する。外面は煤が付着し、褐色化している。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

須恵質土器

小皿(5) 口縁部の破片である。推定口径9.1cm、残存高2.05cm、推定底径4.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部は糸切りされる。胎土は密。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

石製品

石鍋(6) 口縁部の破片である。残存高6.5cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。

砥石(7) 残存長8.6cm、残存幅8.2cm、厚さ1.3cmを測る。明灰白色を呈する凝灰岩製である。砥ぎ面が4面、一つの面に敲打痕が観察される。熱を受けた痕跡がみられる。

SE630 暗褐色土出土遺物 (Fig. 88)

土師器

小蓋c(8) 天井部の破片である。残存高1.6cmを測る。内面の調整は風化により不明、外面はミガキaが施される。貼り付けによりつまみ取り付けられる。胎土は密で、0.2mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、灰色を呈する。

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢(9) 口縁部～体部上半の破片である。残存高6.1cmを測る。調整は風化により不明。胎土はやや粗く、～2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はあまく、内外面淡黄色、断面灰白色を呈する。

鍋(10) 口縁部～体部上半の破片である。残存高8.4cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は粗く、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面灰白色、外面にぶい橙色を呈する。内面下半および外面に煤が付着する。

白磁

碗(11、添付CD P1.454) 底部の破片である。残存高3.2cm、推定高台径6.8cmを測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は精良で、薄白灰色を呈する。焼成は良好。薄灰緑色を呈する釉が薄くかかる。底部外面に墨書を有す。「□市」か。V類。

碗(12) 口縁部～体部の破片である。残存高5.35cmを測る。胎土は薄白褐色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。外面に縦篋花卉文を施す。V-3b類。

SE630 灰色粘出土遺物 (Fig. 88)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

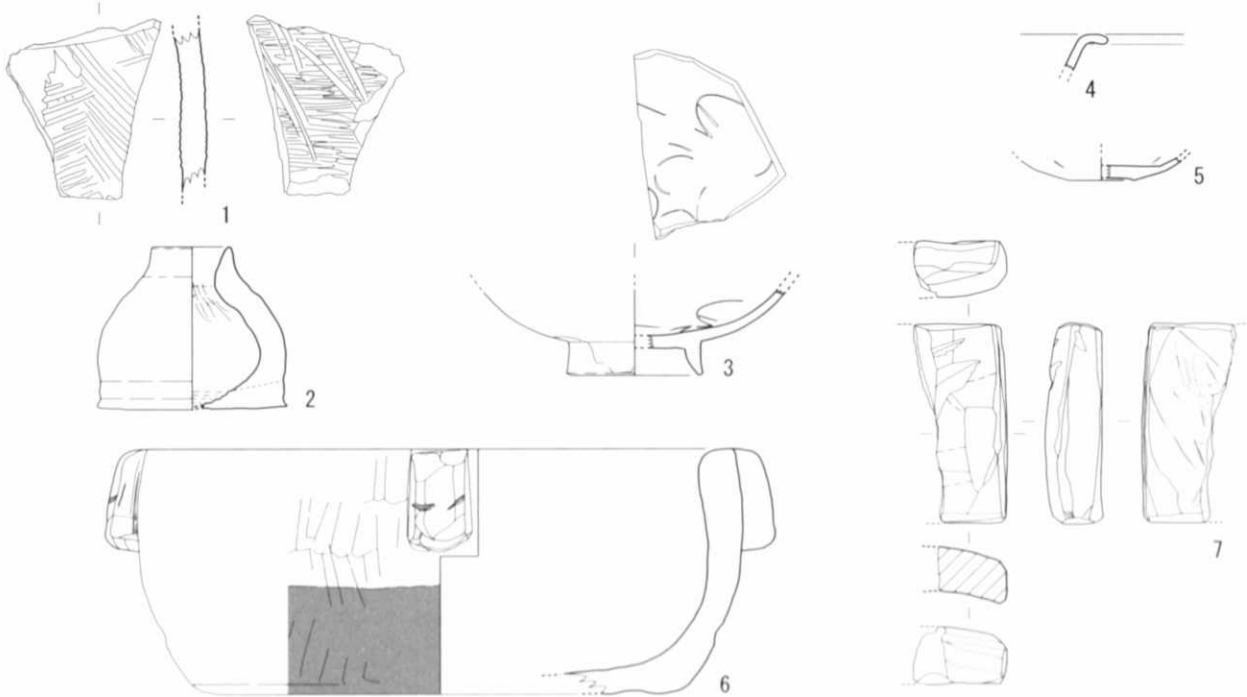
小皿a1 土器計測表参照。

小皿a(添付CD P1.455) 底部の破片である。残存長3.3cm、残存幅3.7cm、厚さ0.3cmを測る。体部内外面は回転ナデが施される。底部切り離しはヘラ切りとみられる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、褐灰色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

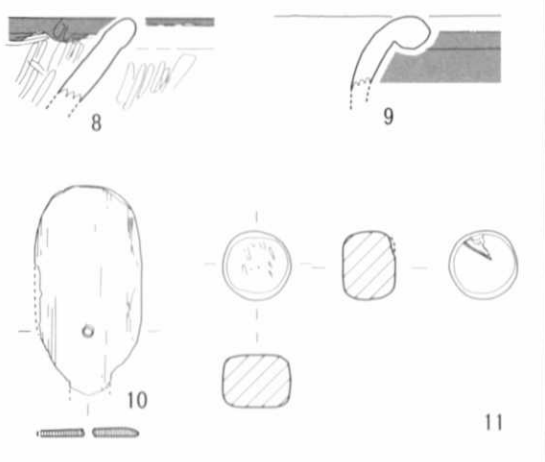
瓦器

碗c 土器計測表参照。

SE640暗褐土



SE640黄褐土



SE640黑褐土

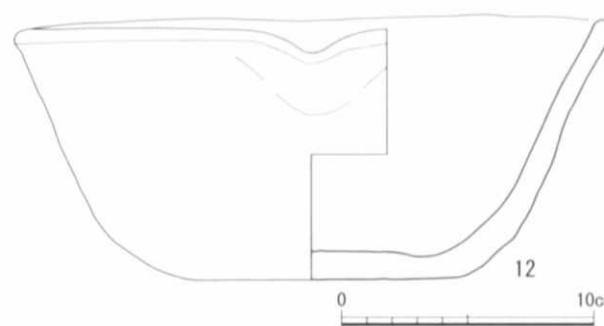
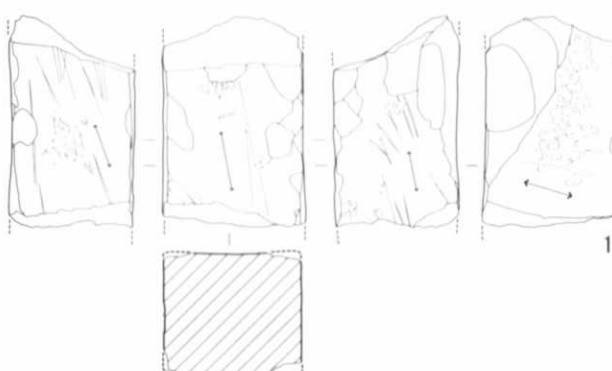
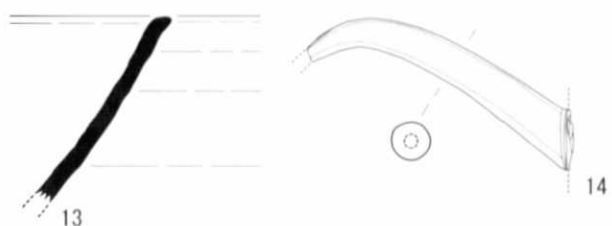


Fig. 89 井戸出土遺物実測図 (1/3)

白磁

皿 (13) ほぼ完存する。口径10.8cm、器高2.85cm、底径3.9cmを測る。胎土は薄褐白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある淡黄白色を呈する釉がかかる。輪花様の部分が2ヶ所みられるが全体に施されていない。V-1a類。

SE632 井戸枠 (Fig. 88)

木製品

縦板 (14、添付CD P1.456) 残存長153.2cm、幅24.0cm、厚さ1.4cmを測る。手斧などにより成形される。基部付近に「田」字状の線刻を有す。コーナー部分のはみだしていたり、何本も書き直したような線がみられたり、また、中央の交差部分に「×」字状の線刻があり、文字ではなく、方形の穴をあけるためなどの目印とみられる。線刻の大きさは長さ10.8cm、幅7.3cmを測る。

SE640 暗褐土出土遺物 (Fig. 89)

須恵器

甕 (1、添付CD P1.457) 体部の破片である。残存高6.6cmを測る。内外面とも平行叩き痕が残る。外面には文様状の線刻を有す。胎土は3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好だが、やや瓦質に仕上がりに、内面暗灰色、外面灰色、灰褐色を呈する。

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

小壺 (2) 推定口径3.2cm、器高6.5cm、底径7.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。頸部内面には絞り痕が残る。胎土は2mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で、内外面淡灰褐色、断面淡灰褐色～褐灰色を呈する。

白磁

椀 (3) 体部下半～底部の破片である。残存高3.45cm、推定高台径5.4cmを測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は精良で、薄白褐色を呈する。焼成は良好。光沢のある薄黄緑色を呈する釉が薄くかかる。内面に篋描文を有す。XⅢ類。

鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高1.5cmを測る。胎土は精良で、灰白色を呈する。焼成は良好。やや光沢のある乳白色を呈する釉が薄くかかる。SE585 黒灰土出土の破片と接合する。

青白磁

皿 (5) 底部の破片である。残存高0.95cm、推定底径2.6cmを測る。底部は回転ヘラケズリにより、わずかに窪められている。胎土は精良で、白色を呈する。焼成は良好。光沢のある薄青白色を呈する釉が薄くかかる。輪花、白堆線を有す。

石製品

石鍋 (6) 推定口径23.4cm、器高9.8cm、推定底径19.8cmを測る。明白銀色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が2ヶ所残存する。外面下半に煤が付着する。

滑石製品 (7、添付CD P1.458) 長さ8.0cm、残存幅3.7cm、厚さ2.3cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用しており、石鍋の成形痕や使用時に付着した煤が残る。

SE0640 黄褐土出土遺物 (Fig. 89)

土師器

丸坏 a 土器計測表参照。

丸坏 土器計測表参照。

小丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (8) 口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。内外面ともミガキが施される。胎土は精良。焼成は良好で、内外面淡灰褐色～暗褐色、断面淡灰褐色を呈する。口縁部に煤の付着、褐色化がみられる。

鍋 (9) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内面の調整は風化により不明、外面はヨコナデが施される。胎土は3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面淡灰褐色、外面淡灰褐色～暗褐色～黒褐色、断面淡灰褐色～暗褐色を呈する。外面に煤の付着、褐色化がみられる。

木製品

題籤 (10、添付 CD P1.459) 残存長8.35cm、幅4.2cm、厚さ0.35cmを測る。中央下よりに穿孔を有す。墨痕等はみられない。

土製品

瓦玉 (11、添付 CD P1.460) 長さ2.75cm、幅2.7cm、厚さ2.1cmを測る。ケズリにより成形される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を微量含む。焼成はやや良好で、白色～淡黒灰色～明白灰色を呈する。

SE640 黒褐色土出土遺物 (Fig. 89)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

捏鉢 (12、添付 CD P1.461) 口径23.7cm、器高10.3cm、底径10.7cmを測る。体部は内外面ともタテナデとヨコナデが交互に施される。底部内面は指押えの後、ナデが施される。底部内面は使用による磨耗や細かな傷が観察される。胎土は密。焼成は良好で、内外面褐色～褐灰色、断面褐色（褐色化による）を呈する。注口が1ヶ所作られる。体部内外面に斑状の煤の付着と褐色化がみられる。

須恵質土器

捏鉢 (13) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は0.5mm程度の白色砂粒をわずかに含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。

白磁

水注 (14) 注口の破片である。残存長10.4cm、根元付近の径2.0cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄青白色を呈する釉が厚くかかる。Ⅱ類。

石製品

砥石 (15) 残存長8.5cm、幅5.5cm、厚さ5.0cmを測る。灰白色を呈する堆積岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、敲打痕が観察される。

SE640 暗青灰粘出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

SE645 暗褐色土出土遺物 (Fig. 90)

須恵器

蓋c (1) つまみ周辺の破片である。残存高1.5cm、推定つまみ径2.8cmを測る。つまみは貼り付けにより取り付けられる。胎土は精良。焼成は良好、還元はやや良好で、灰色を呈する。7世紀後半頃のものとみられる。本遺構の時期よりも古相の遺物である。

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 (添付 CD P1.462) 底部の破片である。残存長3.3cm、残存幅4.1cm、厚さ0.4cmを測る。内面はミガキが施され、外面には板状圧痕が観察される。胎土は精良。焼成は良好で、内面灰黒色、外断面白灰色を呈する。底部外面に「×」のヘラ記号を有す。

SE645 暗青灰粘出土遺物 (Fig. 90)

土師器

椀 土器計測表参照。

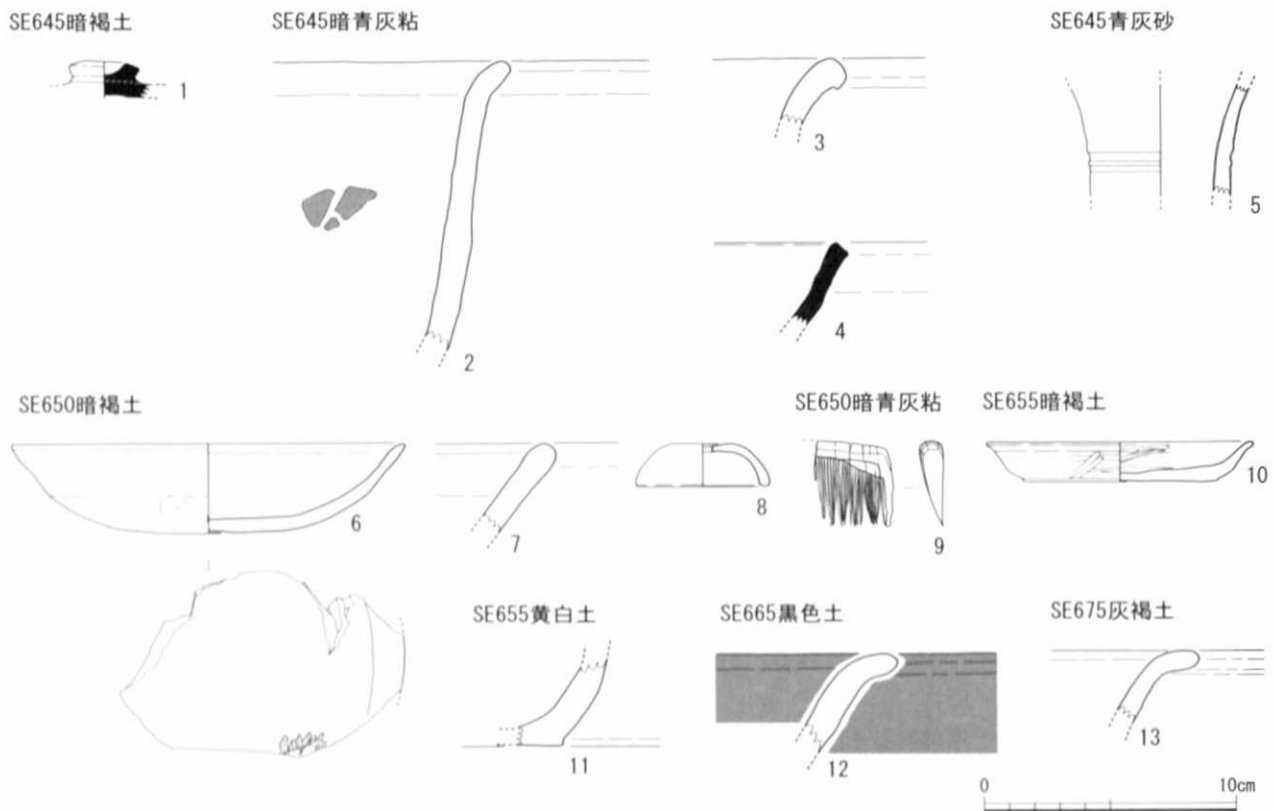


Fig. 90 井戸出土遺物実測図 (1/3)

小皿a1 土器計測表参照。

鍋 (2) 口縁部～体部上半の破片である。残存高11.6cmを測る。口径35cm程に復元される。内外面ともヨコナデが施される。胎土は3～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面にぶい橙色、外面淡褐色、断面灰黒色～橙色を呈する。内面に斑状に煤が付着する。煤は後次的に付着した可能性もある。

鍋 (3) 口縁部の破片である。残存高2.6cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡褐色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は1mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、暗青灰色を呈する。東播系。

SE645 青灰砂出土遺物 (Fig. 90)

白磁

水注 (5) 頸部の破片である。残存高4.6cmを測る。胎土は白色を呈し、精良で、空隙が入る。焼成は良好。内外面に、ガラス質で、光沢のある薄緑色を呈する釉が厚くかかる。

SE650 暗褐土出土遺物 (Fig. 90)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏a (6、添付CD P1.463) 推定口径15.6cm、器高3.6cmを測る。体部内面は回転ナデの後ミガキb、外面は回転ナデが施される。底部内面はナデが施され、底部外面はヘラ切りされ、板状圧痕の後ナデが施される。胎土は精良。焼成は良好で、内外面淡灰褐色、断面黒色～淡灰褐色を呈する。底部外面には草木類の枝葉とみられる文様が焼成前に陰刻されている。

小皿a1 土器計測表参照。

鉢? (7) 口縁部の破片である。残存高3.65cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外断面淡灰褐色、内面淡肺褐色～暗褐色を呈する。口縁部内面に褐色化がみられる。

白磁

合子蓋 (8) 推定口径5.3cm、器高1.75cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。外面に光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉がやや厚くかかる。広東系。

SE650 暗青灰粘出土遺物 (Fig.90)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

木製品

櫛 (9、添付CD P1.464) 残存長3.4cm、残存幅3.15cm、厚さ0.95cmを測る。切り込みにより歯が作られる。歯の付け根付近に沈線を有し、歯を切り込む際の目印とみられる。

SE655 暗褐土出土遺物 (Fig.90)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

黒色土器B類

小皿a1 (10) 推定口径10.6cm、残存高1.6cm、推定底径7.6cmを測る。内外面ともミガキcが施される。底部はヘラ切りされ、板状圧痕の後部分的にミガキが入る。胎土は精良。焼成は良好で、黒色を呈する。

SE655 黄白土出土遺物 (Fig.90)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

壺? (11) 底部の破片である。残存高3.5cmを測る。底径10cm程に復元される。内外面ともナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、内断面淡灰褐色、外面灰褐色を呈する。

SE665 黒色土出土遺物 (Fig.90)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

鍋 (12) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面褐色、断面褐灰色～淡灰褐色を呈する。内外面とも煤の付着、褐色化がみられる。

SE665 青灰砂出土遺物 (Fig.90)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SE675 灰褐土出土遺物 (Fig.90)

土師器

鍋 (13) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内面の調整は風化により不明、外面は回転ナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内断面灰褐色、外面暗褐色を呈する。口縁部内面～外面に褐色化がみられる。

SE2244 黒褐土出土遺物 (Fig. 91)

土師器

坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢? (1) 口縁部の破片である。残存高1.6cmを測る。調整は風化により不明である。口径18～20cm程に復元される。胎土は精良。焼成は良好で、内外面灰褐色、断面灰褐色を呈する。

石製品

石鍋 (2) 口縁部の破片である。残存高5.3cmを測る。青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に煤が付着する。

石鍋 (添付 CD P1.466) 残存長9.3cm、残存幅8.7cm、厚さ2.3cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径6.0mmの穿孔を有す。穿孔内部には鉄釘とみられる金属塊が残存する。

砥石 (3、添付 CD P1.465) 残存長3.5cm、残存幅1.8cm、厚さ1.0cmを測る。明灰白色を呈するきめの細かい泥岩または粘板岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SE2244 緑灰粘ブロック出土遺物 (Fig. 91)

土師器

坏 a 土器計測表参照。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

鉢 (4) 口縁部の破片である。残存高2.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、内面淡灰褐色～暗褐色、外断面淡灰褐色を呈する。

石製品

石鍋 (5) 推定口径27.8cm、残存高10.3cm、推定底径22.9cmを測る。淡青灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。外面に煤が付着する。耳が1ヶ所残存する。径8.0mmの穿孔と、三角形の窪みが、各1ヶ所ある。三角形の窪み内部には炭化物がつまっている。

SE2244 灰色粘出土遺物 (Fig. 91)

土師器

坏 a 土器計測表参照。

丸坏 a 土器計測表参照。

小皿 a1 土器計測表参照。

瓦器

碗 c 土器計測表参照。

白磁

碗 (6、添付 CD P1.467) 体部下半～底部の破片である。残存高4.35cm、推定高台径6.1cmを測る。胎土は精良で、薄白灰色を呈する。焼成は良好。薄灰緑色を呈する釉がやや厚くかかる。底部外面に「川」の墨書を有す。

黒釉陶器

天目碗 (7、添付 CD P1.468) 口縁部～体部の破片である。推定口径11.0cm、残存高3.7cmを測る。胎土は灰色～薄茶灰色を呈し、精良で、～0.5mm程度の白色粒を含む。焼成は良好。光沢のある黒色を呈する釉が厚くかかる。口縁部の釉は茶色である。

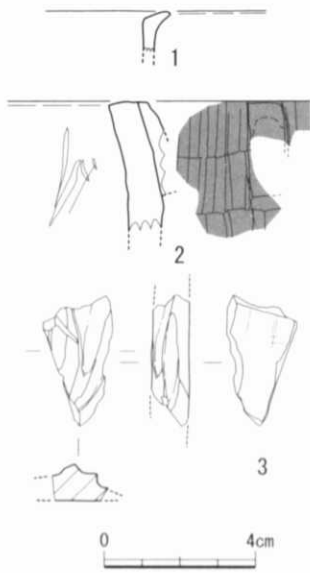
木製品

曲物底板 (8、添付 CD P1.469) 径32.0cm、厚さ0.9cmを測る。側面には、形2～3mm程度の釘穴が7ヶ所観察される。

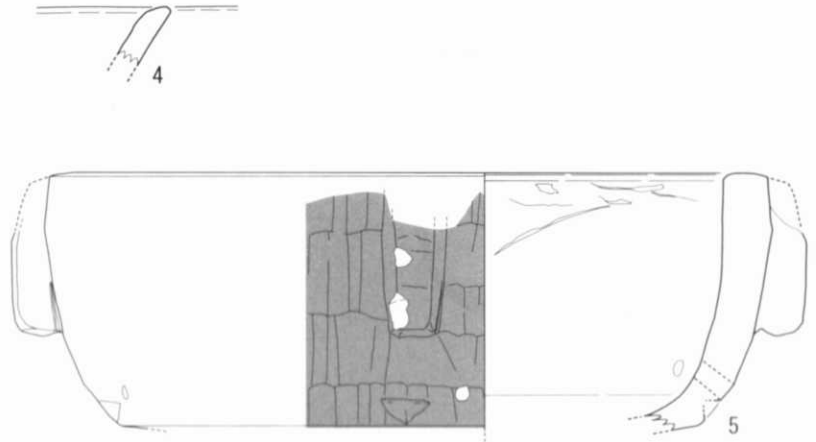
石製品

石鍋 (添付 CD P1.470) 残存長6.5cm、残存幅9.9cm、厚さ2.6cmを測る。灰色を呈する滑石製である。

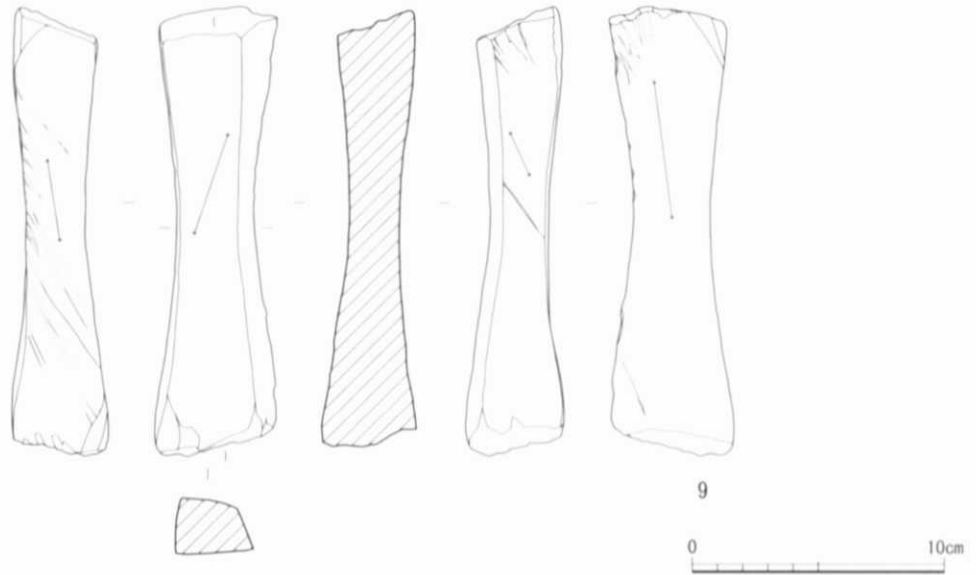
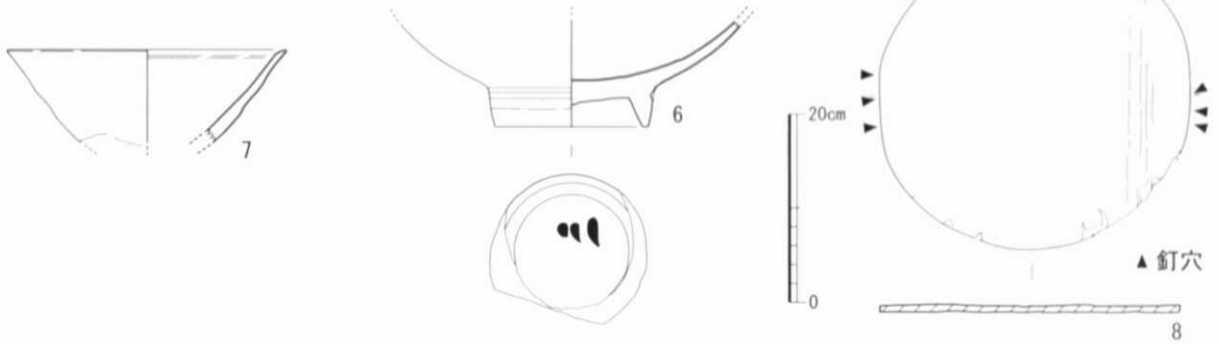
SE2244黒褐土



SE2244緑灰粘ブロック



SE2244灰色粘



SE2863暗褐土



Fig. 91 井戸出土遺物実測図 (3は1/2、8は1/8、その他は1/3)

SI545黄褐土

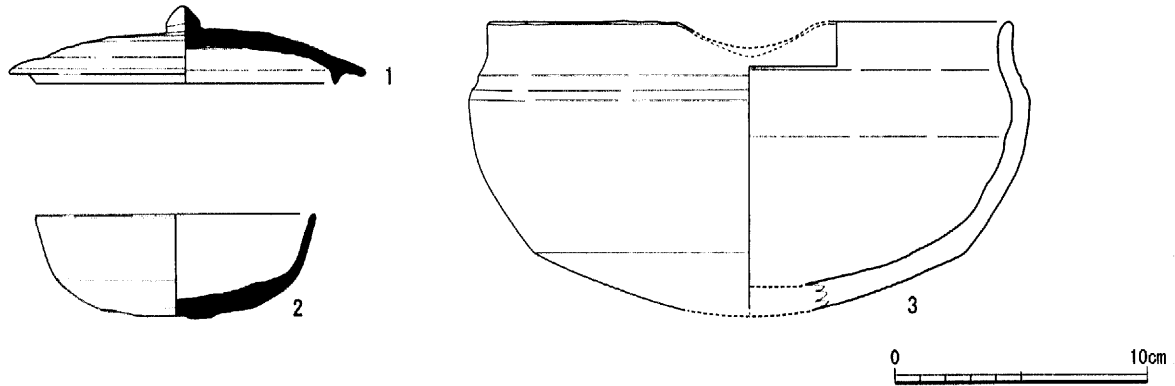


Fig. 92 SI545出土遺物実測図 (1/3)

ケズリにより成形される。内外面に煤が付着する。径7mm程度の穿孔を有す。

砥石 (9) 長さ17.9cm、幅4.8cm、厚さ4.0cmを測る。明白灰色を呈する火成岩製である。平坦な砥ぎ面が4面確認される。小口は使用されていない。

SE2244 緑灰粘出土遺物

土師器

坏 a 土器計測表参照。

丸坏 a 土器計測表参照。

SE2863 暗褐土出土遺物 (Fig. 91)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

石製品

砥石 (10) 長さ5.2cm、残存幅3.2cm、厚さ1.0cmを測る。黄白色を呈するきめの細かい泥岩または粘板岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

土製品

鉢型 (11) 残存長2.7cm、残存幅1.95cm、高さ1.5cmを測る。外面はナデが施され、内面は型押しによる成形とみられる。胎土は密で、~1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、明白茶色を呈する。土師質である。

竪穴住居出土遺物

SI545 黄褐土出土遺物 (Fig. 92)

須恵器

蓋c1 (1) 完存する。口径11.8cm、器高3.05cmを測る。体部は内外面とも回転ナデが施され、貼り付けによりかえりがつくられる。天井部は内面が不定方向のナデ、外面は回転ヘラケズリ、貼り付けによりつまみを取り付けられる。胎土はやや粗く、~3mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、内面明青灰色、外面明青灰色~暗青灰色を呈する。非常に歪んでいる。7世紀後半とみられる。

小坏a (2) ほぼ完存する。口径11.1cm、器高4.1cm、底径6.2cmを測る。内面は斜め方向のナデ、外面は風化のため調整不明、底部はヘラ切りされる。胎土は密で、~2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で、還元はなく、明橙色を呈する。7世紀後半とみられる。

土師器

鉢 (3、添付CD P1.471) 推定口径20.9cm、器高11.5cm、推定底径17.1cmを測る。風化により調整不明。胎土は密で、~2mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、明橙色を呈する。注口とみられる切込みが1ヶ所残存する。

土坑出土遺物

SK040 暗黄褐土出土遺物 (Fig. 93)

石製品

石包丁 (1) 長さ4.2cm、残存幅6.1cm、厚さ0.8cmを測る。暗小豆色～暗紫灰色を呈する輝緑凝灰岩(立岩産)製である。研磨により成形され、径3mm程度の穿孔が2ヶ所確認される。遺構の埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。弥生時代後期とみられる。

SK265 黒灰土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

片(添付CD P1.472) 残存長2.4cm、残存幅2.9cm、厚さ0.5cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良で、～1mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、褐白色を呈する。内面に黒色を呈する漆が付着する。

須恵質土器

鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高4.05cmを測る。内面は回転ナデの後、不定方向のナデ、外面は回転ナデが施される。胎土は精良。焼成、還元ともに良好で、内面黒灰色～暗灰色、外面黒灰色、断面灰白色を呈する。東播系。

中国陶器

小盤 (3) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径21.8cm、残存高5.4cmを測る。胎土は薄黄灰色を呈し、密。焼成は良好。口縁部及び内面に暗緑茶色を呈する釉が薄くかかる。口縁部は釉がふき取られ、目跡が残る。I類。

SK275 暗褐土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

石製品

石鍋 (4) 口縁部～底部の破片である。推定口径20.7cm、残存高10.25cm、推定底径20.3cmを測る。暗灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。内面は使用により磨耗している。外面に煤が付着する。

SK340 黒灰土出土遺物 (Fig. 93)

瓦類

平瓦 (5) 残存長13.5cm、残存幅11.0cm、厚さ2.6cmを測る。凹面は布目痕、凸面は格子叩き痕が残る。格子内部に三角文を有す。側面には切断の痕跡が観察され、凹面側から1/3程度まで切り込みを入れた後に割っている。割った部分は未調整である。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、明白褐色を呈する。

SK355 黒灰土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

瓦器

椀 c 土器計測表参照。

椀(添付CD P1.473) 口縁部の破片である。残存長3.1cm、残存幅4.9cm、厚さ0.5cmを測る。内外面ともミガキcが施される。胎土はやや密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好。還元はやや不良で、内外面黒灰色、断面白色を呈する。内面に黒褐色を呈する漆が付着する。

須恵質土器

捏鉢 (6) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は0.5mm程度の砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好で、内断面淡青灰色、外面淡青灰色～黒灰色を呈する。

東播系。

白磁

壺類 (7、添付CD P1.474) 体部の破片である。残存高3.5cmを測る。外面上位に横位の沈線、その沈線から下に縦位の沈線が、施される胎土は白灰色を呈し、精良。焼成は良好。外面に光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

SK365 黒褐土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

碗c 土器計測表参照。

鉢×壺 (8) 底部の破片である。残存高1.65cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良で、わずかに金雲母を含む。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

瓦器

小皿a1 土器計測表参照。

SK430 黒褐土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

小皿a1 (9) 推定口径8.6cm、器高1.0cm、推定底径6.0cmを測る。内外面は風化により調整不明、底部はヘラ切りされる。胎土は密で、～1mm程度砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、明黄褐色を呈する。

瓦器

碗 (10) 口縁部～体部の破片である。推定口径15.5cm、残存高4.9cmを測る。内面はミガキbの後にミガキc、外面はミガキcが施される。胎土は密で、～5mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともにやや良好で、内外面暗黄灰色、断面明灰白色を呈する。

白磁

小壺 (11、添付CD P1.475) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径2.6cm、残存高1.95cmを測る。肩部に2本の沈線を有す。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある薄緑黄灰色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

青白磁

合子蓋 (12) 残存高1.6cmを測る。胎土は薄褐白色を呈し、精良。焼成は良好。外面及び天井部内面に、光沢のある薄青色を呈する釉がやや厚くかかる。

SK460 黄灰土出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

SK460 黒灰土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

瓦器

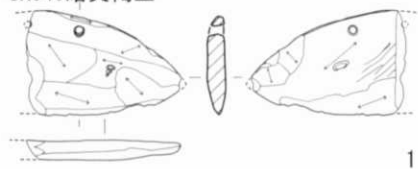
碗 (13) 口縁部～体部の破片である。推定口径15.6cm、残存高4.45cmを測る。内外面とも風化により不明瞭ながら、ミガキがわずかにみられる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好、還元はやや不良で、内断面暗褐灰色、外面暗灰黄色、口縁部面暗黒灰色を呈する。外面には斑に油のようなものしみが観察される。

SK475 暗灰褐土出土遺物 (Fig. 93)

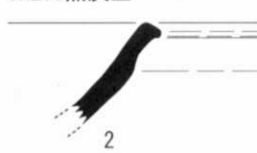
土師器

小皿a1 土器計測表参照。

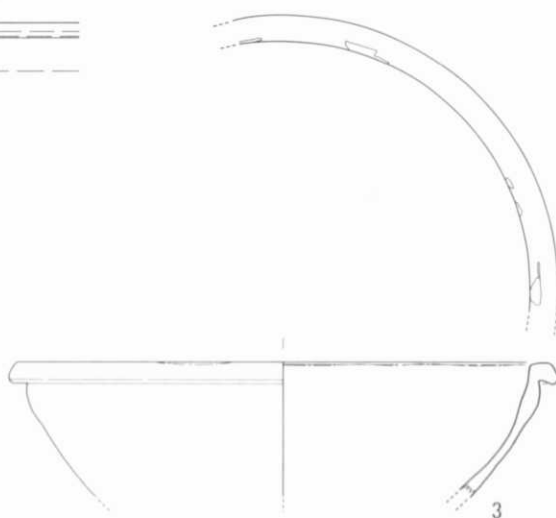
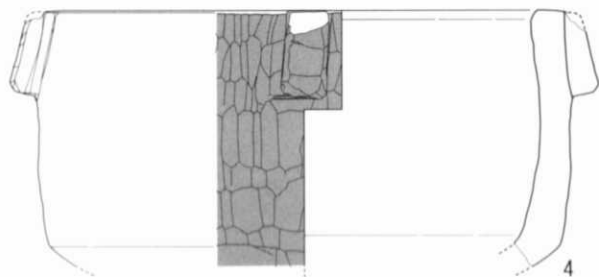
SK040暗黄褐土



SK265黑灰土



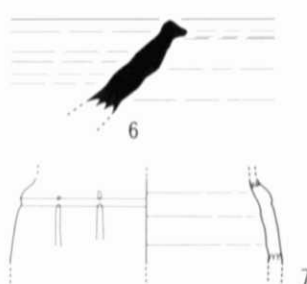
SK275暗褐土



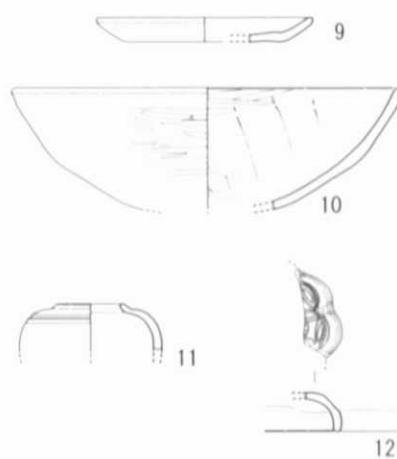
SK340黑灰土



SK355黑灰土



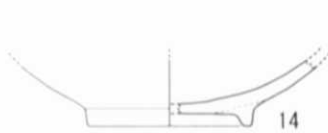
SK430黑褐土



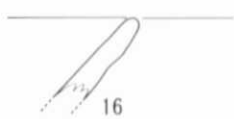
SK460黑灰土



SK475暗灰褐土



SK560暗褐土



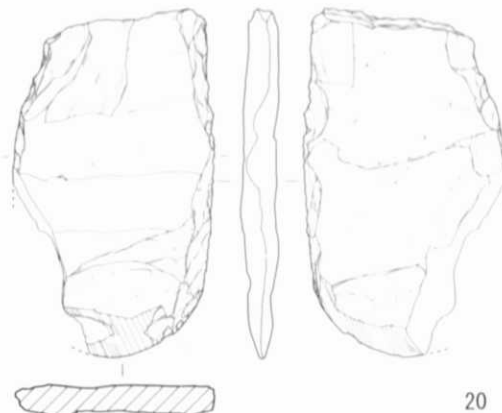
SK560灰褐粘



SK1481黑灰土



SK2248黑褐土



0 10cm

Fig. 93 土坑出土遺物実測図 (1/3)

黒色土器A類

碗c (14) 底部の破片である。残存高2.65cm、推定高台径6.5cmを測る。調整は風化により不明である。貼り付けにより高台が作られる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内面暗黒灰色、外断面明白褐色～暗黄灰色を呈する。

瓦器

碗c (15) 推定口径17.2cm、器高4.6cm、推定底径7.6cmを測る。内面はミガキc、外面は風化により不明瞭ながらもミガキがみられる。底部には板状圧痕がみられ、貼り付けにより高台が作られる。胎土は密。焼成はやや良好、還元は良好で、内面暗黒灰色～暗灰茶色、外面暗黒灰色、断面暗青灰色を呈する。

SK475 黒灰土出土遺物

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

SK560 暗褐色土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

坏 (添付CD P1.476) 口縁部の破片である。残存長5.8cm、残存幅5.4cm、厚さ0.6cmを測る。内面はミガキが施されていたものとみられる。底部外面はヘラ切りされる。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面黒色、外面白灰色、断面黒色～白灰色を呈する。外面底部中央とみられる位置に径7mm程度の楕円状の穿孔を有す。

鉢(16) 口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。内面は不定方向のナデ、外面はヨコナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、内面暗灰褐色～薄白褐色、外面明白橙色、断面黒灰色を呈する。

SK560 灰褐色土出土遺物 (Fig. 93)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢(17) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～4mm程度の砂粒を少量含む。焼成、還元ともに良好で、内外面暗青灰色、断面明白灰色を呈する。東播系。

SK560 白灰砂出土遺物

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏 (添付CD P1.477) 底部の破片である。残存長5.7cm、残存幅6.8cm、厚さ0.7cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内面灰褐色、外断面にぶい橙色～灰褐色を呈する。内面に炭化物と暗褐色を呈する物質が付着する。

SK1481 黒灰土出土遺物 (Fig. 93)

石製品

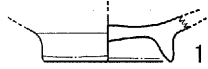
石匙(18) 残存長2.8cm、残存幅6.9cm、厚さ1.2cmを測る。明灰白色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SK2248 黒褐色土出土遺物 (Fig. 93)

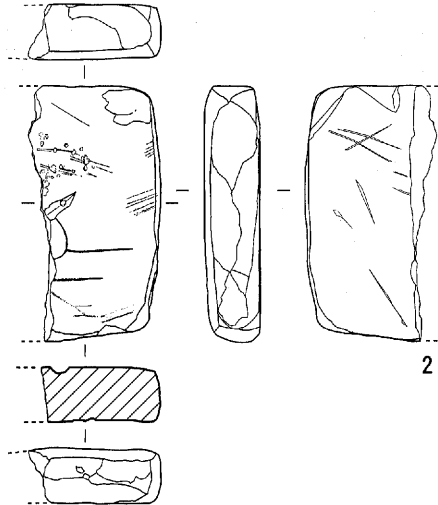
灰釉陶器

深碗(19) 口縁部～体部の破片である。推定口径15.6cm、残存高4.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密、焼成は良好で、明褐色を呈する。内外面に白灰色を呈する釉がごく薄くかかる。0-

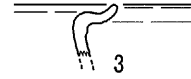
SK4099黑灰土



SK4101暗褐土



SK4146暗灰土



SK4552黑褐土

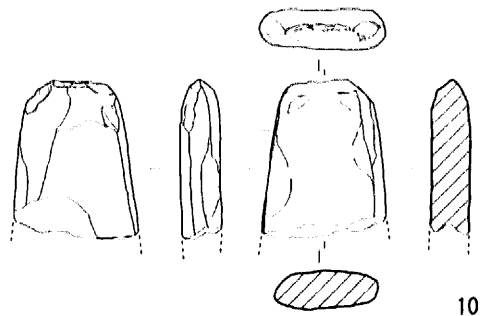
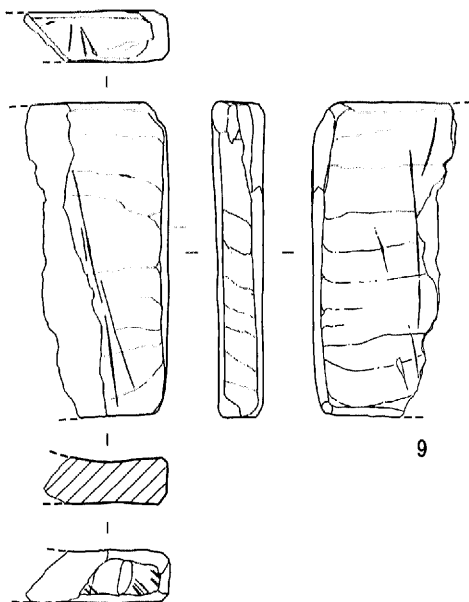
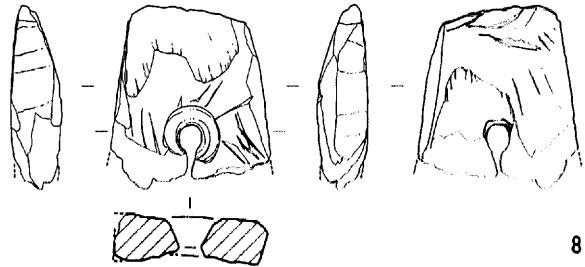
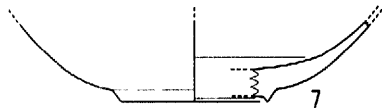
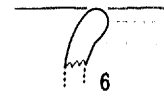
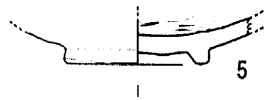
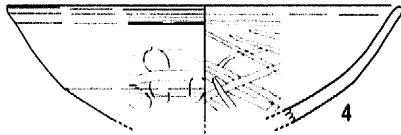


Fig. 94 土坑出土遺物実測圖 (1/3)

53型式。本遺構の時期より古相の資料である。

石製品

石鋏(20) 長さ13.8cm、残存幅7.8cm、厚さ1.5cmを測る。淡緑灰色を呈する結晶片岩製である。刃部及び基部の一部が研磨され、その他は剥離により成形される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SK4099 黒灰土出土遺物 (Fig. 94)

白磁

椀(1、添付CD P1.478) 底部の破片である。残存高1.85cmを測る。胎土は褐白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄緑色を呈する釉がやや厚くかかる。高台内も施釉される。内面見込みは濃黒緑色に変色し、あばた状に荒れている。未分類。広東系。

SK4101 暗褐土出土遺物 (Fig. 94)

石製品

滑石製品(2、添付CD P1.479) 権の可能性のある滑石製品の破片である。長さ10.0cm、残存幅5.2cm、厚さ2.2cmを測る。暗灰黒色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。細い溝状痕、断面U字状の溝状痕、小さな円形痕が観察される。

SK4146 暗灰土出土遺物 (Fig. 94)

中国陶器

壺? (3) 口縁部の破片である。残存高2.1cmを測る。口径14~15cm程に復元される。胎土は明白灰色~薄褐色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に施釉されていたとみられるが、ほとんどはげている。残存する釉は黄緑色を呈する。

SK4552 黒褐土出土遺物 (Fig. 94)

土師器

丸坏a 土器計測表参照。

丸坏c 土器計測表参照。

小丸坏a 土器計測表参照。

椀(4) 口縁部~体部の破片である。推定口径15.7cm、残存高4.7cmを測る。内外面ともミガキcが施される。胎土は精良。焼成は良好で、内面~口縁部外面灰黒色、外面淡褐色、断面白灰色を呈する。

椀c(5) 底部の破片である。残存高1.9cm、推定高台径5.8cmを測る。内面はミガキc、外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土は精良。焼成は良好で、内面淡褐色、外断面灰褐色~におい橙色を呈する。底部外面に「+」のへら記号を有す。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿(添付CD P1.480) 底部の破片である。残存長3.6cm、残存幅3.8cm、厚さ0.3cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。底部外面に板状圧痕が残る。胎土は密。焼成は良好で、灰褐色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

小皿(添付CD P1.481) 口縁部の破片である。残存長2.3cm、残存幅3.7cm、厚さ0.3cmを測る。胎土は密。焼成は良好で、におい橙色を呈する。内面に暗褐色を呈する漆が付着する。

鉢(6) 口縁部の破片である。残存高2.5cmを測る。内面の調整は風化により不明、外面はヨコナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面灰褐色、断面灰褐色~黄灰褐色を呈する。

青白磁

皿(7) 底部の破片である。残存高3.25cm、推定底径5.8cmを測る。胎土は薄白褐色を呈し、精良で、~1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。光沢のある薄黄緑白色を呈する釉がやや厚くかかる。

石製品

石鍋(添付CD P1.484) 口縁部の破片である。残存長7.5cm、残存幅7.8cm、厚さ2.1cmを測る。灰褐色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径8.0mmの穿孔を有す。

滑石製品 (8、添付 CD P1.482) 残存長7.3cm、残存幅6.4cm、厚さ2.1cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。中央下位に径9mm程度の穿孔を有す。権の可能性はある。

滑石製品 (9、添付 CD P1.483) 長さ12.5cm、残存幅5.6cm、厚さ2.1cmを測る。黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の転用とみられ、石鍋の成形痕が残る。

磨製石斧 (10) 磨製石斧の基部の破片である。残長6.8cm、残存幅5.0cm、厚さ1.6cmを測る。濃灰白色を呈する泥質ホルンフェルス製である。研磨により成形される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。弥生時代前期とみられる。

その他の遺構出土遺物

不明遺構出土遺物

SX010 黒褐色土出土遺物 (Fig. 95)

土師器

坏 a 土器計測表参照

小皿 a1 土器計測表参照。

小皿 a (1、添付 CD P1.485) 底部の破片である。底部内面に女性の顔とみられる墨書が観察される。

鉢? (2) 鉢とみられる口縁部の破片である。残存高2.0cmを測る。内外面とも風化により調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面とも灰白色を呈する。

須恵質土器

捏鉢 (3) 口縁部の破片である。残存高3.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈し、口縁部外面は重ね焼きにより灰褐色を呈す。東播系。

石製品

石帯 (4、添付 CD P1.486) 残存長2.2cm、残存幅2.2cm、厚さ0.9cmを測る。表面は非常に丁寧かつ平滑な研磨が施され、光沢を有す。裏面はやや粗く研磨され、帯に留めるための穿孔が施される。暗緑色を呈する蛇紋岩製である。

風字硯 (5、添付 CD P1.487) 残存長4.0cm、残存幅5.3cm、残存厚1.0cmを測る。黒褐色を呈する泥岩製である。裏面に「三〇」の線刻文字が観察される。

石鍋 (6) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.9cmを測る。口径26cm程に復元される。灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。使用による磨耗のため、内面のケズリはやや不明瞭。鏝以下に煤が付着する。

石鍋 (7) 底部の破片である。残存高5.0cm、推定底径25.6cmを測る。明白銀色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。内面のケズリは磨耗により不明瞭である。内外面とも煤が付着する。

石鍋 (添付 CD P1.488) 体部の破片である。残存長4.5cm、残存幅3.5cm、厚さ2.0cmを測る。灰白色を呈する滑石製である。径8mm程度の穿孔を有す。割れ口が削られている。

土製品

取瓶 (8) 口縁部～底部の破片である。口径11.2cm、残存高5.7cmを測る。内面の調整は金属付着物により不明。外面は指押えが施される。胎土は3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面灰色～黄灰色～淡緑灰色、断面薄紫色～淡緑灰色～黄灰色を呈する。指押えにより成形された注口が1ヶ所残存する。内面及び注口からよだれ状に黒色～橙色～赤紫色～黄緑色～灰黄色を呈する金属が付着する。

取瓶 (9) 口縁部の破片である。残存高4.6cmを測る。内外面とも器面調整を施すが詳細は不明である。胎土は1～2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色、外面灰色～黄灰色、断面灰色～暗灰色～黄灰色～薄緑灰色を呈する。指押えにより成形された注口が1ヶ所残存する。口縁部内外面に茶褐色～赤紫色～濃緑色～灰黄色～濃紺色を呈する金属が付着する。

取瓶 (10) 口縁部の破片である。口径13.0cm、残存高3.8cmを測る。内外面ともナデが施される。胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色～灰白色、外面灰白色～褐色～淡緑灰色、断面黄灰色～暗灰色を呈する。内面にわずかに金属が付着する。

取瓶 (11) 口縁部の破片である。残存高5.1cmを測る。内外面とも器面調整を施すが詳細は不明である。胎土は1～2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色、外面紫灰色～灰黄色～褐色、断面灰色

～灰黄色～暗灰色を呈する。内面に灰緑色～赤茶色～緑黄色～濃紺色を呈する金属が付着する。

甗の羽口(12) 径7.1cm、残存長12.3cmを測る。胎土は～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面橙色、外面暗灰色～灰褐色、断面暗灰色～橙色を呈する。端部を欠損しているが、割れ口に黒色を呈する金属が付着しており、端部欠損後も使用していたものと推測される。

SX010 黒褐土ブロック出土遺物 (Fig. 95・96)

土師器

鍋(13) 体部～底部の破片である。残存高12.3cmを測る。内外面とも風化により調整が不明瞭である。内面上半はナデまたはミガキ等の平滑な器面調整、外面下半はナデとみられる。底部はケズリ或いはナデが施される。胎土はやや粗く、3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、内面浅黄橙色、外断面にぶい黄橙色を呈する。外面下半に煤が付着する。

白磁

椀(14) 口縁部の破片である。残存高5.4cmを測る。胎土は白灰色を呈し、精良で、空隙が極わずかに入る。焼成は良好。内外面に、光沢のあまりない薄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。Ⅷ-3類。

石製品

石鍋(添付CD P1.489) 体部の破片である。残存長6.3cm、残存幅9.2cm、厚さ2.3cmを測る。灰色を呈する滑石製である。径10mm程度の穿孔が2ヶ所観察される。

石鍋(添付CD P1.490) 底部の破片である。残存長10.4cm、残存幅3.0cm、厚さ2.0cmを測る。明灰色を呈する滑石製である。径9.0mmの穿孔を有す。割れ口が削られている。

砥石(15、添付CD P1.491) 残存長6.2cm、残存幅6.5cm、厚さ3.2cmを測る。灰色～にぶい黄色を呈する砂岩製である。平坦な砥ぎ面の他、敲打痕が観察される。

土製品

棒状製品(16、添付CD P1.492) 棒状を呈する土製品の破片である。残存長8.0cm、幅3.5cm、厚さ3.0cmを測る。長軸方向にナデが施される。胎土は0.5～4mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、表面褐灰色、断面淡黄色を呈する。

取瓶(17) 口縁部の破片である。残存高4.8cmを測る。器面調整を施しているようだが詳細は不明である。胎土は5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色、外面薄灰色～淡黄橙色、断面薄灰色～浅黄橙色を呈する。注口が1ヶ所残存する。内面に赤紫色を呈する金属がわずかに付着する。

取瓶(18) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを呈する。内面は金属付着物により調整不明、外面はナデを施しているとみられる。胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面淡緑灰色～淡青灰色～灰橙色、断面灰色～灰橙色を呈する。内外面に黒褐色～茶褐色～黄緑灰色～赤紫色～暗黄緑色を呈する金属が付着する。

取瓶(19) 口縁部の破片である。残存高4.8cmを測る。内面に指押えが施される。胎土は1～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗褐灰色、外面黄灰色～灰橙色～灰色、断面黄灰色～灰橙色を呈する。内外面に紫黒色～灰緑色～赤色～赤茶色を呈する金属が付着する。

取瓶(20) 推定口径10.8cm、器高5.3cmを測る。胎土は粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面暗灰色～淡灰褐色、断面暗灰色～橙色を呈する。口縁部外面～内面に黒色～明橙色～赤紫色～黄灰色～紺色～黄緑色を呈する金属が付着する。注口が1ヶ所残存する。また、鉄鉗等の工具で挟んだとみられる痕跡を有す。工具先端は幅1.3cm、長さ2.9cm以上の方形を呈すると想定される。工具痕周辺が外方向に歪んでいる。

SX010 濃ねずみ色土出土遺物 (Fig. 96)

須恵器

猿面硯(21、添付CD P1.493) 須恵器甕を転用した硯の破片である。残存長7.8cm、残存幅5.7cm、厚さ1.4cmを測る。内面は使用により非常に平滑である。外面及び周縁は研磨により成形され、外面には格子叩きの痕跡が一部残る。胎土は精良で、1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。内面に墨痕がみられる。

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

鉢? (22) 鉢とみられる口縁部の破片である。残存高5.0cmを測る。内面は工具による幅広のヨコナデ、外面はタテハケの後ヨコナデが施される。口縁部内面には沈線状を呈する段を有す。胎土はやや密で4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内断面橙色、外面浅黄橙色を呈する。

石製品

石鍋 (23) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.6cmを測る。ケズリにより成形される。灰色を呈する滑石製である。縦耳が1ヶ所残存する。

砥石 (24、添付CD P1.494) 残存長3.2cm、残存幅3.8cm、厚さ3.2cmを測る。暗赤褐色を呈する砂岩製である。

砥石 (25、添付CD P1.495) 長さ3.7cm、幅3.3cm、厚さ3.0cmを測る。黄褐色～橙灰色～灰白色を呈する砂岩製である。ほぼ全面が砥面として使用され、一部に自然面が残る。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

紡錘車 (26、添付CD P1.496) 推定径8.5cm、厚さ2.0cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられ、上下面に石鍋の成形痕が残る。中央に1辺1.5cm程度の方角を呈する穿孔を有す。側面に敲打痕が観察される。

紡錘車 (27、添付CD P1.497) 推定径9.7cm、厚さ2.2cmを測る。明白黄色を呈する滑石製である。上面～側面にかけて連続回転によるものとみられるケズリが施される。石鍋を転用したものとみられ、石鍋の成形痕が部分的に残存する。中央に1辺1.3cm程度の方角とみられる穿孔を有す。

土製品

取瓶 (28) 口縁部～底部の破片で、1/2程度残存する。推定口径11.8cm、器高5.9cmを測る。内面の調整は金属付着物により不明、外面は器面調整は施されているが詳細は不明である。胎土はやや細かく、1～4mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、外面灰白色～黄灰白色～灰色、断面灰色～オリーブ灰色～黄灰白色～オリーブ黄色を呈する。注口が対角に2ヶ所残存する。内外面ににぶい赤色～黒色～にぶい黄橙色～明紫灰色～黄白色～濃緑色を呈する金属が付着する。

取瓶 (29) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径12.3cm、残存高4.4cmを測る。胎土は2～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、外断面白灰色～暗灰色を呈する。口縁部～内面に黒色～赤茶色～黄緑色を呈する金属が付着する。注口の一部が残存する。

取瓶 (30) 口縁部の破片である。推定口径12.0cm、残存高4.0cmを測る。内外面とも指押えが施される。胎土はやや密で、4mm程度の砂粒を含む。また、有機物の痕跡がみられる。焼成は良好で、内面灰白色、外面灰色～灰白色～灰黄色、断面暗灰色～灰白色を呈する。内外面に緑黄色～濃緑色～白赤色～赤紫色～茶褐色～暗灰色～灰色を呈する金属が付着する。

取瓶 (31) 口縁部の破片である。推定口径11.4cm、残存高4.4cmを測る。内外面とも器面調整は施されているが詳細は不明である。胎土はやや密で、3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面灰白色、断面暗灰色～灰白色を呈する。内外面に黒色～暗茶褐色～赤白色～暗赤灰色～赤紫色を呈する金属が付着する。

取瓶 (32) 口縁部の破片である。残存高4.7cmを測る。内外面とも指押えが施される。胎土はやや密で4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色、外断面灰色～灰白色を呈する。内面に灰黄色～赤紫色～暗灰色を呈する金属が付着する。

SX010 灰色粘出土遺物 (Fig. 97)

土師器

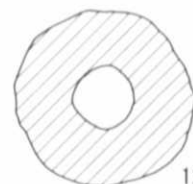
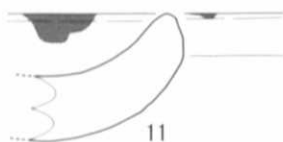
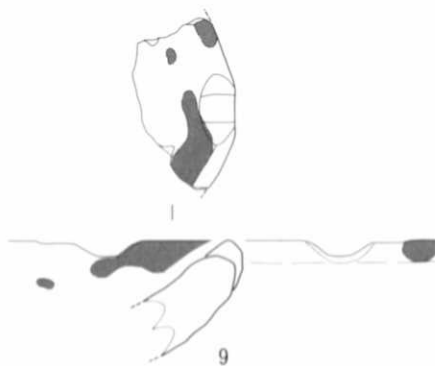
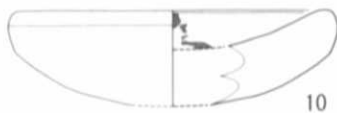
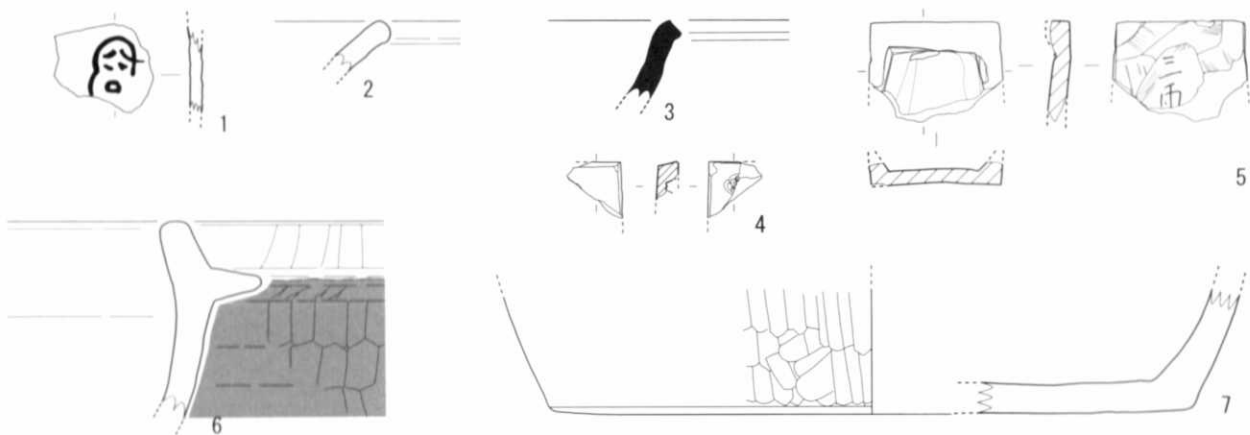
坏a 土器計測表参照。

坏a (1、添付CD P1.498) 底部の破片である。残存高1.5cm、底径11.2cmを測る。底部は糸切りされる。内外面ともナデが施される。胎土は精良で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。底部外面に墨書が観察されるが内容は不明である。

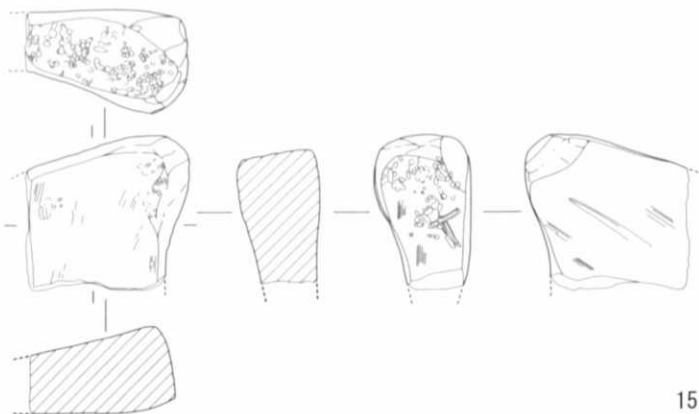
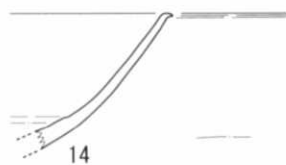
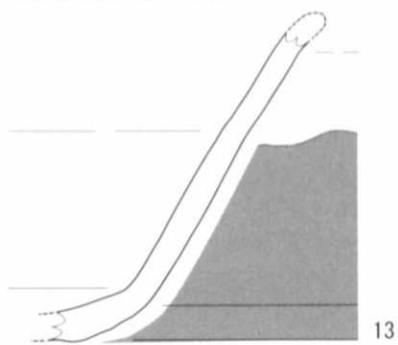
小皿a1 土器計測表参照。

鉢 (2) 口縁部の破片である。残存高4.75cmを測る。口縁部はナデ、内面は回転ナデが施される。外面は風化により調整不明である。胎土はきめ細かく、3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色を呈する。

SX010黒褐土



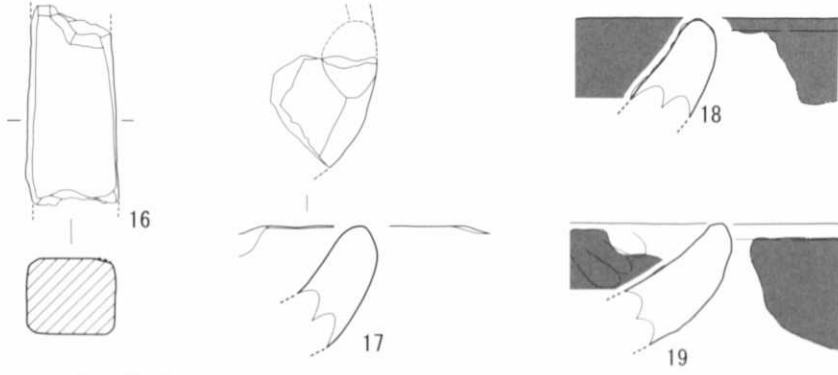
SX010黒褐土ブロック



0 10cm

Fig. 95 SX010出土遺物実測図 (1/3)

SX010黒褐土ブロック



SX010濃ねずみ色土

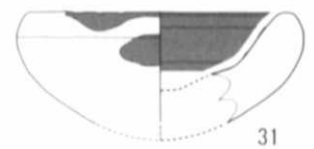
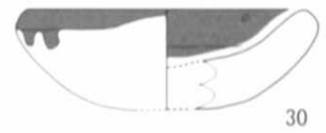
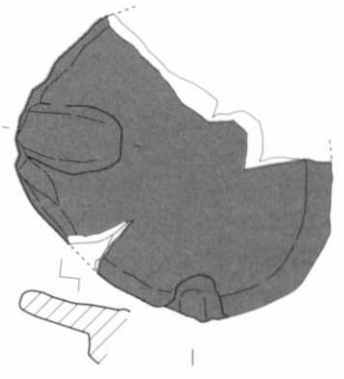
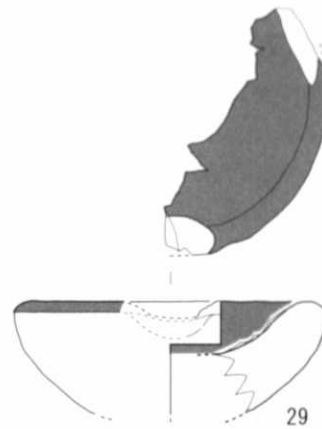
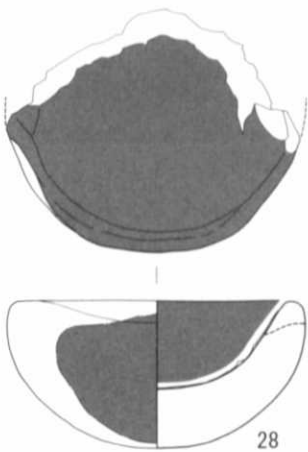
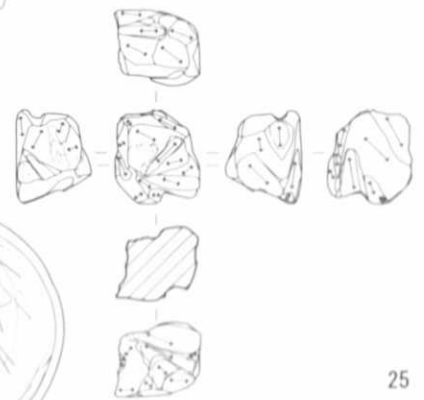
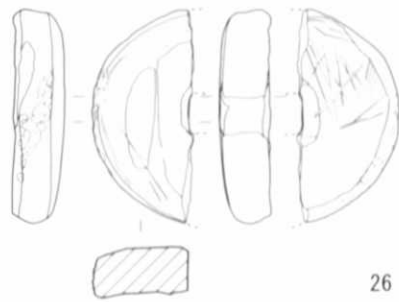
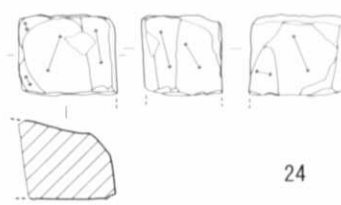
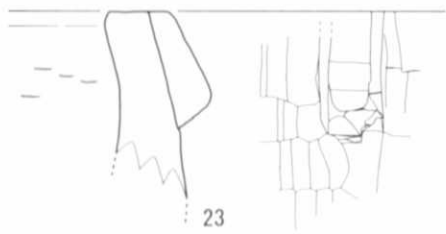
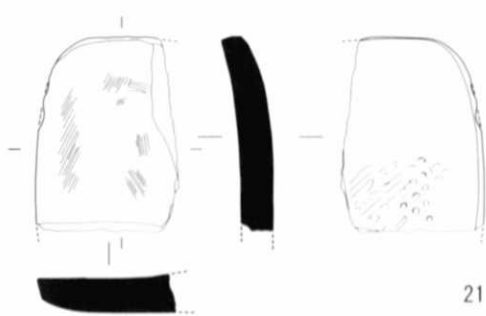


Fig. 96 SX010出土遺物実測図 (1/3)

鍋(3) 口縁部の破片である。残存高4.6cmを測る。口縁部はナデ、体部内外面はハケ後ナデが施される。胎土はきめ細かく、3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内断面黄灰色、外面黄灰色～黒色を呈する。外面に煤が付着する。

瓦器

碗c 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢(4) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はきめ細かく、1.5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢(5) 口縁部の破片である。残存高3.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はきめ細かく、1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、口縁部外面が灰色、その他は灰白色を呈する。東播系。

瓦器

鉢(6) 口縁部の破片である。残存高3.7cmを測る。口縁部は回転ナデ、内面は非常に細かいミガキ(幅1mm以下)が密に入り、外面は指押えの後、ミガキが施される。外面のミガキは風化により不明瞭。胎土はきめ細かく、1.5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面暗灰色、断面灰白色を呈する。類例を調べたわけではないが、胎土やミガキの施され方をみると畿内系の可能性も窺える。

灰軸陶器

碗(7、添付CD P1.499) 高台を伴う底部の破片である。残存高3.4cm、推定高台径7.8cmを測る。底部は糸切りされ、内外面とも回転ナデが施される。高台はナデにより貼り付けられている。胎土は細かく、3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰白色を呈する。内面に、灰緑色を呈する釉が極わずかに残存する。底部内面は非常によく擦られており、滑らかになっている。内面に赤色顔料が付着する。

白磁

皿(8) 口縁部の1/3程度を欠損する。口径9.8cm、器高2.45cm、高台径4.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄黄緑色を呈し、やや厚くかかる。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅲ-1類。

木製品

柄(9、添付CD P1.500) 柄尻の破片である。残存長4.35cm、幅2.3cm、残存厚0.6cmを測る。表面はケズリにより成形される。目釘穴が1ヶ所観察される。

石製品

石鍋(10) 口縁部の破片である。残存高6.5cmを測る。口径35cm程度に復元される。銀色～白銀色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。外面に煤が付着する。

石鍋(11) 頸部の破片である。内外面ともケズリが施される。内面のケズリは磨耗により不明瞭。オリーブ灰色を呈する滑石製である。内面に煤が付着する。穿孔を有し、割れ口の一部が削られている。

滑石製不明品(12、添付CD P1.501) 長さ4.5cm、幅5.6cm、厚さ2.3cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。石鍋の転用とみられ、表裏面に石鍋の成形痕や石鍋使用時に付着した煤が残る。複数の円形の穿孔、断面V字状の条痕が観察される。

滑石製不明品(添付CD P1.502) 残存長7.0cm、幅11.7cm、厚さ2.3cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。

権(13、添付CD P1.503) 長さ9.0cm、幅6.8cm、厚さ2.9cmを測る。黒灰色～灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられ、表裏面に石鍋の成形痕や石鍋使用時に付着した煤が残る。上部より径7mm程度の円形の穿孔を有す。裏面に平鑿によるとみられる、幅6mm程度、深さ7mm程度の彫り込みが観察されるが、意図は不明。

土製品

取瓶(14) 口縁部～底部の破片で、1/2程度残存する。口径9.8cm、器高5.3cmを測る。内外面及び注口とも指押えにより成形される。胎土は細かく、1.5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面明褐色～白灰色、断面明褐色～褐灰色を呈する。注口が対角に2ヶ所残存する。内外面に赤紫色～紫色～暗

SX010灰色粘

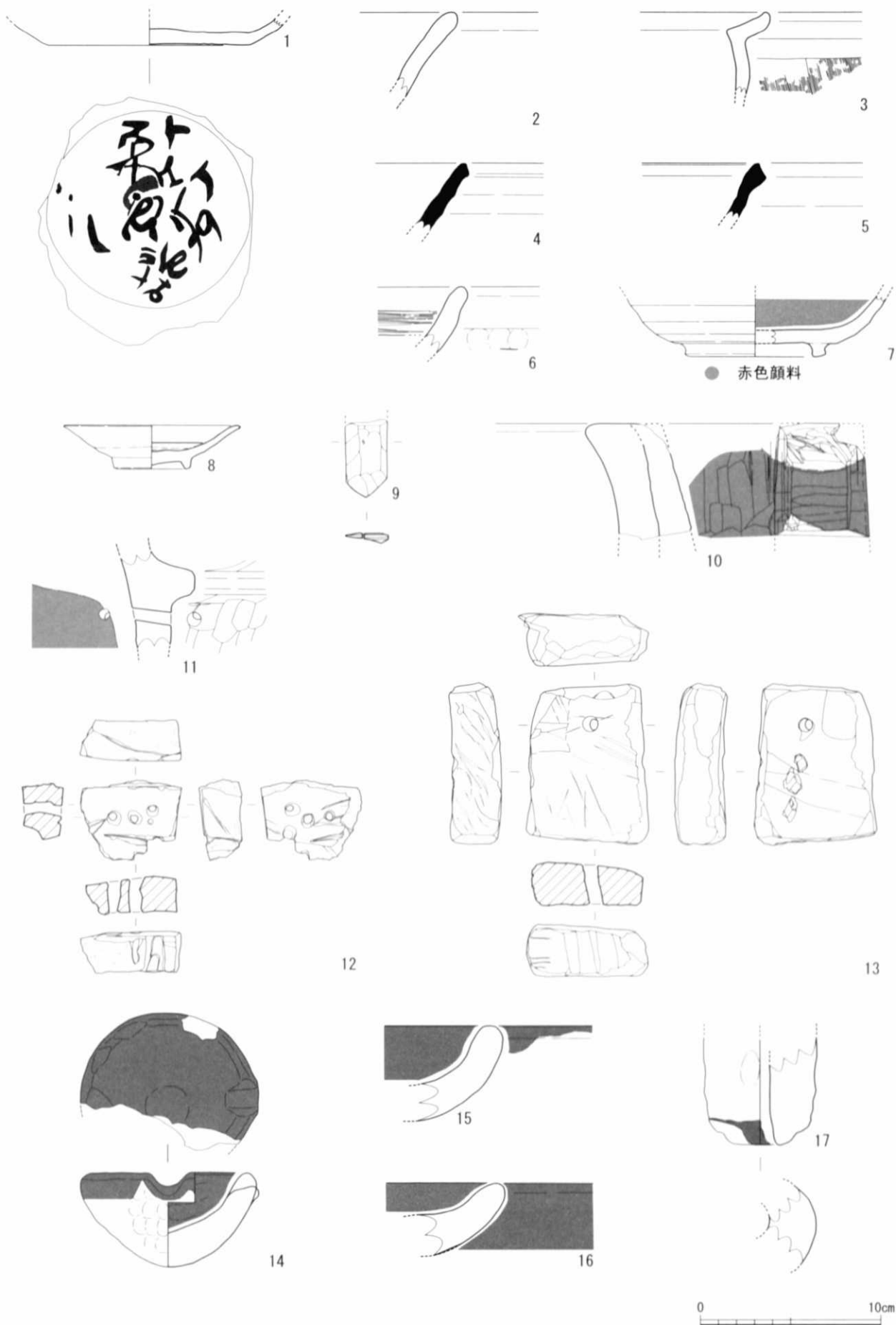


Fig. 97 SX010出土遺物実測図 (1/3)

茶褐色～茶黒色を呈する金属が付着する。

取瓶(15) 口縁部の破片である。残存高5.3cmを測る。口縁部はナデ調整、内外面は器面調整が施されるが詳細は不明である。胎土はやや細かく、4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、外面灰白色～灰色～黄灰色、断面灰色～暗灰色～灰白色を呈する。内外面に濃緑色～黄緑色～赤茶色～橙色～赤紫色～黒色～赤白色を呈する金属が付着する。

取瓶(16) 口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。内外面とも器面調整は施されているが、詳細は不明である。胎土は細かい。焼成は良好で、内面に青灰色、断面灰色～灰白色～黄灰色を呈する。内外面に暗灰色～灰黄色～濃緑色～赤紫色～灰緑色を呈する金属が付着する。

甗の羽1(17) 径6.2cm、残存長6.0cmを測る。胎土は2～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、内面黄褐色～暗灰色、外面橙色～暗灰色、断面暗灰色～橙色～黄褐色を呈する。端部に黄緑色～紺色を呈する金属が付着する。

SX010 黄灰砂出土遺物 (Fig. 98)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

高台片(1、添付CD P1.504) 底部の破片である。残存高2.7cm、推定高台径11.3cmを測る。底部内面はナデ、底部および体部外面は回転ナデが施される。貼り付けにより高台が作られる。胎土はやや密。焼成はやや良好で、薄灰褐色を呈する。底部内外面に墨書がみられる。

瓦器

小皿c 土器計測表参照。

白磁

椀(2) 口縁部の破片である。推定口径18.2cm、残存高5.0cmを測る。胎土は白灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある淡オリーブ色を呈しやや厚くかかる。内面に櫛目文が施される。V-4b類。

椀(3) 口縁部の破片である。残存高3.9cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄灰緑色を呈し、薄くかかる。外面に縦篋花卉文を施す。XII-1b類。

青磁

皿(4) 口縁部の破片である。推定口径11.4cm、残存高1.6cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉はにぶい光沢の黄緑色を呈し薄くかかる。口縁部は輪花を呈しているようである。未分類。

石製品

石鍋(5) 体部の破片である。残存高6.7cmを測る。にぶい黄橙色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳が1ヶ所残存する。

石鍋(添付CD P1.505) 底部の破片である。残存長8.4cm、残存幅10.3cm、厚さ2.0cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。穿孔が4ヶ所確認される。割れ口が削られている。

土製品

取瓶(6) 口縁部～底部の破片である。推定口径11.8cm、器高5.5cmを測る。外面は指押えにより成形される。内面は金属付着物により不明。胎土はやや密で、2～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面明オリーブ灰色、断面暗灰色～明オリーブ灰色を呈する。内面に灰黒色～明紫色を呈する金属が付着する。

取瓶(7) 口縁部の破片である。推定口径11.8cm、残存高3.9cmを測る。外面は指押えにより成形される。内面は器面調整が施されるが、詳細は不明。胎土はやや密で、6mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰色、外面灰黄色～灰白色～にぶい橙色、断面灰色～にぶい橙色～灰黄色を呈する。指押えによる注口が1ヶ所残存する。内面に灰色～赤紫色を呈する金属が付着する。

取瓶(8) 口縁部の破片である。推定径7.6cm、残存高3.6cmを測る。内外面とも指押えにより成形される。胎土はやや密で、3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰白色～灰色を呈する。内外面に灰緑色～暗灰緑色～明紫色を呈する金属が付着する。

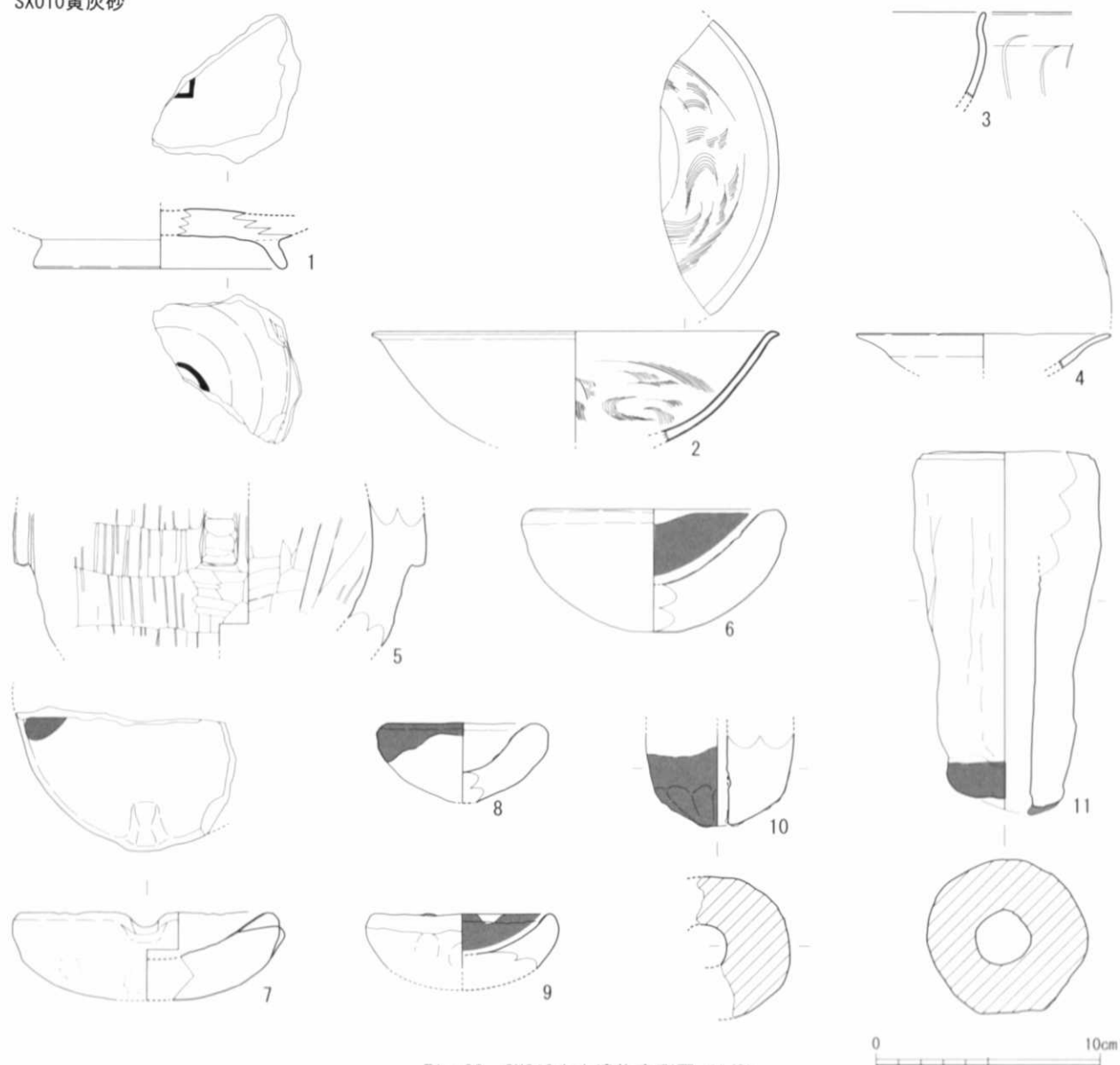


Fig. 98 SX010出土遺物実測図 (1/3)

取瓶 (9) 口縁部の破片である。推定口径8.6cm、残存高2.5cmを測る。外面は指押えにより成形される。内面は器面調整は施されるが詳細は不明である。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面灰白色、外面灰白色～黄白色、断面灰色～灰白色～黄白色を呈する。内面に赤紫色～黒紫色～黄白色～濃緑色を呈する金属が付着する。

甗の羽口 (10) 先端部の破片である。推定径6.6cm、残存高4.25cmを測る。外面は器面調整が施されるが詳細は不明。内面は棒状物の抜き取りにより成形される。胎土は粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面浅黄橙色、外面灰白色、断面にふい黄橙色～灰白色を呈する。先端部に黒紫色～赤紫色～暗黄緑色～黄白色を呈する金属が付着する。

甗の羽口 (11) 推定径8.3cm、長さ16.4cmを測る。外面は縦方向のナデが施される。胎土は2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面橙色、外面橙色～灰色～暗灰色、断面橙色～灰色～赤紫色を呈する。先端部に黒色～茶褐色～黄白色～赤紫色を呈する金属が付着する。

SX530 暗褐土出土遺物 (Fig. 99～101)

土師器

坏a 土器計測表参照。

丸坏a 土器計測表参照。

小皿a1 土器計測表参照。

小皿a(1) 口縁部の破片である。残存高1.1cmを測る。口縁を内側に折り返す。調整は風化のため不明である。胎土は密で、～2mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。京都系。

小皿(添付CD P1.506) 底部の破片である。残存長2.6cm、残存幅3.8cm、厚さ0.7cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の赤色粒を含む。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。内面に黒色を呈する漆が付着する。

小皿(添付CD P1.507) 底部の破片である。残存長3.3cm、残存幅3.2cm、厚さ0.4cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密。焼成はやや良好で、褐白色を呈する。内面に黒色～褐色を呈する漆が付着する。

小壺(2) 口縁部を欠損する。残存高5.15cm、底径7.05cmを測る。内外面とも回転ナデが施され、底部外面は不定方向のナデが施される。胎土は粗く、～5mm程度の砂粒を非常に多く含む。焼成はやや良好で、内断面薄灰茶色、外面薄灰茶色～濃灰茶色～暗黒茶色を呈する。体部外面に煤が付着する。

脚付鉢(3) 推定口径37.0cm、器高10.0cm、推定底径27.3cmを測る。内面は工具による不定方向のヨコナデ、外面は斜め方向のナデの後、ヨコナデが施される。貼り付けにより脚が作られ、ナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面暗橙色～薄灰茶色、外面暗橙色～暗黒茶色～薄灰茶色、断面薄灰茶色を呈する。脚が1ヶ所残存する。

鉢(4) 口縁部～体部の破片である。残存高7.15cmを測る。内外面とも工具を使用したとみられるタテ方向のナデが施される。胎土はやや粗く、～7mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗橙色、外断面薄白茶色～暗橙色を呈する。内面に赤色顔料とみられるものが付着する。

鉢(5) 口縁部～体部上半の破片である。残存高7.0cmを測る。内面は工具を使用したとみられるヨコナデ、外面は工具を使用したとみられるタテナデが施される。外面口縁部付近に指頭痕が観察される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面薄灰茶色～暗黒灰色、外面薄灰茶色～暗橙色を呈する。

鍋(6) 口縁部～体部下半の破片である。残存高9.3cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや密で、～3mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面薄橙色、断面暗褐灰色～薄橙色を呈する。

鍋×甕(7) 口縁部の破片である。残存高6.8cmを測る。口径35cm程に復元される。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～8mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面薄灰茶色～暗灰茶色、外断面薄灰茶色を呈する。

鍋×鉢(8) 口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、口縁部は明橙色、その他は薄灰茶色を呈する。

鍋×鉢(9) 口縁部の破片である。残存高2.6cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内断面薄白橙色、外面暗黒茶色を呈する。外面に褐色化、煤の付着がみられ、二次的に火を受けている。

鍋×鉢(10) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、暗灰茶色を呈する。外面に煤が付着する。

鍋×鉢(11) 口縁部の破片である。残存高3.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内断面明茶褐色、外面暗灰茶色～暗茶褐色を呈する。

鍋×鉢(12) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～4mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内断面薄灰茶色、外面明茶褐色～暗茶褐色を呈する。

鍋×鉢(13) 口縁部の破片である。残存高3.1cmを測る。内外面ともヨコナデが施される。胎土はやや粗く、～5mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面薄灰茶色～明白茶色、外断面明白茶色を呈する。

片(添付CD P1.508) 体部の破片とみられる。残存長2.1cm、残存幅3.1cm、厚さ0.5cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内面褐白色、外面暗灰色、断面褐白色～暗灰色を呈する。内面に褐色を呈する漆が付着する。

瓦器

小皿 a1 土器計測表参照。

須恵質土器

捏鉢 (14) 口縁部～体部上半の破片である。推定口径28.9cm、残存高7.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、斜め方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成、還元ともに良好で、内断面明青灰色、外面面明青灰色～暗青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (15) 注口を含む口縁部の破片である。残存高5.8cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、不定方向のナデが施され、使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、青灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (16) 口縁部の破片である。残存高3.2cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (17) 口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (18) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成、還元ともに良好、内外面灰色、断面灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (19) 口縁部の破片である。残存高3.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内断面灰白色、外面灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (20) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、焼成は良好、還元はやや不良、内外面灰白色～灰色、断面灰白色を呈する。東播系。

捏鉢 (21) 口縁部の破片である。残存高4.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下半は回転ナデの後、不定方向のナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (22) 口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面下位は不定方向のナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (23) 口縁部の破片である。残存高5.5cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、内断面灰白色、外面灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (24) 口縁部の破片である。残存高5.6cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (25) 口縁部の破片である。残存高6.7cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。東播系。

捏鉢 (26) 体部下半～底部の破片である。残存高4.7cmを測る。体部内面は回転ナデの後、斜め方向のナデ、体部外面は回転ナデ、底部は内外面ともにナデが施される。内面は使用により磨耗している。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰色を呈する。

捏鉢 (27) 底部の破片である。残存高2.6cmを測る。内面は使用による磨耗で調整不明、外面はナデ、底部は糸切りの後、ナデが施される。胎土はやや密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成、還元ともに良好で、灰白色を呈する。

白磁

椀 (28) 口縁部の破片である。残存高4.4cmを測る。胎土は薄黄白色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。内面に櫛描文が施される。V-4b類。

椀 (29) ほぼ完存する。口径16.0cm、器高6.1cm、高台径6.3cmを測る。胎土は薄黄白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉がかかる。Ⅷ-2類。

椀 (30) 底部の破片である。残存高6.35cmを測る。胎土は薄褐色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄褐色を呈する釉が薄くかかる。体部外面に篋描文が施される。XⅡ類。

皿 (31) 完存する。口径8.9cm、器高3.1cm、高台径4.4cmを測る。胎土は薄褐色を呈し、精良で、～1mm程度の黒色粒、白色粒を含む。焼成は良好。やや光沢のある薄灰色を呈する釉がやや厚くかかる。Ⅱ-1b類。

Ⅲ (32) 推定口径10.0cm、器高2.5cm、高台径4.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある暗オリーブ色を呈する釉がやや厚くかかる。輪花が1ヶ所残存する。Ⅲ-2類。

Ⅲ (33) 口縁部の破片である。推定口径10.6cm、残存高2.15cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。薄褐色を呈し、泡状化した釉が薄くかかる。V-2類。

Ⅲ (34) 口縁部の破片である。残存高1.35cmを測る。胎土は薄褐色を呈し、精良。焼成は良好。光沢のある薄褐色を呈する釉が薄くかかる。輪花、白堆線が1ヶ所残存する。V-2b類。

Ⅲ (35) 推定口径10.7cm、器高2.45cm、推定底径3.5cmを測る。胎土は明灰白色を呈し、精良で、極小の白色粒、黒色粒を含む。焼成は良好。やや光沢のある薄黄灰色～薄灰白色を呈する釉が薄くかかる。VI-1a。

Ⅲ (36) 底部の破片である。残存高6.4cm、底径4.9cmを測る。胎土は薄灰色を呈し、精良で、黒色粒をわずかに含む。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑色を呈する釉が厚くかかる。Ⅷ類？。

Ⅲ (37) 口縁部の破片である。推定口径11.9cm、器高3.05cmを測る。口縁部外面に、貼り付けにより鐙が作られる。胎土は明白灰色を呈し、精良で、極小の黒色粒をわずかに含む。焼成は良好。内外面に、にぶい光沢の薄黄灰白色を呈する釉がやや厚くかかる。広東系。

越州窯系青磁

器台 (38、添付CD P1.509) 香炉等をのせていたとみられる器台の破片である。推定口径10.3cm、器高8.15cm、推定底径17.1cmを測る。脚は6ヶ所に復元される。上位及び中位の屈曲部に横位の沈線が施される。脚は縦位の沈線により区画され、脚と脚の間には、上、中、2段の透かしが入っていたことが推測される。上段の透かしは玉ねぎ状の形態に復元され、透かしを縁どるように沈線が入る。中段については不明だが、何らかの図象をモチーフにした透かしが入っていた可能性もある。胎土は灰色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、やや光沢のある暗灰緑色を呈する釉が薄くかかる。

青白磁

壺×水注 (39、添付CD P1.510) 花卉を陽刻した壺或いは水注の胴部の破片とみられる。残存長6.05cm、残存幅6.65cm、厚さ1.15cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢があり、ガラス質で薄緑色を呈し、外面に厚くかかる。

壺×水注 (40) 花卉を陽刻した壺或いは水注の胴部の破片とみられる。残存長2.9cm、残存幅2.3cm、厚さ1.4cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢があり、ガラス質で薄緑色を呈し厚くかかる。39とは別個体とみられる。

瓦類

文字瓦 (41、添付CD P1.511) 残存長7.3cm、残存幅4.3cm、厚さ2.1cmを測る。凸面は格子叩きが施される。胎土はやや粗く、～3mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、表面暗灰橙色、断面明橙色を呈する。「佐」の逆字が陽刻される。

セン (42) 残存長4.1cm、残存幅4.0cm、残存厚4.3cmを測る。表面はヨコナデが施される。胎土はやや密で、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、表面淡灰黄色、断面淡灰黄色～暗橙色を呈する。

セン (43) 残存長12.2cm、残存幅12.4cm、残存厚4.0cmを測る。表面はナデが施される。胎土はやや密で、～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、表面淡灰黄色、断面淡黄灰色～淡灰黄色を呈する。

石製品

石鍋 (44) 口縁部の破片である。残存高8.05cmを測る。明白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。耳に部分的に煤が付着する。割れ口が二次的に加工されている。

石鍋 (45) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.0cmを測る。明白灰色を呈する滑石製である。内外面ともケズリにより成形される。鐙以下に煤が付着する。鐙下の体部に穿孔を有す。口縁部内面にも穿孔があるが、斜め口縁端部かするように施されている。

石鍋 (46) 口縁部～体部上半の破片である。残存高5.4cmを測る。明白灰色～薄茶灰色を呈する滑石製である。内外面ともケズリにより成形される。口縁部付近に穿孔がある。鐙以下に煤が付着する。

石鍋 (添付CD P1.512) 体部の破片とみられる。残存長7.0cm、残存幅9.2cm、厚さ1.3cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径8.0mmの穿孔を有す。外面に煤が付着する。穿孔

SX530暗褐土

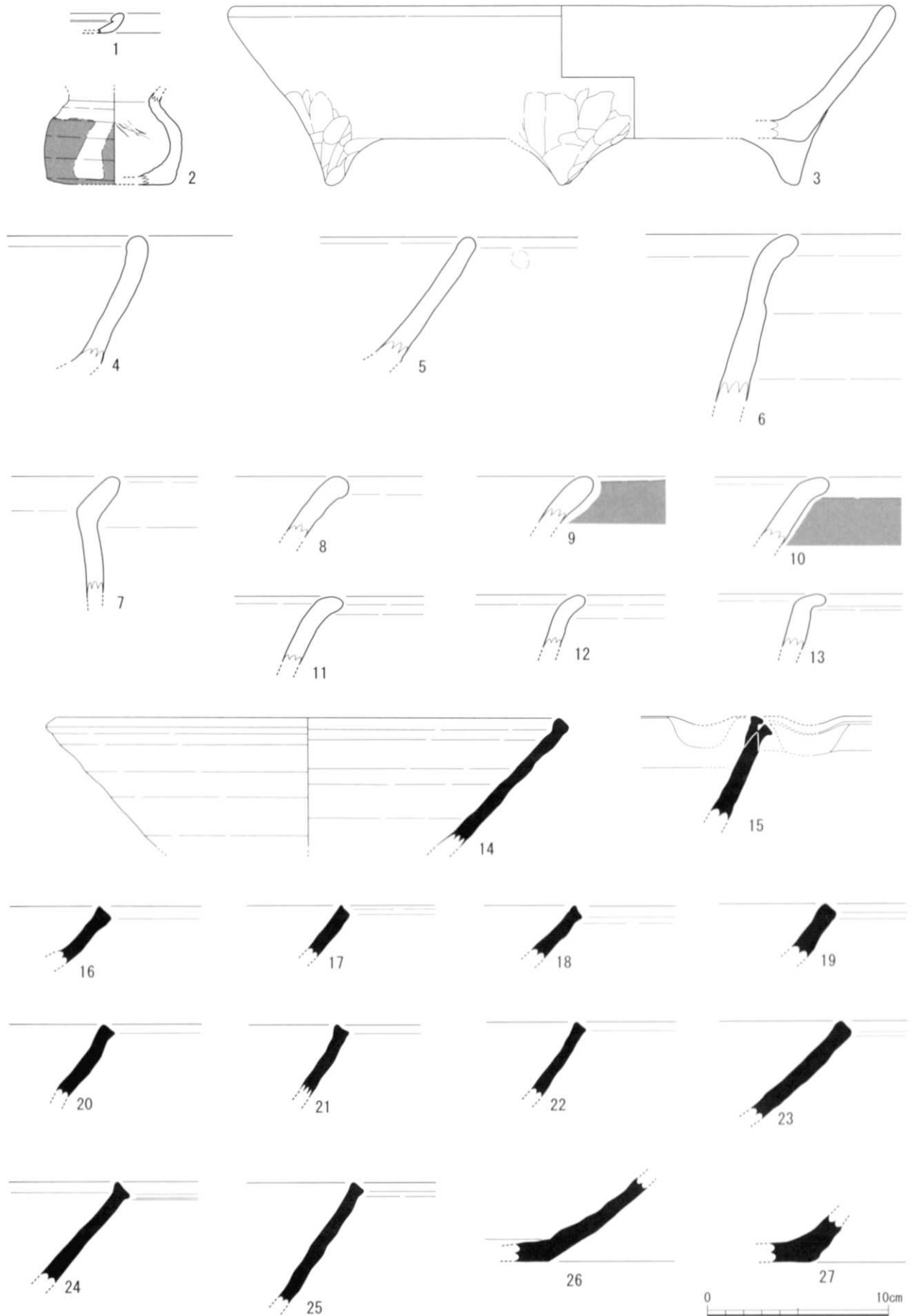


Fig. 99 SX530出土遺物実測図 (1/3)

SX530暗褐土

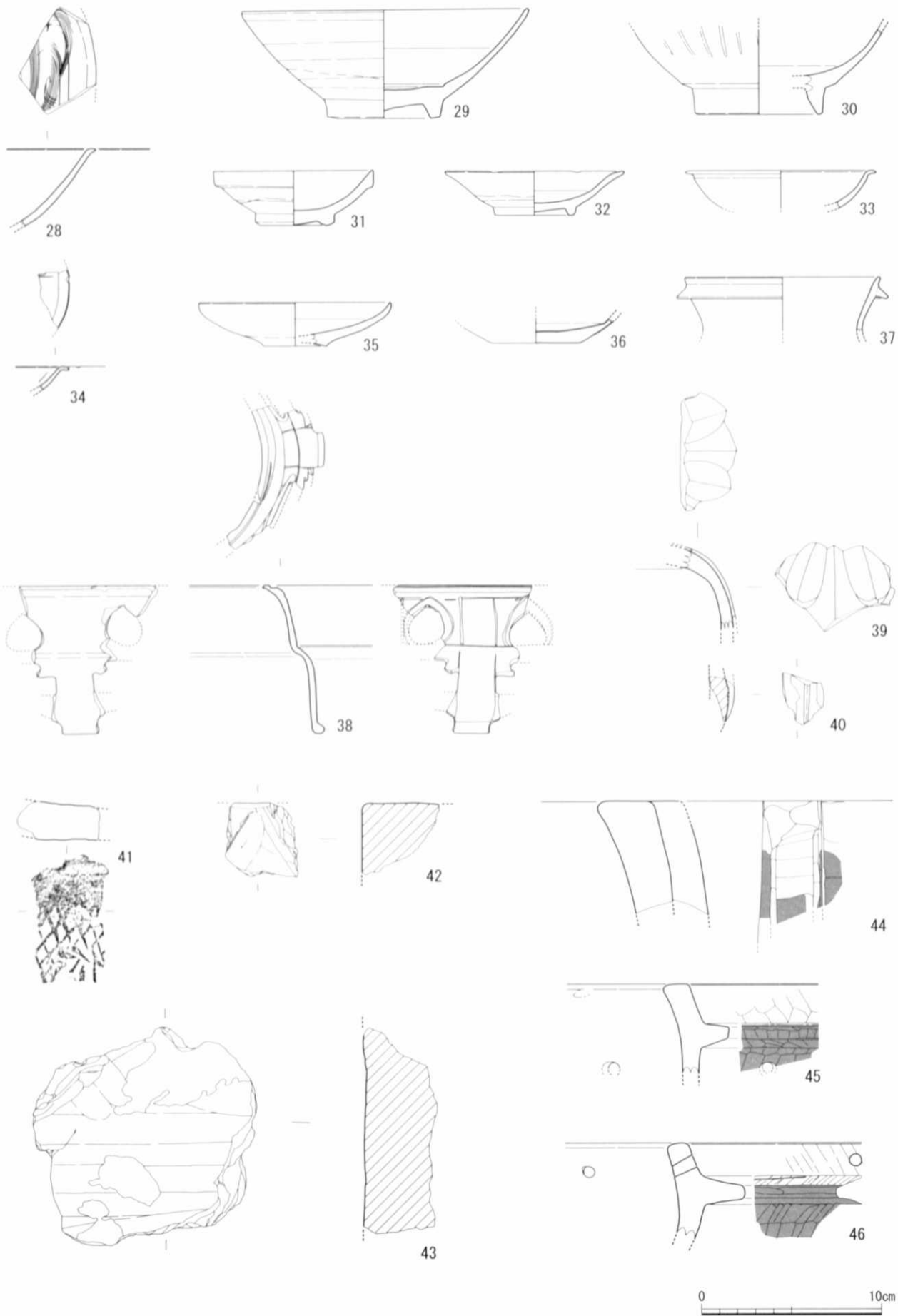


Fig. 100 SX530出土遺物実測図 (1/3)

SX530暗褐土

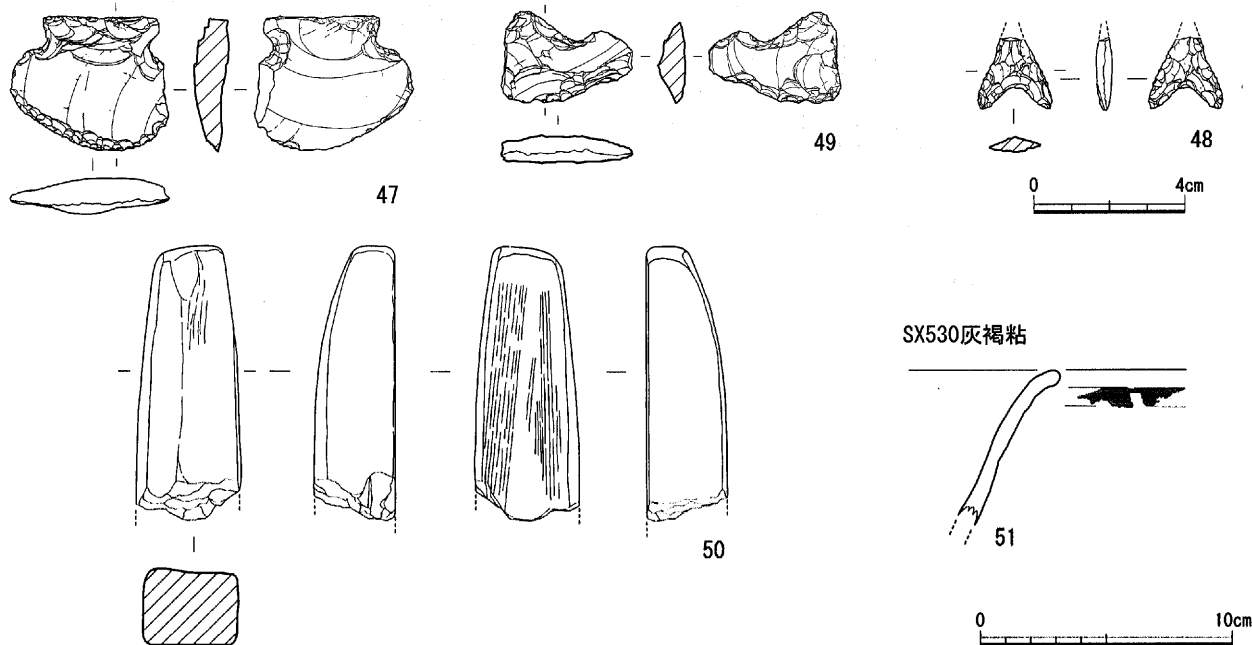


Fig. 101 SX530出土遺物実測図 (48は1/2、その他は1/3)

内部にも外面付近に煤が付着している。

石鍋 (添付 CD P1.513) 残存長3.2cm、残存幅5.2cm、厚さ2.2cmを測る。白灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径13mm程度の播鉢状の穿孔を有す。割れ口が削られている。

滑石製品 (添付 CD P1.514) 長さ9.0cm、残存幅6.6cm、厚さ1.3cmを測る。灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。径3~5mmの穿孔が4ヶ所観察される。

石匙 (47) 長さ5.4cm、幅6.3cm、厚さ1.4cmを測る。白灰色を呈するサヌカイト製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

石鏃 (48) 残存長1.9cm、幅2.0cm、厚さ0.45cmを測る。灰白色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

二次加工のある剥片 (49) 長さ3.6cm、幅5.25cm、厚さ1.0cmを測る。黒灰色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

土製品

柱状製品 (50、添付 CD P1.515) 残存長10.95cm、幅4.15cm、厚さ3.2cmを測る。ハケの後、ナデが施される。胎土はやや粗く、~4mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、明茶褐色~暗茶褐色を呈する。

SX530 灰褐粘出土遺物 (Fig. 101)

土師器

小皿a1 土器計測表参照。

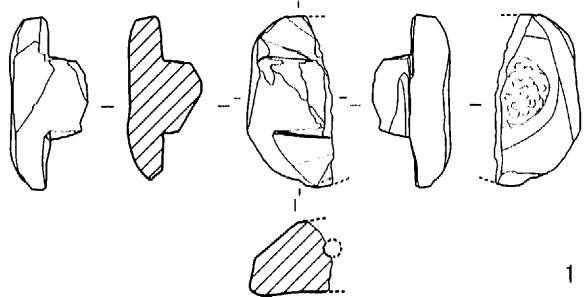
鉢 (51) 口縁部~体部上半の破片である。残存高6.2cmを測る。内面は不定方向のナデが施される。外面は風化及び剥離のため調整不明。胎土はやや密で、~2mm程度の砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、内面薄橙茶色、外断面薄橙茶色~薄茶褐色を呈する。口縁部に褐色化がみられ、二次的に火を受けた可能性がある。

SX530 白灰砂出土遺物

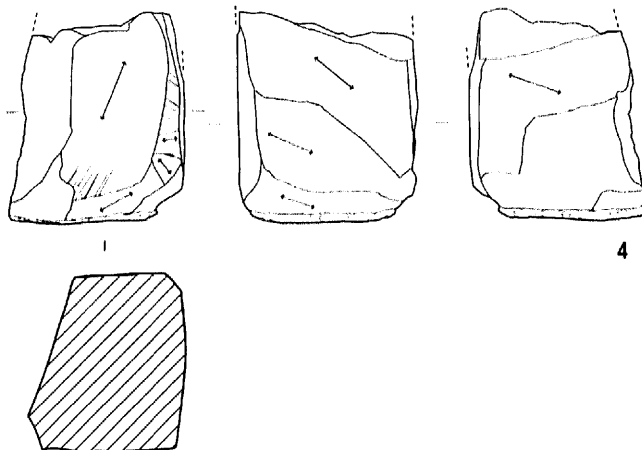
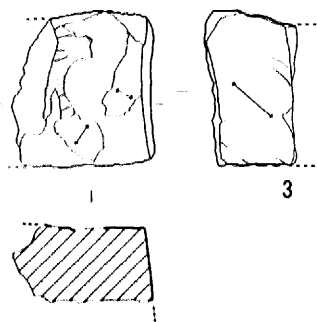
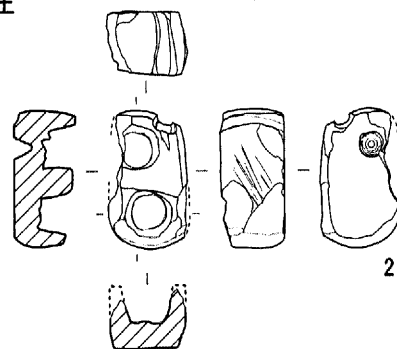
土師器

小皿 a1 土器計測表参照。

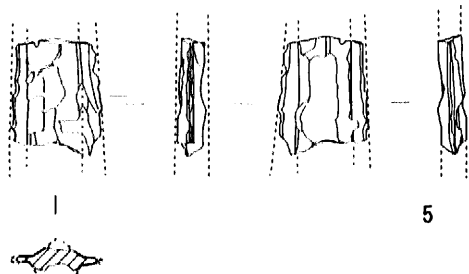
SX204暗褐色土



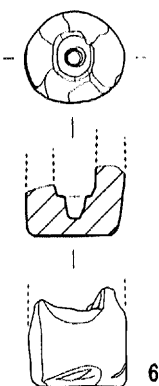
SX1534暗灰土



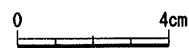
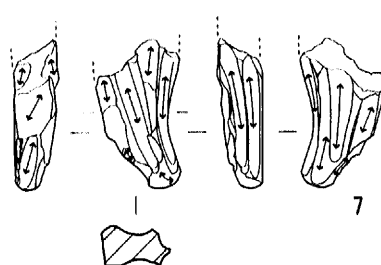
SX2278黒灰土



SX2454黒色土



SX2578暗灰土



SX2579黒色土

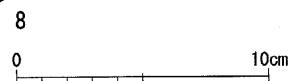
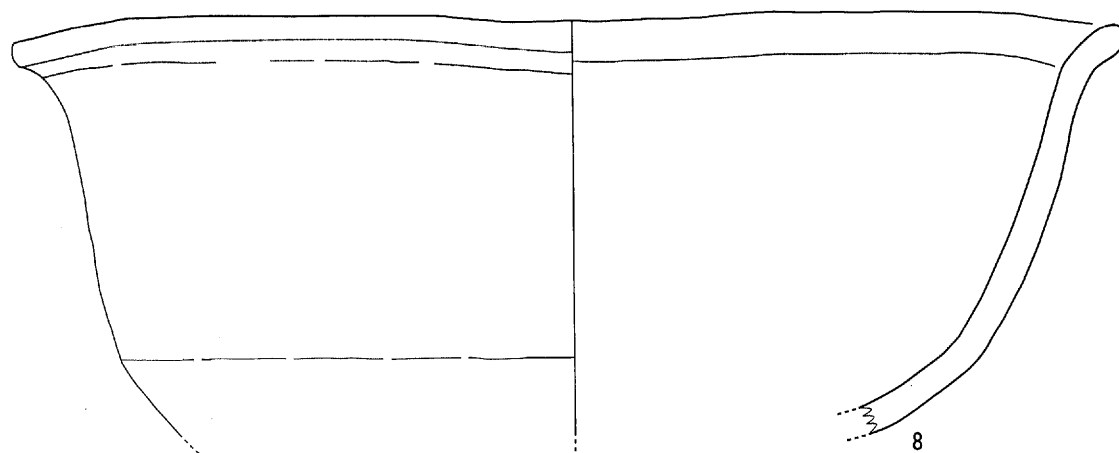


Fig. 102 たまり状遺構出土遺物実測図 (5~7は1/2、その他は1/3)

たまり状遺構出土遺物

SX204 暗褐色土出土遺物 (Fig.102)

石製品

石鍋補修品 (1、添付 CD P1.516) 長さ6.8cm、残存幅3.5cm、厚さ3.1cmを測る。明灰白色～暗黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の耳部破片を加工して製作されたものと見られる。耳部であった部分に穿孔がみられる。裏面に敲打痕が観察される。

SX1534 暗灰土出土遺物 (Fig.102)

石製品

滑石製品 (2、添付 CD P1.517) 長さ5.6cm、残存幅3.2cm、高さ2.5cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられる。平面はやや丸みを帯びた長方形を呈する。上面には、円筒形の彫り込みが2つ、長軸方向に並んで存在する。彫り込みは径1.7cm、深さ1.1～1.3cmを測る。図上での上側面には、側面をかすめるような穿孔の痕跡が観察される。下面には径0.9cm、深さ0.7cmの挿鉢状の穿孔がある。

石製品

砥石 (3) 長さ6.3cm、残存幅5.6cm、残存厚3.7cmを測る。明灰白色を呈する砂岩製である。砥ぎ面は2面観察される。

砥石 (4) 残存長8.5cm、幅7.0cm、厚さ7.1cmを測る。明灰白色を呈する変成岩製である。砥ぎ面は3面観察される。

SX2278 黒灰土出土遺物 (Fig.102)

金属製品

銅剣 (5、添付 CD P1.518) 残存長3.2cm、残存幅2.4cm、残存厚7.5cmを測る。細形銅剣の破片とみられる。風化が著しく、刃・鏃等ほとんど残っていない。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SX2454 黒色土出土遺物 (Fig.102)

土師器

筒状不明製品 (6) 径2.7cm、残存高2.65cmを測る。外面は指ナデが施され、中心の穴は、棒状の芯の抜き取りによる成形とみられる。胎土は密で、～3mm程度の砂粒を含む。焼成はやや良好で、薄灰褐色を呈する。

SX2578 暗灰土出土遺物 (Fig.102)

石製品

砥石 (7、添付 CD P1.519) 残存長3.9cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。明灰青色を呈する粘板岩製である。平坦な砥ぎ面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX2579 黒色土出土遺物 (Fig.102)

土師器

鍋 (8、添付 CD P1.520) 口縁部～体部の破片である。口径44.2cm、残存高16.8cm、推定底径34.2cmを測る。調整は、内外面とも風化により不明瞭だが、ヨコナデとみられる。胎土はやや密で、1～3mm程度の多く砂粒を含む。焼成は良好で、内面灰白色～にぶい黄橙色～黄灰色～黒灰色、外面灰白色～暗褐色、断面灰白色～にぶい橙色を呈する。外面に褐色化、内面下位に黒色化がみられる。

SX2624 黒灰土出土遺物 (Fig.103)

同安窯系青磁

椀 (1) 体部下半～底部の破片である。残存高5.55cm、高台径6.1cmを測る。胎土は薄褐色を呈し、精良

で、黒色粒を含む。焼成は良好。やや光沢のある灰緑色を呈し、薄くかかる。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅲ-2類。

石製品

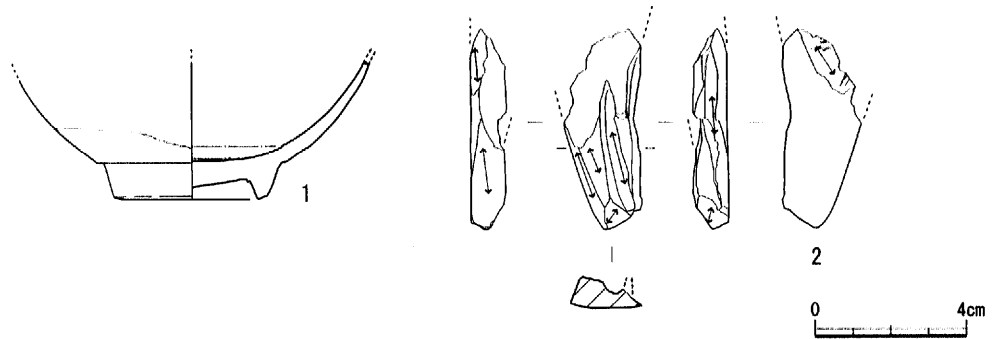
砥石 (2、添付CD P1.521) 残存長5.3cm、残存幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。明白灰色～明黄褐色を呈する粘板岩製である。平坦な砥ぎ面の他、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX2914 暗灰土出土遺物 (Fig. 103)

土師器

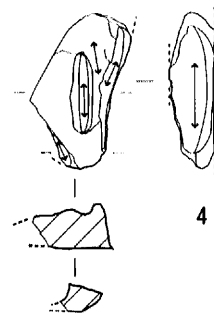
鍋 (3、添付CD P1.522) 体部～底部の破片である。残存高15.6cm、推定底径27.5cmを測る。体部内面はヨコナデ、底部外面は粗いミガキが施され、他の部分は風化により調整不明である。胎土はやや密で、1～4mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面淡黄色～灰黄色、外面淡黄色～灰白色～暗褐色～橙色、断面淡黄色～白灰色～暗褐色を呈する。体部外面には斑状の煤の付着、褐色化がみられ、底部内面には炭化物が付着する。

SX2624 黒灰土

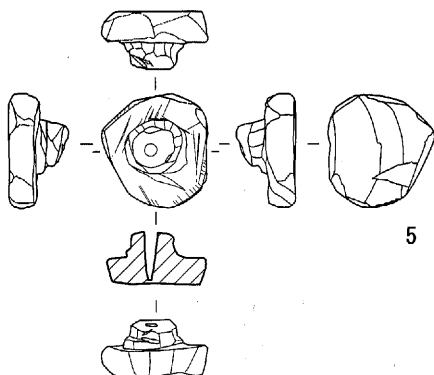


SX2914 暗灰土

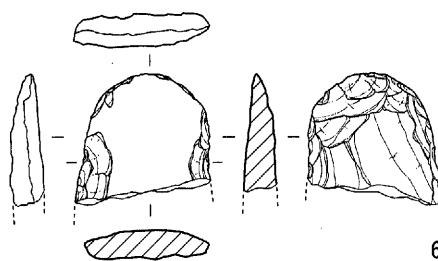
SX2979 暗褐色土



SX4264 暗灰土



SX4517 暗灰土



SX4764 暗灰土

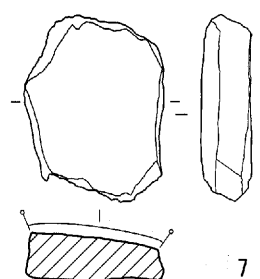


Fig. 103 たまり状遺構出土遺物実測図 (2・4は1/2、その他は1/3)

SX2979 暗褐色土出土遺物 (Fig.103)

石製品

砥石 (4) 残存長4.1cm、残存幅2.7cm、厚さ1.2cmを測る。明白黄色を呈する粘板岩製である。断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX4264 暗灰土出土遺物 (Fig.103)

石製品

滑石製品 (5、添付 CD P1.523) 平面円形を呈し、4.5×4.0cm、高さ1.9cmを測る。暗茶褐色を呈する滑石製である。断面は凸字形を成し、凸字部中央に穿孔を有す。

SX4517 暗灰土出土遺物 (Fig.103)

石製品

石鍬 (6) 石鍬の基部の破片である。残存長5.2cm、残存幅5.4cm、厚さ1.4cmを測る。暗緑灰色を呈する結晶片岩製である。剥離により成形される。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SX4764 暗灰土出土遺物 (Fig.103)

石製品

磨石×砥石 (7、添付 CD P1.524) 長さ7.4cm、幅5.6cm、厚さ2.1cmを測る。明赤白色～明白色を呈する花崗岩製である。砥ぎ面は1面観察される。赤色顔料がうっすらと付着し、赤色顔料を磨ったものとみられる。

小穴出土遺物

SX163 暗灰土出土遺物 (Fig.104)

金属製品

刀子 (1、添付 CD P1.525) 関～茎の破片である。残存長3.9cm、幅1.7cm、残存厚0.4cmを測る。

SX268E 掘方灰色砂出土遺物 (Fig.104)

中国陶器

盤 (2) 推定口径30.9cm、器高8.55cm、推定底径23.0cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は密で、～1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。薄金色を呈する釉が薄くかかる。内面に鉄絵を有する。I-1b類。

SX686G 暗褐色土出土遺物 (Fig.104)

石製品

砥石 (3、添付 CD P1.526) 残存長8.7cm、残存幅6.1cm、厚さ3.1cmを測る。暗緑黒色を呈する粘板岩製である。平坦な砥ぎ面の他、断面V字形の溝状痕がみられる。この溝状痕は表裏対応する位置にあり、本体を切断する目的で施された可能性がある。

SX931 黒褐色土出土遺物 (Fig.104)

白磁

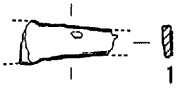
小坏? (4、添付 CD P1.527) 底部の破片である。残存高1.1cm、高台径2.2cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。広東系。

SX1047 暗灰土出土遺物 (Fig.104)

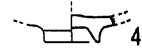
石製品

滑石製品 (5、添付 CD P1.528) 器または蓋状に加工された製品の破片である。残存長5.2cm、残存幅2.9cm、残存高2.1cmを測る。円形の製品と仮定すると、径10cm程に還元される。明灰白色～黒灰色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。石鍋の破片を転用したものとみられ、底部には石鍋外面の加工痕がわずかに残る。

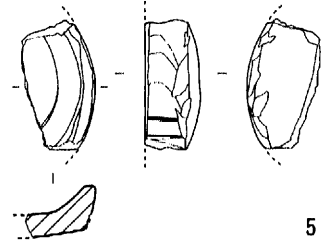
SX163暗灰土



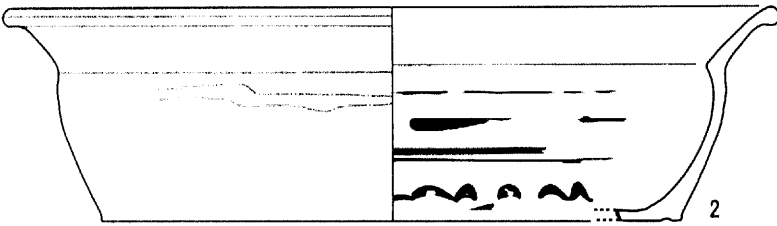
SX931黑褐土



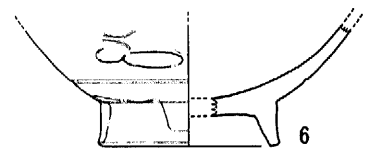
SX1047暗灰土



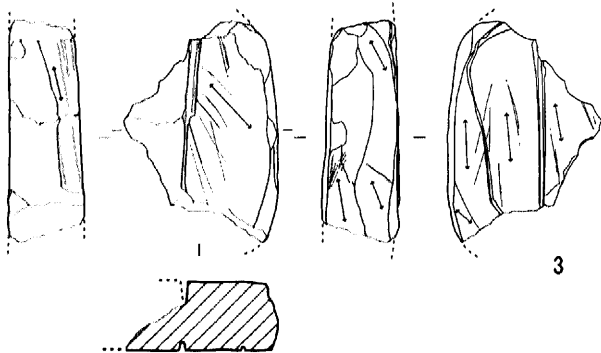
SX268E掘方灰色砂



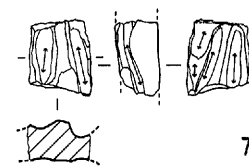
SX1084黑灰土



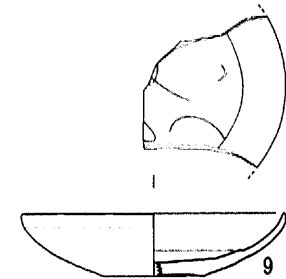
SX686G暗褐土



SX1189暗灰土



SX1823暗灰土



SX1583暗灰土



SX2321D暗褐土

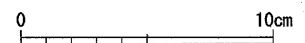
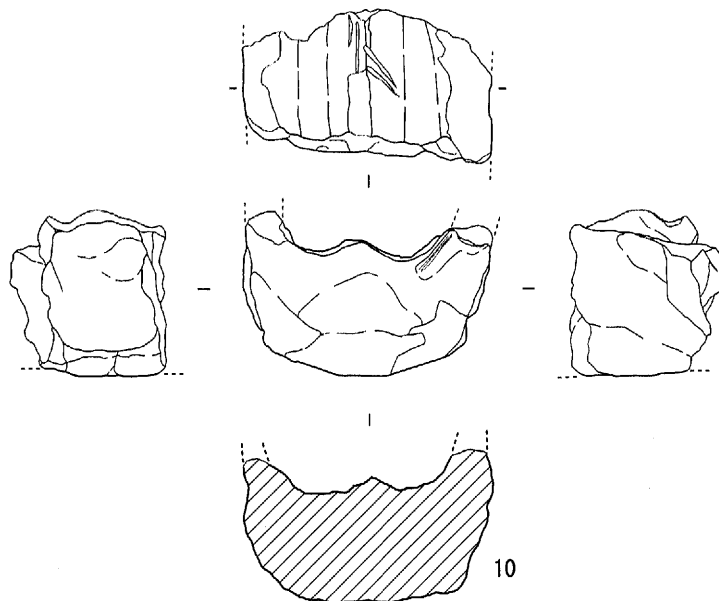


Fig. 104 小穴出土遺物実測図 (1/3)

SX1084 黒灰土出土遺物 (Fig. 104)

白磁

碗(6) 体部下半～底部の破片である。残存高4.85cm、高台径7.2cmを測る。胎土は薄褐色～白色を呈し、精良。焼成は良好。高台を除く内外面に、光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。外面に篋描文、沈線が施される。XⅡ類？。

SX1189 暗灰土出土遺物 (Fig. 104)

石製品

砥石(7、添付CD Pl. 529) 残存長3.0cm、残存幅2.5cm、厚さ1.8cmを測る。明黄褐色を呈する比較的粒度の細かい砂岩製である。上下面に断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX1583 暗灰土出土遺物 (Fig. 104)

灰釉陶器

壺(8) 口縁部の破片である。推定口径6.2cm、残存高2.05cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。胎土は粗く、～3mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、薄灰褐色を呈する。釉ははげてしまったものか、確認できない。

SX1823 暗灰土出土遺物 (Fig. 104)

白磁

皿(9) 推定口径10.4cm、器高2.5cm、推定底径3.9cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。内面に篋描文が施される。VI-2a類。

SX2321D 暗褐色土出土遺物 (Fig. 104)

その他

焼土塊(10) 残存長6.1cm、幅9.9cm、残存厚6.1cmを測る。胎土は～4mm程度の砂粒を多く含む。一面は径3cm程度の棒を2本並べて押し当てられて形成されたとみられ、断面が、丸みを帯びたW字状を呈する。径10cm程度の小穴に、棒を立てた際の裏込土が焼土化したもの、という推測も可能性の一つとして挙げられるが、詳細を復元するに至らない。表面薄黒灰色～薄褐色～薄赤褐色、断面薄褐色～薄赤褐色を呈する。

SX2328 暗灰土出土遺物 (Fig. 105)

瓦類

丸瓦(1) 残存長20.3cm、残存幅14.6cm、厚さ2.2cmを測る。上面は格子叩きが施され、下面は布目痕が残る。胎土は密で、～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、明灰色を呈する。

SX2434 暗灰土出土遺物 (Fig. 105)

石製品

砥石(2、添付CD Pl. 530) 残存長4.3cm、幅3.7cm、厚さ2.0cmを測る。暗黒灰色を呈する粘板岩製である。欠損部を除く全面に、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕がみられる。

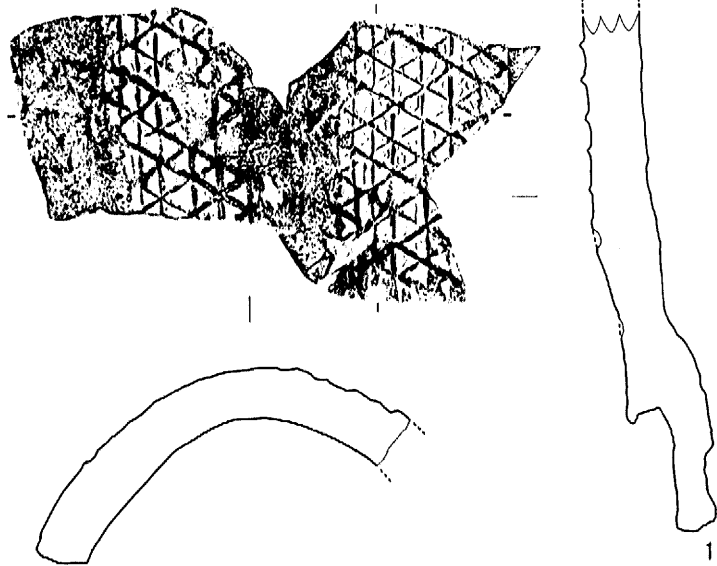
砥石(3) 残存長5.3cm、幅3.8cm、厚さ1.3cmを測る。明灰白色を呈する砂岩製である。砥ぎ面は4面観察される。

SX2551 暗灰土出土遺物 (Fig. 105)

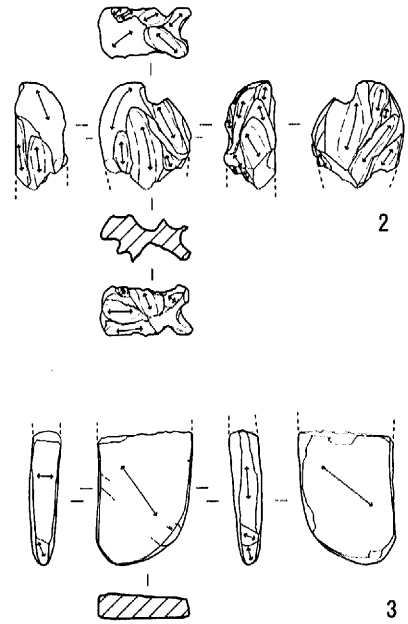
石製品

砥石(4、添付CD Pl. 531) 残存長3.5cm、残存幅2.2cm、厚さ1.0cmを測る。明灰白色を呈する粘板岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

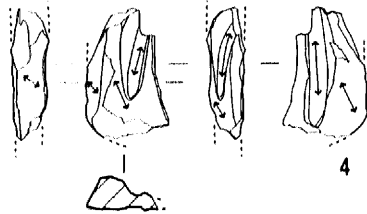
SX2328暗灰土



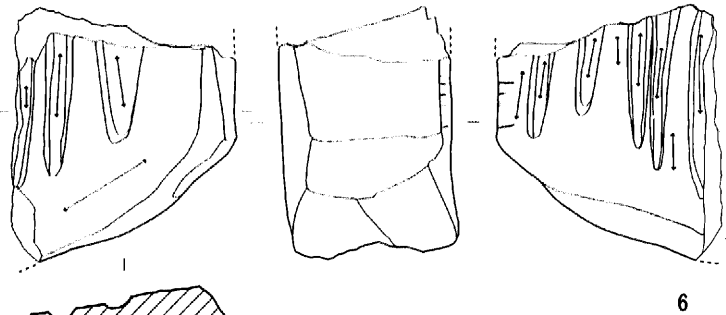
SX2434暗灰土



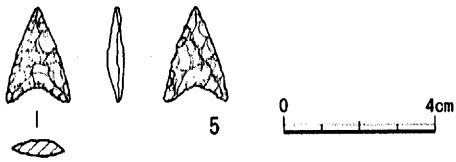
SX2551暗灰土



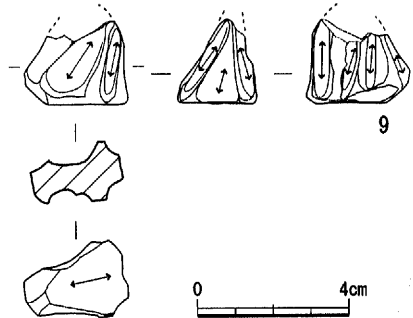
SX2744A暗灰土



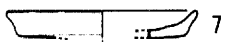
SX2709G暗褐土



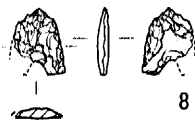
SX2854暗灰土



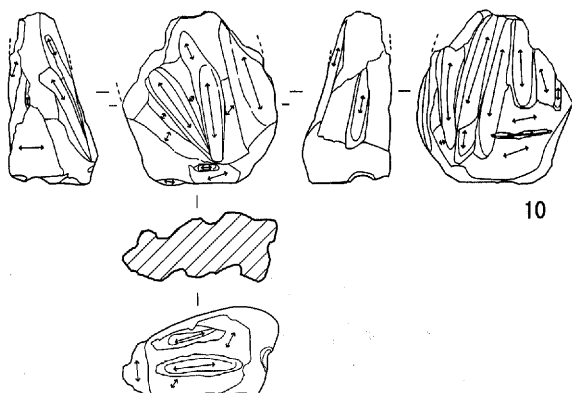
SX2802L暗灰土



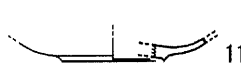
SX2803暗灰土



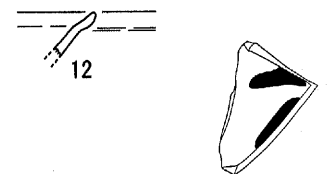
SX2879暗灰土



SX3251黒灰土



SX3366暗褐土



SX3458暗灰土

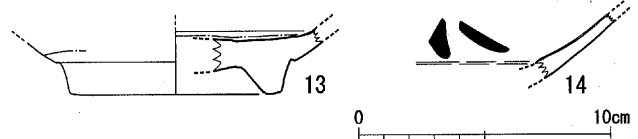


Fig. 105 小穴出土遺物実測図 (4・5・8・9は1/2、その他は1/3)

SX2709G 暗褐土出土遺物 (Fig.105)**石製品**

石鏃 (5) 長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。姫島産とみられる、暗灰色を呈する黒曜石製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SX2744A 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**石製品**

砥石 (6、添付CD P1.532) 残存長10.1cm、残存幅9.0cm、厚さ6.8cmを測る。明灰白色を呈する、粒度のやや粗い花崗岩製である。平坦な砥ぎ面のほか、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。煤状の付着物、褐色化がみられる。

SX2802L 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**土師器**

小皿 (7) 推定口径7.6cm、残存高1.1cm、推定底径6.6cmを測る。調整は風化により不明である。胎土は精良。焼成は良好で、淡橙色を呈する。

SX2803 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**石製品**

石鏃 (8) 長さ1.8cm、残存幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。暗黒褐色を呈する黒曜石製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SX2854 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**石製品**

砥石 (9、添付CD P1.533) 残存長2.2cm、幅2.7cm、厚さ2.0cmを測る。暗黒灰色を呈する粘板岩(対馬産)製である。断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX2879 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**石製品**

砥石 (10、添付CD P1.534) 残存長6.9cm、残存幅6.2cm、厚さ3.5cmを測る。明黄白色を呈する、粒度のやや粗い砂岩製である。平坦な砥ぎ面、断面が浅いU字状を呈する溝状の砥ぎ痕が観察される。

SX3251 黒灰土出土遺物 (Fig.105)**青白磁**

皿 (11) 底部の破片である。残存高0.9cm、推定底径4.0cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。内外面に、光沢のある薄緑白色を呈する釉が薄くかかる。

SX3366 暗褐土出土遺物 (Fig.105)**灰釉陶器**

椀 (12) 玉縁を有する椀の口縁部の破片である。残存高1.85cmを測る。胎土は精良で、~4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、明白灰色を呈する。暗緑色を呈する釉が点々と付着する。百代寺窯式。

SX3458 暗灰土出土遺物 (Fig.105)**白磁**

鉢 (13) 底部の破片である。残存高2.65cm、推定高台径8.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成は良好。やや光沢のある薄緑灰色を呈する釉がやや厚くかかる。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。Ⅲ類。

鉢 (14) 体部下半の破片である。残存高2.6cmを測る。胎土は白色を呈し、精良。焼成は良好。や

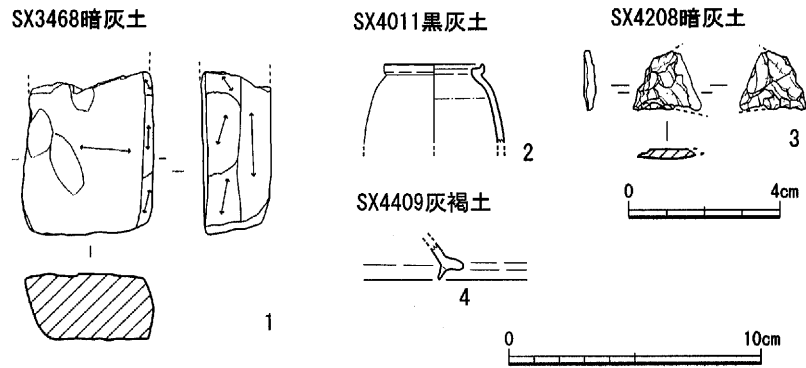


Fig. 106 小穴出土遺物実測図 (3は1/2、その他は1/3)

や光沢のある薄緑灰色を呈する釉がやや厚くかかる。内面に鉄絵が施される。

SX3468 暗灰土出土遺物 (Fig. 106)

石製品

砥石 (1) 残存長 6.5cm、幅 5.2cm、厚さ 2.8cm を測る。淡赤灰色を呈する砂岩製である。砥ぎ面は 2 面観察される。

SX4011 黒灰土出土遺物 (Fig. 106)

中国陶器

小壺 (2) 口縁部の破片である。推定口径 4.0cm、残存高 3.2cm を測る。胎土は暗赤褐色を呈し、精良。焼成は良好。内面上位及び外面に、白灰色を呈する釉が極薄くかかる。

SX4208 暗灰土出土遺物 (Fig. 106)

石製品

石鏃 (3) 残存長 1.6cm、残存幅 1.8cm、厚さ 0.3cm を測る。明灰白色を呈する安山岩製である。遺構埋没時期を示す遺物ではないが掲載した。

SX4409 灰褐色土出土遺物 (Fig. 106)

土師器×黒色土器 B 類

蓋 1 (4) 口縁部の破片である。残存高 1.45cm を測る。調整は風化により不明。貼り付けによりかえりが作られる。胎土は密で、金雲母を含む。焼成はやや良好で、暗黒灰色を呈する。

攪乱出土遺物

攪乱出土遺物 (Fig. 107)

瓦器×黒色土器 B 類

壺? (1) 二重口縁の可能性のある口縁部の破片である。残存高 1.8cm を測る。調整は風化により不明である。胎土は密で、ごく小さい長石を含む。焼成はやや良好で、内外面黒灰色、断面白灰色を呈する。

肥前系陶磁器

皿 (2) 口縁部の破片である。残存高 1.9cm を測る。胎土はややざらつきがあり、淡緑灰色～暗赤茶色を呈する。焼成は良好で、やや光沢のある淡緑灰色を呈する釉が薄くかかる。唐津系。17世紀代とみられる。

皿 (3) 口縁部の破片である。残存高 2.4cm を測る。胎土はややざらつきがあり、灰白色を呈する。焼成は良好で、光沢のある薄黄緑色を呈する釉が薄くかかる。唐津系。17世紀代とみられる。

皿 (4) 底部の破片である。残存高 1.55cm、推定底径 4.1cm を測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は、粒子はそろっているが、ざっくりした印象をうけるもので、茶褐色を呈する。焼成は良好で、やや内面に光沢のある濃灰緑色を呈する釉が薄くかかる。唐津系。17世紀代とみられる。

白磁

皿 (5) 底部の破片である。残存高1.15cm、底径4.4cmを測る。底部は回転ヘラケズリにより窪められている。胎土は精良で、白灰色～白色を呈する。焼成は良好。光沢のある薄緑白色を呈する釉が薄くかかる。内面に篋描文を有す。平安期の遺物ではないかもしれないが、V類或いはVI類の可能性もあり、掲載した。

小形皿 (6、添付CD P1.536) 底部の破片である。残存高1.5cmを測る。削り出しにより高台が作られる。胎土は精良で、薄褐色～白色を呈する。焼成は良好。底部外面を除き、におい光沢の薄灰緑色を呈する釉が薄くかかる。平安期の遺物ではないかもしれないが、未分類資料の可能性もあり、掲載した。

盤口瓶 (7、添付CD P1.535) 口縁部～頸部の破片である。口径4.7cm、残存高3.8cmを測る。頸部に沈線有す。胎土は精良で、灰白色～薄褐色を呈する。焼成は良好。内外面にやや光沢のある薄黄緑色～薄緑色を呈する釉がうすくかかる。

瓦類

平瓦 (8) 残存長9.4cm、残存幅9.3cm、厚さ2.1cmを測る。胎土は密。焼成は良好で、凹凸面明黄灰色、断面黒灰色を呈する。凸面に鴻臚館式蓮華文を有す。

木製品

櫛 (9、添付CD P1.537) 残存長3.0cm、残存幅7.0cm、厚さ0.3cmを測る。漆塗りとみられる。

金属製品

刺金 (10、添付CD P1.538) 長さ2.95cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmを測る。

石製品

石鏃 (11) 長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。明灰白色を呈する安山岩製である。平安時代の遺

攪乱

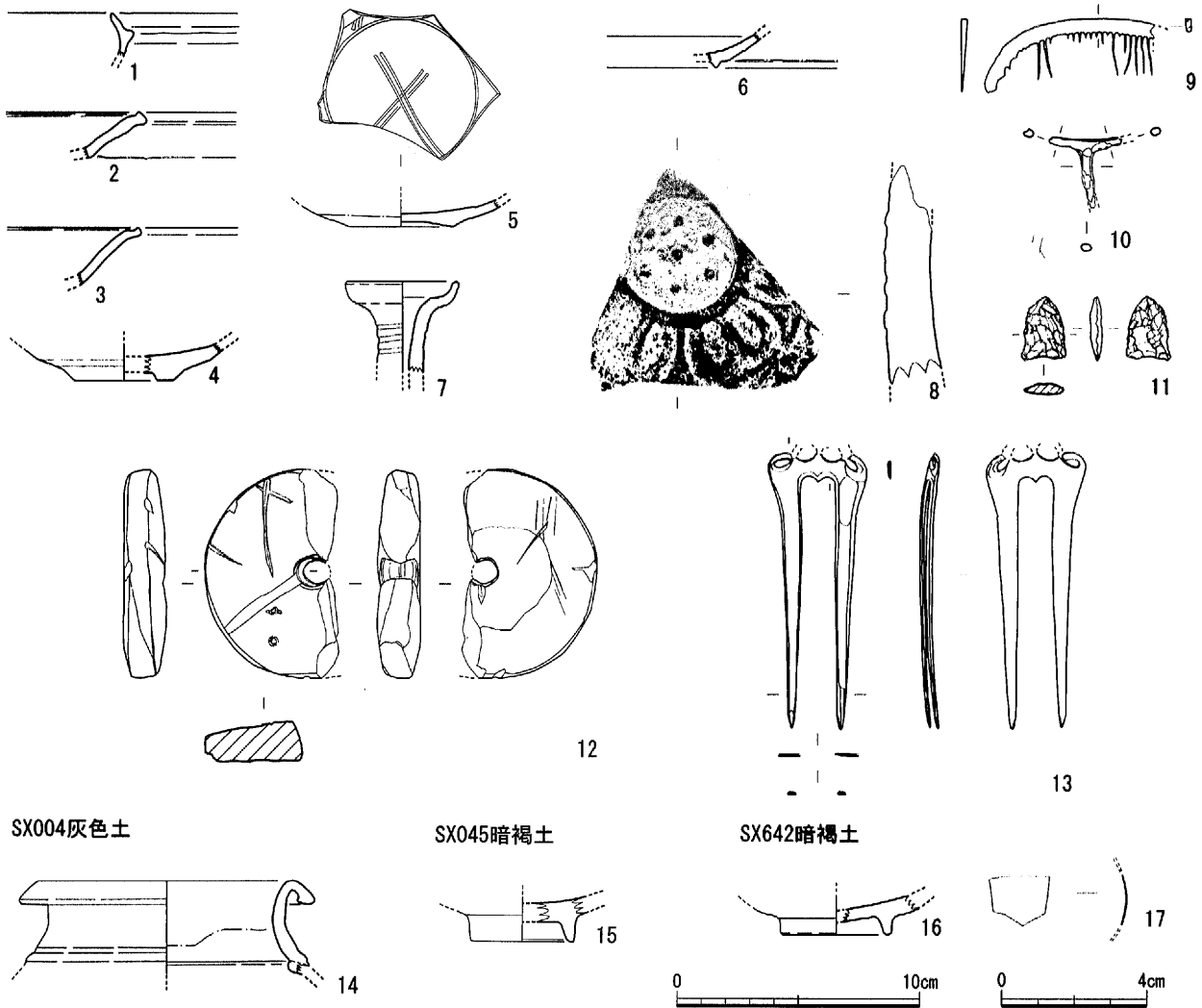


Fig. 107 攪乱出土遺物実測図 (17は1/2、その他は1/3)

物ではないが掲載した。

紡錘車 (12、添付CD P1.539) 径8.7cm、厚さ1.8cmを測る。明灰白色を呈する滑石製である。ケズリにより成形される。中央に円形の穿孔が施される。断面が浅いV字状を呈する溝が観察され、欠損後、砥石としての利用が想定される。

その他

簪 (13、添付CD P1.540) 残存長11.5cm、幅4.1cm、厚さ0.1cmを測る。髓甲製とみられる。

SX004 灰色土出土遺物 (Fig.107)

白磁

壺 (14) 口縁部の破片である。推定口径12.2cm、残存高3.9cmを測る。胎土は白灰色を呈し、精良。焼成は良好。薄黄オリーブ色を呈する釉が薄くかかり、にぶい光沢を有す。Ⅱ類。

SX045 暗褐色土出土遺物 (Fig.107)

白磁

椀 (15、添付CD P1.541) 高台部の破片である。残存高1.9cm、推定高台径2.3cmを測る。胎土は淡黄灰色を呈し、精良。焼成は良好。釉は光沢のある薄黄オリーブ色を呈し、全面にかかる。平安期の遺物ではないかもしれないが、未分類資料の可能性もあり、掲載した。

SX642 暗褐色土出土遺物 (Fig.107)

白磁

椀 (16、添付CD P1.542) 底部の破片である。残存高1.65cm、推定高台径4.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精良で、極小の黒色粒を含む。焼成は良好。やや光沢のある薄黄緑灰色を呈する釉が薄くかかる。平安期の遺物ではないかもしれないが、未分類資料の可能性もあり、掲載した。

ガラス製品

ガラス製品片 (17、添付CD P1.543) 器種は不明だが、球形の製品の破片とみられる。残存長1.4cm、残存幅1.7cm、厚さ0.03cmを測る。色調は半透明の淡赤紫色を呈する。

VI. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、大宰府条坊跡終末期(AD1150年前後)とされる遺構(SX010)の最下部の泥層について花粉分析を実施し、当時の古植生に関する情報を得る。

1. 試料

試料はSX010の覆土の各層から採取された試料のうち、最下部層から採取された3点(No. 3、4、6)について分析を行う(図4)。本層準の堆積物は機能期もしくは放置期の堆積物と推定されている。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

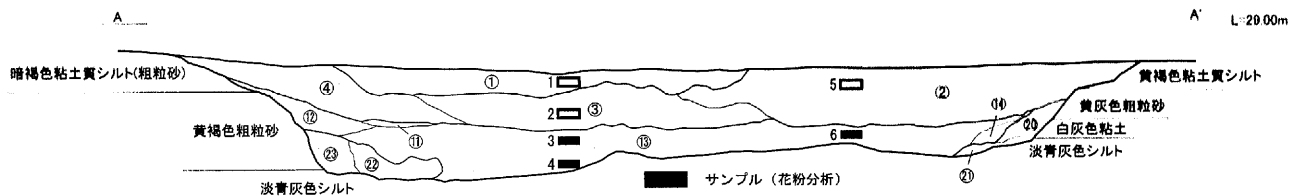
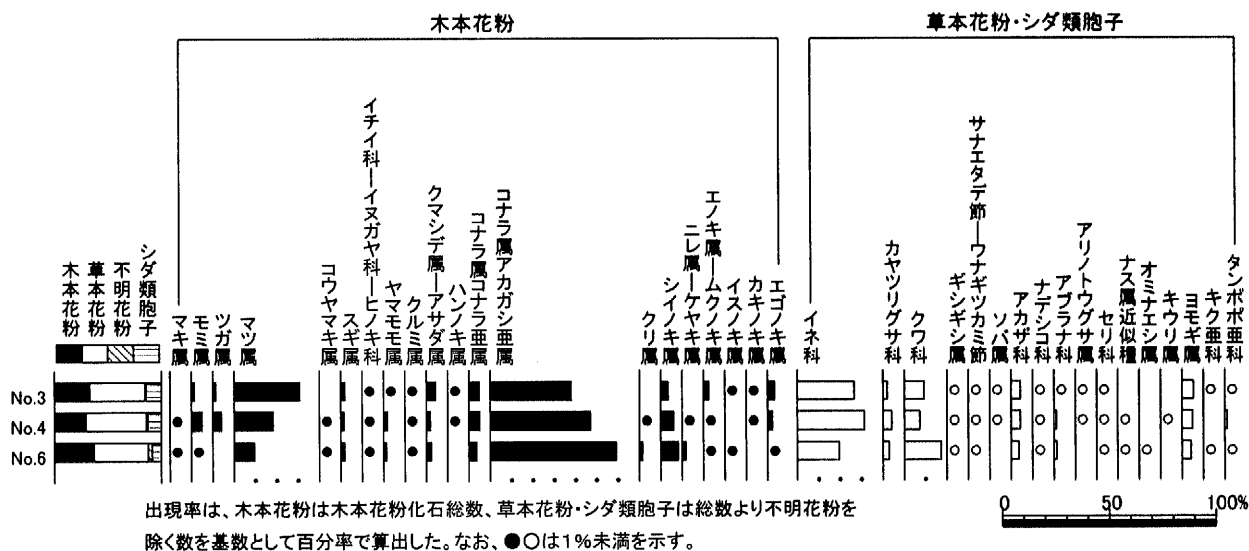


図4 SX010の堆積断面および花粉分析層準



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

図5 SX010の花粉分析群集の層位分布

3. 結果

花粉分析結果を表3、図5に示す。花粉化石はいずれの試料からも産出し、類似した組成を示す。木本花粉に比べ、草本花粉の割合が相対的に高い。木本花粉ではアカガシ亜属の割合が高く、マツ属がそれに次いで多い。またクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、シイノキ属、エゴノキ属などの花粉化石が検出される。草本花粉では、イネ科の割合が高く、カヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属等の花粉化石が検出される。層位的には、上位に向かってマツ属花粉が増加傾向を示している。

4. 考察

大宰府条坊跡終末期(AD1150年前後)とされるSX010の花粉化石群集は、木本類に着目すると、暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であるアカガシ亜属が多産することが特徴である。このほか、ヤマモモ属、シイノキ属、イスノキ属といった暖温帯に分布の中心がある種類を伴っている。このような傾向は北九州各地の花粉分析結果に表れていることから(Hatanaka, 1985; 畑中ほか, 1998)、遺跡周辺の山地には、シイ・カシ類からなる照葉樹林が存在していたと考えられる。なお、照葉樹林の代表的な樹木としてタブノキやクスノキなどクスノキ科の植物があるが、クスノキ科の花粉化石は花粉膜が弱い化石としてはほとんど残らない。そのため、当時クスノキ科も多く生育していたとは思われるが、花粉化石からはその復元が難しい。クスノキ科の化石が検出される可能性がある部位は、木材、葉、種子、植物珪酸体であることから、今後これらの化石に着目した調査も実施していく必要がある。

また、今回の結果では、マツ属復維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)が比較的多産し、かつ増加傾向を示している。マツ属復維管束亜属は、開発による伐採地に先駆的に生育し二次林を形成することが多い種類であり、このような特性から植林されることもしばしばある。このことから、条坊跡終末段階の古植生は基本的には暖温帯性の広葉樹林であったが、人間活動などの影響を受け、マツの二次林や植林が増加し、山地で優勢であった照葉樹林が減少してきた可能性がある。マツ属の増加時期は、北九州地域では、地史的植生変遷上約1,500年前以降に始まるとされる(Hatanaka, 1985)。今回の結果とも調和的であるが、マツ属の増加の背景に

表3 花粉分析結果

種 類	遺構・試料番号		
	SX010		
	No. 3	No. 4	No. 6
木本花粉			
マキ属	-	1	1
モミ属	3	11	2
ツガ属	3	9	-
トウヒ属	1	-	-
マツ属単維管束亜属	1	-	-
マツ属複維管束亜属	52	27	16
マツ属(亜属不明)	11	13	5
コウヤマキ属	-	1	1
スギ属	4	3	4
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	2	2
ヤナギ属	-	-	1
ヤマモモ属	2	4	3
クルミ属	1	2	1
クマシデ属-アサダ属	9	4	5
ハシバミ属	1	-	-
カバノキ属	1	-	1
ハンノキ属	2	1	-
ブナ属	4	1	1
コナラ属コナラ亜属	10	11	8
コナラ属アカガシ亜属	79	103	131
クリ属	-	2	3
シイノキ属	7	13	18
ニレ属-ケヤキ属	-	1	4
エノキ属-ムクノキ属	5	1	2
イスノキ属	1	-	1
サクラ属	-	-	2
アカメガシワ属	-	-	2
カエデ属	-	-	1
ツタ属	1	-	-
ミズキ属	1	-	-
ツツジ科	-	-	1
カキノキ属	1	1	-
エゴノキ属	7	5	2
テイカカズラ属	-	1	2
ムラサキシキブ属近似種	1	2	2
草本花粉			
イネ科	168	231	113
カヤツリグサ科	12	31	17
ツユクサ属	2	1	-
クワ科	59	53	100
ギシギシ属	3	5	5
サナエタデ節-ウナギツカミ節	5	3	1
ソバ属	1	1	-
アカザ科	27	32	21
スベリヒユ属	-	-	1
ナデシコ科	2	3	1
キンポウゲ科	1	-	-
アブラナ科	5	8	8
バラ科	1	-	3
マメ科	1	2	-
アリノトウグサ属	2	3	-
セリ科	5	1	4
ナス属近似種	-	3	1
オミナエシ属	-	-	1
キウリ属	-	1	-
ヨモギ属	34	37	25
キク亜科	1	-	1
タンポポ科	3	9	4
不明花粉	6	9	21
シダ類孢子			
ヒカゲノカズラ属	1	-	-
ゼンマイ属	-	2	-
イノモトソウ属	1	3	1
他のシダ類孢子	90	91	50
合 計			
木本花粉	209	219	222
草本花粉	332	424	306
不明花粉	6	9	21
シダ類孢子	92	96	51
総計(不明を除く)	633	739	579

ある人間活動との関係については未だ良く分かっていないのが現状であり、地域によって異なっている可能性も想定される。そのため、今後も本地域での情報の蓄積を行い、発掘調査成果を踏まえた総合解析が必要と判断される。

一方、草本花粉は、総花粉・胞子の中で半数以上を占めている。各種類ではイネ科、クワ科、アカザ科、ヨモギ属が多い。これらは開けた場所に先駆的に草地を作る種類で、人家や耕作地に多くみられることから、「人里植物」と呼ばれている。おそらく、遺構周辺は開発によって草地化し、これらの草本類が生育していたものとみられる。また、ソバ属、ナス属、キュウリ属など栽培種もしくは栽培種を含む分類群の花粉化石が検出されていることから、これらが周辺で栽培・利用されていたことが示唆される。

引用文献

Hatanaka Ken'ichi, 1985, Palynological studies on the vegetational succession the Wurm Glacial Age in Kyusyu and adjacent areas. *Journal of the faculty of Literature, Kitakyusyu UniveraSity (Series B)*, 18, 29-71.

畑中 健一・野井 英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史. 図説 日本列島植生史, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 151-161.

Ⅶ. まとめ

1. 遺構について

本調査区で確認できた遺構面は1面であり、柵列、掘立柱建物、溝、井戸、竪穴住居、土坑その他を検出した。

遺構で最も古いのは7世紀後半に埋没したと考えられるSD680、SI545がある。古代にまで遡る遺構であり、同時代の遺跡が周辺にあった可能性がある。

SD680、SI545以外の遺構は、11世紀末～12世紀前半という短い期間に埋没しており、以下遺構の種別ごとに概要を述べていく。

・掘立柱建物

小穴は総数5000基ほど検出しており、今回報告した掘立柱建物は20棟であるが、当時はこれより多くの建造物があったと想定される。建物の多くに共通してみられることは、建物の軸のほとんどが正方位を指向し、柱間に対して小穴の平面プランが小さく、掘り方も浅いということである。これらの建物は住居として利用されていたと考えられる。例外として、SB315は他の掘立柱建物と様相が異なり、倉庫であったと想定している。小穴の分布状況を見ると、道路に沿った部分で遺構密度が高く、道路から離れた中央部では比較的閑散としていた状況が窺える。このことから区画内で宅地化される区域が決まっていた可能性がある。

・溝

溝も複数検出している。なかでもSD350・2134・4394の一群、SD255・265の一群、SD125はいずれも正方位を指向しており、同時代の遺構の切り合いが少ないことなどから、区画内部の区割り溝であったと想定している。そこから区画内は東西間を4分割していたと推定できる。

SD120とSD595についても正方位を指向している。これらは区画内部の区割り溝もしくは時代の異なる区画設計の痕跡の可能性も考えられるが、現段階では特定できず、今後の周辺の調査を待つところである。

・井戸

井戸は小型のものも含め61基検出している。単体で検出されたものが多いが、2～3基の井戸が切り合っているところもある。井戸の分布状況も小穴同様にまとまりが認められる。また61基の井戸のうち16基は井戸枠もしくは集水施設を確認することができた。井戸枠については方形縦板組型、丸太刳貫型、曲物組型、結桶組型など多様なパターンがある。方形縦板組型は、隅柱の有無、横棧木の加工の差などでさらに細分することができる。結桶組型は全国的にみても北部九州が最も早く11世紀後半頃に出現するので、本調査区の井戸枠もその初現期にあたる貴重な資料になった。井戸枠もしくは集水施設を確認できなかった井戸については、元々素掘りの井戸であった、再利用のために部材が抜かれてしまった、腐ってしまったなどの可能性が考えられるが、調査区内の地山土質を考慮すると、素掘りの井戸の可能性は低かったと想定される。

・道路

調査区東(SF1100)・南(SF700)・西(SF1000)の3カ所で、道路遺構を検出した。SF700・1000の交差点付近では道路通行痕跡を確認した。道路通行痕跡から両道路が同時期に使用されていたことが具体的に判明できた。SF700はSF1000よりさらに西に延びていたかは確認できなかったが、SF1000は調査区より南に続いていたのは間違いない。そのことから、南北道路が優位という意識が働いていると考えられる。また同じ南北道路でも、SF1000よりSF1100の路面幅のほうが2m程度も広く造られている。このことは当時の都市計画の中で道路の格差があったことも今後検討していく必要がある。

道路は廃絶後、いずれも路面中央に大溝が掘削されてその機能を終了する。ただしSF700のように大溝が埋まった後も道路として利用されていることから、SF1000・1100についても再利用の可能性は考えられる。調査区の南と西には道路遺構に平行して現在でも一般道路が通っており、当時の道路設計が今日まで影響を与えているともいえる。

・不明遺構(SX010)

調査所見ではSX010内に水がたまっていた状況を想定していたが、花粉分析結果では水域の存在を示唆する水生植物の花粉化石が全く検出されなかった。この結果を尊重すると、SX010は池のような性格を有したものではなかった可能性が高くなる。

また、花粉化石群集が単層内で層位的に変化することから、埋土下部の灰色粘・黄灰砂の成因として、周

圃からの流れ込みなどに起因する堆積物であることが推定される。したがって、花粉化石群集のうち草本花粉などは遺構近辺に分布していたものに由来する可能性がある。

以上のことから、SX010が埋没するXⅣ期（12世紀中頃）あたりでは遺構周辺は人里に多い草本植物などからなる草地が形成されていたことが推定される。ただ今回はSX010しか自然科学分析を行っていないので、本調査区内全てにいえることではなく、今後の周辺の調査で解明されることを期待する。

2. 遺物について

調査区全体をみると、出土した遺物はほとんどがXⅡ～XⅢ期（11世紀末～12世紀前半）のもので、陶磁器も同時期の磁器区分C期以外はほとんどみられない。石鏃や石包丁、銅剣など縄文～弥生時代の遺物が出土しているが、平安後期の遺物に混じって出土しており、縄文～弥生時代の遺構は確認できない。XⅡ期以前の遺構として捉えられるのは、7世紀後半とみられるSD680、SI545に限られる。古相の遺物はSD075などから8世紀代の遺物がわずかながらまともって遺物が出土している程度で、その他でもほとんど混入していない。平安前～中期の遺物はなおさらである。XⅣ期（12世紀中頃）以降の遺物も、攪乱から出土する程度で、その場合も、多くのXⅡ～XⅢ期の遺物に数点混じっている程度である。遺構もXⅣ期より後のものは確認できない。このことは、この地の開発、衰退の時期が極めて限られたことを示すものとみられる上、土器相把握の上で貴重な資料群になったといえよう。XⅣ期とした遺構についてみても、白磁碗Ⅷ類やⅤ-4類、白磁皿Ⅲ類などは出土しているものの、青磁が皆無に等しく、一般的なXⅣ期の様相とは異なる。XⅢ期とした方がよい可能性もあるが、今後委ねたい。

遺物の種類は、土師器、黒色土器、瓦器の供膳具、土師器鍋や滑石製石鍋などの煮炊具、東播系とみられる捏鉢や畿内系とみられる瓦器碗などの外来系遺物、貿易陶磁器など、日常生活に関わるものが大半を占める。そうした中、取瓶、鞆の羽口、鋳型、砥石など、鋳物等の金属生産に関わる遺物が、少量ながら出土している。砥石は断面が浅いU字状を呈する使用痕を有するものが多くみられる。完存する鋳型も出土しているが、製品が何なのかは判らなかつた。出土量的に、集約的な工房群があったとは想定しがたく、ごく小規模な形で営まれていたものと推測される。他にも、漆が付着した土師器碗、坏、小皿が出土しており、漆器生産を行っていた可能性もある。石鍋の破片を加工して、権や小型の容器などを作ったり、破損した石鍋を修理するために利用されたりといった、石鍋の再利用が行われている。また、穿孔や溝状痕を有し、砥石的な（砥石としての効果には疑問があるが）利用が想定される破片も出土している。

3. 検出した区画について

最後に今回確認できた区画のことについて触れておきたい。本調査区の道路と大宰府条坊跡第122次調査で検出した道路および仮に大宰府条坊跡第176次で検出された東西に走行する流路遺構を区画の北限と認めらば、そこから区画の内法（宅地部分）は東西約95m、南北約110m、各道路・溝群心々間は東西約103m、

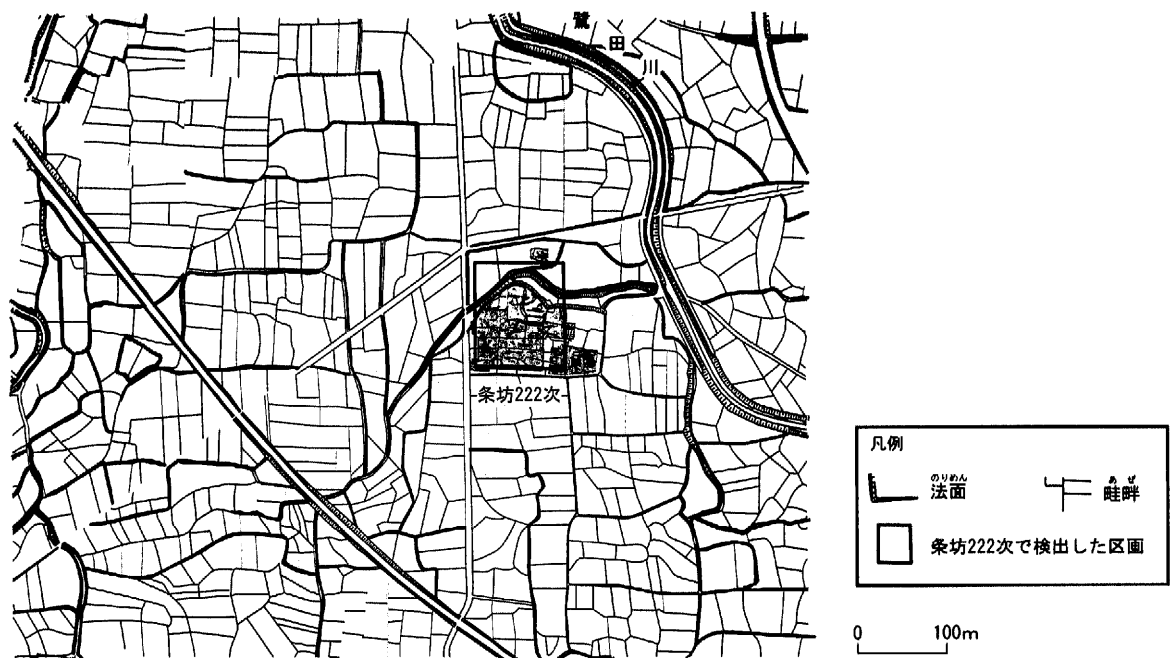


図6 大宰府条坊跡第122次調査と昭和23年当時の周辺地形図

南北約124mに復元することができる。一方、近年の条坊研究成果から条坊一区画は約90m四方と導かれている。このことから、本調査区で確認された区画は条坊区画とは異なる設計である。当初、本調査区は大宰府条坊内と考えられてきたが、鷲田川以東とは区画の設計が異なっており、大宰府条坊の範囲の再考を促す良い資料になったと考えている。

今回検出した区画は、宅地部分のみの面積が約10,450㎡となり、面積が1町に近似することになる。調査区の西に広がる一帯は、遺存地割より1町単位の区画の存在(条里プラン)が指摘されてきたが、面積だけでなく位置的にも周辺地割になじむことが認められることから、今後周辺を解明していく上で、基準となる成果を得たといえよう。

<参考文献>

鐘方正樹 『ものが語る歴史シリーズ ⑧ 井戸の考古学』 同成社 2003
 狭川真一 「大宰府条坊研究の現状と課題」 『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集・追悼論文集—』 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995
 井上信正 「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」 『条里制・古代都市研究 通巻17号』 条里制・古代都市研究会 2001

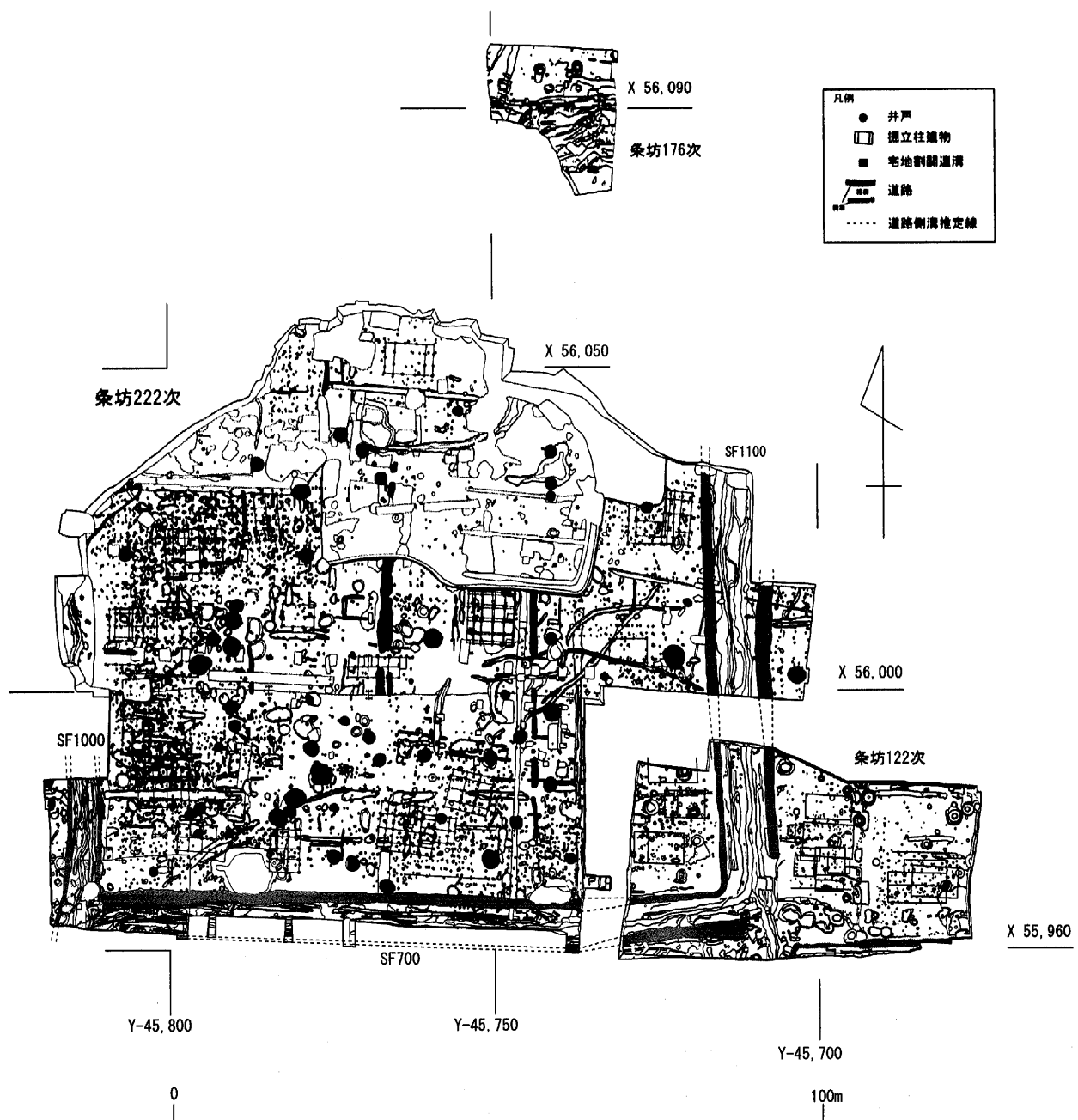
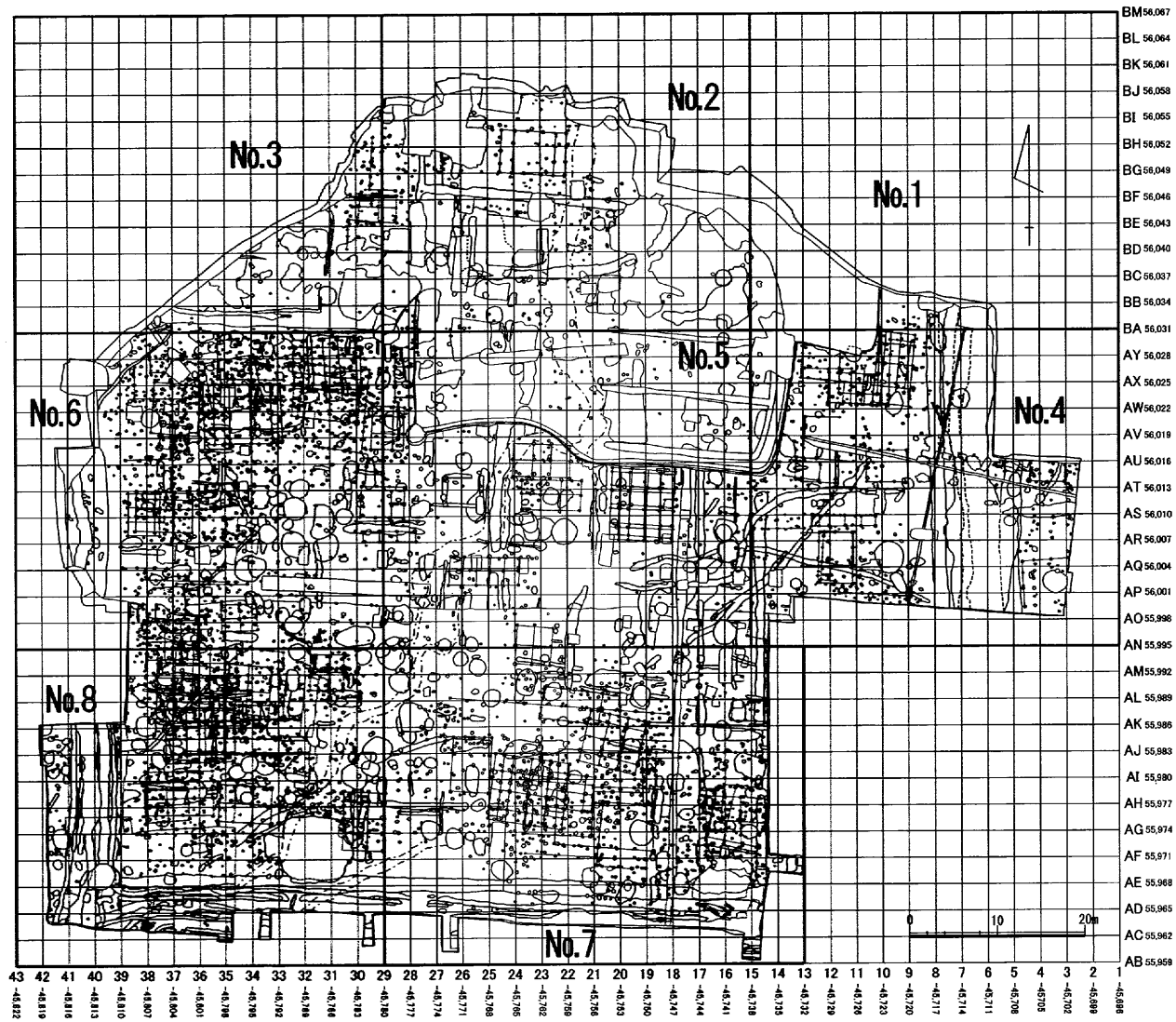
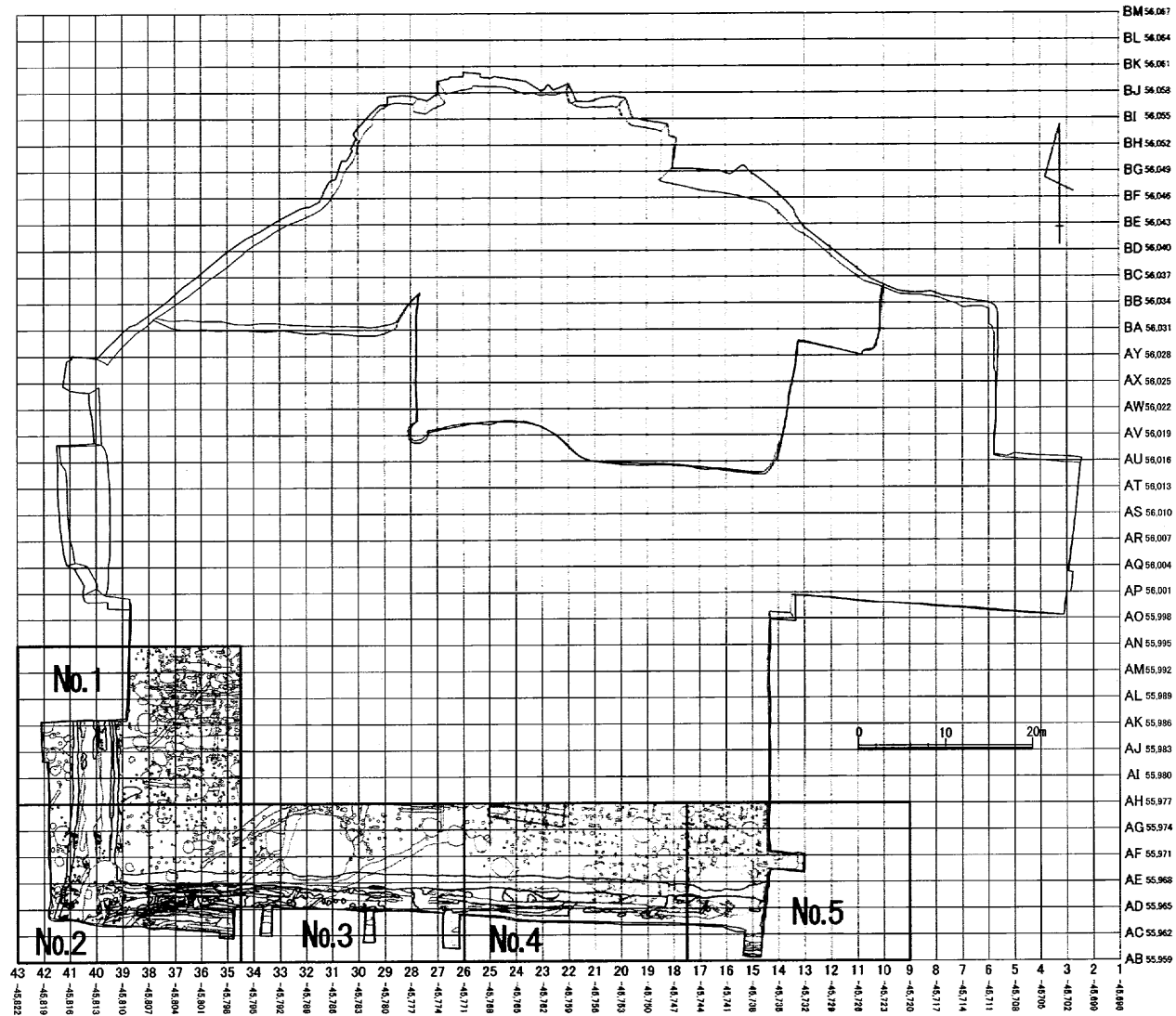


図7 大宰府条坊跡第222次調査区と周辺調査 (1/1,000)



* No.番号は遺構配置図に対応する。(付図参照)

図8 遺構配置割付図 (1/800)



* 割付図No.1～3については遺構配置図と道路使用時全体図があり、No.4と5については道路使用時全体図のみ作成している。(添付CD収録「SF700・1000道路関連図」)

図9 SF700・1000関連遺構割付図 (1/800)

写真図版



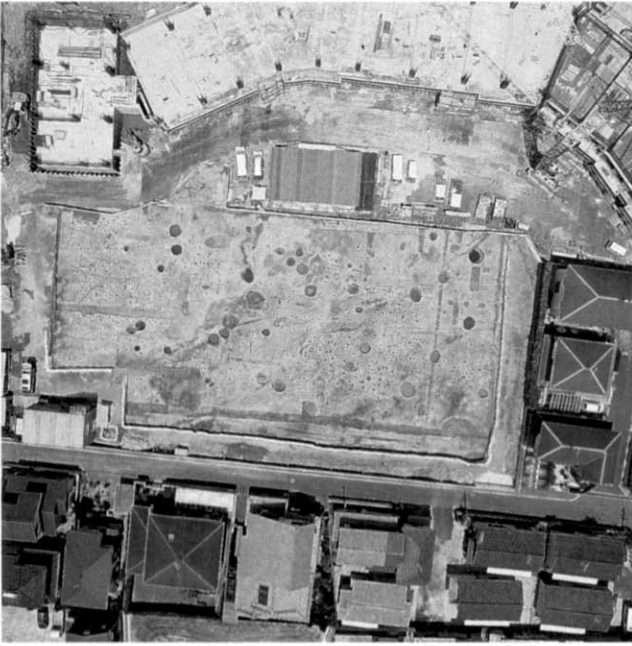
北調査区全景(南西から撮影)



北調査区全景(上が北)



北調査区東側近景(上が北)



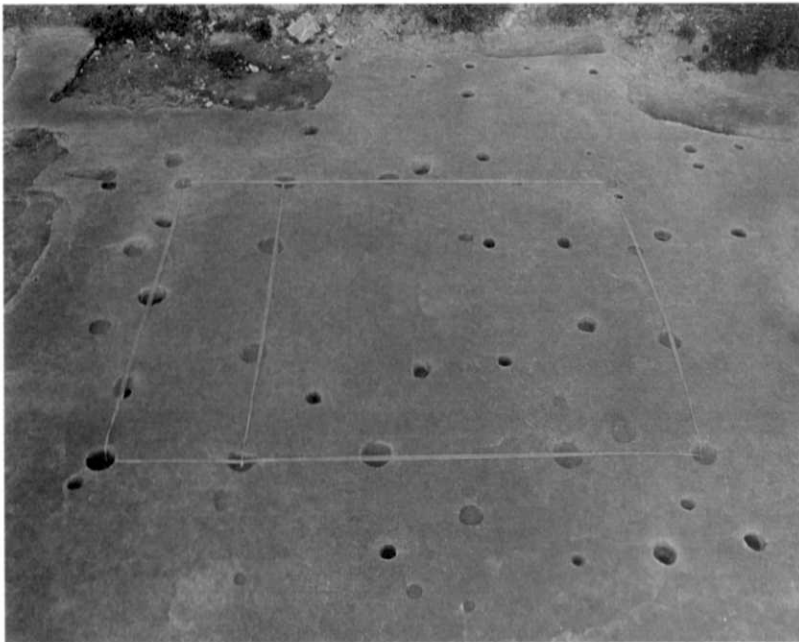
南調査区全景(上が北)



南西調査区全景(上が北)



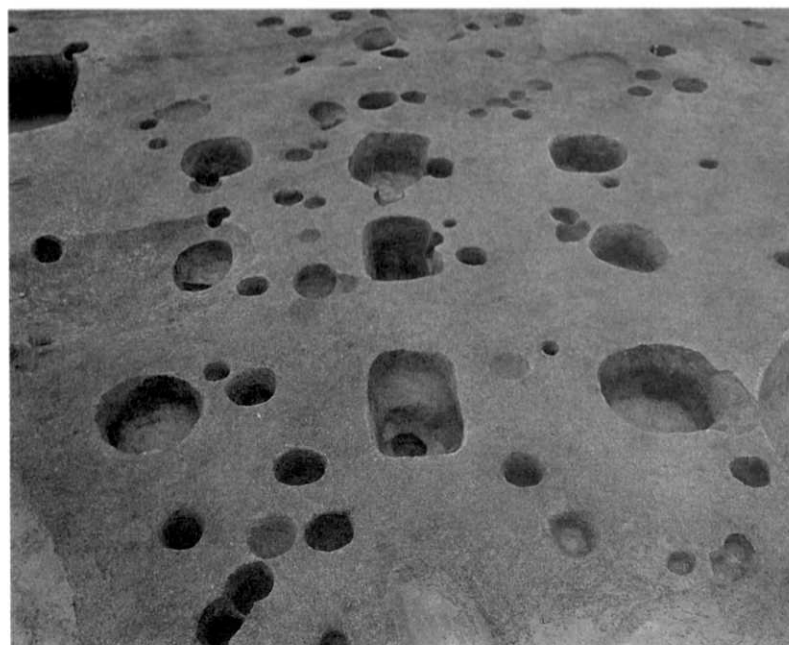
調査区南辺全景(西から撮影)



SB001完掘状況(ラインあり)(南から撮影)



SB210・215完掘状況(南から撮影)



SB315完掘状況(北から撮影)



SD055・060・070・075完掘状況(北から撮影)



SD120・125完掘状況(南から撮影)



S385完掘状況(北から撮影)



SD520完掘状況(西から撮影)



SD595完掘状況(西から撮影)



SD2443・2446. 2447. 2448完掘状況(北から撮影)



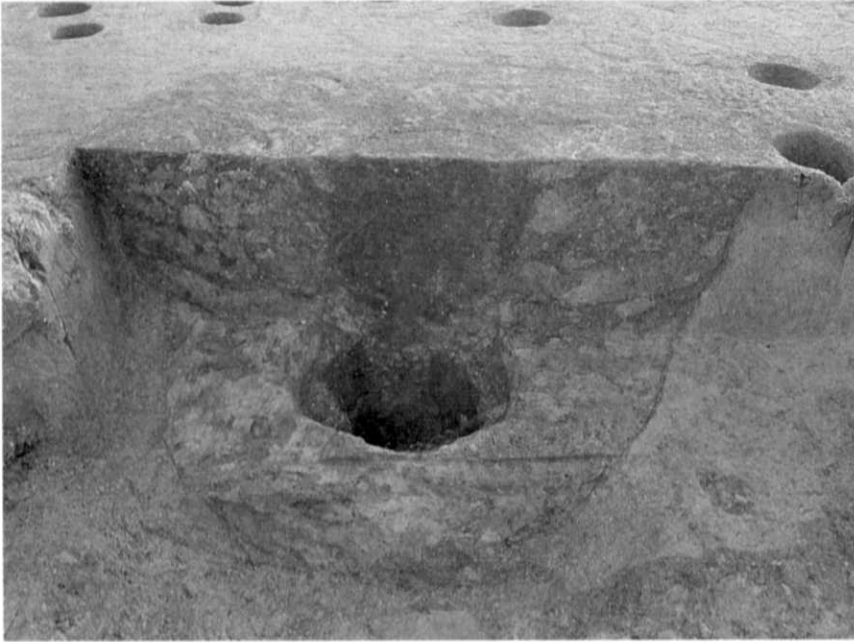
SE050井戸枠検出状況(南から撮影)



SE150井戸枠検出状況(北から撮影)



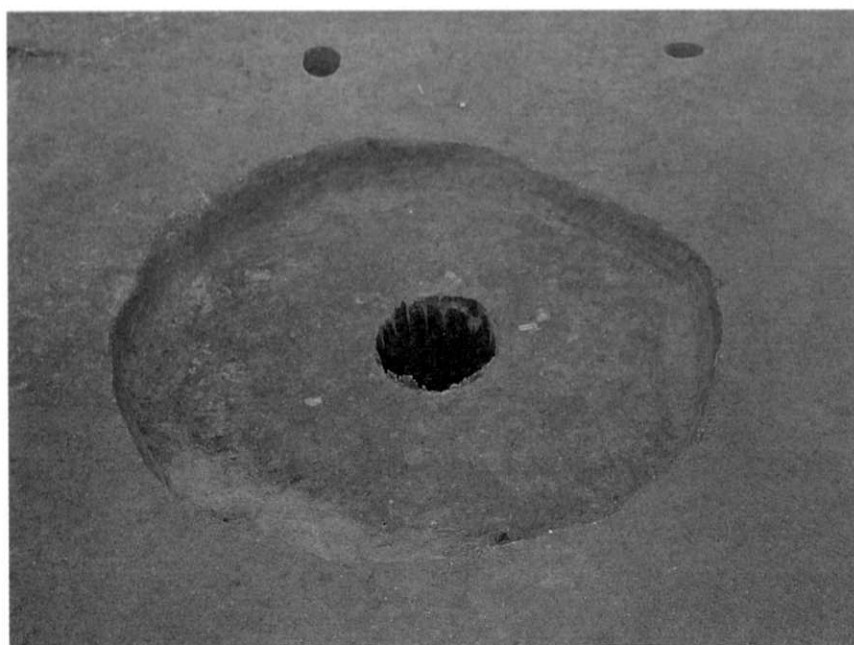
SE150曲物検出状況(北から撮影)



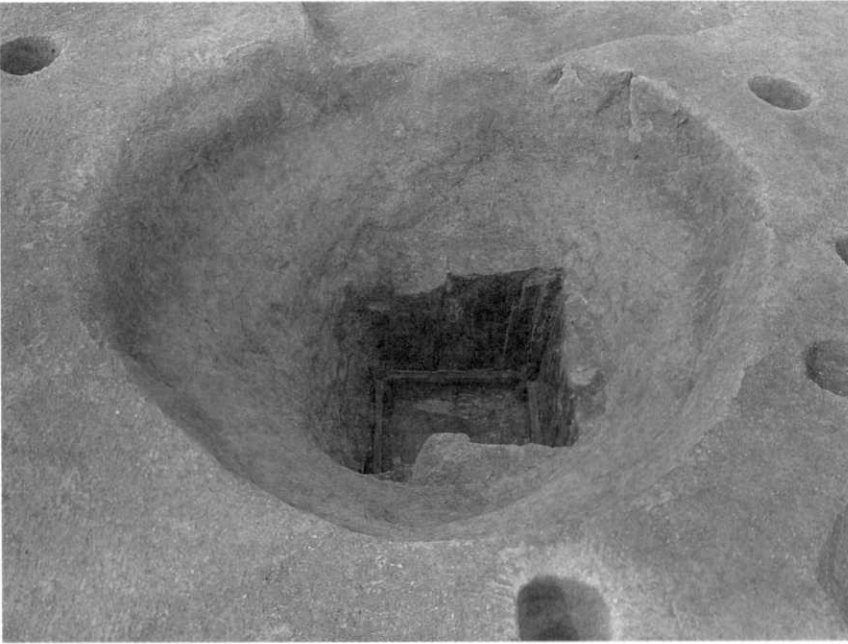
SE235土層観察(北から撮影)



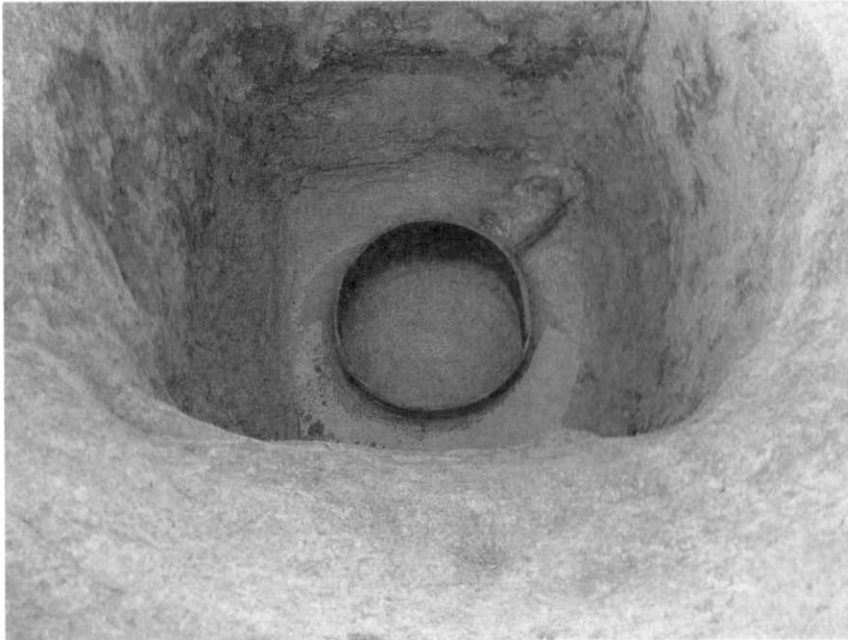
SE235井戸枠検出状況(北から撮影)



SE270井戸枠検出状況(南から撮影)



SE320井戸枠検出状況(東から撮影)



SE320曲物検出状況(南から撮影)



SE410井戸枠検出状況(西から撮影)



SE415井戸枠検出状況(北から撮影)



SE415井戸枠検出状況(南から撮影)



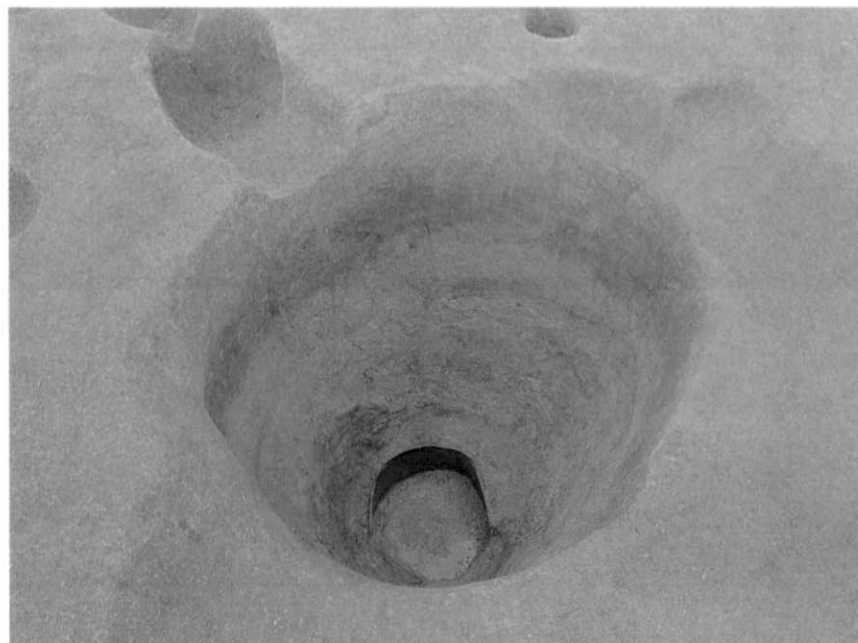
SE535曲物検出状況(南から撮影)



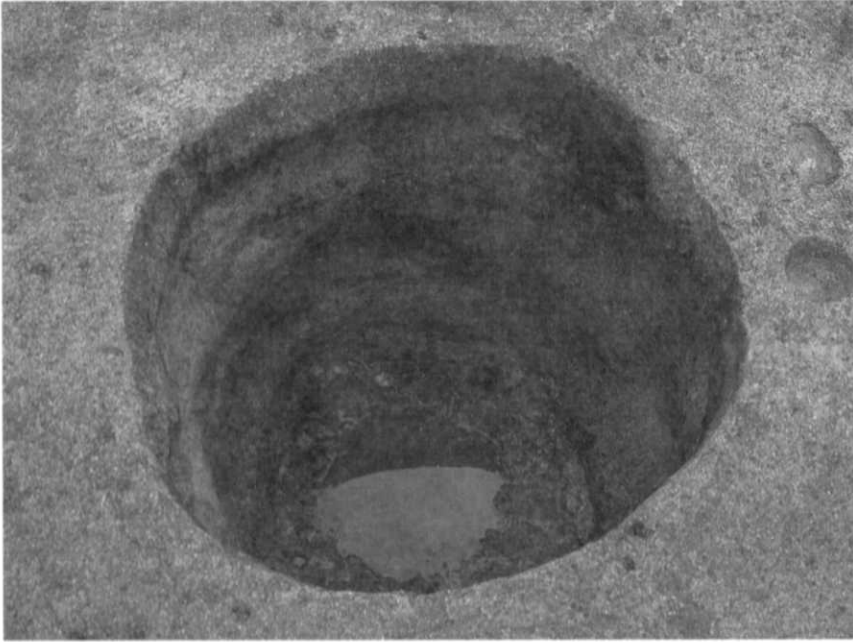
SE535曲物検出状況(北東から撮影)



SE575曲物検出状況(西から撮影)



SE580曲物検出状況(西から撮影)



SE610井戸枠検出状況(西から撮影)



SE615井戸枠検出状況(西から撮影)



SE625剝貫式井戸枠検出状況(北から撮影)



SE632井戸杵検出状況(南から撮影)



SE632木桶検出状況(西から撮影)



SE665曲物痕検出状況(西から撮影)



SF700他路面状況(西から撮影)



SF700(700bを除く)完掘状況(西から撮影)



SI545掘り方完掘状況(南から撮影)

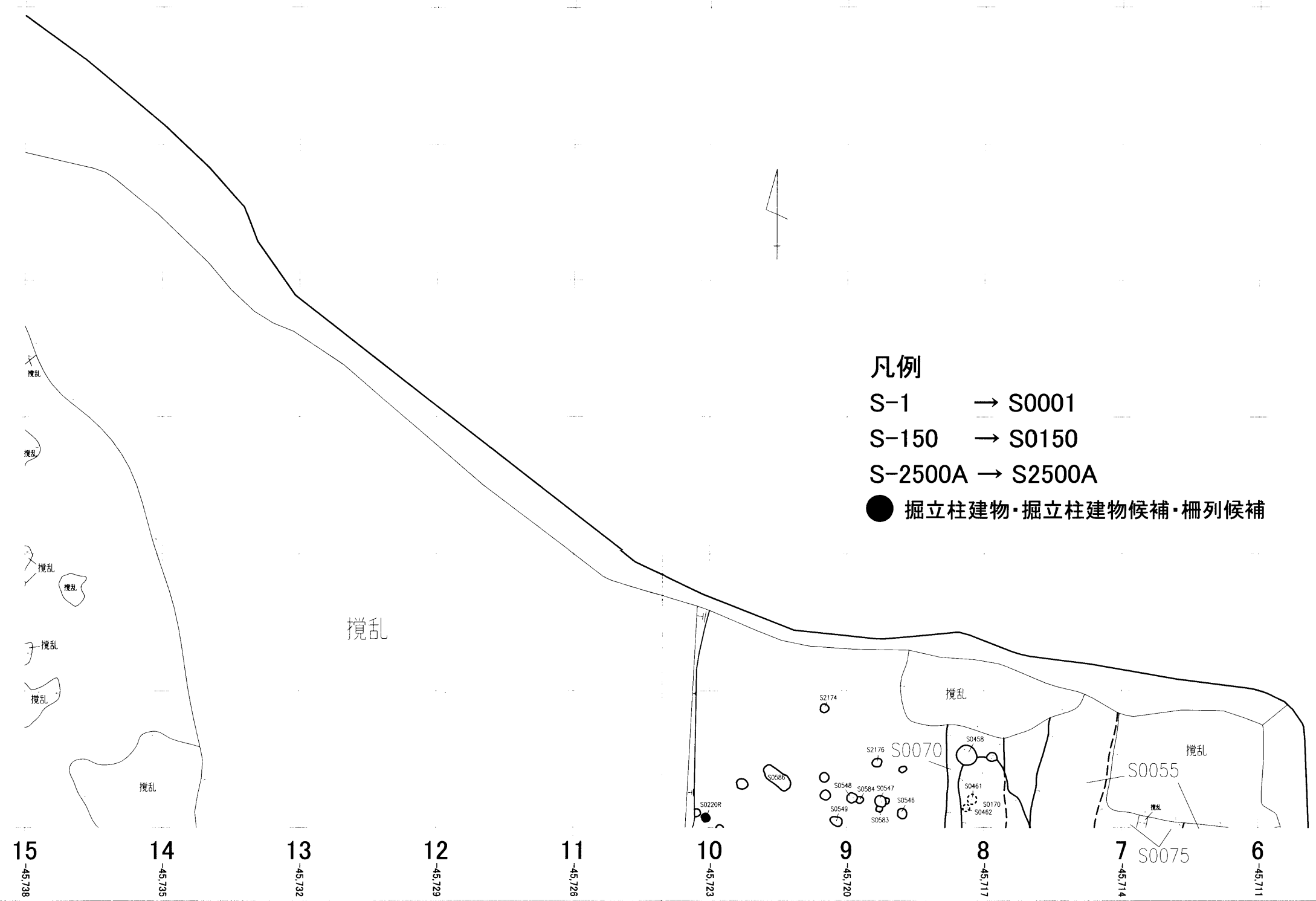


SX010完掘状況(南から撮影)



SX530完掘状況(北から撮影)

BM 56.067
BL 56.064
BK 56.061
BJ 56.058
BI 56.055
BH 56.052
BG 56.049
BF 56.046
BE 56.043
BD 56.040
BC 56.037
BB 56.034
BA 56.031



凡例

S-1 → S0001

S-150 → S0150

S-2500A → S2500A

----- S2236(旧河川)

● 掘立柱建物・掘立柱建物候補・柵列候補

注 色が薄い復元線は調査担当者の考える一案を参考
までに載せているために、特に遺構名を記していない



S0015
① 暗褐色土
S0002-0006-0024は一連の溝の可能性ある

S0003(BC21地区)
① 暗褐色土
② ねずみ色土ブロック
③ 黄褐色シルト
④ ねずみ色土

S0005(BF24地区)
① 灰色土

S0010
① 黒褐色土
② 黒褐色土ブロック
③ 濃ねずみ色土
④ 灰色粘
⑤ 黄灰砂

S0020
① 暗褐色土
② 黄白粘
③ ねずみ色土

S0025
① 暗褐色土
② 暗灰砂
③ 暗灰土
④ 灰色粘
⑤ 灰色砂 遺物なし

S0035
① 暗褐色土
② 暗黄褐色土

S0040
① 暗褐色土
② 暗黄褐色土

S0280
① 暗褐色土
② 暗褐色土(黄灰粘質シルトブロック)

S0153
① 暗褐色土
② 暗褐色土(黄灰粘ブロック)
③ 灰色粘

S0480
① 暗褐色土
② 黒褐色土
③ 灰色粘
④ 黄灰砂 遺物なし

S0626
暗褐色土

S0300
① 黒灰土
② 灰色粘

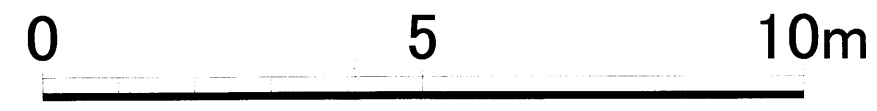
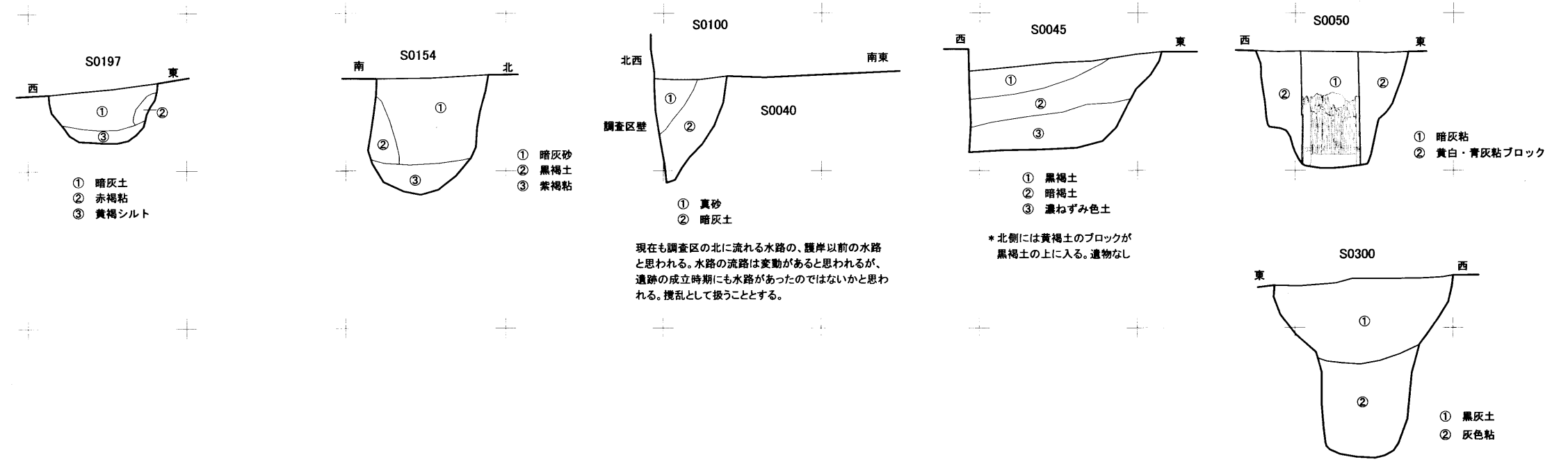
S0260(BA24地区)
暗褐色土

凡例

- S-1 → S0001
- S-150 → S0150
- S-2500A → S2500A

● 掘立柱建物候補・柵列候補

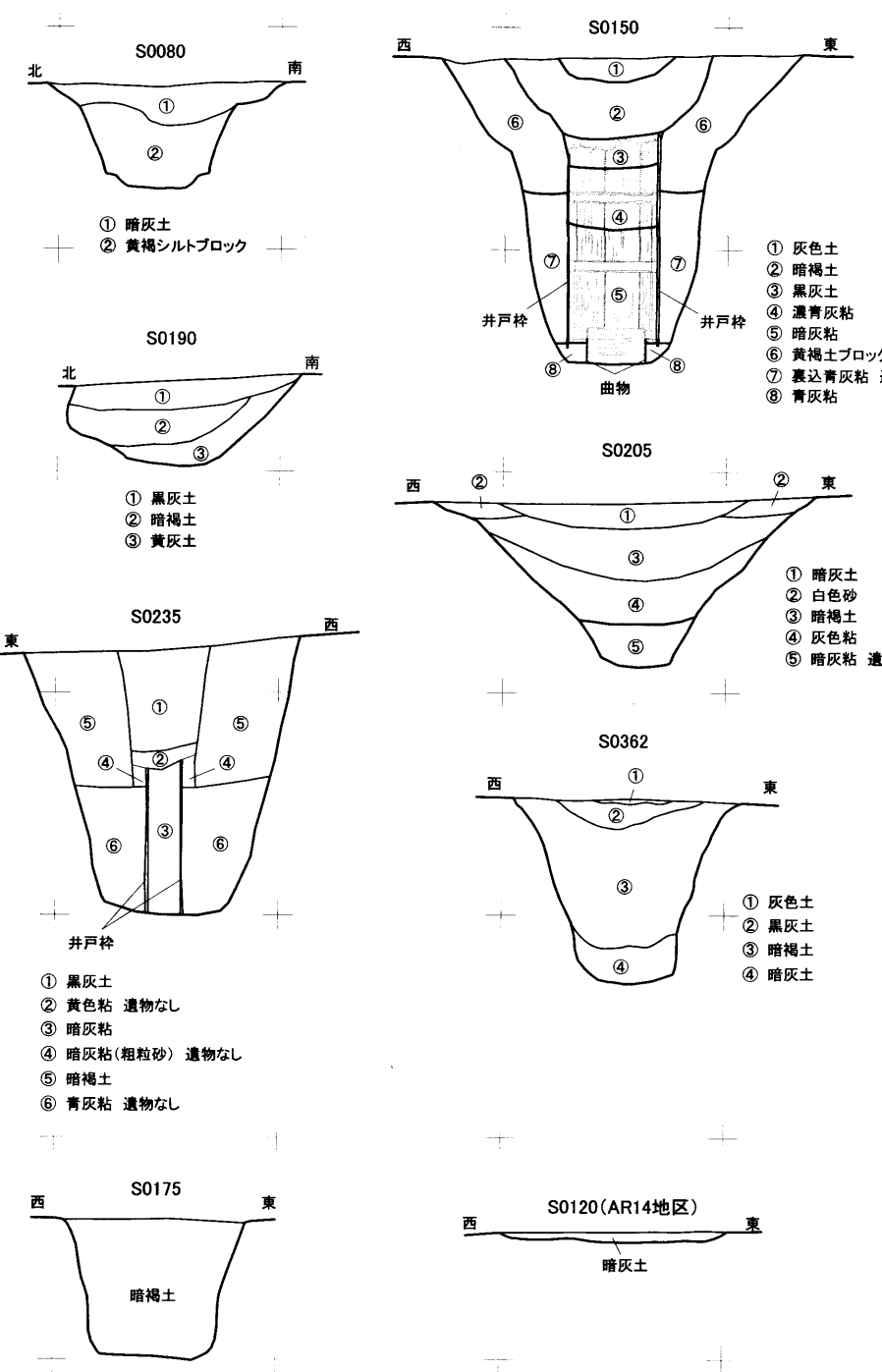
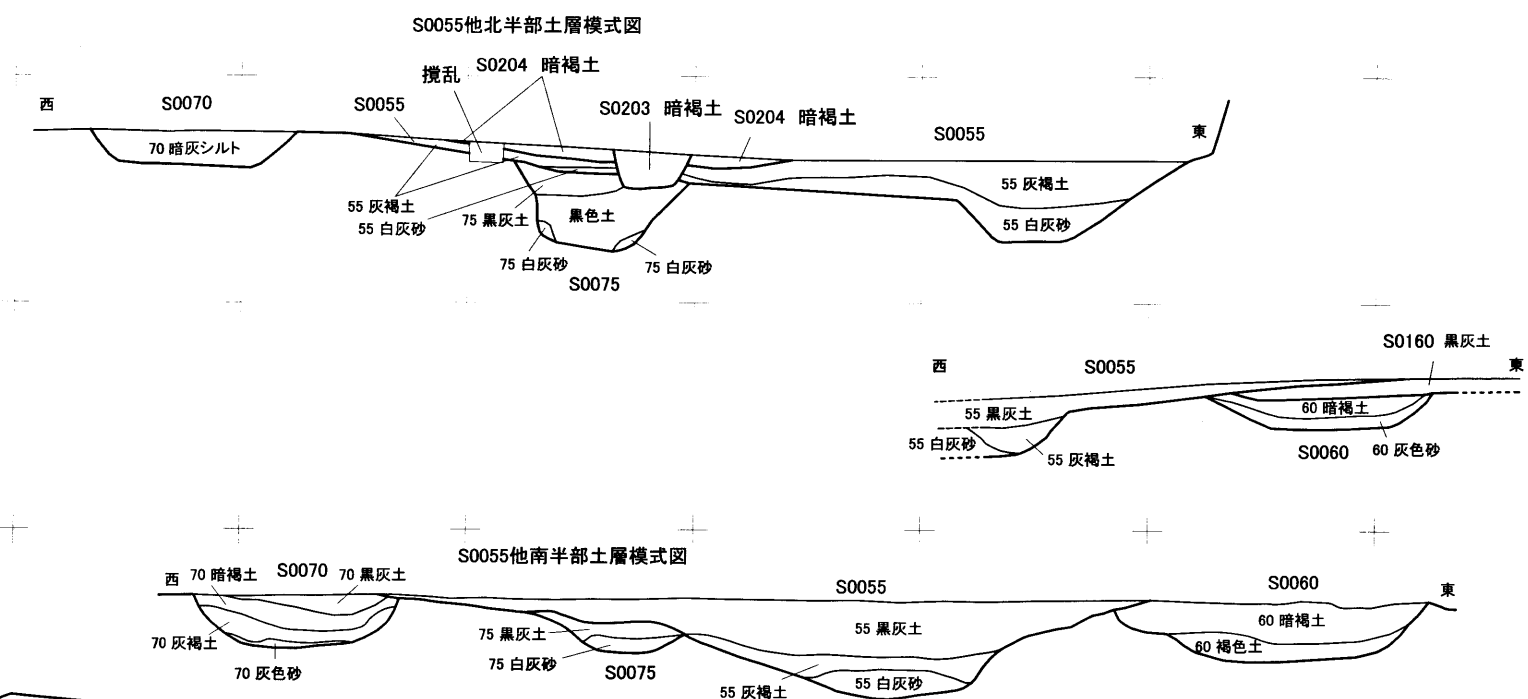
注 色が薄い復元線は調査担当者の考える一案を参考までに載せているために、特に遺構名を記していない



大宰府条坊跡 第222次調査 遺構配置図 No.4 S=1:100



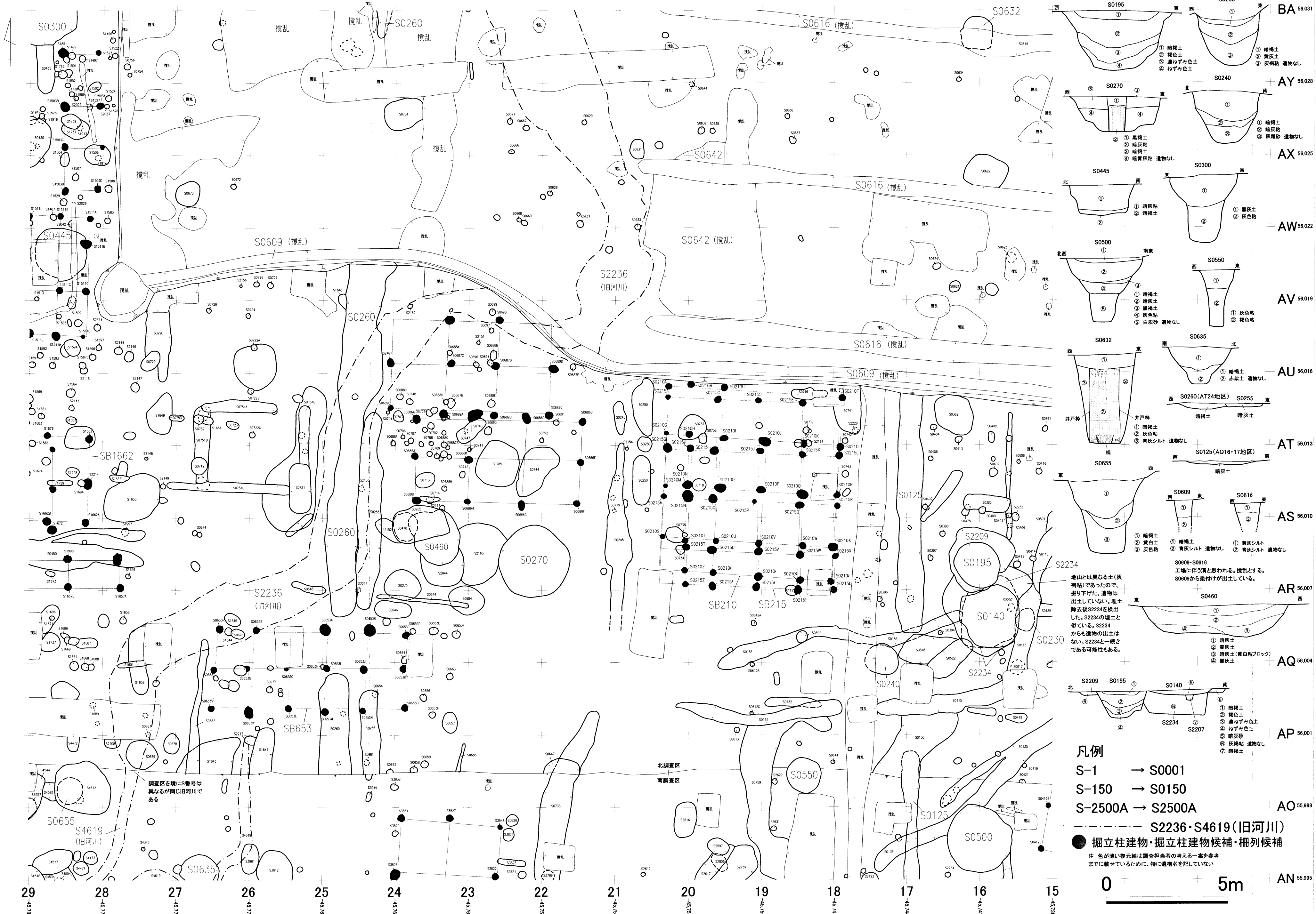
凡例
 S-1 → S0001
 S-150 → S0150
 S-2500A → S2500A
 ● 掘立柱建物候補・柵列候補
 注 色が薄い復元線は調査担当者の考える一案を参考
 までに載せているために、特に遺構名を記していない



15 -45.728 14 -45.735 13 -45.732 12 -45.729 11 -45.726 10 -45.723 9 -45.720 8 -45.717 7 -45.714 6 -45.711 5 -45.708 4 -45.705 3 -45.702 2 -45.699 1 -45.696

BA 56.031
 AY 56.028
 AX 56.025
 AW 56.022
 AV 56.019
 AU 56.016
 AT 56.013
 AS 56.010
 AR 56.007
 AQ 56.004
 AP 56.001
 AO 55.998
 AN 55.995

大宰府条坊跡 第222次調査 遺構配置図 No.5 S=1:100



凡例

- S-1 → S0001
- S-150 → S0150
- S-2500A → S2500A
- S2236・S4619(旧河川)
- 掘立柱建物・掘立柱建物候補・柵列候補

注 色が薄い復元線は調査担当の考える一案を参考までに載せているために、特に遺構名を記していない

土層・土質説明

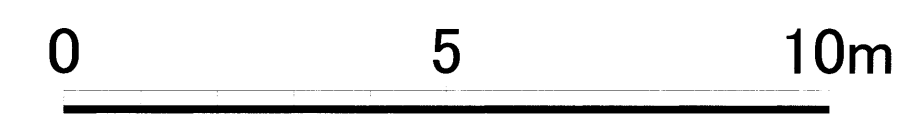
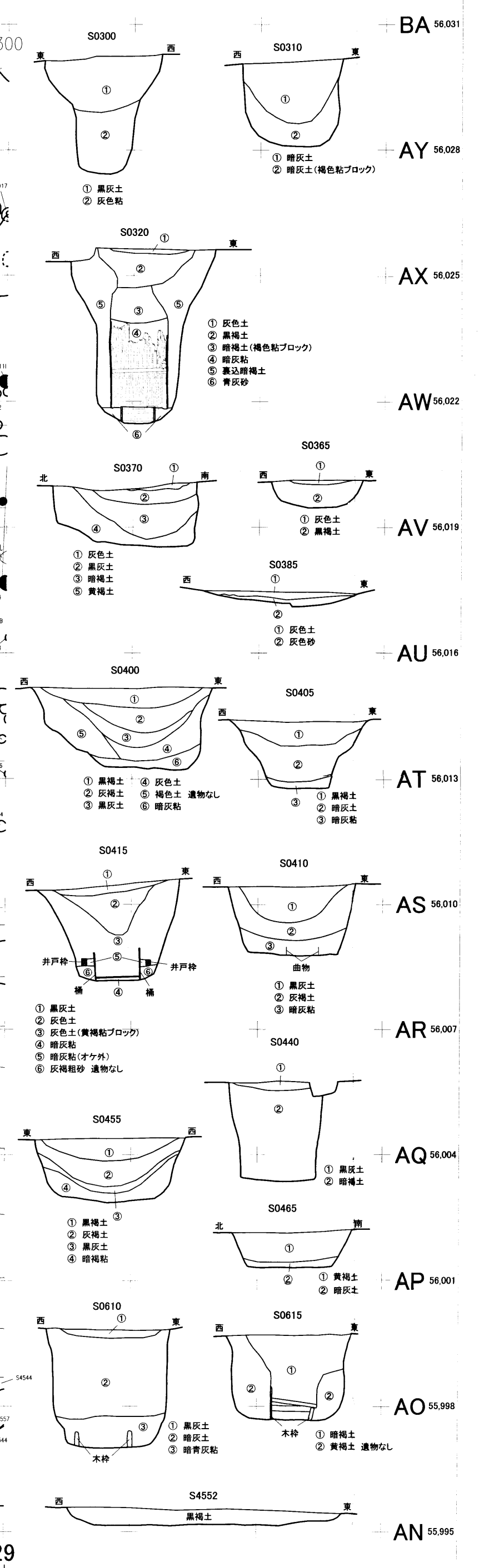
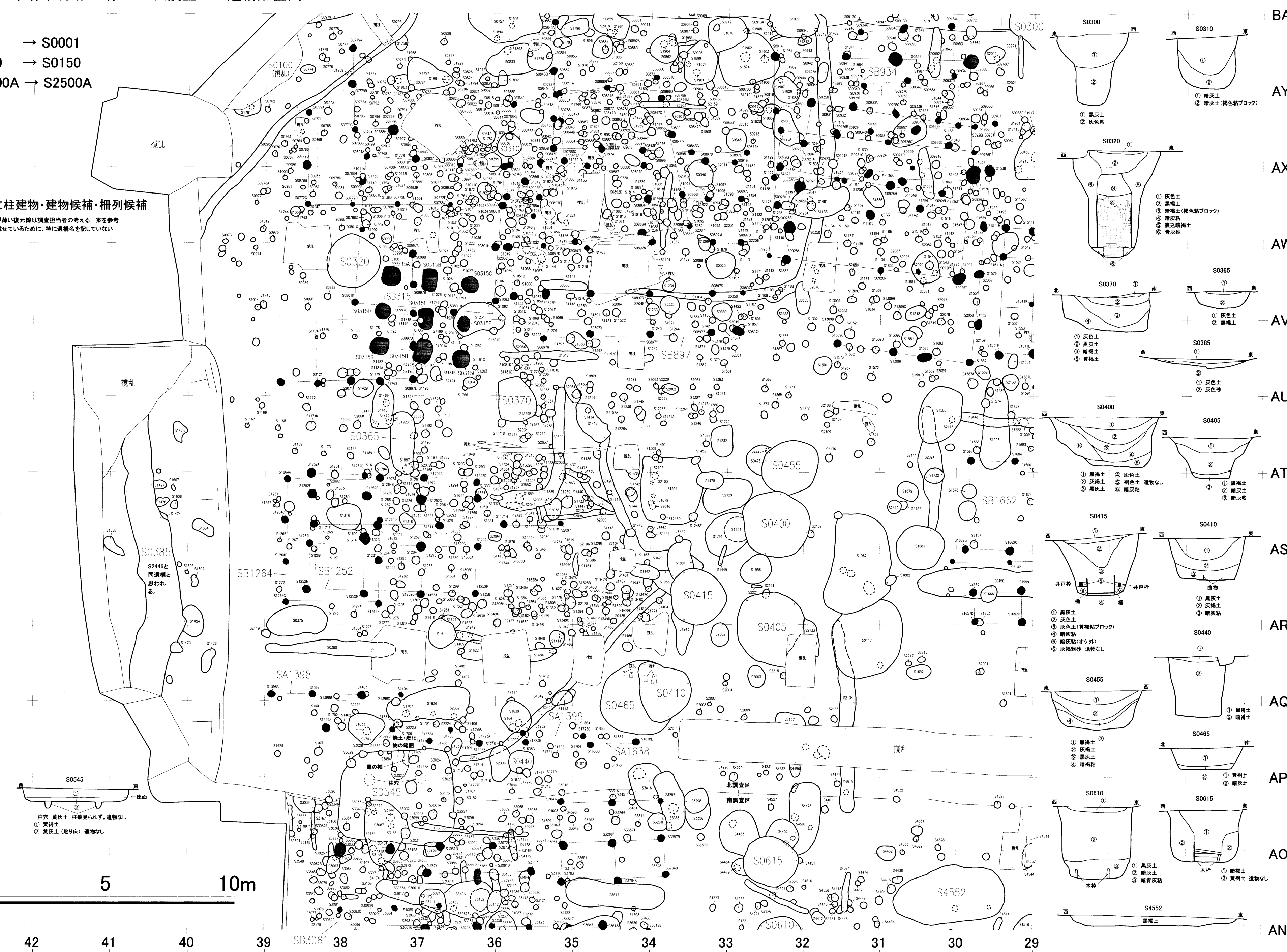
- ① 暗褐色土
- ② 褐色土
- ③ 濃わずみ色土
- ④ わずみ色土
- ⑤ 暗灰土
- ⑥ 灰褐色土
- ⑦ 暗褐色土
- ⑧ 暗褐色土
- ⑨ 暗褐色土
- ⑩ 暗褐色土
- ⑪ 暗褐色土
- ⑫ 暗褐色土
- ⑬ 暗褐色土
- ⑭ 暗褐色土
- ⑮ 暗褐色土
- ⑯ 暗褐色土
- ⑰ 暗褐色土
- ⑱ 暗褐色土
- ⑲ 暗褐色土
- ⑳ 暗褐色土
- ㉑ 暗褐色土
- ㉒ 暗褐色土
- ㉓ 暗褐色土
- ㉔ 暗褐色土
- ㉕ 暗褐色土
- ㉖ 暗褐色土
- ㉗ 暗褐色土
- ㉘ 暗褐色土
- ㉙ 暗褐色土
- ㉚ 暗褐色土
- ㉛ 暗褐色土
- ㉜ 暗褐色土
- ㉝ 暗褐色土
- ㉞ 暗褐色土
- ㉟ 暗褐色土
- ㊱ 暗褐色土
- ㊲ 暗褐色土
- ㊳ 暗褐色土
- ㊴ 暗褐色土
- ㊵ 暗褐色土
- ㊶ 暗褐色土
- ㊷ 暗褐色土
- ㊸ 暗褐色土
- ㊹ 暗褐色土
- ㊺ 暗褐色土
- ㊻ 暗褐色土
- ㊼ 暗褐色土
- ㊽ 暗褐色土
- ㊾ 暗褐色土
- ㊿ 暗褐色土

遺構説明

- S0195: ① 暗褐色土, ② 褐色土, ③ 濃わずみ色土, ④ わずみ色土
- S0230: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 灰褐色土, 遺物なし
- S0270: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, 遺物なし
- S0240: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, 遺物なし
- S0445: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土
- S0300: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土
- S0500: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, ⑤ 暗褐色土, ⑥ 暗褐色土, 遺物なし
- S0550: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土
- S0632: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, ⑤ 暗褐色土, 遺物なし
- S0635: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, 遺物なし
- S0260(AT24地区) S0255: 暗褐色土, 暗褐色土
- S0125(AQ16-17地区): 暗褐色土
- S0655: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, 遺物なし
- S0609: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, 遺物なし
- S0616: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, 遺物なし
- S0460: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, 遺物なし
- S2209 S0195 S0140: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, ⑤ 暗褐色土, ⑥ 暗褐色土, ⑦ 暗褐色土, ⑧ 暗褐色土, ⑨ 暗褐色土, ⑩ 暗褐色土, ⑪ 暗褐色土, ⑫ 暗褐色土, ⑬ 暗褐色土, ⑭ 暗褐色土, ⑮ 暗褐色土, ⑯ 暗褐色土, ⑰ 暗褐色土, ⑱ 暗褐色土, ⑲ 暗褐色土, ⑳ 暗褐色土, ㉑ 暗褐色土, ㉒ 暗褐色土, ㉓ 暗褐色土, ㉔ 暗褐色土, ㉕ 暗褐色土, ㉖ 暗褐色土, ㉗ 暗褐色土, ㉘ 暗褐色土, ㉙ 暗褐色土, ㉚ 暗褐色土, ㉛ 暗褐色土, ㉜ 暗褐色土, ㉝ 暗褐色土, ㉞ 暗褐色土, ㉟ 暗褐色土, ㊱ 暗褐色土, ㊲ 暗褐色土, ㊳ 暗褐色土, ㊴ 暗褐色土, ㊵ 暗褐色土, ㊶ 暗褐色土, ㊷ 暗褐色土, ㊸ 暗褐色土, ㊹ 暗褐色土, ㊺ 暗褐色土, ㊻ 暗褐色土, ㊼ 暗褐色土, ㊽ 暗褐色土, ㊾ 暗褐色土, ㊿ 暗褐色土
- S2234 S0227: ① 暗褐色土, ② 暗褐色土, ③ 暗褐色土, ④ 暗褐色土, ⑤ 暗褐色土, ⑥ 暗褐色土, ⑦ 暗褐色土, ⑧ 暗褐色土, ⑨ 暗褐色土, ⑩ 暗褐色土, ⑪ 暗褐色土, ⑫ 暗褐色土, ⑬ 暗褐色土, ⑭ 暗褐色土, ⑮ 暗褐色土, ⑯ 暗褐色土, ⑰ 暗褐色土, ⑱ 暗褐色土, ⑲ 暗褐色土, ⑳ 暗褐色土, ㉑ 暗褐色土, ㉒ 暗褐色土, ㉓ 暗褐色土, ㉔ 暗褐色土, ㉕ 暗褐色土, ㉖ 暗褐色土, ㉗ 暗褐色土, ㉘ 暗褐色土, ㉙ 暗褐色土, ㉚ 暗褐色土, ㉛ 暗褐色土, ㉜ 暗褐色土, ㉝ 暗褐色土, ㉞ 暗褐色土, ㉟ 暗褐色土, ㊱ 暗褐色土, ㊲ 暗褐色土, ㊳ 暗褐色土, ㊴ 暗褐色土, ㊵ 暗褐色土, ㊶ 暗褐色土, ㊷ 暗褐色土, ㊸ 暗褐色土, ㊹ 暗褐色土, ㊺ 暗褐色土, ㊻ 暗褐色土, ㊼ 暗褐色土, ㊽ 暗褐色土, ㊾ 暗褐色土, ㊿ 暗褐色土

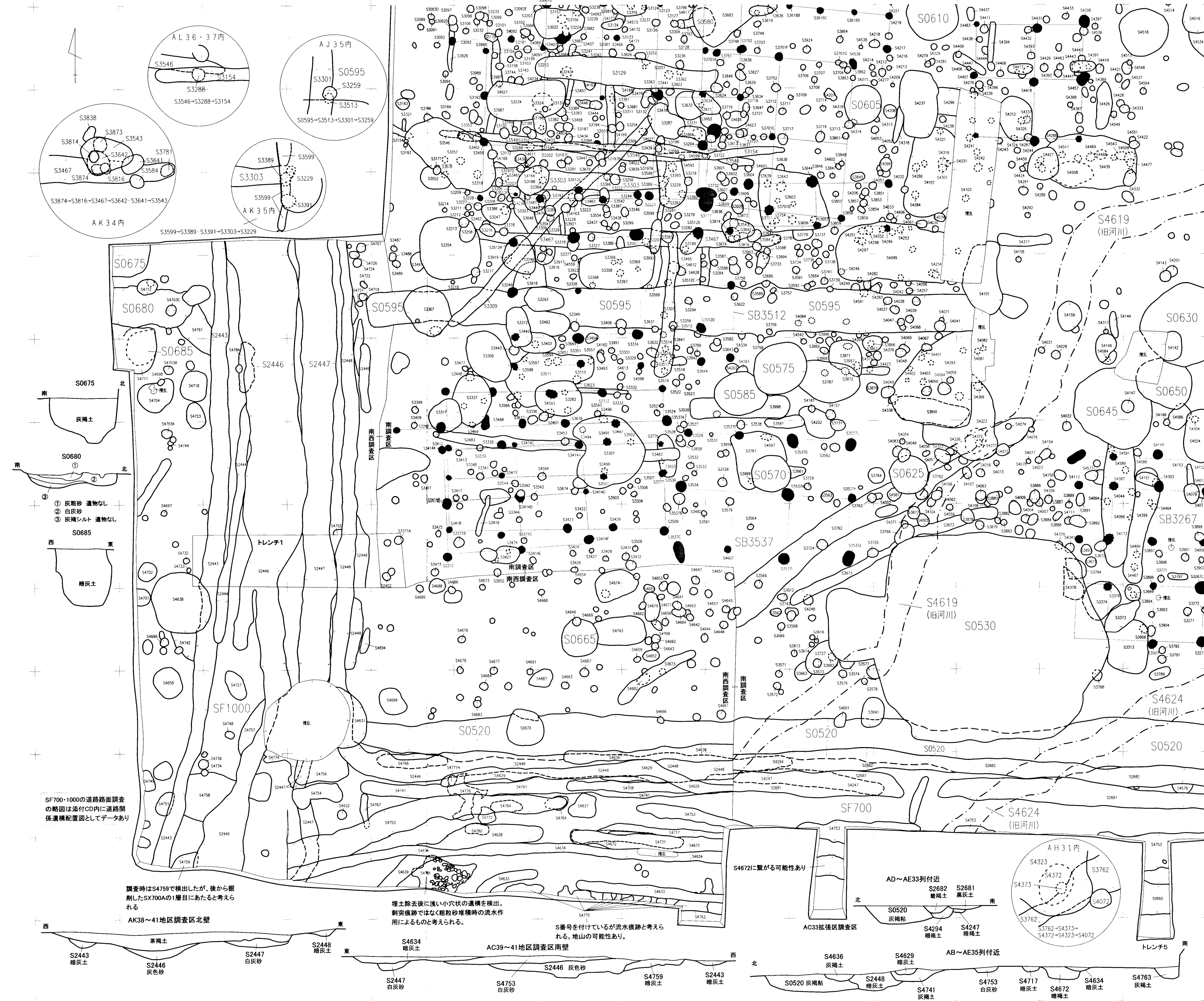
凡例
S-1 → S0001
S-150 → S0150
S-2500A → S2500A

● 掘立柱建物・建物候補・柵列候補
注 色が薄い復元線は調査担当者の考える一案を参考
までに載せているために、特に遺構名を記していない



43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
-45.822 -45.819 -45.816 -45.813 -45.810 -45.807 -45.804 -45.801 -45.798 -45.795 -45.792 -45.789 -45.786 -45.783 -45.780

- 凡例
 S-1 → S0001
 S-150 → S0150
 S-2500A → S2500A
 --- S4619・S4624(旧河川)
- 0 5m
- AN 55.995
 - AL 55.989
 - AK 55.986
 - AJ 55.983
 - AI 55.980
 - AH 55.977
 - AG 55.974
 - AF 55.971
 - AE 55.968
 - AD 55.965
 - AC 55.962
 - AB 55.959



SF700・1000の道路路面調査の略図は添付CD内に道路関係遺構配置図としてデータあり

調査時はS4759で検出したが、後から掘削したSX700Aの1層目にあたと考えられる
 AK38~41地区調査区北壁

埋土除去後に浅い小穴状の遺構を検出。刺突遺跡ではなく粗粒砂堆積時の流水作用によるものと考えられる。
 S番号を付けているが流水遺跡と考えられる。地山の可能性あり。

S4672に繋がる可能性あり

AC33掘立柱調査区

AD~AE33列付近
 S2682 暗褐色土
 S2681 黒灰土

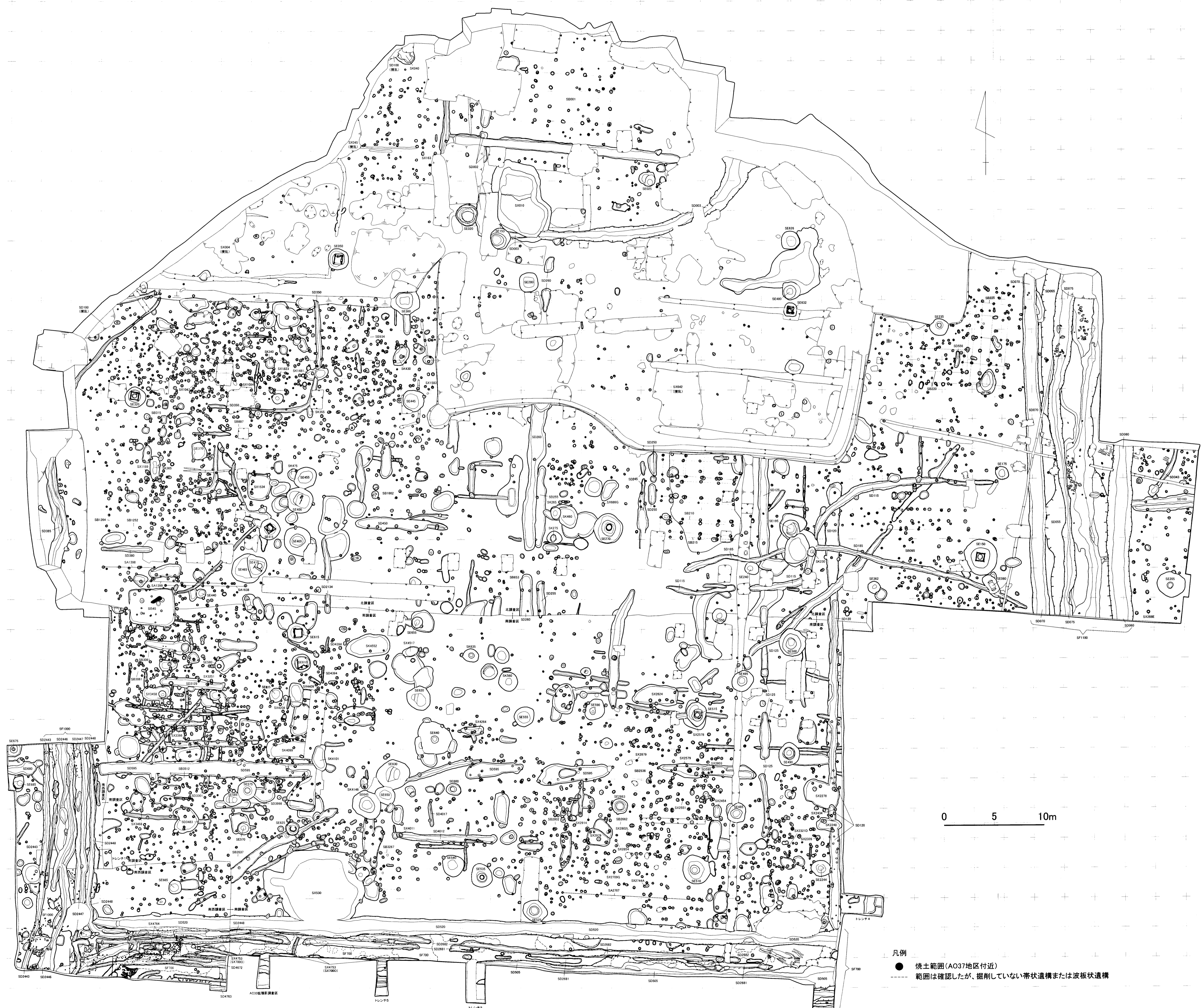
AB~AE35列付近
 S4294 暗褐色土
 S4247 暗褐色土

43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

56.067 BM
56.064 BL
56.061 BK
56.058 BJ
56.055 BI
56.052 BH
56.049 BG
56.046 BF
56.043 BE
56.040 BD
56.037 BC
56.034 BB
56.031 BA
56.028 AY
56.025 AX
56.022 AW
56.019 AV
56.016 AU
56.013 AT
56.010 AS
56.007 AR
56.004 AQ
56.001 AP
55.998 AO
55.995 AN
55.992 AM
55.989 AL
55.986 AK
55.983 AJ
55.980 AI
55.977 AH
55.974 AG
55.971 AF
55.968 AE
55.965 AD
55.962 AC
55.959 AB

大宰府条坊跡 第222次調査 遺構全体図 S=1:200

BM 56.067
BL 56.064
BK 56.061
BJ 56.058
BI 56.055
BH 56.052
BG 56.049
BF 56.046
BE 56.043
BD 56.040
BC 56.037
BB 56.034
BA 56.031
AY 56.028
AX 56.025
AW 56.022
AV 56.019
AU 56.016
AT 56.013
AS 56.010
AR 56.007
AQ 56.004
AP 56.001
AO 55.998
AN 55.995
AM 55.992
AL 55.989
AK 55.986
AJ 55.983
AI 55.980
AH 55.977
AG 55.974
AF 55.971
AE 55.968
AD 55.965
AC 55.962
AB 55.959



0 5 10m

凡例
● 焼土範囲(AO37地区付近)
--- 範囲は確認したが、掘削していない帯状遺構または波板状遺構

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと27									
書名	大宰府条坊跡27									
副書名	第222・222-2次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第81集									
編著者	遠竹 陽一郎・柳田 信・井上信正・バリノ・サーヴェイ株式会社									
編集機関	太宰府市教育委員会・㈱パスコ									
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号 ㈱パスコ 〒153-8555 東京都目黒区東山2丁目13番5号									
発行年月日	2005(平成17)年 3月31日									
ふりがな	条坊	ふりがな	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
所収遺跡名	【鏡山推定案】	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	m ²	
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第222次	右郭10・11条 9坊	太宰府市 都府楼南 2丁目16-10	402214	210044-222	55,956.000	-45,693.000	20020903	20031020	7,650	共同住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
大宰府条坊跡 第222次	大宰府条坊	平安時代後期	掘立柱建物20 溝42 井戸61 道路 3 竪穴住居1 土坑18			土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦器・ 畿内産瓦器・黒色土器・木製品・銅 剣・金属製品・墨書土器・墨画土器			11c後半～12c前半の街区 画の検出・同時期の一括 性の高い出土遺物群	

太宰府市の文化財第 81 集

大宰府条坊跡 27

第 222・222-2 次調査

平成 17 年 3 月

発行 太宰府市教育委員会

〒 818-0198 福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号

編集 (株)パスコ

〒 153-8555 東京都目黒区東山 2 丁目 13 番 5 号

印刷 石川特殊特急製本株式会社

〒 550-0004 大阪府大阪市西区靱本町 1 丁目 5 番 15 号